

NTロリ娘。

にやあたいぷ@飼い猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ニュータイプ能力を持った幼女、もしくは少女がダイクン家でロリメイドをしていたり、ザビ家で養子になったり、ロリコンの性癖を壊したり、脳を破壊したりする話。

# 目次

## カナリア編

- |     |                        |     |
|-----|------------------------|-----|
| 1.  | にゆうたいぶようじよ             | 1   |
| 2.  | だいくんけでのにちじょう。          |     |
| 3.  | さよならば、とつぜんに。           | 10  |
| 4.  | ぼうりよくはいけないことです。        | 20  |
| 5.  | だれがわるいつてわけじゃない。        | 35  |
| 6.  | なかまはずれなんてゆるさない。        | 60  |
| 7.  | まもるべきをまもるため。           | 71  |
| 8.  | かなりあちゃん、よんさい。          | 85  |
| 9.  | 酒場エデンでのにちじょう。          | 98  |
| 10. | れきしのお勉強です。             | 105 |
| 11. | カナリア尾行たい、そうぜい一<br>名!   | 118 |
| 12. | 予想していたものとはちがつた<br>のです。 | 128 |
| 13. | とり返しをつかないこと。           | 136 |

14. モテる女はたいへんなのです。 | 146
15. それもラブ、これもラブ。 | 158
16. 見捨てられないから家族なので | 170
- す。
17. 人付き合いは難しいものです。 | 182
18. ちゃんとお勉強もしていますよ | 193
- !
19. 超絶美少女テストパイロットカ  
ナリアちゃん | 204
20. イエスロリータ、ノートタッチ！ | 204
21. すれ違い宇宙。 | 215
22. 謀ったな!? | 236
23. 金糸雀は、まだ鳴かず。 | 249
24. 暁の蜂起。 | 258
25. 暁の蜂起、裏舞台。 | 267
26. エクストリーム機密漏洩！ | 281
27. 青春シンドローム | 295
28. 問題児も、三人揃えばなんとや  
ら。 | 309
29. ボーイ・ミーツ・ガール | 309

402	3 6.	殺すね、貴方を。皆も。	
	3 5.	キルスコア2千万。	392
		悲はなし。	383
	幕間:	ヤードポンド法、滅ぶべし。慈	372
	です。		
	3 4.	案外、自分ではわからないもの	361
	3 3.	這い寄る混沌。	353
	す。		
	3 2.	政略のちよつと小難しい話で	340
	3 1.	スミス海の戦い。	328
	3 0.	幸せは、傍にある。	

	3 7.	カナリアちゃんの戦いはこれか	415
	らだ!		
	メアリー編		
	1.	ゴツプの娘	424
	2.	御嬢様の犬	432
	3.	親の心子知らず、子の心親知らず。	443
	4.	士官学校	453
	5.	戦争	464
	6.	北米の魔女	475
	7.	じこはおこるさ	484
	8.	ジャンヌ・ダルク	495
	幕間:	可能性の光	503

B  
B編

1. THE BLUE BIRD F

LIES AWAY. | 507

2. かくして、ガンダムは大地に立つ。

| 524

3. ファーストコンタクト | 535

4. 艦長代理 | 549

5. 戦果報告 | 561

6. 特急便ガテム | 573

7. ゴールデンツダ | 585

# カナリア編

## 1. にゆうたいぷようじよ

生まれてこの方、ジャンケンに負けた事が一度もない。

物心がついた時にはもう孤児院に居たので、両親の顔も分からなければ名前も知らない。とはいえ此処は他の施設よりも十分な支援を受けていたので衣食住に困らない生活を送ることができた。昼食時に余ったプリンを掴み取る為に繰り広げられるジャンケン大会、そこで私は必ずと言ってても良い程に勝ち続けてきたし、ジャンケンじゃ勝てないからって他のゲームに替えられても私が勝利をし続ける。特に得意なのはトランプを使ったゲームであり、相手が何を企んでいるのか。何を隠しているのかなんて手取るようにわかる。

それが特別だと気付いた時にはもう、私とゲームをしてくれる人はいなくなってしまう。プリンの争奪戦もなくなった。

悪戯をされる事が増えた、分かっちゃうので一度も引つかかる事じゃなかったけど。靴を隠された時、誰が隠しているのかなんて一目見て分かった。その男の子に少し問い詰めてやれば、隠し場所だって直ぐに分かった。私に悪戯をする子は「証拠を出せよ

！」と小賢しい事を言うけども、そんな事よりも見れば分かる。と私は裏庭に埋められていた靴を掘り当てる。男の子は「自分で隠して、自分で見つけたんだ！」と宣ったけど、もうその子の事なんてどうでも良かった。だって、これが恋愛感情の裏返しであるなんて事は勘付いてるし、私が彼に思う事は「失望」の一言で済まされる。

過激になる悪戯に億劫な気持ちになりつつある。

私は別室に呼び出される機会が増えた。

相談室と銘打たれた場所であり、通された扉の先には机と椅子があるだけの殺風景とした部屋になっている。そこに院長先生が居て、最初はジャンケン。次にトランプで勝負をさせられる。勝てば、プリンが貰える。負ければ、特になにもない。ランダムに伏せられたカードの中身は分からないけども、院長先生が伏せたカードが何なのかは察する事ができる。一個の飴玉がある。両手に握ったふりをして、どちらに飴玉が隠されているのか問い掛けられれば、それはもう百発百中で当てられる。

確率を学んだ、簡単な基礎的な話。五枚のカードがあつて、一枚のカードを当てられる確率。それが二度、三度と連続して続けられる可能性、特定の条件下で連続的の中が百回目に達した時、その事が紛れもない異常である事は幼い私でも理解する事ができた。

甘い、甘い飴玉を舐める。延々と同じことを繰り返されるのは、面白い事ではなかった。



悪戯ばかりする子も、これで好意だというのだから、本当に煩わしい。どうしてこれで好きになれるのか、気を使ってやっていると考えるのか。私には理解ができなかった。楽しいが、嫌いで塗り潰される。退屈が占める割合が増え続けた。

とある日の話になる。相談室と銘打たれた扉の先に、顎髭の凄いおじさんが椅子に腰かけていた。

「初めまして」

子供向けの柔和な笑みを浮かべてから彼はポケットから飴玉を抜き取ると、椅子に座った私に握った両手を差し出す。彼の期待している事は聞かずとも分かる。くれるのならさっさと欲しい、と私から見て右の手を指で差せば「見事だな」と彼は感心するように右手に握られた飴玉を私に手渡す。

「紹介はいらなくても知れないが……私はジョン・ズム・ダイクンだ」

「……だいくん？ えらいひと？」

彼の考えている事の大体は分かる。でも、それは言語として正しく理解している訳じゃない。なんというか、ものすごく偉い感じのイメージは出来る。そして、彼はピラミッドの頂点に立つ人間だという事もわかった。けど、それを言語化することは難しくって、私の知る言葉で最も近いものは「王様」なんだけど、それともまた違う感じがする。

「ああ、そうだ。この国で一番、偉い人だよ」

ダイクンと名乗る彼は笑いかけてくれる。なんか窮屈な生き方をしてる人だと思った。偉いのに窮屈、不思議だと思った。彼はポケットからトランプを取り出すと一枚のカードを確認する。そのまま二枚、三枚と見た後で十枚のカードを机の上に並べた。

「さあ、この中から……」

「ん」

彼が差しして欲しいカードはこれだ。捲つてみるとスペードのエースだった。

「……絵柄は分かっていたのかい？」

「わからない。でも、えらんでほしいの、これ」

「では次に私が引いて欲しいカードのマークは分かるかな？」

優しい目で問い掛ける彼に、私は膨れっ面を作つて非難する。

「マークじゃない。ジョーカー、それでジョーカーはこれ」

ひっくり返してやれば、ジョーカーの絵が印刷されていた。

「驚いたな……これは確かに異能だと呼んでも良い」

では次だ。と彼は告げる。また意地悪をしようとしている彼のことを私はジトツと睨み付けたが、この思いは興奮気味の彼には届かない。

「ハートのクイーンだ。何処にある？」

「みぎのてくび、そこにかくしてる」

おじさん狡い。と非難してやれば、彼は大きな口を開いて笑い出す。院長先生だつて意地悪してたけど、此処まで酷くはなかった。私が不貞腐れてやれば「悪かった悪かった」と平謝りで頭を撫でてくる。謝罪に誠意がない、子供だからつて馬鹿にしている。「私にも君くらいのこと……いや、君よりも少し上の子がいる」

彼はそう言いながら席を立つた。

「来なさい、君はウチで引き取る」

私に手を差し伸べてくる。でも私はその手を取らない。

だつて彼は私に意地悪をしたし、ちゃんと謝つてくれてもないのだ。

つーん、とそっぽ向いてやった。

「……子供とは、レディのように気難しいものだな」

彼は困つたように周りを見た後、机の上に置かれていた飴玉の入った袋を見つける。

「お詫びにそれをあげよう」

「ぜんぶ？」

「袋ごと持つて行きなさい」

仕方ない、許してやる。誠意とは言葉ではなくて、物なのだ。平謝りされるよりも余程、誠意がある。

「……物を贈れば機嫌を直すのは、レディの扱いと一緒か」

大変失礼な脳波を受信した気がするが、飴玉に免じて聞かなかつた事にしてやる。

少なくとも彼には悪意はなく、必要以上に恐れもない。自分には子供が居ると言った時の穏やかな感情、そこから私に向けられる温かい波長。意地悪ばかりするおじさんだつたけど、根っからの悪い人ではない事は分かっている。どっちかというの良い人なんだけど、悪いことにも手を染めている。それは彼が悪戯をする時に分かっていた事だ。でも、大人つて皆、良い人でも、何かしらの悪い事に手を染めているものなので、そういうものだと感じている。院長先生だつて、私に関する事で袖の下を貰っていたけども、だからといって必ずしも悪い人じゃないつてことは分かっていた。

人の心はまだら模様。色が混ざる場所もあれば、白と黒ではつきりと分けられている箇所もある。

良い人つていうのは、白と黒だと白を占める割合の多い人つて感じだけど、中身が黒ばつかりな人の中にも良い人がいる。

逆に白ばかりが目立つ人つて好きじゃない。あの意地悪な子だつて、白の割合の方が多いのだ。でも嫌い。同じ白でも嫌いな白があつて、同じ黒でも嫌えない黒がある。好ましいのは、温かく感じられる。たぶんその温もりはきつと「優しさ」と呼ばれるものであり、他にも多くの感情が白と黒の人間模様で溶け込んでいる。

私がこの孤児院で人に触れて分かったことは、極端よりも曖昧な方が好ましいって事だった。

その日、ジオン・ズム・ダイクンに引き取られた私は屋敷に連れ込まれる。

エントランスホールで出迎えてくれた大人の女性、彼女は私の姿を見るや否や姿勢を正す。

呼吸をひとつ挟んで、キツと厳しい目付きでおじさんを睨み付けた。

「そこにおられる子は、何処の誰との子でありましょうか？」

「……誤解だ。この子はウチが支援している孤児院から引き取ってきた」

「孤児院？」

女性が私の方を見つめてくる。たぶん彼女はおじさんの良い人なんだという事は簡単に察せられた。

孤児院でも、そういう大人の関係は多々見た事がある。そして、その関係性に若干の翳りがある事より、二人が正しく結ばれた関係じゃないって事も理解できた。

私は、おじさんに向き直ってレディとしての忠告をしておく。

「おじさん。うわき、ダメぜったい」

両手の人差し指でペケマークを作る。おじさんは目を見開いて、女性の笑顔が引きつった。

「……アストライア、誤解だ」

「少し詳しく話を聞く必要があるようね？」

「あと君も誤解している」

彼は想い人から目を逸らすように私に向き直る。

「私には正妻が居る。しかしアストライアは私が最も愛している女性だ」

うん、知ってる。大人の関係は複雑怪奇だ。

アストライアと呼ばれた綺麗な女性は、まあ、と声を零した後、少し頬を赤らめながら私を見る。

「……それでこの子はどうするおつもりで？」

そう言いながら私のことを抱き寄せる。

なんだか温かい感じがする。少し安心する、感覚がある。

されるがままに抱き締められておいた。

「とりあえずは……使用人見習いとして家に置いておくつもりだ」

「では使用人用の服を仕立てなければいけませんね。詳しい話は後でお聞かせください」

彼女は抱き寄せていた私をゆっくりと引きはがして私に微笑んでみせる。

「貴女の名を聞かせて頂戴？」

「かなりあ。かなりあつてよばれてた」

「カナリア……そう黄色に近い金色の髪になぞらえたのね」

手櫛で髪を撫でられる。

「綺麗な髪をしているわ。歳は幾つかしら？」

ひー、ふー、みー……とりあえず、指を四本立てた。

## 2. だいくんけでのにちじょう。

カナリアです。ダイクン家の使用人見習いをしています。

年齢の割にしっかりしていると褒められます、四歳です。

今は瀟洒にポーカーを嗜んでいます。

「くそつ、なぜ勝てない！」

対面に座るのは母譲りの金髪の少年。名はキャスバル・レム・ダイクン。

ジオン・ズム・ダイクンの嫡子である彼は今、くしゃりと悔しそうに前髪を掻き上げる。そんな彼の手元の机には、並べられた五枚のカード。数字の6から10のストレート。その対面に座るメイド服を袖に通すレディな私の手元にはスペードのフラッシュだ。

私は場に積み上げられた賭け金代わりの飴玉を、にんまりと笑みを浮かべて手元に掻き集める。

「あめだま、たくさん」

山積みの飴玉。それをジオン・ズム・ダイクンの次子である少女、アルテイシア・ソム・ダイクンが横から羨ましく見つめてきたので飴玉を幾つか御裾分けする。



使用人見習いの仕事なんて、あつてないようなものだ。

アストライアが仕立てさせたメイド服を普段着代わりに着込んでいるけども、まだ四歳の身の上では満足に家事も手伝えない。代わりにジオンが私に与えた役割は、二人の子供の遊び相手。男の子と女の子が一人ずつ、嫡子のキヤスバル・レム・ダイクンはキザでスカした男の子、それでいて負けず嫌いだ。次子の女の子は、アルテイシア・ソム・ダイクン。よく笑つて、よく歌つたりする。飼っている黒猫のルシファが大好きだ。

キヤスバルは私よりも五つも上で、アルテイシアは二つ上。傍目から見ても仲の良い兄妹である。

私の特別な力を使つても、オセロやチェスでキヤスバルには勝てない。

でもババ抜きや神経衰弱なら絶対に負けない。キヤスバルは負けず嫌いなので何度でも勝負を挑んでくる。本当に何度も何度も挑んでくるので、ちよつと相手をする事が面倒になった私は対価を要求する事にした。それで彼はお菓子を持つて来るようになり、これを賭け金代わりに勝負を持ち込んできた。それを搔つ攫うのが私の今の御役目だ。

私、知ってるよ。こういうのをカモつていうんだよね。

「きょうも、みついでくださりありがとうございます」

彼の手元から飴玉がなくなったのを確認し、深々と頭を下げる。

「賈いだ訳じゃない！ そんな言葉、何処で学んだんだ！」

次は勝つ！ と彼は私を指で差した後、机に広げられたトランプカードを片付け始める。

御馳走様です。私は心の内側で次の分の感謝を述べておいた。

「やはりポーカーで勝つ為にはカウンティング……」

彼がカウンティングを頑張ってくれるおかげで山札の残りが分かっちゃうんだけどね。と、彼に気付かれないようにンベツと悪戯っぽく舌を出した。今日のルシファは御機嫌斜め、アルテイシア以外が手を出したら嘔まれちゃう。撫でたい気持ちをグツと堪えて、両手いっぱい餡玉を持って与えられた自室に戻る。部屋には子供用のピアノがあつて、大量の餡玉は宝箱に突っ込んでから鍵盤に指を添える。

私は相手の気持ちを読み解く事ができる。

かといって、それは相手の感情を理解できるといった程度のものであり、納得とは程遠い。ジオンは私の事を新人類の先達と言ったりもするけども、人の心が読める程度で大きな何かが出来るとは訳じゃなかった。道具は使う人間で用途が変われば、形も変わる。刃物は料理を作る時に便利だけど、人を殺す事に特化させることもある。技能や能力も似たようなものだ。持っているだけでは、大した意味はない。これ単体ではプリンや餡玉をせしめる程度が関の山、こんなものが人類の抛り所になるはずもない。

想いを誰かに伝えるのであれば、テレパシーなんかよりもっと良い手段がある。

「~~~~~」

アストライアが発する歌声は、名前も顔も知らない誰かの心を響かせる。

ノーシング・ノーライフ。これよりも素晴らしい共感性を持つ力が、果たして他にあるだろうか？ 私からすると皆を幸せな気持ちにさせるアストライアの歌声の方が余程、羨ましく思える。

その夜、夕食時。議会がまとまらない事で悩むジオンに私は「アストライアの歌を聞かせれば良い」と提案した。

微笑ましいものを見る目で頭を撫でられた。

「みんな、お前のように相手を理解してやれる優しい人間だったら良かったのだがな」

その父の言葉にキヤスバルは、訝しむように首を傾げる。

テメー！ 言いたい事は分かってんだぞ、コラー！

◆

餓鬼が来た、女だった。ヒヨコのような金髪の芋臭い女だ。自由奔放な妹だけでも手に余るというのに、更に餓鬼が増える事を想うと億劫で仕方ない。

僕は行く宛のない餓鬼を放り投げてもよいと考えるほど鬼ではないし、決められている事に難癖を付けるほど子供でもない。ただ理解する事と納得する事を同義だとは思

わないで欲しい。母のアストラリア、妹のアルテイシア。そこに僕を含めた親子水入らずの場に不純物が混じる事は全くもって不本意である。

それに此奴は、使用人見習いの身分の癖に家族同然の扱いを受けるのも納得がいかない。

「はじめまして、かなりあです」

そう言つて小汚い頭を下げる。

衣服は庶民の中でも貧相なものを着ており、髪の手入れも満足にしていな。

正直、見ていて気分の良いものではない。

触れるのも嫌だと僕がそっぽ向けば、此奴は困つたようにはにかんだ。

なんだその態度は、僕の方が子供のようではないか。

「遊んでやる、来い」

「いいの？」

「僕が良いと言っているんだ。……いや、先に風呂に入つて来なよ。臭い」

彼女が風呂に入った後、僕はトランプで簡単なゲームに付き合つてやる事にした。

一度や二度、適当に遊んでやれば良いと思つていたのだが、意外にもこれが長く続いて一時間が過ぎる。

その間、僕は一度も彼女に勝つ事ができなかつた。

「よつわ〜い」

ババ抜きの中で、彼女は最後の二枚の内一枚を摘みながらにまにまと笑みを浮かべる。

摘ままれているのはハートの7、歯ぎしりする。勝負の中で、彼女は僕の手札からババを引くことは一度もなく、しかしアルテイシアからは程よくババを抜き取って僕に渡してくる辺り、狙ってやっているとしか思えなかった。オセロやチェスだと勝てなくもないが時折、僕の思考を読み切っているのではないかという動きをしてくる事があった。結局、地力の差で勝ててしまえるのだが、誘い込んで罠に掛けようと思った時は必ずといっても良い程に引つかからない。ブラックジャックだと勝てることはあるけども、彼女の負けた時の大半は自滅。それも引かなきゃ負けるっていう時しか引かず、運悪く負けてしまうっていうパターンばかりだ。

ジャンケンをした時、アルテイシアには程よく負ける癖に僕相手に負けた事は一度もない。

気に食わない奴だと思った。

彼女が僕の家に来てから一週間が過ぎた頃、彼女は子供向けのメイド服を着ていた。

馬子にも衣裳とはよくいったもので、姿勢を正し、深々と頭を下げる仕草は思っていたよりも様になっている。そういえば、この家に来てから母が肌と髪の手入れをしてい

るので見れなくはない程度には綺麗になつていた。この綺麗という言葉思い浮かべた時、彼女は僕の方を少し驚いた顔で見つめた後、にまにまと笑みを浮かべる。「いつてくれないとわかりませんよ」と舌足らずの口で宣いやがったので、片手で彼女の頭をぐりぐりと押し付けてやった。

母から彼女が特別な能力を持っている事を聞いている。

思っていることが言わずとも伝わってしまうのは厄介なものだ。あまり良い気がしない。と思つた時のこいつはとて悲しそうな顔をしたから「身内以外ならな」と片手で髪をぐしゃぐしゃに撫で回してやった。相手の思っている事が分かるのであれば、もつと上手く取り入ることもできるはずなのに、こいつはそれをしようとしなかつた。

その特別な能力を相手を揶揄う事ばかりに使って、その反応を楽しんでやがるのだ。

まったくもって悪女である。将来有望な女狐だ。

でもまあ相手の心が分かるからといって相手に合わせるばかりの人生つてのは「窮屈だろうな」と子供心に思つた。

◆ 案外、彼女くらい人を食つてるのが丁度良いのかも知れない。

ダイクン家の生活にも慣れ始めた頃の事だ。

私の保護者であるジオンは時折、屋敷に偉い人を呼んで密会をすることがある。サングラスを掛けた頭の禿げたおじさんは優しい人、その隣に付き従っている事の多い坊主頭は怖い人。どちらも心は真つ黒で、たくさん悪い事をしてきたんだと思う。でも頭の禿げた恰幅の良いおじさんは嫌な感じはしなかったし、坊主頭のお兄さんは怖い人だけど、自ら進んで悪い事をするような人にも見えなかった。あと顔が怖くて大きな人は心が白くて、とつても優しい！ 私が今まで会って来た人の中で最も優しく感じられる人だったから、会えると嬉しくなつて抱き着いちゃう！ 出会つた当初は子供の扱いに困っていたけども、今じゃ笑いながら私を高い高いしてくれるのだ、大好き！

アルテイシアと二人で肩車をして貰つて、キャスバルを見下すのが最近のトレンドである。

ジオンの友達には心の黒い人が多い、悪党ばかりだ。

でもドズルの他にも優しい人はいる。ラルおじさんである。ジンバは信用できない奴だけど、ランバは良い奴だ。ドズルは優しいけど気弱で泣き虫、それに比べてランバが心根が真つすぐで強い！ なによりも子供の私を前にしても、ちゃんと私の事を見てくれるのが高得点！ ジオンとジンバが密会している間、暇になつたランバに「おにたいじだ！」と意地悪なキャスバルを退治しに行くのにも付き合ってくれる。チェスやオセロもランバの手を借りれば、ポッコポコに出来るのだ！

悔しがるキャスバルを眺めるのは、おつなものですな！

「大人の手を借りて卑怯だと思わないのか!？」

「おにいさま。すぐれたしきかんというのは、いかにぶかをうまくつかいこなせるかということです」

「はっはっはっ！ このランバ・ラルもカナリア嬢には勝てませんな！」

大人げなく笑うランバに合わせて私も高笑いをする。

「しかしカナリア嬢も人の手を借りてばかりではいけませんぞ。そしてキャスバル様、この手は少し軽率過ぎましたな」

そういつて二人は先程までやっていたゲームの検討を始めるまでがセットだ。

私も話を聞くようにはしてるけど難しい事はよく分からない。

キャスバルは、よく考える。孤児院で同年代の誰よりも賢く、ドズルよりも物事を深く考える事ができた。

その事はランバも理解しており、九歳の子供にはまだ早いと教えない事も口にしたりする。

ランバからすると私も十分に賢いとの事、当然である。私は特別なのだ。

そんな感じで色んな人と顔を合わせていると、本当に悪い事を企んでいるような奴もいる。



密会を終えた後、ジオンは私だけを部屋に呼んで、いつも同じ質問をする。

「今日、会った相手はどう見えたかな？」

私は思った事を率直に告げる。

細かい事は分からない。何かを企んでいる。という事は分かっても、パツと見ただけでは具体的な何かまでは分からない。

だから何時も印象だけを口にはしている。

そうか、とジオンは短く頷くだけだ。

ザビ家の印象を口にした時は「意外だな」と深く考え込むように呟いていた。

### 3. さよならは、とつぜんに。

自分が子供受けをしない見た目をしている事は自覚している。

ちよつと恫喝するだけで恐れられる姿をしていたから俺は軍人を目指した。俺は馬鹿だ、考えるのは得意ではない。親父や二人の兄貴のように物事を大局的に俯瞰し、多角的に見ることはできない。だが馬鹿が馬鹿なりに考えて、自分が出来る形で家族の力になりたくて選んだ道だ。

……ジオン共和国建国時、ジオン共和国軍の前身となるジオン国防隊が設立された。

これはスペースノイドの動きを危険視した地球連邦の経済制裁や連邦軍の派遣といった事柄への対抗手段であり、これを取りまとめたのが親父という事になっている。

この事は事実としては正しいが、事情は少し複雑だ。

先ずジオン共和国はジオン・ズム・ダイクンを代表に据えた二大派閥で構成されている。

一つはジオンが掲げる理想主義に共感した者達で構成されたダイクン派と呼ばれる派閥。もう一つは現実主義を是とする父デギンを派閥の代表とするザビ派だ。そしてダイクンは理想主義者であると同時に非暴力主義者でもあった、少なくとも民間人を戦

わせる事を是とする人間ではない事は俺も知っている。だがダイクンのシンパである大半の者達はダイクンが提唱した「コントリズム」のみを取り上げており、自分達力で自由を勝ち取るんだと躍起になっていた。これを無理に押さえつけては暴動が起きるとして、親父は彼らを義勇兵として迎え入れる。

義勇兵となつた彼らは当時、組織されていたジオン国防隊に編入される事になつた。その為、親父が奴らを受け入れたにもかかわらず、ジオン国防隊の末端の兵の大半はダイクン派によつて占められる事になつてしまつた。また当時のジオン国防隊の将校と士官には、親父が地球連邦から派遣されてきた駐留軍の切り崩しによつて得た経験豊富な将兵が多く採用されていた事もあつてダイクン派の反感を買う結果にもなつており、その遺恨はジンバ・ラルを代表に今も残り続けている。

親父は政治家だ。長兄のギレンも、次兄のサスロも、武よりも智に重きを置く人物だ。国防隊から共和国軍になつた今でも、末端の兵達はダイクン派の人間が多く占めてい

る。別に俺はダイクンの事が嫌いという訳ではないのだが、ダイクン本人の意思とは別にコントリズムを掲げるダイクン派の連中は好ましくない。奴らは過激で攻撃的だ。親父や兄貴達は勿論、妹のキシリアや弟のガルマにだって危険が及ぶかも知れない。だから俺はダイクン派の連中が余計な事をしないように共和国軍の内側から楔を打つ役割

を担うのだ。それに頑丈だけが取り柄の肉体。いざという時は外敵は勿論、内敵からも家族を守る為の盾になる。

それが俺の選んだ道だ。馬鹿が馬鹿なりに選んだ胸を張れる役割だ。

自分の子供泣かせな強面も、その為にあるのだと思えば、少しは誇らしく思えるものだ。

「われをかかげろ、そらたかく！」

とある日だ。親父に付き従ってダイクンの屋敷に来た日の事だ。

親父と長兄がダイクンと話をする為に奥の部屋に入ろうとした時、後を追いかけてとする俺の前に立ちふさがったのは幼い女の子であった。レモンのような金髪をした幼子は、怖い顔をしているはずの俺に両手を突き出している。どう扱えば良いのか困り果てた俺に「外で待ってなさい」と親父が告げられて、長兄は鼻で笑った後にダイクンを含めた三人で奥の部屋に入ってしまった。

目の前には幼子、俺の両手で握れば簡単に壊れてしまいそうな子供だった。

「はやくして！ はやくー！」

ぴよんぴよん、と飛び跳ねる幼子。他に誰かいないかと周りを見渡すと部屋の入り口から俺を見つめる幼い女の子が更に一人、警戒するように俺の事を観察している。そうだよ、俺の顔を見れば、あの隠れている子の方が正しい反応なのだ。しかし目の前の女

の子は俺を見て怖がりもせず、構ってくれない事に膨れっ面を見せる始末だ。  
「てりやーっ!!」

痺れを切らした女の子が俺の身体に飛び込んだ。

危ない、と思った俺は咄嗟に幼子の身体を受け止めた。

両手を彼女の脇の下に入れて、掴み取る。

怪我はしなかったか、握り潰してはいないか？

ギョツと閉じていた瞼を、恐る恐ると開いてみる。

幼子がクリツとした目で俺を見つめていた。

「かかげろー!」

「……掲げろ?」

「たかく! ずつとたかく!」

戦々恐々と天井近くまで掲げてやれば、幼子はキヤツキヤと笑い出した。

「らるおじさんよりもずつとたかい!」

「ラル? ジンバ・ラルの事か?」

「じんばきらい! らんばのほう! らんばだいすき!」

ランバ、ランバ・ラル。確かジンバ・ラルの息子が、そのような名前だったか。

「らんばいいやつ! ひつとうかしん!」

俺は率直に言うとは過激なばかりのダイクン派の連中が嫌いだ。

ダイクン派の中でも過激派筆頭のジンバ・ラルの息子が、この幼子に気に入られてい  
る事実がなんとなく気に食わなかった。

だから俺は彼女を掲げながら、その場でクルクルと回転してみせる。

「おーすごい！　すごい！」

「ランバも良い奴かも知れんが、俺はもつと凄い事ができるぞー！」

「じゃあ、かたぐるま！　かたぐるまして！」

「おお、良いぞ！　しっかりと掴まっておくんだ！」

「おおー！　おつきい！　じゃあね！　じゃあね！」

子供に怖がられる事が当たり前だと思っていた。

この強面な顔も悪い事ばかりではないし、強い劣等感を持つていた訳でもない。

だが、何もしていないのに、子供に怖がられてしまった時や泣かれてしまった時は流  
石に傷ついたりもする。

子供が嫌いな訳じゃないのだ、ただちよつと苦手なだけだ。

だから、こうやって子供を掲げるのは初めての経験で、自分の事を怖がらない子供も  
初めてだった。

たったそれだけの事が、嬉しかった。

「このままぜんしん！　じおんろぼ、はっしーん！」

「おお！　……で、何処に行くつもりなんだ？」

「おにたいじ！　いじわるなきやすばるをたいじする！」

キヤスバルというのが誰だか分からないが、とりあえず彼女の云う事を聞いておけば良いと歩を進めようとした。

ズボンの裾を引つ張られる感覚。足元を見てみれば、部屋の入り口から様子を窺っていたはずの女の子が羨ましそうな目で俺を見上げていた。

「あるていしあー！　こわいかおのおにーさん、きゆうしゅつにんむー！」

「怖い顔……俺はドズルという名前がある」

「どずるー！　あるていしあものせてあげて！　はやくはやくー！」

アルテイシアと呼ばれた女の子も肩に乗せてやれば、嬉しそうに笑顔を浮かべてくれた。

両手に花とはこの事か。気が強くなった俺は胸を張り、二人と一緒に堂々と屋敷の中を歩き始める。

とはいっても直ぐに目的地の部屋の前まで辿り着く事ができた。

「きやすばる、でてこい！　はやくー！」

「おにいさまー、はやくー！」

幼子二人が部屋に向かって誰かに呼び出しており、少しして扉が開かれた。

「あくもう、なんだよ。アルテイシアまで一緒にな……」

「かった！ きた、みた、かった！ これがあつとうてきぶりよくさによるむけつかい

じょうというものだー！」

「というものよー！」

「きやすばるよー、むじょうけんこうふくせよー！」

「しなさーい！」

目の前には強張った顔で身動きひとつ取れない少年が一人。

勢いのままに此処まで来てしまったが、さてどうしたものか。

……俺は両肩に乗った二人に全てを委ねる事にした。



俺、ランバ・ラルはクツキーの入った缶を片手にダイクン家に足を運んでいる。

目的は屋敷に住む三人の子供であり、親父に会いに来た道すがらに寄つてみただけに過ぎない。親父に会う時よりも少しだけ身嗜みを整えて、屋敷のチャイムを鳴らす。屋敷の中から慌ただしい足音、少しして扉が開けられる。中から姿を現わしたのは、自分よりも頭ひとつ分以上も大きな体躯。忘れるはずもない強面な顔、政敵であるザビ家の三男。ドズル・ザビ。その男の両肩には見慣れた二人の幼子が腰を下ろしている。



彼と視線が交錯する。殺意はない、敵意があつた。

それが幼子二人に関わる事を直感的に理解したからには、引く事はできぬと目一杯の敵意で睨み返す。

「らんぼー」

幼子の一人、カナリア嬢が満面笑顔で俺の名前を呼ばれた。

俺に両手を差し出す彼女を両手で受け止めて「は〜い、ラルおじさんだよ〜♪」と破顔させながら空高くに掲げる。

カナリア嬢をあやしつつドズルと再び視線を合わせる。

——分かつているな？

——ああ、勿論だとも。

男には、時に言葉を介さずとも伝わる時がある。

戦場に生きる者は即断即決。俺達は過去の諍いを振り切り、即刻で停戦条約を締結する。

条項はただ一つ、ダイクン派とザビ派の諍いをダイクン家の屋敷に持ち込まない。

掲げ上げたカナリア嬢をそのまま肩に乗せて、屋敷へと足を踏み入れる。

この屋敷は現時刻を以て、非戦闘地域に指定されたのだ。

アストライア様にリビングまで案内された時、クツキーのついでに用意した珈琲の豆

を贈る。

それを受け取った彼女は「今から珈琲を淹れて来ましょう」と気さくな笑顔で台所へと向かった。部屋に残されるのはカナリア嬢とアルテイシア様の他、政敵のドズル。正直、邪魔以外の何物でもないが、厄介な事に二人はドズルを気に入っている御様子だ。ここで敵意を剥きだしにしても良い事はない。子供達を怖がらせるだけという事は相手にも分かっているようで、特に何かを言ってくるような真似はしてこなかった。

だがザビ派の連中とは昨日の敵で、今日も敵の間柄。同じ空間に居ては居心地の悪さを感じる。

見るに相手も同じものを感じているようだった。

此処は大人の余裕を見せつける為にも小粋なジョークでも飛ばしてやりたいものだったが、思いつくのは軍人的なジョークばかりで幼子の前で口にするようなものではなかった。

かといって、このまま黙っている訳にもいくまい。

はて、どうしたものか。

「らんば！ ちえす！」

悩み、困り果てているとカナリア嬢がチエス盤を持ってきた。

「らんば、たい、どずる！ ふあいつ!!」

その言葉を聞いた時、俺はドズルと顔を見合わせる。

賭け金は幼子二人からの尊敬。互いに好戦的な笑みを浮かべた後、盤上に駒を配置する。

負けられない戦いが、此処にはあつた。

と、思っていたのだが。

カナリア嬢はドズルの膝の上に座り、俺に向けて挑発的な笑つてみせた。

「らんば、つよい！ ゆえに、ゆえあつて、すけだちするー！」

正直な話、ドズル相手なら負ける気はしない。カナリア嬢の腕もキャスバル様に負ける程度、二人が力を合わせた程度で俺に敵うはずもない。

そう思っていた。

その考えが甘いと知るのは数十分過ぎた後の話になる。

「ぐぬ、ぐぬぬ……」

形勢は不利、ドズルの腕前は平均以上にはある。しかし俺が手こずる程ではない。

「どずる、だめ！ そこじゃない！」

「お、おう。ここのらどうだ？」

「うむ、くるしゆうない！」

しかしカナリア嬢の的確な助言が今、俺を苦しめている。

今も仕掛けていた罠のひとつを見破られてしまった。手が読まれているとしか思えない助言の数々、形勢は着実に悪くなりつつある。

温くなった珈琲を啜り、長考する。拙い、拙いぞ。このままでは勝てない。

「らんばく……かてないの?」

カナリア嬢がドズルの膝を占拠した為、代わりに俺の膝上に腰を下ろしたアルテイシア様が心配そうに俺を見上げる。

勝つか、負けるか、ではない。男には、勝たねばならぬ時がある。

ランバ・ラル、此処が男の見せ時だ!

数分後、

「むむむ……」

仕掛けた罠は全てカナリア嬢に見切られた今、絶体絶命の窮地に追い込まれている。

最早、どう足掻いてもチエツクメイトを逃れられぬ状況。今にも泣き出しそうなアルテイシア様、守れなかったこの笑顔。敗北の味を噛み締めながら彼女の頭を優しく撫でた。

「……見事だな。しかしドズル、自分の力で勝つたのでないぞ。カナリア嬢の助言のおかげで勝てたのだということ、忘れるな!」

「はっはっはっ、これが負け犬の遠吠えというものか。なあカナリア?」

「はいぼくしゃのことばにちからなし、しょうしゃのみがれきしをきずくのだー!」

高笑いを上げる二人に、どうにか怒りを堪えて再戦を申し出る。

その要求を二人は快く受け入れて、チエスの駒を並べ直す。今度こそ、という言葉はあまり使いたくないものだが、今度は最初から勝つ為の戦略を組み立てる。油断をした訳ではない、しかし何処か見縊っていたのかも知れない。戦場では次はない、勝つ為の準備を怠った。俺の勝利はアルテイシア様の笑顔に繋がる。だがしかし、どうすれば二人に勝つ事ができるのか。

一手目から熟考する。膝上で俺を心配そうに見つめる彼女の為にも、負ける訳にはいかぬのだ。

「ん? チエスをやっているのか?」

そんな折、新たにリビングへと足を踏み入れる少年。キャスバル・レム・ダイクンがチエス盤を覗き込んだ。

「なんだ、まだ始まったばかりじゃないか」

「おにーさま! わたし、らんばにかつた! おにいさまにかつたらんばにかつたから、わたしがさいきよう!」

「おいおい、俺の事も忘れないでくれよ?」

「うん! どずるとわたしでうちゅうさいきよう!」

「……なるほど」

キヤスバル様は小さく頷き、俺の隣に腰を下ろした。

「僕を手伝え。あのクソガキを分からせる」

「なんと？」

「あー、だめー！ ふたりでとかずーるーいー！」

「お前も二人じゃないか」

ぶうぶうと文句を言うカナリア嬢には意にも介さず、キヤスバル様は最初の一手を打ち込んだ。

「いいか、ランバ。あのクソガキの攻略にはコツがあるんだ」

「あー、あー！ どずる、さくせんたてて！」

「お、おう。……いや、俺は頭に自信がなくてだな」

「おにいさまがいるとかてないの！」

「小癪な事に罫を全て見破りやがるからな、盤石な態勢で少しずつ全体を押し上げていくんだ」

「どずるー！ ひらおしにまけるなー！」

「や、やらせはせん！ やらせはせんぞー！」

キヤスバル様と共同戦線を組んだ二戦目は、無事に勝つ事が出来た。

アルテイシア様も御満悦である。三戦目は俺だけで戦って優勢、四戦目のキャスバル様で五分となっていた。

どちらもカナリア嬢とドズルの敗北である。

「どずるのばかー!」

「いたた……わかった、わかった。次までにちゃんとチェスの勉強をしておくからな」  
ポカポカとカナリア嬢に頭を叩かれる政敵の姿は正直、小気味良いものではあった。しかし流石に少し気の毒にも感じられたし、彼女の教育にも悪いと考えて諫言する。

「ドズルに頼るだけではなく、カナリア嬢もしっかりと学ばなくてはなりませんな」  
彼女は、むうっと頬を膨らませながらも大人しくドズルの膝上に座り直す。

簡単に検討する。時間にして二十分程度、カナリア嬢が大きな欠伸をした頃に中断した。ドズルも政敵である俺の話を実剣に聞いていたのは少し意外だった。

「感謝する」

検討を終えた時、ドズルは俺の目を見て頭を下げる。

「別にお前の為だけにやった訳ではない」

俺は素っ気なく返し、自分で買ったクツキーを頬張る。

正直、菓子類は好きではない。しかし最近は洋菓子を食べる機会が増えたせいかわ味の良し悪しが分かるようになった。

た。  
珈琲と洋菓子も一緒に食べれば味が合う事も、この家に来るようになってから知っ



ドズルとランバが家に来るようになってから数ヶ月が過ぎた。

派閥同士で対立する事はあつても、個人間であれば仲良くなれる。

そんな一例、心地よい日々が過ぎる。

この穏やかな毎日が何時までも過ぎて行けば良い。

そう思い始めた頃の話だ。

ジオン・ズム・ダイクンが議事堂にて暗殺される。

平和な日常は終わりを迎える。

時代は次の舞台へと移行し、戦乱の世が幕を開けようとしていた。

私達は守るべきを守る為、大切なものを奪われない為にも戦わなくてはならない。

そんな時代が、始まろうとしている。



#### 4. ぼうりよくはいけないことです。

ジオン・ズム・ダイクンの急死、議事堂は大混乱に陥っている。

重要演説の最中だったのも痛かった。ジオン共和国の宙域全てに発信されていた映像は瞬く間に民間へと伝播し、ダイクンの熱狂的な信奉者が雄叫びを上げる。これに同調した者達が蜂起し、軍内部にまで波紋が広がりがつあつた。その一部始終を見ていたデギンは唾然とした顔を浮かべた後、忌々しく齒を食い縛ってから指示を飛ばす。

ジオン・ズム・ダイクンの延命処置、病院への搬送手続き。医学を修めている者が居ないかの搜索、とりあえず旧友のジオンが病院に搬送されるのを見送った後、後事をジンバ・ラルに押し付けて、デギンは一人、近場のホテルに足を運んだ。防諜機能が施されたスイートルームの一室、中にはザビ家の人間が集まっている。

デギン、ギレン、サスロ、キシリア、ガルマ。そして俺、ドズルも同席する。

「どうやら無事に集まってくれたようだな」

デギン——親父は全員の姿を確認すると小さく息を零す。

「父上、キシリアやガルマまで呼び付ける必要はあつたのですか？」

はつきりとした物言いで問い掛けたのはサスロ兄。次兄の言いたい事もわかる。

事実としてキシリアは13歳、ガルマに至っては9歳だ。この状況で呼び出すのは危険だと俺も思う、実際にガルマなんて怯えてキシリアに泣きついている始末ではないか。しかし親父は一言だけ「私ならこのタイミングだ」とポツリと零す。何が、とは言わずとも察する事はできる。その意味まで俺の頭では考え付かないけど。

だが、それでは親父が身を晒すのは危ないではないか？

「私なら大丈夫だ。私なら私は殺さん、今となつてはジオンをまとめられるのは私だけだからな。まとめる相手が居なければ降伏勧告もできまい」

今やダイクンの信奉者の方が怖い、と親父は言つて俺達に向き直る。

「この難局を乗り越えるぞ。サスロはザビ派の人間を取り纏めろ、ギレンは私と共にダイクン派の人間が勝手な事をしないように話を付ける。これには国防軍の将校も含まれる……まあ将校の七割方はザビ派の人間だ、抑えつけるのは難しい事ではない。ドズルは……キシリアとガルマを守つてやれ。さあ行くぞ。現状でも治安維持の名目で連邦軍が、このズム・シテイを占拠しかねん。……いや、最悪は今、連邦と戦端を開く事だ。それだけは避けなくてはならん」

話を終えるや否や親父、長兄、次兄が同時に携帯電話を取り出した。

サスロ兄は携帯電話で通話をしたまま、部屋から出ていこうとする。

それに伴つて、親父とギレン兄も歩を進めた為、俺は思わず口を開いた。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ 結局、ダイクンを殺したのは誰なんだ!? 俺達とダイクンは政敵ではあったが、同じ共和国の仲間でもあったはずだ！」

「それは今、聞くべき事か？」と長兄がドスを利かせた声で言い聞かせる。

「ああ、必要だ！ 皆も知っているだろうが俺はダイクン家と交友を持っている。そして、これは黙っていた事だがラル家のランバ・ラルとの交友もある!!」

「お前、よりにもよってラル家の連中と……ッ！」

サスロ兄は俺の発言の途中で、咄嗟に通話を切り、拳を握り締めたまま大股で歩み寄ってくる。

殴られる！ と思ったが、それを親父が手で制する。

「この状況でダイクン派の中心に近い人物とホットラインを持っている意味は大きい」

それでドズル、と親父がサングラス越しに俺を睨みつける。

「今の状況を理解できていない訳ではあるまい。お前は、この状況で何がしたいのだ？」

「お、俺は……」

歯を食い縛り、声を絞り出す。

「……助きたい奴がいる」

「誰だ？ ダイクン家の者か？ それとも、そのラル家の友人か？」

「……子供だ。ダイクン家の使用人見習いをしている。ダイクン家の人間には、価値が

ある。俺がやらずとも誰かが守る」

だが、と声を荒らげた。

此処は引くべきではない、不合理なのは分かっている。

感情を訴える他にない。

「……だが！ アイツには今、守るだけの価値がない！ だから……俺が、行かなきゃいけないんだ!!」

親父は長兄をチラリと見やる。長兄は思い当たる節があつたようで「ああ、あいつかと零した。

「お前……今は国家の一大事だぞ?! 子供一人がなんだつて……!」

サスロ兄の激昂に「ああ高が子供一人だ!」と叫び返す。

「だが、俺には国家に対する役割がないのだろう!? なら私情で動いても良いはずだ!!」

「……ドズル。お前には今、家族を守るといふ役目を与えたはずだ。重要でないとは言わせないぞ。今の状況で信じられるのは身内だけだ!」

「親父……でも、俺……行かなきゃ……アイツには、親すら居ないんだよ……!!」

今、こうしている間にも国家の崩壊は迫っている。

親父は大きく溜息を零し、手で顔を覆い隠す。サスロ兄は今にも俺に飛びかかって来そうだ。

だが、俺も此処で引く訳にはいかなかった。

こんなことをしている場合ではないと分かつてはいるけども、それでも此処は譲れない。

「良いではありませんか」

長兄が口を挟んだ。

「どの道、此処に置いておいても飛び出していかも知れない人間にキシリアとガルマは任せられませんよ」

「いや、それは……」

「ドズル」

長兄の鋭い視線だけで、お前は黙っている。というのが伝わってきた。

「ギレン、此処には誰を残す」

「父上で良いのでは？ その御老体で駆け回るのも辛いでしょう。此処をザビ家の作戦本部とし、陣頭指揮を取るのは如何ですか？」

「まだ隠居するつもりはないんだがな」

「元気な内に後進の育成をするのも先達の務めですよ」

親父はまた大きく息を零し、部屋にあったソファに腰を落とす。近くにいたガルマに「水を持ってきてくれないか？」と頼んだ後で「ドズル」と俺の名を呼んだ。

「ダイクンを暗殺したのは誰だと思っ？」

「それは……」

民衆の中にはザビ家の誰かが殺したのだと言う者も居る。しかし、それはない。と俺は考える。ザビ家には、ダイクンを殺す意志がなかったのは今までのやり取りでもわかる。少なくとも親父が指示を出す事はないはずだ。ダイクン派がダイクンを殺すのはありえない、ならば消去法で地球連邦軍？

「それでは30点だな。及第点はザビ派と答える事だ。満点は、地球連邦軍と共和国軍のザビ派だ」

ジオン共和国軍に存在するザビ派の半数以上は、元地球連邦の駐留軍で構成されている。

その為、地球連邦軍と共和国軍内のザビ派にはパイプが繋がれており、そこから情報が流れていたのだと親父は推察した。元より地球連邦とジオン共和国では、経済力に致命的な差がある。信念だけで飯は食えない。それに元駐留軍はダイクン派から嫌われていたし、民衆からの評判も悪い。そんな共和国での暮らしに嫌気の差した人間に声を掛けて、家族を含めた市民権と共に地球への移住を条件にすれば、切り崩すのはそこまで難しくないらしい。

これを長兄は興味深そうに耳を傾けているのが、少し印象的だった。

「この情報が必要だったのだろうか？ さっさと行け、この親不孝者が」

「あ、ああ……」

俺は親父と長兄に深く頭を下げ、扉の取手に手を掛ける。

「ドズル！」

長兄に呼び止められる。振り返れば、何かが投げられる。

受け取ると、それは何かの鍵だった。

「私のバイクだ、使え。私は車を押収する」

「ああ、ありがとう！ ギレン兄！」

「それとだ、ドズル」

親父は、ソファに腰を落としたまま、顔も向けずに告げる。

「死ぬなよ。友人も、その子も、ダイクン家も、無理だと思つたならば諦めなさい。お前には弟妹を守るといふ役目がある事を忘れるな。本当の親不孝者になることを決して許さんからな！」

その言葉を聞いた俺は、扉の前で踵を返し、背筋を伸ばして敬礼する。

「ドズル・ザビ。行ってくる！」

「早く行け、馬鹿者！ お前が帰ってくるまで、私はここで缶詰だ！」

怒鳴り付けられて、慌てて部屋を飛び出した。

◆ ジオン・ズム・ダイクンの急死を聞いた時、俺はいち早くダイクン家の屋敷まで車を走らせた。

病院に搬送されているが、命は絶望的との事だ。

だが、まだ生きている可能性はある。

今はまだ誰もが衝撃を受けている状況だったので混乱は少ない。しかし民衆が暴徒化するのも時間の問題、この状況では何処かに匿うのが良いのだろう。だが、しかし、そんな事は大人の勝手だ。せめて子には親の死に目を立ち会わせてやりたいのが人情というものである！

故に、故あって、ランバ・ラルはダイクン家に助太刀する！

愚図るアルテイシアに活を入れて、ダイクンの遺族を車の中に押し込んだ。助手席に座ったのはカナリア嬢、両手には黒猫のルシファを抱えている。本当なら隣よりも後部座席に乗って欲しいが今は時間が惜しい、アクセルを目一杯に踏み込んだ。

程なくして爆発音上がる。舌打ちした、民衆の暴徒化が思っていた以上に早い。

誰かが裏で手引きしている？

いや、今は病院まで連れて行く事が先決。迂回すべきか、このまま突っ切るべきか。

「だいたいしょうぶ、まっすぐすすすんで！ うかいしても、いっしょー！」



異常なまでに勘の鋭い幼子の言葉を信じて、道なり真つ直ぐに突き進んだ。

程なくして暴徒の群に遭遇してしまった。彼らは金属バットや鉄パイプで武装しており、俺達の方に駆け寄ってくる。その中の一人が火炎瓶を所持しているのを見て、躊躇している時ではない。と家から持ち出した護身用の機関銃を片手に握り締めて、車の天井から身を乗り出す。

「近付くんじゃあない！ 道を空けるんだっ!!」

空に向けて発砲する。その銃撃音に暴徒は一瞬、足を止めるも俺が軍服を着ているのを見て、ゲビた笑顔で歩み寄ってきた。

「良いのかよ！ 軍人が民間人を殺してもよおっ!!」

「ひゃっはあ！ 知ってるぜ、軍法会議もんだ！ 銃殺刑になるかもよ!!」

「銃器だ、奪ってやれ!! 連邦のクソ共を殺せる武器を探してたんだよ!!」

これだからダイクンのシンパはいけ好かない！ と自分の派閥を棚上げにし、機関銃の銃口を民間人に向ける。

「死にたいのか!?! 撃つぞ！ 撃たれたいのかッ!?!」

「撃つてみせろって言ってるんだよ、ちよん髭野郎!!」

撃つしかないのか、しかし……撃つしかないのか！ 引き金に人差し指を掛けた時、

服の裾を引っ張られる。

「だいじょうぶ、さいきょうのすけつとがくる」

カナリア嬢は俺の傍から外に身を乗り出し、大きく息を吸い込んでありつたけの声を発した。

「たすけてえーっ!!」

「そこかあッ! カナリアアアッ!!」

俺達と暴徒の間に割って入る大型バイクと大柄な男性。大凡、人の範疇に収まらない巨体で暴徒の前に立ち塞がる。

「貴様らアアッ! 誰に手を上げようとしてんだアアッ!!」

「ドズルかッ!」

「やっちやえ、ばーさーかー!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

ドズルは二百キログラムは悠に超えるであろう大型バイクを頭上に持ち上げて、そのまま暴徒に向けて投げ付けた。

それは暴徒の一步手前に叩き付けられる。しかし人外染みた怪力に暴徒は震え上がり、さりとて度胸自慢が死角からドズルの側頭部に鉄パイプを振り落とす。鈍い音、鉄パイプは曲がるほどの強打。

「へへ……やっただぜ!」と男が破顔したのも束の間、男の頭が右手で握り締められる。

「ただ暴れたいだけの屑共がッ！ 良いだろう、今から俺がこの場に在る全員を修正してやるッ!!」

狂戦士と化したドズルを止められる者は、もう人間の枠には存在しない。

文字通りに千切つては投げて、千切つては投げてを繰り返して、張り手の一発で昇天させては左拳で顔面を陥没させる。人数の差は一对百以上。しかし十を倒した時、暴徒は歩みを止めて、三十人を叩きのめした時には逃げ出した。引かぬ、媚びぬ、省みぬ。暴徒が逃げ出すまで金属バットや鉄パイプで幾度と殴り続けられてもドズルは一步も退かず、立ち続けた。背中に居る、守るべきを守る為、男が男で在り続ける為の天晴れ見事な仁王立ち。暴徒が居なくなった事を確認し、後ろを振り返ったドズルが見せた血塗れの笑顔は——御世辞にも、子供に見せて良い顔ではなかった。

現にアルテイシアは悲鳴を上げて、怯えている。

「あっぱれじゃ、どずる！ ちこうよれ！」

だが頭を割って、血を流す彼の強面もカナリア嬢には通じない。

覚束無い足取りで近づくドズルに彼女は飛びつき、その頬に自らの唇を押し付けた。目を点にするドズル、唇を離れたカナリア嬢は太陽のように眩しい笑顔を浮かべる。

「カ……カナリア、今……な、なにをした?」

「ほうびだ！ うれしいだろう!」

「お、おお……うおおおおおおおっ!!」

ドズルが、咆哮を上げた。

……別に羨ましい訳ではない。俺には酒場の歌姫が居る。

高が子供の接吻ひとつ、嫉妬するはずがない。

「らんば、あとでしてあげよつか?」

にまにまと笑みを浮かべる幼子、俺は彼女の首根つこを掴んで車の中に押し込んだ。

「……ドズル、乗って行くか?」

本来なら対立すべき間柄、しかし今は国家の一大事だ。

過去の因縁を投げ捨て、この難事を乗り越える為に手を取り合うのも吝かではない。

だが、ドズルは首を横に振る。

「いや、俺はすぐに戻らねばならん。ランバ・ラル。他の誰でもないお前があの子達の側に居てくれるなら安心だ」

「そうか、なら……」

「あー、だめ! どずる、だめ!!」

押し込んだはずのカナリア嬢が、また車外に身を乗り出した。

「どずる、わるいのがまとわりついてる! だめ、わたしもついてく!!」

その悪いのが何を意味しているのか分からない。

だが勘の良いカナリア嬢の事だ、もしかするとドズルの身に何かが起きるのかも知れない。

ならば、カナリア嬢だけ渡すか？ いや、優先順位を履き違えるな。

「……ランバには、その悪いのとやらは纏わりついているのか？」

「らんば、だいじょうぶ！ どずる、だめ！ だから、わたしもいつしよにいく！」

「……そうか、なら。お前はランバと一緒に駆け」

どうやらドズルも同じ考えのようだ。彼は誰よりも大きくて無骨な手でカナリア嬢の頭を乱雑に撫でる。

「俺はドズルだ、ドズル・ザビだ。どんな悪者だろうと蹴散らしてみせるさ」

ドズルは血塗れの顔でサムズアップをしてみせる。

まだ愚図るカナリア嬢を車内に押し込み、ドズルと視線を合わせた。

——死ぬなよ？

——ああ、わかっている。

テレパシーなんて必要ない、カナリア嬢のような特別な力も必要ない。

男が二人揃えば心を通じ合わせるなんて訳もないのだ。

アクセルを踏み締める。目指す先は、危篤のダイクンが待つ病院だ。

数日後、ジオン・ズム・ダイクンの国葬式の事だ。

ドズルが乗っていた自動車が爆破された。

## 5. だれがわるいつてわけじゃない。

元々危篤の状態にあつたジオン・ズム・ダイクンは、医師達の奮闘も虚しく逝去してしまつた。

この事でジンバ・ラルの動きが活性化する。元々ジンバ・ラルはダイクン派を代表する熱狂的なコントリズムの信奉者であり、国防隊が組織される以前から活発的に反地球連邦のデモ活動に参加していた。サイド3が地球連邦政府からの独立を宣言し、ジオン共和国が建国された後は義勇兵を募り、反地球連邦政府へのデモ活動の指揮を執り、サイド3の地球連邦軍駐留部隊との衝突を繰り返した過去を持っている。

義勇兵を国防軍に編入する際、義勇兵を指揮する者の一人とし、ダイクン派とザビ派。デギンの工作により、ジオン共和国に寝返つた元駐留軍と愛国者のバランスを取る為にジンバ・ラルは破格の大尉待遇を受けた。その後、息子のランバ・ラルを国防隊に入隊させる。まだ法整備が甘かつた時期の話だ。自分の階級を移譲する形でランバ・ラルを大尉に着けた後、ジンバ・ラルは歳を理由に政治家に転身する事になる。

こうして彼は軍部への影響力を残したまま、政界のダイクン派を中心に力を付け始める。

「親父が奴を泳がせていたのは事実だ。要のダイクンは非暴力主義で武力で自由を訴えようとするダイクン派の連中とは相容れないし、ダイクン派を自称する以上はダイクンの意志なしでは動けなかったからな。裏でコソコソとされるよりも表で一ヶ所に集まってくれる方が操りやすかったのもある」

国葬式、俺はサスロ兄の言葉に耳を傾ける。

俺には政治がよく分らない、小難しい話は頭が拒絶する。

こんな事は頭が良い奴がすれば良い。

と、少し前まで思っていた。

「ダイクン派を排除するのではいけなかったのか？」

「それは余りにも愚かな提案だな」

俺の問いかけにサスロ兄は鼻で笑ってみせる。

「ドズル、イデオロギーや国民性という言葉に惑わされるな。要は人間が持つ意志だ、それが大きな流れを生み出す。コントリズムは、要はスペースノイドの自立を促す主張だが、それも国民全員が同じ形の理想を持っている訳ではない」

俺と兄上が持つ理想だって必ずしも一致している訳ではない、と彼は続ける。

「人は誰しもが力を持つている。多くの人間が同じ場所に集まれば、それだけで大きな流れが生まれる。多数の人間がより強い流れを生み出し、少数が多数によって押し流さ



れるのは世の常だ。人間、二人も居れば、それだけで反発が起きる。外的要因により、生み出された流れが堰き止められてしまう事もある。多くの要因によって生み出された流れは淀み、流れが止まれば腐敗する。思想の水は腐り落ちてしまうのだ」

だが、とサスロ兄は強い口調で俺を見つめる。

「邪魔だからと排除するのも得策ではない。人は誰しも力を持っているんだ、排除するだけでも力を消耗する。排除を続ければ、流れは弱まり、いずれ水は止まる。なにも反発する相手がいる事は悪い事じゃない。上手く活用して競わせれば、それだけで強い力を生み出す事が出来るし、時には手を取り合う事だつてあるはずだ。多様性は力だ。俺達だけでは解決できない事も、俺達とは別の力を持つ勢力と手を取り合う事で切り抜けるられる事だつてある。最も重要な事は、互いに敵視しない事。次に重要なのは、相手が自分の力を発揮できる場を用意してやる事。相手が国家に不満を持てば、攻撃を受け続ける事になるからな。そういった意味でも、受け皿は用意するに越したことはない」

マンパワーはあればあるだけ良い、とサスロ兄が笑つてみせる。

サスロ兄の話は難しい。多様性は力だ、言われてもピンと来ない。

力の流れも全部が同じ方向に向いていた方が良いに決まっている。

でも、それが浅はかな考えだつて言う事は、分かつていた。

「なあ、サスロ兄」

スモークを施した窓越しに外を覗んだ。

今は国葬式の真つ只中、嚴重な警備の中を多くの車が行進する。

何処にいるかも知れない襲撃者に目を光らせる。

妙に勘の鋭いカナリアの助言だ。慢心せず、警備を嚴重にするように親父に進言した。

だが親父は最初から暗殺を警戒していたし、既に最大限の努力が取られた後だった。これ以上、警備を嚴重にすることはできない。と告げる親父に長兄は「狙撃対策として、窓にスモークを付けてはどうか」と提案する。外から車内を見えなくすれば、それだけで暗殺の難易度は上がる。その上で誰がどの車に乗っているのか分からなくすれば、狙って暗殺する事はほぼ不可能だ。国家の代表者足る親父は顔を見せる必要があるが、親父以外で特定の誰かを守る備えとしては十分。単純だが効果的な提案、且つ低コストで実行できる点も含めて、親父は快諾した。

搭乗する車は直前にジャンケンで決めた、これにより秘匿性は更に増す結果となる。

「俺、政治を頑張ってみようと思うんだ」

なにげなく呟いた。その言葉にサスロ兄は目を見開いた。

ランバ・ラルは、政治を守るべきを守る為の力だと定義した。

政治に国を変えるだけの力はない、国を変えるのは人が持つ意志である。だから国家

の方向性を示す指導者の力は偉大であり、意志を束ねたダイナミズムが文明を築き上げる。

ならば政治とは何か、現状をより良くする為の手段である。

「おお、そうか！ やつとお前も政治に興味を持つようになったか！」

サスロ兄は破顔して俺の包帯が巻かれた頭を撫で回した。この歳で頭を撫でられるのは気恥ずかしいものがある。だが、振り払ったりはしなかった。

「良いか、ドズル。政治の肝はパワーバランスだ、組織や派閥の間にあるパワーバランスを取り持つのが政治家の役目と言っても良い」

嬉々として話し出すサスロ兄の話は、やっぱり今の俺には理解できないものばかりだ。分かったような、分からないような。そんな話に頭がパンクしそうになっている俺に気付いたサスロ兄は苦笑し、また俺の頭を撫でた。

「ドズル、無理に政治をしなくとも良い」

「……だけどサスロ兄、俺は……」

「公人で在り続ける限り、政治は切っても切り離せないものだ」と知っておくだけで構わない」

サスロ兄が、優しく笑いかけてくれる。

「お前が恵まれた肉体を持つように、政治にも才能ってものがある。政治家と軍人が相

容れない事もあるはずだ。だが政治への理解を持つ者が軍隊に所属しているだけでも、俺達にとつては大助かりなんだぞ？」

お前が政治に理解を示そうとしてくれた事が嬉しいんだ、とサスロ兄が口にする。そんな殊勝な事は考えていない。国家の為ではない、エゴを貫く為に政治という力を欲したのだ。

それでも、とサスロ兄は告げる。嬉しいんだ、と。

「勉強したいなら良い本を教えてやる。政治でやりたい事があるなら俺か兄に相談すれば良い。可愛い弟の頼みだ、一つや二つ聞いてやっても罰は——」

まだ、話の途中だった。

視界が眩い閃光のように白く染まった。

対して意識は真つ暗に——意識を取り戻した時、車内は黒い煙で立ち込めていた。

熱かった、車内が燃えている。まだ意識が朦朧としている。

一体、何が起きたんだ？ サスロ兄は？

つい先程まで、今まで見た事もないような笑顔で話していた肉親の姿はもう何処にもない。

隣の席には、原型を留めない肉塊があつた。

ヒュツと血の気の引く感覚。次の瞬間、感情が怒髪、天を衝いた。

「サスロ兄が殺されたッ!! 出て来いッ! 誰がサスロ兄を殺したあああああああッ!!」

俺達の落ち度は、殺すのは親父以外のザビ家なら誰でも良かったという点だった。

◆ 「これを恐れていた」

意気消沈した父さんが、サスロ兄さんの遺体を前に項垂れる。

ドズル兄さんは入院中。この場に居るのは父さんの他にギレン兄さん、キシリア姉さんだ。ギレン兄さんは買ってきた缶コーヒーの栓に爪を立て、カチツカチツと何度も開けるのに失敗する。苛立ちを隠せず、未開封の缶コーヒーをテーブルに叩き付けた。

空気が重い、未だサスロ兄さんが死んでしまった事が信じられない。

「ダイクン派の連中だな」

兄さんは零す。

「詳しくは地球連邦の手解きを受けたダイクン派の連中だ」

父さんは兄さんが叩き付けた缶コーヒーの栓を開けて、口を付ける。

「報道ではジンバ・ラルが首謀者という事になっていますよ。私の伝手から得た情報もジンバ・ラルの手の者だ」

「アイツは人を殺せる度胸はあっても暗殺ができるタマじゃない。義勇兵を率いていた

時も味方と共に突撃し、叱咤激励をするモチベーターだ。もしアイツが首謀者なら今頃、死んでいるのは私だよ」

「だがジンバ・ラルの手の者である事は事実です」

「……人望がない訳じゃない。兵には好かれても将には嫌われるタイプだからな、ソコを突かれてしまったのだろう」

「では地球連邦は何故、わざわざジンバ・ラルの手の者を使つたのですかな？」

偶然とは言わせませんよ。と感情を感じさせない目で父さんを問い詰める。

「冷静になれ、ギレン。言わずともわかつているはずだ」

「……ええ、ええ、そうですとも。ザビ派とダイクン派の対立を深める為です。ダイクンの暗殺にザビ派の者が使われていた以上、此処までが地球連邦が仕掛けた策だと考えるのが妥当です」

だが！ とギレン兄様が声を荒らげて、拳を机に叩きつけた。

「弟が殺されたのです。これを報復せずはザビ家の恥です」

「それで笑うのは誰だ？ 連邦の連中だぞ。ダイクン派の連中も、手綱を握れなかったジンバ・ラルも許せんが、裏で糸を引いた連邦の連中に笑わせるのはもつと気に食わん！」

「肉親が、殺されたのです！」

「殺した殺されたの話をするならば、先に殺したのは我々ザビ派の方だ!!」

「都合の良い場所だけ都合の良いように捉えて、ダイクンの何たるかも知らぬ者達がダイクン派を名乗っている事が鳥澁がましいのです!。そもそもジオン共和国とは、ダイクンとザビ家で成り立っていたのです!!。それをダイクン派がまるで味方の総大将を殺されたかのように振る舞うのがおかしい!。ダイクンを殺されたのはザビ家も一緒だ!!」

「感情で語るな、馬鹿者!。私だって、できる事なら縊り殺してやりたいわ!」

口論が止まる、二人が息を切らしていた。

ボクは、何も出来ない。激昂する二人を眺めている事しかできない。

……いや、違う。ボクには、泣く事しかできなかったんだ。

「もうやめてよ……誰が殺したとか、報復とか、そんな事今はどうでも良い!。サスロ兄さんが死んだんだぞ!!」

政治、政治、政治……なんでこんな時も、父さんと兄さんは喧嘩なんかしているんだ。今から葬儀が始まる。ジオン・ズム・ダイクンの国葬を終えた直後の混乱期でサスロ兄さんの葬儀を執り行うことができず、身内だけのひっそりとした形式で行われている。父様は、落ち着いた後にまた改めて葬儀をすと言っている。

……今は、サスロ兄さんが死んでしまった事が、ただただ悲しい。

サスロ兄さんの遺体の前で、二人が政治の話で喧嘩をしているのかと思うと、その事実だけで涙が溢れ出した。

「……ガルマ、すまん。熱くなり過ぎた」

ギレン、と父さんが兄さんと呼んだ。

「今はサスロを悼む時だ」

「……分かりました、話は終わつた後で致しましょう」

ギレン兄さんはテーブルの上に手をやり、そして何かを掴もうとして空振つた。

缶コーヒーを啜る父さんを、ジッと睨み付ける。ボクは慌てて、部屋に備え付けてあつたティーパックを使って紅茶を淹れる。

おずおずとティーカップを差し出す。

ギレン兄さんは力の抜けた息を零し、紅茶を受け取ってくれた。

「私がサスロ兄様の代わりを務めます」

それまで押し黙っていたキシリア姉さんが声を上げる。

「今はまだ……しかしサスロ兄様が今日までやって来た事を私が引き継ぎ、ザビ家の力になりたいと思います」

この時、父さんと兄さんは姉さんの言葉に何も返さなかつた。

皆が自分の感情を整理する事で精一杯で、キシリア姉さんに優しい言葉を掛けられる



人は居なかつた。

今、この場にドズル兄さんが居れば、もう少し違う未来もあつたかも知れない。

「……ギレン、ダイクンの遺族はどうなっている？」

「今はラル家の屋敷に、後々正妻のローゼルシアを頼る事になりそうです」

「そうか。不自由を強いる事になるな」

この時、キシリア姉さんは、二人を睨み付けていた。

## 6. なかまはずれなんてゆるさない。

ズム・シティの大通りからひとつかふたつ、道を外れた裏通りにその店はあった。

酒場エデン。少し柄の悪そうな男達が集う中で足踏み二回、拍手を一回。ズンズンチャのリズムで魂を震わせる律動を刻んだ。此処は世間様の爪弾き者が集まる場所、不満ばかりを口にする不貞腐れた面をした大人になったばかりの若者が酒を呷る。

そんな酒場のしがたない舞台上で私は彼らを指で差し、訴えてやるのだ。

おい、主語ばかりがでかい若人よ。

今は道端でヤンチャしてるけど、何時か大物になってアツと言わせてやるんだろ。自分の顔に泥を塗ってる暇があるならシヤンとしろ！ ガキにケツをしばかれなきや何もやりやしないのか！

さあ、歌え！ 私達で世界をアツと言わせてやるんだ！ 私達が何者になれるのか確かめに行こうじゃないか！

くだらない理由で喧嘩して、顔に血なんか付けているんじゃないぞ！ 慈悲を請うな、自分で動かない人間なんて誰も助けちゃくれないぞ！ 心の安寧は自分で動いて掴み取るしかないんだよ！ 自分だけの旗を掲げる、アームストロングは月に旗を立てて見

せた！ 私達で世界を手に入れてみせるんだ！！

さあ、今だ！ 此処で虚勢も張れない奴は二度と男を名乗るんじゃない！

私達で世界をアツと言わせてやる！

さあ、吠えろ！ 私はやってやるぞってな！！

「ういー、ういーる、ういー、ういーる！ ろつくゆーっ！ しんぐいつとー！」

その場に居る全員が片手に持ったエールを天井に突き上げて、私にリズムに合わせて歌い始める。

私はカナリア、歌姫なのです。地球の音楽が聴いてみたいとランバとドズルに訴えた時、ドズルに貰った音楽CDの焼き増しを聞いた私はド嵌りした。バンド名からして私の為にあるような曲だった。歌っていた人は男の人だったのだけど、きつとこれはカバークとかいいうもので本家本元は女性バンドに違いない。だつて男性が女王様なんていうバンド名なんておかしいに決まつてる！ でも、この男性の人つてアマチュアとは思えないくらいに歌が上手いんだよ！ 顔も名前も分からないけど、きつと有名なプロのミュージシャンになったに違いない。このカナリアがいうから絶対だ、この耳に狂いはない！ ちなみにランバから貰ったのはオーケストラだった。

そんなこんなで私が歌い終えた後、私が立つ舞台に大量のおひねりが投げ込まれた。

その回収は周りに任せて、私はランバの妻であるハモンに汗を拭き取って貰う。

内縁の妻だっけ？ よく分からない、浮気とは違うのかな？ でも、ランバって独身だ。夫婦のようなお付き合いつて事？ それとも結婚を前提にしたお付き合い？ 大人の世界はややこしい事ばかりだ。

でもまあ良い関係だつて事は分かるので、私からは何も言う事はない。

何故なら私は出来るレディ。出来るレディは余計な小言を口にせず優しく見守るものなのです。

カウンター席で酒を啜るランバに駆け寄り、にんまりとした顔で見つめる。

「……なんだ、その目は？」

「あつたかーいめ」

「馬鹿なことをするな」

ランバに心底、ウザったそうに手で追い払われた私はムツキヤーと拳を振り上げる。

「ほらほら、レディが無暗に手を出してはなりません」

だがランバの腹を叩こうとした拳はハモンによって止められてしまった。できるレディの筆頭格に言われてしまつては仕方ない。と私は握り締めた拳を緩めた。

「ハモン、奥の部屋は空いているか？」

「ええ、今なら大丈夫よ。貴方の天使が酒場を盛り上げてくれたしね」

「あ、わたしもついてくー！」

私が付いて行こうとすれば、ハモンに止められてしまった。

「あなたはダメよ、まだ早いわ」

「えーっ！ きやすばるとあるていしあのはなしなんでしょ!! わたしもいく!」

「……ランバ?」

ハモンに睨まれたランバは観念するように首を横に振る。

「その子に隠し事はできない。いずれ君も分かる」

「ええ、でも……」

「ちゃんとはなしがおわったらでてくから! ふたりでいちゃいちゃしたいんだよね

!?!」

私が必死で説得を試みたらハモンが笑顔で私の脳天にチョップを振り落とした。

「あだあつ!!」

悲鳴を上げる私、ハモンは私を腰に抱えて奥の部屋へと足早に連れ込んだ。

ランバは周囲の客を睨み付ける。しかし、お客さんのにまにまとした揶揄う視線に耐え切れず、居心地の悪そうに私達の後を追ってくる。

私はお客さんに笑顔で手を振ったとこで扉が閉められた。

ランバが私の事を鬼の形相で睨み付けている。

私は、ハモンの腕から抜け出し、ソファの上に腰を落とす。

「まじめな、はなしをしましょう」

ハモンは困ったものを見るように失笑し、ランバは額に手を打ち付けて苦悶の表情を浮かべた。

今日の朝方、ラル家の屋敷にローゼルシアがヘリコプターでやって来た。

ジオンの正妻であるローゼルシアがジオンの遺児である二人を引き取りに来たのだ。ラル家の総領であるジンバは適当な理由を述べて、受け渡しを拒否していたけども、ジンバの頭の中にあるのは保身ばかりで聞くに堪えない。その事をローゼルシアにも見透かされてしまっているから二人の遺児の引き渡しを押し切られてしまうのだ。

舌戦に負けたジンバ。ローゼルシアは手早くキャスバル達を連れ去り、慌てたアストライアも二人を追いかけた。

この時、私もキャスバル達と一緒に行く事になるのかなって思ったけど、ローゼルシアはダイクン家に関わりのない人間は乗せないって言ってた。悪意はある、特にアストライアに対する恨みが強い。でも私には優しくできないから突き放したって事も理解できたから、二の足を踏んで三人を見送ることになってしまった。

ジンバは私を屋敷から追い出そうとしている事が見て分かった。でもランバは違ってた。

ランバは私を抱えて、ラル家を出た。

簡単な変装をした後で、とある酒場に訪れる。そこで開店準備を始めていたクラブつて男に私を押し付けて、ランバはまた一人で何処かへと行ってしまった。クラブはキョトンとしていた、ほっそりとした顔をしている。私の知る男の人は皆、恰幅が良いか、体格の良い人ばかりなのでちよつと珍しかった。

私が彼をジロジロと見つめると、彼も私の事をジロジロと見つめ返す。

どうやら子供の対応に困っているようだ。仕方ない、私が彼にレディの扱いを伝授して差し上げましょう。

「ますたー！ きついのをいっぱい！」

彼は戸惑いつつも果汁100%のオレンジジュースを奮発してくれた。

うん、モテるよ。クラブさん。ちゃんとグラスで出してくれるのが百点満点だ！

そんなこんなでクラブと一緒に居ると、ハモンがやって来た。

んで自称用心棒のタチって人が来る。

すつごいわかりやすい人だ！

心を読むまでもない。だってハモンを見て、鼻の下を伸ばしちやつてる！

そこから徐々に人が増え始めた。

メイド服を着た私を見た酔った兄ちゃんが「何かやつてみせろ、褒美をやるよ」つて言つて来たので、私は舞台の上で自分の一番好きな歌を歌つてみせた。これがバカ受け

したのが今さっき、いつの間にかランバもカウンター席に座って私の歌を聞いていた。

私が歌ってる時、ずっと胸の内でもズルに悪態を吐き続けていたの知ってるよ。

そして今、ランバとハモンと私の三人で奥の部屋にいる。

「それで根回しは済んだのですか？」

「ああ、ダイクン派の若い奴は俺の提案に賛成してくれたよ。そっちは？」

「港湾局の伝手に話を付けておきましたわ」

私を抜きに勝手に話し始める二人の内容をまとめる。

ダイクン家の三人は塔に入れられる事になった。アストラライアは塔に幽閉される事になり、キャスバルとアルテイシアはローゼルシアの下で育てられる事になる。しかしサスロが暗殺された事でラル家の地位は失墜、それに伴ってダイクン派の力も削ぎ落とされてしまっている。今やジオン共和国はザビ家が政権を握っている状況だ。

そんな状況下では、反乱の芽となるジオンの遺児は邪魔者。

二人の成長を待った後、ザビ家がダイクン家に政権を戻すのは困難を極める。それはザビ家の意志とは関係ない。今から十年以上の年月が過ぎた時、盤石に積み上げられたザビ家の政権を誰が崩したいと思うのか。その時に、まだザビ家の政権が続いているのか分からない。でも二人が政権を握れる程に大きくなつた時までザビ家が続いたとすれば、その権威と権力はザビ家の方が大きくなつて然るべきだ。



二人に与えられるのは、良くて権威。権力は、ザビ家に仕える形で拡大する必要がある。

まあそれもジオンを信奉するローゼルシアに育てられるとなれば、話は別。

二人が大人になった時、間違いないくローゼルシアはダイクン家による政権を訴えてくる。そうなれば水面下で息を潜めるダイクン派の人間が二人に追従し、内乱に発展する。もしかすると内乱時に連邦軍の支援を受けて、連邦軍をサイド3に招き入れる可能性だってある。

そうなった時が最悪だ。いや、二人を神輿にするのであれば、今からでも実行する事もできる。

二人は今、災厄を抱えて生きている状態である。

ザビ家から見た二人は、サイド3に居る限り、殺さざるを得ない程の危険人物となっていた。

「……ドズルが、協力してくれる事になった」

ランバが素っ気なく呟いた。

「ザビ家が？」とハモンが驚きに声を上げる。

「ダイクンの遺児はザビ家にとつても邪魔者。それを地球に追い出してくれるのであれば、願ったり叶ったりとの事だ」

「対価は？」とハモンが鋭い目で問い掛ける。

「ザビ家への恭順。ダイクン派の人間を俺にまとめさせる腹積もりのようだな」

父も見逃してくれると言ってくれた。とランバが肩を竦めてみせた。

「話は以上。此処から先は大人の時間だ」

そう言つてランバは私を部屋から追い出そうとした。

「わたしもついてくから」

「連れていける訳ないだろう、危険だ！」

「かつてにいくからいいよ」

私を振り切ることができないの分かつているでしょ？ と私はランバに目で訴えた。

「……いいや、駄目だ！ 戦場をあまく見るな！」

怒鳴られた、本当に心配しているのはわかる。

でも、二人を助けるのに私だけなんにもしない訳にはいかないのだ！

私は涙が出そうになるのを堪えて、扉の取つてに飛びついた。そのまま部屋を飛び出す。

クランプのいるカウンター席の椅子をよじ登り、更にカウンターの机に昇つて腰を下ろす。

行儀が悪い？ 良いの、今日の私は悪い子なのです！

「ますたー！　いつもの！」

「……代金は、おひねりの中から引いといてやるよ」

「あー……あれってどれだけあったの？」

問い掛けただけで、おひねりは結構な金額になっている事が分かった。

果汁100%のオレンジジュースを在庫、全部飲んでも足りる程。高い酒のボトルも幾つか空に出来てしまうほどだ。

結構、みんな奮発してくれたようでした……なら、私もお返ししないとね！

「ますたー！　みんなにえーるをー」

私を見て、店に来ていた客はみんなキョトンとした顔を浮かべる。

大丈夫、今、此処に居る人で悪い人はいない。

みんな、店の常連でハモンの味方で明日の作戦参加者だ！

「みなさん！　あした、よろしくおねがいますー！」

店を揺るがす程の歓声が沸いた。

奥の部屋からランバとハモンが飛び出してくる。

クランプに事情を聞いた後、ランバは頭を抱えた。

ハモンは笑うしかないって感じで腹を抱えた。

これでも私関係者だ。もう爪弾き者になんて出来ないね〜？

ランバの拳骨は、とても痛かった。

## 7. まもるべきをまもるため。

地球連邦軍、某所。とある一室にて、紅茶を淹れる音がする。

此処には将官服を着た三人の男。英国紳士然とした男が、恰幅の良い男と白い顎鬚の男に紅茶を振舞っている所だ。

英国紳士然とした男は、紅茶を揺らし、その香りを楽しんでみせる。

「ここまでは想定通り」

呟いたのは、英国紳士然とした男。名はグリーン・ワイアット、階級は少将。

恰幅の良い男は地球連邦軍の双壁の一人、ゴップ中将。

最後の一人は少将、ヨハン・イブラヒム・レビル。彼は若い頃に地球連邦軍の鬼才と呼ばれた男だ。

「あまりティーカップは好まないのだがね」

レビルは呟けば「その髭を剃れば良いではないか」とゴップが豪快に笑ってみせる。

そんな旧友を胡乱な目で睨み付けて、溜息ひとつ。白い顎鬚を赤く染めた。

「紅茶は美味いが、状況は想定よりも拙い事になっているようだが？」

「思っていたよりも混乱が少ないのは確か。もっと派手に内乱が起こるかと思っていた

が、想定以上にザビ家が上手くやる」

「ダイクンを仕留めただけでも大きいかな」

五年でサイド3を自活できるまで発展させた内政手腕は驚愕に値するよ、とゴツプは感嘆の息を零す。あの手腕を以て全てのコロニーを自活可能にしてくれれば、必然的にスペースノイドの地位も向上しただろうにな、とも。

「これではザビ家を後押ししただけではないか。——ダイクン家の遺児はどうなった？」

レビルが問い掛ける。

「今はダイクン派のラル家に匿われているようですが、まあそれも今だけ。いずれザビ家に捕らえられるか、捕らえられたとしてどうなるか……案外、事故と見せかけて殺してしまう事も考えられますな」

ワイアットが気障ったく肩を竦めたのを見て、レビルは深く息を零す。

「私は、あまり政治が得意ではない。二人はどう考える？」

「ジンバ・ラルに地面の下に潜るだけの知性があれば、支援しても良いかと」

「連邦軍で匿う意味は薄いな。持て余すだけだ」

ワイアットが答えた後、ゴツプも続いた。

今回の騒動でジオン・ズム・ダイクンの暗殺を企てたのはグリーン・ワイアット少将。

コロニー移住計画の最中、駐留軍の中には家族を地球からコロニーに移住させられた者も居た。アースノイドとスペースノイドの軋轢は地球連邦の中でも問題視されており、デギンに切り崩しを受けた駐留軍の中には、そういった状況で不満を持った者が多かった。だが地球連邦を裏切った連中の不満は分かっている。逆に、それを解消してやれば懐柔するのは容易いと言ったのがワイアット少将である。

これに乗ったのがゴツプ中将であり、裏切り者の地球での暮らしの保証は彼が根回しをした。

またサスロを暗殺する時に使った爆弾を調達したのも彼であり、その爆弾の仕掛け方をダイクン派の人間に指導したのはワイアットの直属の部下になっている。

「では、ダイクンの遺児はどうするつもりだ？」

再び問い掛けるのはレビル。今回の件で表立って動いていないのは彼だが、これは彼が今回、大きな役目がなかったというだけの話。ゴツプも、ワイアットも、レビルの人柄と能力を信頼しており、レビルもまた同じように二人の事を信頼している。

ワイアットは紅茶を啜り、「放っておくのが良いでしょうな」と優雅に答えた。

「内乱の最中で死んでくれるのが一番、しかし我らの手で暗殺してしまえばザビ家に大義を与える事になる」

「あまり疑いの目を向けられたくはないな」とゴツプ。

「死ねば上、死なずとも中。下は連邦がダイクンの遺児を殺すことがザビ家にバレる事だ」

「ああ、でも、なにかの成り行きで殺すことは可能かな？」

例えば、相手が戦車でも奪って逃亡している時に、それを止める為に止むを得ずつてのはどうかな。とゴップが問いかける。

「それでも相手に砲を撃たせなくてはなりませんかね」

「それなら威嚇射撃でも止まらなかつた、というのはどうだ？」

このレビルの言葉にもワイアットが答える。

「まあ悪くはないが、悪くはないといった程度だな」

ワイアットの返答にレビルは紅茶を呷り、真つ赤に染めた顎髭をハンカチで拭いながらしみじみと口を開いた。

「まさか私達が子供の生き死にを算段に立てるようになるとはな……嫌な大人になったもんだ」

ワイアットは失笑する。ゴップもまた困ったように目尻を下げた。

「レビル、我らが守るのは100億人の連邦市民だ。それに国民を守る為に存在するのが軍人とはいえ、彼らにも家族がいる。戦争せずに済むのであれば、それに越したことはない」



「経済という観点から見ても戦争で儲かるのは軍需産業の関係者だけだ。戦争は起こさない方が良い。どれだけ卑劣で卑怯な作戦を取ろうともな」

「……まったく国を左右する人間というのは因果なものだな。あまり出世し過ぎるものではない」

レビルは溜息を零し「では、私達は事の成り行きを見守るとしよう」と場を締め括る。

◇

「ああ、そうだ。レビル」

ワイアットが茶器を片付ける音がする中で、部屋を出ようとするレビルにゴツプが声をかけた。

「時代のせいじゃない。世界のせいでもなければ、誰に言われた訳でもない。これは私達が自ら決断し、選択を続けてきた道だ。自分がやらずとも、どうせ誰かがやっていたからではない。私達が私達の意志を信じてやった事だ」

なあ、そうだろう？ と問う彼にレビルは、

「ああ、そうだと。そうなのだろうな」

と力強く頷き返した。自分に言い聞かせるように。

◆

『ランバ、準備は出来ているな？』

通信機越しの言葉。嘗て、政敵だった男の声が聞こえてくる。

「ああ、若い者は全員配置に就いたよ」

情報は逐次、各部隊の通信機から入れられている。

今回の作戦はダイクン派の若者衆とザビ家の合作、共演だ。ダイクンの遺児の扱いは、ジオン共和国の中でも困っている。ザビ派の連中は反乱の芽を摘む為に暗殺する計画を企てているし、ダイクン派の連中は遺児を神輿として担ぎ上げる事で復帰を企んでいた。こんな状況では、まとまるものもまとまらない。そこで体良くダイクンの遺児をジオン共和国から追い出すのが今回の目的だ。

だが共謀を気付かれてはならない。

あくまでもザビ派の魔の手から逃げる形で、ダイクンの遺児をジオン共和国から追いつね出す必要がある。

これには連邦の目を欺く意味合いもあった。

「茶番だな」

『ああ、茶番だ。だが、この茶番が政治なんだろうか？』

「武人のやる事ではない」

だが、その茶番がダイクンの遺児を救う為に必要だという事は理解している。

「そろそろ出る」

俺は通信機を片手に持ったまま、装甲車両に乗り込んだ。

正直、政治はあまり好きではない。

個人的に政治というのは自分の立場を良くする為に実行する工作行為だ。他者を助ける事で恩を着せ、自分を助けて貰う為に根回しする。そういった貸し借りの積み重ねが政治というものだ。俺は理解している。

だが、俺の根っこにある部分は武人だ。助けるべきを助ける、守るべきを守る。それだけで良いじゃないか。集団で動く以上、不要な争いを避ける為にも政治が必要だと分かっているが、この茶番めいた行為を理解はしても納得し切れない。こんなおままごとなんて煩わしいばかりだ。

まあ、そう考えても——自分だけならいざ知らず、政治をしなければ自分を慕う者達の立場も悪くすることも分かっている。

世の中、動機つてのは驚くほどに単純な事が多い。

しかし社会というのは、立ち眩みをするほどに複雑に絡み合っている。

「本質だけを見て、物事を単純に捉えたい。と考えるのは、やはり怠慢なのだろうな」

『俺もそうしたい。だが人の上に立つ者として、やはり、それではいかんだと俺は思い直すことにした』

「随分とご立派になられたもので」

素直に感心するのも癪で、皮肉交じりに返す。

さて、と俺は車内を見渡した時、そこに居るはずの幼子の姿が見当たらなかつた。

「……おい、カナリア嬢は何処へ行った？」

どうせ戦場に出てくるのであれば、自分の隣が最も安全。そう考えて、彼女には俺が乗る車で待つように言い付けていた。

「はッ、あの酒場の幼子の事でしょうか？ 見かけていませんね」

同乗する若い軍人が答える。

『おい！ カナリアがどうしたって!?!』

「あの馬鹿……!?!」

『ランバ・ラル！ 答えろ！ おいつ!!』

アイツが向かった場所は分かっている。

時計を見る、もう既に作戦は開始された後だ。

今更、連れ戻す事はできない。

ああ、クソ。と頭を掻きむしる。

「作戦を開始する！ 道路を封鎖し、連邦を足止めするぞッ!!」



ローゼルシアの下に居るとザビ家の人間に殺される。

それが僕だけなら真つ向から迎え撃つ覚悟も決められたけど、妹のアルテイシアまで狙われるとなれば話は別だ。

ダイクン派の一人、ランバ・ラルの仲間。クラウレ・ハモンの協力で屋敷から逃げ出す事ができた。母は塔に残されたままだ、今の僕達では母を助けることはできない。連邦軍の制服を着たハモンが乗ってきたガンタンクガンタンク初期型（型番：RTX—65）。この時はまだMSの概念はなく、大型戦車という枠組みに入れている。コアブロックシステムはない。に乗り込んで、着替えと一緒に砲座に押し込まれる。

ハモンが下の操縦席に降りて行った後、アルテイシアと見つめ合った。  
とりあえず着替えるのが先決か。

そう思った時、座席の下でもぞもぞと動く小さな人影があった。

「……カナリア。何故、そこにいる？」

もう顔を合わせる事もないと思った少女が「きちやった」と悪戯っぽく舌を出した。

◆  
ダイクン家の遺児を砲座に押し込んで、操縦席に戻る。

操縦席には二人の男、このガンタンク本来の操縦手と砲手。二人は地球連邦駐留軍に所属する正規の兵士だ。

情報が漏れた時のリスクを考えて、二人には詳細を話していない。それが仇となる。

「ニセ少尉さんよ。最初によおく聞いておくんだったよ」

「どうやら仔細がバレてしまったようだ。」

「上に乗せたあのガキ共。えらい上物のようじゃねえの」

「なんか俺達、えらく安請け合いしちゃったみたいね」

私は今、足元を見られている。

「あら、そうかしら？ 燃料費込み二万ドルで貨物センターまでタクシー代わりというのは悪いアルバイト料ではないと思うけれど？」

気丈な態度を崩さず、しかし背に腹も変えられないのも事実。

「プラス一万ドル、フルスピードを条件に再度、条件を持ちかけるも二人は挑発的な笑みを崩さなかった。」

もつと搾り取れると思われる。完全に舐められていた。

「カネがそれつきりしかないっていうんならしかたないけどネ。その場合は……」  
砲手の男が下卑た笑みで詰め寄って来る。

ここで引けば、骨の髄まで搾り取られる。

本能的に察した私は、静かに覚悟を——

「てりやあああああああああつ!!」

頭上からメイド服を着た幼子が降って来た。

何故、彼女が此処に？ 砲手の顔に飛び付いた彼女は、数秒もせず壁に叩き付けられる。

ふぎやつ！ という声と共に器材の角に頭を打ち付けたカナリアを見て、

私は、我慢が利かなくなった。

カナリアに注意を向ける砲手、その鼻つ柱に肘を叩き込んだ。

顔を両手で押さえる。まだ意識は残っている、無防備になった股間に蹴りを叩き込んだ。

砲手の男が地面に崩れ落ちる。受け身も取っていなかったので、完全に気絶したようだ。

操縦手が咄嗟に拳銃を抜き、銃口を私に向ける。

「やめなさい!!」

威圧する、吹っ切れた私に恐怖はなかった。

「こんな所で銃を撃つたらどんなことになるか。まさか知らないわけじゃ——」

パン、

と、

乾いた、

音が鳴った。

操縦手の男の眉間に空いた穴、赤い液体が噴き出した。

音がした方を見る。切った額から血を流す幼子が、苦しそうに右肩を押さえていた。その足元には拳銃がある。

彼女の側には、ついさつき気絶させた砲手の男。

頭の、中が、真っ白になる。真っ白になった頭の中で、辛うじて残ったのは作戦の目的の事だ。

ここで立ち止まっては、砲座にいるダイクン家の遺児を助けられなくなる。

酒場エデンの歌姫アストラリアが残した二人の子供、私が尊敬する先輩の子供達が政争の道具にされる。

立ち止まる訳には、いかなかった。

操縦手の男を、操縦席から引きがす。ガンタンクの操縦なんてやった事はないが、マニュアルは読み込んでいたし、実際の操縦は先程まで見させて貰っていた。まだ痛みを堪えるカナリアを抱きかかえて、操縦席に乗る私の膝に乗せる。

我武者羅に、形振り構わず、ガンタンクを爆走させた。

だが、それも長くは続かない。

「ガンタンクが四台……！」

正面から隊列を為して、近付いてくる。



両肩に乗ったキャノン砲の砲口は、紛れもなく私達に向けられていた。「どうする? どうする……!」

此処で立ち止まる訳には……撃破、しなくてはならない。

やるべきことは分かっている。操縦桿を握る手が震える。私は酒場の歌姫、死んだ人を見かける事はあつても殺し合いに参加した事もなければ、誰かを殺した経験もない。呼吸が荒くなる、照準器を見る目が霞み始めた。視界がブレる。照準器の真ん中に敵機が収まっているのに、照準が定まらない……ッ!?

その時、小さな手が操縦桿を握る私の手に添えられる。

「そいつ!!」

小さくてか弱い、されど力強い彼女の手がキャノン砲の発射スイッチに押し込まれる。

自機の両肩から放たれた砲弾は吸い込まれるようにガンタンの急所に命中した。

「……きこえる。こえが、きこえる……でもっ!!」

二度、三度の繰り返し返される砲撃は全て、ガンタンの急所に当たって爆炎が上がる。

気付いた時には、三台のガンタンクを撃破してしまっていた。

膝上に乗る彼女の顔は——悲しみが無い訳じゃない、恐怖が無い訳でもない。

怯えを飲み込んで、困難に立ち向かうその姿は。

私の愛しい人が戦地に赴く時の横顔に、よく似ていた。

## 8. かなりあちやん、よんさい。

『7thアヴェニューで戦闘発生！ 連邦軍戦車同士が撃ち合っています！』

シヨップिंगモールにある大型の電光掲示板に、映し出されるニュースの速報。緊急避難を促すアナウンサーの姿を見て、困惑する。

ハモンがガンタンクを持ち出したのはローゼルシアの警備兵に対して威圧し、ダイクンの遺児を引き渡させる為であり、仮にダイクン派やザビ派と戦闘になった時でも確実に逃げ出せるように保険も兼ねている。まあ尤もザビ派の抑え込みはドズルがやってくれているのだが——そこに連邦軍との戦闘は想定にない。ドッキングベイのカーゴターミナルまで行けるところまで突き進んでから乗り捨てる手筈となっていた。

それがガンタンクを撃破だ？ 何の冗談だ、これでは連邦軍も本気を出さざるを得ない。

「や、やばいぞ、おい……ハモンのヤツやりすぎだ！ この後、どうするつもりなんだ！」

装甲車に乗り込んで、運転手にアクセルを踏み込ませた。

「女なんてものは、キレると何をするかわからん！」

「どちらへ？ 大尉殿」

「現場だあつ！ それ以外に行く所があるかあつ！」

非常事態、法定速度を無視して装甲車を飛ばさせる。

道端に乗り捨てられた自動車を蹴散らして、なんとかハモン達を救う為に暴走するガンタンクの側まで急いだ。

救いがあるとするれば、あそこにはカナリアが居るはずだ。

勘の良い彼女であれば、この危機的状况からも抜け出せるかも知れない。

「……つたく！ 我ながら子供を頼りにするとは情けないっ！！」

兎にも角にも今は現場に辿り着かなければ、どうしようもない。



7thアヴェニューにて、連邦軍による阻止線が形成される。

並べたるは八輻の戦車、四輻のガンタンク。既に四輻のガンタンクが撃破された事もあり、兵士達の顔に緊張感があつた。

これ以上、被害を出す訳にはいかない。地球連邦の認識としてサイド3は、未だ統治下にあり、彼の地は紛争宙域に指定されている。つまり連邦軍にとってジオン共和国は守るべき宙域であり、ジオン共和国の国民は守るべき市民だ。それが如何に欺瞞であつたとしても、どれだけ石を投げつけられようとも、地球連邦軍はサイド3の市民を脅威から守る義務がある。

不満はある。なんでこんな奴らの為に命を張らなきゃいけないのかなんて誰もか思っている。

「間もなく阻止線に到達する！」

それでも私情を飲み込んで守るのが軍人。職務には忠実、それが公人。

「警告の上、一斉射撃を加えて破壊せよ！」

鬱憤は任務を終えた後、民間人の耳に入らない場所で幾らでも叫んでやれば良いのだ。

「待ったあああ!!」

だが、それをして貰っては困るのだ。と強面の大柄な男が単身で彼らの前に立ち塞がる。

「ジオン国防隊、首都バンチ司令部のドズル・ザビ少佐だあつ！ 責任者は誰かつ!」

つい先程まで、逃げ出すダイクンの遺児を捕える為に動き出したザビ派の人間を止める為に奔走していたドズル。

ガンタンク暴走の報道を聞いた彼は、現場へと一目散に駆け付けける。政治に興味を持ち始めたといっても、まだ17歳の若者。我慢が利かずに飛び出してしまった彼の若さが、この時ばかりは功を奏する。彼の背後では、肉眼では確認できないが中破したガンタンクの煙に紛れて動く人影があった。

そんな事も露知らず、「攻撃はちよつとまたれいっ!!」とドズルは声を荒らげる。

「共和国前議長の御息、御令嬢があれに乗せられている！ 攻撃はならん！ 御二人を救出したその後でなければっ！」

そのドズルの迫力に気圧された阻止線の指揮官は「わ、わかった。今、司令部に問い合わせ」と通信機を片手に取る。

この時、地球連邦がジオン共和国の存在を認めていれば、ドズルの要望は受け入れられていた可能性が高い。

だが、地球連邦から見たジオン共和国は、統治下のサイド3という宙域に他ならない。連邦にとってジオン共和国という名は、テロリスト組織の名称なのだ。勝手に統治下にあるコロニーの所有権を主張する犯罪者集団の名がジオン共和国なのだ。

それに既に被害は出てしまっている。ガンタンク四輛という大きな被害、死者も出てしまっているからには地球連邦としても引く訳にはいかない。テロリストの前リーダーの子が車輛に乗せられているからといって、連邦が砲撃を止める理由にはならなかった。

つまりドズルの要請に対する返答は一言、連邦の知った事ではない。

「速やかに叛乱車輛の制圧、破壊……と、いうことのようにだが……」

「聞き捨てならんっ！」

かといつてドズルもまた引く訳にはいかなかった。

彼はダイクンの遺児の他にカナリアの命も背負っている。ランバ・ラルから得た情報で暴走したガンタンクに乗っている可能性が高いという話を聞いていた。彼はカナリアとの付き合いでキャスバルやアルテイシアとも仲良くなっている。最早、彼にとつて三人は身内であつた。義務感ではない、使命感でもない。私情で彼は動いている、感情で彼が動かされていた。

だが、それ故にドズルは頭を回転させねばならない。

「如何に連邦の論理とはいへ、そのような事は……知つた事ではないとはなんだッ!!」感情で訴えても何も変わらない事は分かっている。

だが、考え込む時間はない。言葉を詰まらせてはガンタンクが砲撃を受ける。

喋りながら、論理的に言葉を積み重ねなければならぬ。

「我等の指導者ジオン・ズム・ダイクンの遺児をおのれどもは殺すというのかッ!? それ  
がジオン共和国、延いてはサイド3に住む人々にとつて、どういう意味か分かっている  
のだなッ!? 戦争だ! かつて世界を巻き込んだ戦争は皇位後継者とその妻の暗殺か  
ら始まつた! 東洋の島国と大陸の戦争は駐屯軍と現地軍の間で起きた一発の銃弾か  
ら始まつた! 貴様には、戦争の引き金を引く覚悟があるのかッ!!」

「い、いや……」

「全宇宙を戦乱に巻き込む覚悟があるのかと聞いているッ!!」

責任者が気圧される。だがしかし、こうしている間にも状況は刻一刻と悪くなっている。

「GT四〇一接近! 速度変わらず、距離二〇〇〇!! 停止命令に依然、応答しませんッ!!」

「よし、砲撃用——えっと、ドズル少佐?」

「撃てば戦争になるぞっ! おいこら!! 良いのか、戦争だぞッ!」

ガンタンクの姿が見えた。事ここに至っては、力押しで時間を稼ぐしかなかった。

「ドズル少佐、少しよろしいでしょうか。ギレン様からの言付けです」

「何?」

後ろを見る、見慣れない顔だ。ジオンの軍服を着ている。

「もう大丈夫だ。万事解決する。との事です」

……どういう、意味だ? ドズルの頭の中は完全に止まってしまった。

「これ以上は……待てません! もう駄目です! 砲撃を受けてしまいます!」

「砲撃用意ッ! ドズル少佐、貴方の懸念も分かります! しかし、しかしながら、みすみすと配下を死なせる真似もできんです! 砲撃の許可……頂けますか?」

背筋を伸ばして問う彼の瞳には、許可がなくとも砲撃するという覚悟があった。



その時、茫然としていたドズルは「……ああ」と勢いに飲まれて頷いた。  
「砲撃許可、てえ——ツ!!」

暴走したガンタンクは砲撃の雨に晒されて、火の海に沈んだ。

その速度は、暴走している割には、やけに遅かったなあ。と漠然と思った。



怒涛の砲撃音が響き渡った。それを聞いて俺はダッシュボードに拳を打ち付ける。  
「始まった……間に合わなかった!」

俺が歯を食い縛っている間も運転手は軽快に装甲車を走らせた。

そうして路地裏の近道から表通りに出た時、運転手に肩を叩かれる。

顔を上げる、運転手が指で差す方を見た。

見知った顔の四人組を見て、思わず破顔してしまった。

ああ、本当に良かった。と全身から息を吐き出す。

「いかにいかに。あんな事をしでかした後だ、しっかりと釘を刺しておかねばな」  
両頬をパンと叩いて、表情を険しく引き締める。

運転手が彼女達の側に車を止めた。

コホンと咳払いをひとつ、開けた窓からハモン達の様子を眺める。

「……何があった?」

三人は暗い顔をしており、メイド服を着た幼子は頭から血を流していた。

俺の問いかけにハモンは答えられなかった。とりあえず俺は四人を装甲車に乗せて、配下の一人にカナリアの治療をさせる。アルテイシアは単純に怪我をしたカナリアを心配しているだけのようだ。しかしキヤスバルは何も口にせず、ハモンは膝に乗せたまま治療を受けるカナリアの頭を延々と撫で続けている。そして肝心のカナリアはヘラヘラと笑っていた。

なにか起きたのかは明白だ、十中八九でカナリアがなにかをやらかした。

だが今は一刻でも早く、目的地に到達するのが先だった。

ドッキングベイのカーゴターミナル。此処まで送ってきた三人を急いでコンテナの中に詰め込まなければならぬ。

カナリアが意地でも付いて来ると言ったのは、おそらくキヤスバルとアルテイシアを心配しての事だ。それは即ち二人の後を追いかけるという事に他ならない。それはキヤスバルとアルテイシアも同じように思っていたようだった。キヤスバルは先にコンテナの中に入った後で頭に包帯を巻いたカナリアに手を差し伸べる。アルテイシアもカナリアの隣で「はやく！ はやく！」と声を上げる。

だが、カナリアは歩を進めなかった。困ったように笑顔を浮かべるだけだった。

「きやすばる、あるていしあ。かなりあとは、ここでおわかれです」

「……何を言っているんだ。冗談を言っている時間はないぞ、早く来るんだ」

「いいえ、いけません。わたしには、ここでやるべきことがあります」

妙に畏まったカナリアが「もうしわけありません」と深々と頭を下げる。

「わたしまでいってしまえば、あすとらいあがひとりになります」

たぶん俺はまだ、この子の事を見縊っていたのだと思う。

「てがみはわたしあてでください。たぶん、けんえつされちやうから、きやすばるはちやんとみてあげてね」

まだ四歳の子供だと、何処かで思い込んでいた。

キヤスバルは、カナリアを睨み付ける。睨み付けたように見えるだけで、涙を堪えているだけだという事はわかった。

アルテイシアが愚図りだした。大声を上げそうで、拙い。と思った時、カナリアが彼女を抱きしめる。

「おねえちゃん、またあおうね」

「ずるいよお……こんなときだけ、おねえちゃんつてずるいよお……」

「てがみ、おくるよ。とどくかどうかかわからないけど」

カナリアが優しくアルテイシアの頭を撫でれば、アルテイシアは不貞腐れるように頬を膨らませた。

「申し訳ありませんが、もう時間がありません。早く入ってください」

カーゴターミナル所属のタチ少尉が三人を急かした。

アルテイシアとカナリアは、最後にもう一度だけ抱き締め合って、互いの頬にキスしてから身体を離す。

キャスバルは眉間に皺を寄せて、ずっと泣くのを堪えている。

「またね！　かなりあ、ぜったいだよ！」

「うん、またね。きやすばるも」

「……ああ、そうだな」

「いきりやどうとでもなる」

カナリアは最後に強く笑って二人を見送る。

コンテナの扉が閉じた後もカナリアは泣かなかった。

強い子だと思う、コンテナが無事に届けられるのを見送る為に別の場所へと移動する。

窓から見下ろす、周りには誰も居ない。

移動するコンテナを見送りつつ、俺はハモンに問い掛ける。

「合流する前に何があった？」

ハモンは言い淀んだ、カナリアは顔を俯かせる。二人の言葉を、俺は待ち続ける。

廊下の奥から足音がした。良い子も泣き叫ぶ強面、ジオンの軍服を着た大柄な男。彼は俺達の姿を確認すると笑顔で手を振った。

「ひとを、ころしました」

足音が、止んだ。カナリアは、笑顔を浮かべていた。

「けんじゆうでひとり。あのせんしゃで、はちにんころしました」

それは相手を気遣わせない為に大人がするような笑顔。

後悔する。俺は何故、まだ四歳の子に、こんな顔をさせているんだ。

今すぐに、この愚鈍な頭をかち割ってやりたい。

だが、今は、そんな事よりも先に、してやらなくてはならない事がある。

「あたまのきずはだいじょうぶ。おちてたけんじゆうをひろって、こう……かまえて

……みけんにあたって……しようじゆんきのまんなか、ちゃんといれて……すいっちを

おして……わたし、あのろぼつとせんしゃをよんだいもたおしたんだよ！」

ほめて！ と悲痛に叫ぶ、彼女の頬を思いつきり叩いた。

手に力を入れていない。でも、しっかりと彼女に気持ち伝わるように叩いてやつ

た。

俺は大人として、失格だ。この子はまだ四歳なのだ。

「あ……ああ……ああ……ああ、う……うあ……あ、ああ……っ！」

茫然とするドズル。駆け寄ってくるハモンを睨んで制止し、彼女を抱き寄せた。

「すまん。守ってあげられなくて、すまん」

「う、うう……うあ……う……う……うあああああああああああああああ  
あん!!」

カナリアが俺の胸に顔を埋めて、大声で泣き叫んだ。

ハモンとドズルに周囲を警戒するんだ、と視線で指示を出す。

「はもんがあつー! うたれちやうつて……うごかなきやつておもつてえ……!! や  
らなきや、やられちやうつて……うごかなきやつておもつてツ!! あのろぼつとせん  
しやも……わたしがうたなきや、きやすばるがうつてた! わたしはもうころしたから  
! ころしちやつたから、きやすばるにうたせたくなくて、だから、わたしがかわりに  
うつた!! きやすばるはおにいちゃんだから! あるていしあをまもらなきやいけな  
いから! だから、わたしが! わたしがうつたらいいんだって、おもつたから!! ひ  
とりもふたりもいっしょだつて!!」

まもりたかつたんだよ!? とカナリアは、また泣き叫んでしまった。

「わかつている。お前は優しい子だ。理由もなく、そんな事をする子ではないのは分  
かっているつもりだ。お前が悪い子だとは欠片も思っていないよ」

怒っている訳じゃない、殴りたかつた訳でもない。

でも誰かが叩いてやらないといけなかった、それも今すぐでなければならぬ。  
ハモンは助けられた人間だ、ドズルでは彼女を叩けまい。

この場に居る人間で彼女を叩けるのは、俺だけだった。

俺だけが彼女を叱ってやることができた。

今、痛みを以て叱ってやらないと、この子は道を踏み外すことになる。

「すまなかつたな。それは大人の仕事なんだ。それをお前にやらせた俺達の失態だ」  
食い縛る奥歯が砕けて、血の味がした。

俺はもう二度と、彼女のように泣く子を見たくない。

そう強く、願うようになった。

## 9. 酒場エデンでのにちじょう。

もし私が完璧な一日の過ごし方ってのを語るのなら、こんな感じの始まり方が良い。冷蔵庫に入っている果汁100%のオレンジジュースをコップ一杯に飲み干して、今日もまた酒場の舞台に立って集まっているお客様に魂を叫ぶんだ。盛り上がるかどうかなんて気にする必要はない。私の歌に興味のある奴は耳を傾けてくれるし、場が盛り上がれば、自然と気分も楽しくなってくるってもんだ。ズム・シテイの末端にあるようなしがたない酒場が集まる連中なんて、そんなもんだ。私は私の好きなようにやって、皆も皆で好きで此処にやってくる。机をバンバンと叩いて、今、此処は最高に熱いライブ会場となっている。

イカしたバンドメンバーとハイタッチを交わして、今から始まる熱狂をワン・ツー・スリーってな具合に始めちゃうのだ。

「ワインズ！ ウィンズ！ ワン・ツー・スリー！」

月に一度、送られてくるアルテイシアの手紙が四十通を超えた頃の話。

私はお父さんの旧友であるクラブが運営する酒場で日々を暮らしており、学校にも行かず、夜に酒場の手伝いをする事で生計を立てている。お父さんは働かずに学校に行



けつていうけども、この心を読める能力のせいかな小学生程度を相手にするのは面倒で疲れる。まあ私にとつての異性の基準がお父さんかドズルだし、この二人と比べるとキャスバルだって子供っぽく感じてしまうのだから仕方ない事ではある。私が可愛いのは分かるけど、せめてキャスバル程度の知性を身に着けるか、アルテイシアのように純粹で真つすぐな心を持つてから来て欲しいものだ。

それに自分で自由に使えるお金は確保しておきたかつたのもあるし、勉強はクランプとお母さんが教えてくれるので今んとこは困っていない。

おじさま好きになつてしまった私の恋愛模様に関しては、二十歳を過ぎるまでお預けになりそうだ。

キャスバル達が地球に行つてから三年余り、色々な事が起きた。

先ずジオン共和国は、ジオン公国に名を改めた。公王はドズルの父親であるデギンが務めており、ザビ家の独裁体制を築き上げている。若いダイクン派の人間はお父さんが取りまとめており、血気盛んに武力で反発するダイクン派の人間はドズルが積極的に排除し続けている。このザビ家の手腕に関してクランプは「思つていたよりも血が流れなかつた」と悔しいような、ほつとしたような顔で言つていた。

お父さんがザビ家の人間に与している事もあつてか、内心では複雑な色模様をしてい

週に一度、塔住まいのアストライアに顔を見せに行っている。

ローゼルシアはキャスバルとアルテイシアが連れ去られてから数ヶ月程度で死んでしまったけど、あの後ローゼルシアとは一度だけ顔を合わせた事がある。覇気のない顔をしていた、毒気が抜けたというべきか。ダイクンの遺児を旗頭にダイクン派を結集して、ジオン・ズム・ダイクンの意志を継ぐための政争を起す腹積もりもあったようだけど、キャスバルとアルテイシアを失ってからはその芽も尽きた。ただジオンを想い、アストライアを恨み続けるだけの日々を送り続けているようだった。

実際に彼女と話してみた印象として、ただただひたすらに不器用な人だと思った。

ジオンの正妻にあるという立場を持つていながら彼の愛情はアストライアに注がれており、アストライアが子を産んでからは顔を合わせる機会も少なくなった。ジオンがまだうだつも上がらぬ時期から支援をし続けてきたローゼルシア。アストライアに妻としての立場を追いやられて、寵愛すらも受け取れなくなってもジオンを支援し続けて来たのは、そこに愛があったからだと思っている。

まだ愛つてもものはよく分かってないけど、ローゼルシアがジオンを愛していた事だけはわかる。

「お前は悪い男に捕まるんじゃないよ」

そういつて私の頭を撫でた数日後にローゼルシアは亡くなった。天国でジオンの頬

を思いつきり殴ってきたらいいと思うよ。

この話をお母さんとお父さんにもしてあげた時には「私には此処までの度量はありませんよ」とお母さんがにつこりと笑って、お父さんは乾いた声で笑っていた。

やっぱり、浮気って駄目だ。夫婦円満、これが一番。

アストライアも、結果的ではあるけど塔に入れられたおかげでダイクン派の旗頭にされる事もなければ、キャスバルとアルテイシアを連れ戻す為の人質にならずとも済んだ。塔に居る以上はザビ派も手出しをする理由がないってドズルも言ってたし、結果的にローゼルシアがアストライアを守っていた事になってるっていうのは皮肉というか、なんというか。人生の妙を感じるのです。

ちなみに私がローゼルシアと比較的、好意をもって話せたのは、生前にジオンが一度だけ私の事を伝えていたからみたい。だから一度、しっかりと話してみたかったようだ。

「子供を政争の道具にしようなどと、ばかなことを……それは、私も一緒だねえ……」

天国に行った時はジオンの顔を見つけ次第、その横っ面に助走を付けてから右ストレートでもすれば良いと思うよ。

いや、本当に。今度、お墓に金属バットでもお供えしておく？

塔に入ってからのアストライアは病気がちになっていて、日に日に痩せ細っている。

この近況は私からキヤスバルに手紙を出しているし、もうあまり長くないっていうのも伝えてある。でも二人がアストライアと会う事は難しい。伝えたいことがあれば、今のうちにたくさん手紙を書いておくんだよ。って添えておいた。手紙の文量が倍になった。これを読み聞かせるのは私なんだけどなあ。二人分の手紙を読むと一時間以上になる、もうちよつと手加減して欲しい。

ああ、それと。二人は今度、ルウムにあるテキサスコロニーに引越すみたいだ。ドズルに話を聞いてみると、口には出せない事情があるってことがわかった。

たぶんジンバのせいだ、知らないけど。あの人、二人の事をダイクンの遺児としてしか見てなかったしね。

ジンバが悪い。嫌いだ。

まあ、あんな奴の事はおいておき、今はお客様のリクエストで舞台上に立っている。

私が歌うのは、お母さんの休憩時間で週に一度か二度ある程度。あのお姫様バンドにド嵌りした私は、もつとあんな曲が聞きたいってドズルにおねだりしてる。誕生日プレゼントに貰った曲は、また別のバンドのものだ。私が音楽の話をするとお父さんが何時もドズルを睨んでる、なんでだろ？

ヤーヤーヤーヤーって歌い出しの曲とか最高に熱いのに。なんかこう熱つてものを感じる、魂が震えて熱くなる！

「そんなわけのわからん歌はもういいっ!!」

ガシャンと机を蹴飛ばす連邦の軍服を着た偉そうな人が叫び出した。

「大体、なんで乳臭い餓鬼が歌ってやがるんだ! さっきの姉ちゃんを出せ、姉ちゃんを! いや、俺が歌ってやる!」

そう言つて、私からマイクを奪い取ろうとした瞬間。ガタリとその場にいた常連のお客さん達が立ち上がる。

「な、なんだ貴様ら! スペースノイド風情が連邦に逆らおうつてのか!」

「なあに連邦に逆らおうつて訳じゃない。ちよつと酔いが過ぎていようだからな、少し酔い覚ましに付き合つてやるだけだ」

「大尉殿、後片付けは御心配なく」

「あーダメだよ! ワタシも片付けるんだよ、ぜつたいダメ!」

私は今にも暴れ出そうとするお父さんと連邦兵の間に立つて「マスター、このひとたちエールを!」と声を上げる。

「ワタシのおだちんから差し引いてね」

につこりとクランプに笑つてやれば、彼は黙つて五人分の大ジョッキを用意してくれた。それを机まで持つて来てくれるのはお父さんだ。ジョッキを机に叩き付けて「娘の奢

りだ、飲め」と目で威圧する。この店に居る全員が臨戦態勢で連邦兵を睨み付けており、手を出せば、全員が襲い掛かるのが目に見えていた。

連邦兵の一人がおずおずとジョッキに口を付ける。

「おいしいですか?」

私が満面笑顔で問い掛ければ、彼らはバツが悪そうに目を背けた。

酒場エデンは今日も割かし平和です。

## 10. れきしのお勉強です。

カナリアを引き取った理由なんて、なんてことはない。他に適任者が居なかったって  
いうだけの話だ。

ドズルが子供を引き取るには、当時はまだ十七歳と若過ぎた。ザビ家の人間が暗殺さ  
れた直後という事もあって彼は辞退し、かといって俺達以外に彼女の頼れる宛はない。  
孤児院に預ける事は論外だ。心情的には勿論、カナリアの特異な能力を放置する事は、  
彼女自身を危険に晒す可能性が高い。

あとはまあ俺にはハモンという女手があった。クランプもいる。

十分に子育てができる環境が整っていた事もあり、彼女を受け入れる事を断る理由が  
なかった。

三年以上が過ぎた今、カナリアは俺の事を父と慕ってくれている。

ハモンを母と呼び、俺達の娘のように振る舞っていた。尤も俺はハモンと籍を入れた  
事はなく、カナリアとも戸籍の上では他人のままだ。それは、俺が死んだ時にザビ家の  
魔の手が二人に及ばないようにする為の隔離処置。着々と築き上げられるザビ家の独  
裁体制、俺がダイクン派の人間である以上、何かのスケープゴートとして処刑される程

度の事は予想して然るべきだ。

ドズルは信用できてもギレンは別。もしそうなった時に家族が居ると、一家諸共、不幸にする可能性もある。

それに俺はドズル麾下として、三年以上も働き続けている。武闘派を気取るダイクン派の人間からは「ザビ家の犬」と罵声を受け続けており、暗殺未遂も一度や二度ではない。浮浪者に扮した男がナイフを片手に体当たりをして来た事だつてある。

そんな事があれば、とてもじゃないが書類上の家族を作りたいとは思えない。

幸いにもハモンは書類の關係に興味がなかったし、カナリアも似たようなものだ。

理解のある妻と娘に恵まれた事に感謝して、愛妻弁当を片手に現場へと赴くのである。

「ランバ・ラル大尉、辞令だ」

軍隊に入ったばかりの若造のケツをシバこうと思つていた時、ドズルに話しかけられる。

「今日は帰れないと伝えておけ」と通信機を渡された十分後には、ドツキングベイ行きの黒塗りの高級車に乗せられていた。

「月旅行にでも付き合えと？」

「そんな遠くじゃない。つい隣までだ」



聞きたい事は色々であったが口数の少ない彼の横顔を見て、秘匿性の高い任務である事を察する。

サイド3から出ずともコロニー間を移動する短くない旅路だ。今から気を張ってでは疲れる、と楽な姿勢を取った。

ドズル・ザビ。ジオン共和国がジオン公国に名を改めた時に大佐へと昇進を果たしている。

当時はまだ18歳という異例のスピードで昇進を果たしたが、それが親の七光りである事は誰の目から見ても明らかであった。しかし軍内部における彼の評判は驚く程に悪くない。業務は真面目に熟しているし、分からない事は積極的に質問する。当人が親の力で分不相応な地位に就いている自覚があった為、階級にモノを言わせる事もなければ、階級が下の人間であっても遜って教えを請うた。武闘派を気取るダイクン派の拠点を押さえる時は、経験豊富な将兵の意見に耳を傾けてから決断を下す。

なにより彼は御曹司の立場であっても、泥臭い戦場で文句ひとつ。泣き言すら言わないのが現場の人間から「根性がある」とウケが良かった。

ザビ家が実権を握った今、彼が司令官になる事は既定路線。

それは誰の目から見ても明らかかな事であり、だからこそ彼を優秀な軍人に育て上げる為に多くの人間が尽力している。

業務の合間に勉強をする多忙な毎日を送る彼の目元は、いつも薄らと隈が付いていた。

「今更、聞くのも恥ずかしい話なのだが……」

と彼は零した後、少しの間を置いてから問い掛ける。

「ダイクン派が掲げている理念というのは一体、どういうものなのだ？」

「……お前、そんな事も知らずに戦つて来たのか？」

俺は武力で訴える過激なダイクン派とは、袂を分かつ身の上だ。

だが、かつての同志。父が生きていた時は同じ戦場を駆けていた事もある相手である。

自分達が戦う理由すらも知られぬまま、散つていた元同志が少し哀れに思えた。

「これは、この国の成り立ちにも関わる話だぞ？」

「し、仕方ないだろう！ この三年間、与えられた仕事を熟すだけで精一杯だったんだ！」

「……まあ恥を忍んで聞いてくるのが、お前の長所だよ」

溜息ひとつ、幸いにも移動中の車という秘匿性の高い場所だ。

とりあえず何から話すべきか思案する。

「……たぶん、お前には理解が出来ない話になるぞ？」

「構わん。何故、奴らがああも戦うのか知りたいだけだ」

「そうか。……まあ、ざっくりといえば地球の保全だな」

「地球？ 保全？」

ポカンとした顔をするドズルに「その反応をするのは分かっていた」と俺は更に溜息を零す。

先ず最初に、

爆発的に増えた人口により、地球が許容できる数を超えてしまったのが始まりだ。

その問題を解決する為に立案されたのが人類宇宙移民計画であり、計画を推進する為に樹立したのが地球連邦政府。それが百年以上も前の話。最終的には、地球への依存をなくし、全人類を宇宙に打ち上げる事を目的としていた。

だが、これには問題があった。当時のスペースコロニーには経済的に自立できるだけの能力がなかったのだ。

地球に依存したまま、人類宇宙移民計画を推進した結果、地球と宇宙では大きな格差が生まれる事になる。また地球から宇宙に打ち上げる費用は、自費で賄う必要があった。支払えない場合は地球連邦政府に借用する必要があった事もあり、これがアースノイドとスペースノイドの大きな格差を生み出す一因となっている。そうした積み重ねが地球を特権階級の住処とする事になった。

今や地球連邦政府の理念は瓦解している。

「そこで立ち上がったのがジオン・ズム・ダイクンだ。ここまでは良いな？」

「お、おう。アースノイドとスペースノイドの格差だけの問題じゃなかったんだな」

「……よくその認識でザビ家の人間でいられるな？」

「そういうのはギレン兄とサスロ兄の役目だったんだよ」

不貞腐れるドズルに、まあいい。と俺は顎を撫でながら次に語るべきことを考える。

「ジオン共和国が樹立するまでの経緯を語る前に、まずはダイクンが掲げる理念から話さねばならないだろうな」

ドズルが頭から湯気が出そうになっているのを無視して、言葉が続ける。

ジオン・ズム・ダイクンが掲げる理念は以下の三つで構成されている。

エレズムとコントリズム、ニュータイプ。

エレズムとは、先ず宇宙移民者の間で広がった思想の一つであることを言っておかねばならない。

人類宇宙移民計画を推し進めた結果、地球を知らない世代が増えた事により、宇宙から見た自然豊かな未知の惑星に対する憧れが地球を神聖視するようになったのが思想の生まれた一因。それに伴って、人類発祥の地である地球を聖地化しようという考えがエレズムの根幹である。

この思想を更に進めて「地球の環境を汚染する原因が人類に起因するものであればこそ、全人類は地球の庇護下から脱却して宇宙に移り住まなくてはならない」と続く事になる。

「ちよつと待て」とドズルが口を挟んだ。

「人類宇宙移民計画は元々、地球の環境を守る為の計画だったよな？」

「そうだな」

「なんで宇宙移民の間で地球の環境保全の考え方が広まっているんだ？」

「アースノイドとスペースノイドの格差と差別、後は地球連邦による選民思想だろうなあ……」

「まあ、それは現状を鑑みると分かるのだが……」

「いまいち納得をし切れないドズルに「人類宇宙移民計画は頓挫したんだよ」と話を続ける。

「少し前も当時のスペースコロニーに経済的に自立できる能力がなかったと言ったな。これを理由に地球連邦政府は特例を用いて、選民した人類を地球に居住させ続けたんだ。これが後にアースノイドとスペースノイドという言葉を作り、格差と差別を生む結果になる」

人類宇宙移民計画の推進は非現実的。ならば主張の前提を打ち壊してしまえば良い。

という風にジオン・ズム・ダイクンが主張したのが、コントリズムだ。

彼が掲げるコントリズムの根幹には「スペースノイドは経済的にも、政治的にも自立が可能であり、連邦政府とも対等な自治権を持つことができる」というものがある。これは言ってしまうえば「宇宙に地球に依存しない新たな経済圏を確立する事で自立し、宇宙のみで国民の生活を守り続ける事は可能だ」という事であり、そのまま「宇宙の民は連邦政府に頼らずとも生きていける為、連邦政府の支配下から外れて独自の自治権を確立する」と繋がる事になる。

それを実証してみせたのがサイド3であり、ジオン共和国となる。

「結局の話、ダイクンが地球連邦政府に訴えたかったのは、人類宇宙移民計画の完遂」  
なんだろう」

俺が一通り語り終わると「……ふううむ」とドズルは深く考え込んだ。

「つまりダイクン派の連中は地球の環境保護を訴えるのが目的なのか？」

「いや、それは多くのダイクン派にとっては違うと思うぞ」

「はあ？」

「ダイクンの下に集まった連中の多くは、地球と宇宙の格差に不満を持った人間ばかりなんだよ」

親父も似たようなものだしな。と窓の外を眺める。

郊外に出て、建造物も疎らになってきた。ドッキングベイに近付いて来た証拠でもある。

「エレズムなんていう大層な御題目は民衆の大半にとつては、どうでも良い話だ。地球を追い出されてからの暮らしが辛く苦しいものであったから、地球連邦政府に不満を持ち、攻撃したかっただけなんだ。理由はなんでもよかつた。その根幹にあるのは何時だって、今よりも少しでも良い暮らしがしたい。俺達を地球から追い出して、お前達だけぬくぬくと地球で過ごしてゐるなんて許せねえ、とな」

俺はドズルを横目に見やりながら告げる。

「その事を理解していたのが、お前達ザビ派の人間だよ」

デギン・ソド・ザビが現実路線と呼ばれるのには理由がある。

今なら分かる。デギンはダイクンの思想を正しく理解しており、そこに共感もしていた。

しかし彼の思想を広める為の土壌がジオン共和国にはなかつた。

経済的に余裕がなければ、多くの人は心に余裕を持つ事ができない。

理想を掲げられる人間ってというのは、その大半が経済力を持っている人間の事をいう。

そして民衆というのは基本的に自分と家族、恋人を守る事だけを考える。

「全ての人類を地球から追い出す為にデギンが考えたのが、地球に住んでいる人間に対して自主的に宇宙に来て貰う事だった」

彼が考えたのは、宇宙の生活を地球よりも豊かにすることだ。

これには長い時間が掛かる。今ある地球連邦政府とジオン共和国の国力差からして、彼が生きている間に宇宙に暮らす人々の生活基準が地球のそれを上回る事は難しいはずだ。それでも彼は、いずれ覆る。と信じている。その為に必要な事はジオン共和国の樹立。即ち宇宙のみで完結する経済圏を確立し、自治権を得る事。そして自分達を危険視した地球連邦政府が、自らの利権の為に牙を剥いて来た時の為、ジオン共和国を守り続けるだけの武力を保持し続ける事だ。

だが、将来に希望を託すという行為そのものがダイクン派の人間にとっては幻想だった。

「ダイクンの人格で讃えられるべきは、あくまでも政治活動によって地球連邦政府を是正しようとした事なのだろうな」

革命つてのはいつもインテリが始める。夢みたいな目標を持ってやるから、何時も過激なことばかりをする。

「……親父もその類インテリの人間だった」

「前線で戦っている時は英雄として祀り上げられていたんだったな。あれがどうして、



ああなつたんだ？」

「ああ、それは誰でも一度は陥る罠だな。俺もそうだった」

それは教育を受けて来た人物が二十代前半くらいで掛かる熱病のようなもの。知識を摂取するという行為そのものに微量の中毒性が伴っており、今まで知らなかった多くの知識を取り込む事によって世の中の全てを知った気になる容態を発症する。若い頃から武人として生きた父が、ダイクンの思想に触れる事で発症し、彼の思想を自分にとって都合の良い解釈をするようになってしまった。

「はあ……なんか、その、気の毒だな」

そういうドズルは、いまいちピンと来ない顔をしていた。

「お前は立派だよ、ドズル」

根っこの部分で謙虚な彼はきつと、厄介な病気を患う事もないのだろうな。

自分の恥ずかしい過去を思い返しそうになり、目を伏せて、思考を無理やり打ち切った。

「……俺の知識も偏つたものだ。ちゃんと理解したければ、自分の目でダイクンの論文でも手に取るんだな」

人伝てに聞いた話など当てにならない。と少し眠る事にした。

ドッキングベイ、宇宙船に乗り換える。

随分と座り心地の良い椅子だ。

近くに居た乗船員に珈琲を頼んで口に含んだ。

苦いな、少し前まではブラックの方が好きだったはずなのだが……

「まだニュータイプの話は聞いていないよな？」

隣で窮屈そうに座るドズルの言葉に「ただの欺瞞だ」と一蹴する。

「ダイクンも理想を語るだけでは、人が付いて来ない事は分かっていたのだろうな。どう考えても地球と宇宙では生活に格差があるからな。宇宙に住む事の優位性を語る上で捻りだした言葉がニュータイプ、つまりは人類の革新。本来ならば、それだけの話だったんだ」

「本来ならば？」

ドズルが問い返すので「アイツだよ」と俺が返してやれば「ああ、アイツか」とドズルは天井を見上げる。

「本来は科学的にも、医学的にも根拠のない話のはずなんだが……アイツのせいで否定し切れなくなっちゃった」

今は娘同然の幼子を思い出し、深く息を零した。

全くもって頭の痛い話である。

俺達を乗せた宇宙船はサイド3のエキストラ・パンチと呼ばれる場所に移動してい

る。

通称、ダーク・コロニー。

あそこには秘密裏に兵器を開発する設備があるのだと少し後にドズルが教えてくれた。

## 11. カナリア尾行たい、そうぜい一名!

ジオン共和国がジオン公国に名を改めた直後の話。

ジャブローにある地球連邦軍司令部。その会議室において、感情任せに拳を机に叩き付ける男が居た。

「ジオン共和国はジオン公国に名を改めて、専制的な政治体制を取っている！ 軍備増強を確認してからでは遅いのだ！ 今から計画を立てるにしても議決されるのは半年以上も先の話、後手に回っては何もかもが手遅れになる!!」

男の名はマクファアティ・ティアンム、この時は大佐。彼の対面にはゴツプ中将が腰を下ろしており、彼から手渡された書類に眠たそうに目を通してゐる。書類の表紙には「七〇年代軍備増強計画・草案」とある。

ゴツプは、熱弁を振るうティアンムの話を適当に聞き流した後、書類だけを受け取って彼を部屋から追い出した。

その夕方、彼の執務室では二人の友人が、応接用の机で書類の束を手に熱心に睨み付けてゐる。

片や立派な顎鬚が特徴的なレビル少将、もう一人は英国然とした男であるワイアット

少将。そんな二人を前にゴツプは座り心地の良い椅子に身を沈めていた。

二人が読み終わった頃合い。自分用に淹れた珈琲を啜り、冷めている事に眉をひそめてから問い掛ける。

「どう思う？」

レビルは紅茶で薄つすらと赤く染めた口元で答える。

「ざっと見た感じでは六〇年代軍備増強計画の延長線だな」

ゴツプは小さく頷いてみせる。

ジオン共和国が樹立した時、彼の国への備えとして計画されたのが六〇年代軍備増強計画。

宇宙世紀に入ってから以来、警戒すべき敵が居なかった地球連邦政府が軍縮に次ぐ軍縮の政策を行っていた為、地球連邦軍には一国家と戦闘できるだけの軍備が整えられていなかった。そこで急遽、軍備増強する為に発案されたのが六〇年代軍備増強計画。これは既存の戦闘用艦艇を早急に量産する事を主目的として、同時に停滞気味だった軍事研究を再開させる意図があつた。

とはいえだ、所詮は辺境にある一サイドの国力しかない相手だ。

相手の倍程度の数を維持するだけに留めており、あくまでも余裕のある範囲で戦艦を増やしている。

今回、テイアナムが提出した七〇年代軍備増強計画は、上記の六〇年代軍備増強計画を継続し、焼き直した代物になっている。

六〇年代から続けてきた兵器の開発を継続。中でもミノフスキー粒子を用いた新兵器の開発が主目的とされており、それを用いた艦艇の再設計、開発。新造する事で多くの艦艇を揃える事を掲げていた。

本計画の最終目標は、大規模な作戦行動が可能な軍としての体裁を整える事にある。

「……このミノフスキー粒子は、熱核反応炉以外の使い道もあるのか?」

レビルが問い掛けると「既に実証はされているらしいぞ」とワイアットが答える。

「ミノフスキー粒子を良い感じにするとメガ粒子になると面白いな。まだ兵器運用できる段階にないが見通しは立っているとの事だ」

「ジオンの奴らは、この兵器を運用してくるかな?」

「間違いなくしてくるだろうな。なんたって、あちらにはミノフスキー物理学の権威がいる」

ミノフスキー粒子に関しては地球連邦に出来て、相手に出来ない事はないだろうな。とワイアットは肩を竦めてみせた。

「メガ粒子砲搭載の艦艇の開発に関しては、まあ良い」

とレビルは書類のページを捲り、とある項目を見つめる。

「気になるのは、この宇宙空母の開発の方だな」

「こちらに関してはレビルの方が詳しいのではないかな？」

「……かつて地球で起きた大戦では、航空母艦は大活躍したとは聞くな」

レビルは腕を組んで、しかし、と難しい顔で続ける。

「航空母艦が活躍したのは、戦艦の射程距離の外から戦闘機で一方的に攻撃を仕掛けられた為だ。だが、それは当時の艦艇が空からの攻撃に対空砲を多く揃える事でしか対抗できなかった事情もある。空しかない宇宙空間で、戦闘機にどれだけの価値があるかな？」

「戦艦を動かすよりも戦闘機の方が取り回しが良いぞ」

「そういう事を言っている訳ではないが……」

「偵察にも使えるではないか。既存の艦艇を動かすよりも余程、気付かれにくそうだ」

「……まあ、腐りはしないだろうな」

二人の結論が出た頃合いで「計画に反対はないのだな？」と問い掛ける。

「軍備増強に関しては、今すぐに実行すべき事案だろう」

「レビルに同じく、だな」

「では、これに陸上戦力の増強も加えて、叩き台にしてみよう」

宇宙軍ばかりを優遇しては、地上軍はヘソを曲げてしまうからな。とゴツプが高

笑いしてのける。

◆ それをレビルと冷めた目で見やり、ワイアットは冷めた紅茶を啜った。

翌年、ジオン公国。公王執務室にて。

地球連邦軍の更なる軍拡により、国家間の緊張が高まりつつある中での話だ。

「戦争を始めるつもりか、ギレン?」

息子から受け取った予算案を見たデギンが、ゆっくりと顔を上げる。

予算案には、余剰分を全て軍事費に費やす内容が記されており、これは去年の二倍以上の金額となっていた。

しかしギレンは一笑して「いずれ、何処かで衝突しますよ」と答えてのける。

「それは父上も重々に承知でしょう?」

「必要以上の軍備増強は、連邦政府を刺激する事になる」

「ジオン公国と名を改めた時から連邦は、私達の事を仮想敵として見做していますよ」

飄々とした態度を取り続ける息子の姿を見て、デギンは彼を睨み付けた。

「どうするつもりだ?」

「先ずは艦艇を建造しましょう、常識の範囲で」

はぐらかそうとする回答にデギンは目を細めた。



デギンは地球連邦と戦争になった時、ジオン公国が負けると確信している。少なくとも馬鹿正直に軍事力で競つては万が一の勝機もない程度には、ジオン公国と地球連邦の国力差は致命的であった。この事をギレンも理解している。現状では、勝ち負けどころの話ではない。戦えば、必ず負ける。今のままでは、確実に。

ギレンは確信している。いずれ、連邦政府はジオン公国を弾圧する為に攻め込んでくる。

デギンは武力を持つ事で戦争そのものを避けようとしているのに対して、ギレンは起こるべくして起こる連邦との戦争に備えることを目的に置いていた。言ってしまうと、非戦派と主戦派の対立。

ギレンが求めるのは、戦争に勝つ為の手段である。

「何を、作るつもりだ？」

デギンの言葉に、ギレンは笑みを深める。

連邦軍を打ち破る為に必要なのは、今までの戦争を根底からひっくり返すような新兵器。

その取っ掛かりをギレンは既に握っている。ミノフスキー物理学の権威であるトレノフ・Y・ミノフスキー博士が発見した、レーザーや誘導兵器を使用不能にするミノフスキー粒子の特性。そのミノフスキー粒子が大量に散布された領域では、これまで電波

に頼りきりだった戦争の常識は粉々に打ち砕かれる。必要なのは、ミノフスキー粒子の散布下で優位性を保てる兵器の開発。

ギレンが幾つか考えている案のひとつが、人型機動兵器。即ち、モビルスーツ。

開発には当時、建造が中断したまま放置されたコロニーを兵器開発の拠点として改築したものを活用する事になる。

エキストラ・バンチ。通称、ダーク・コロニー。

後の歴史に多大な影響を与える新兵器の開発は、こうして始められたのだ。

◆  
そして現在、

ダーク・コロニー内部にて。巨大な人型兵器が連邦軍の大型戦車と対峙している。

巨大人型兵器は重厚なシールドを左腕に構えており、連邦の大型戦車ことガンタンクから放たれるバルカン砲を防いでいる。通常歩行、時速30km。走行状態、時速80km。金属の軋む音、両肩のキャノン砲を受けてもなんのその。地面を踏み均して発砲状態にあるガンタンクに襲い掛かる。右手に武装した大型クロー、それがガンタンクの頭部を掴んで砕いた。

この光景を目の当たりにしたランバ・ラルは、啞然とする他にない。

「これで連邦をやつつけるのだ、大尉」

隣に立つドズルが握り拳を作るのを見て、ランバは連邦との戦争は避けられない事を悟る。

今やランバは実質的なダイクン派の代表となっている。

しかし彼自身は、今の自分がイデオロギーの闘士になれない事を重々に承知していた。大義があればこそ人は人を戦わせることができる、しかし大義だけで人は死ぬことができない。何か守りたいものがあり、初めて人は死地に赴くことが出来る。

彼が今、守りたいものは——幼い娘。彼女が居ればこそ、彼は覚悟を決められる。

「やるからには徹底的に、だ」

覚悟を決めた男の顔は、親のソレと同じであった。



お父さんが仕事で別のコロニーに旅立ってから数日後の事、彼は全身をボロボロにした姿で帰ってくる。

話を聞いても何も教えてくれなかったけど、それがドズルも関わっている事は直ぐに分かった。何かまた大変な事をやっている。帰って来た時に私の頭を撫でるお父さんの手から、何時も決意を固めるような強い意志を感じてしまうので、たぶんきつと私に關する事で何か思い悩んでしまっている。

お父さんは公私を分ける人なので機密的な事は絶対に喋らないけども、これがドズル

もつてなると結構な一大事だ。

特にドズルからも私を守る意志を感じるので怪しかった。

なにか私に関する事で分かった事でもあるのだろうか……

思い当たるのは、

前にジオンが私を差して「新人類の先達」と言っていた事か。

それとなしにお父さんに話を振ってみれば、

「お前が気にするような事ではない」

と露骨に話を打ち切られたので、きつと当たりに違いない。

だから、私はお父さんの後をひっそりと追いかけてみる事を決意する。

お父さんにバレてはいけない、ドズルにも頼れない。お母さんやクランプはドズル以上の難敵だ。下手な事を口にすれば、お父さんの耳に入るのは分かり切っている。

私が自由に扱えるのは、舞台上に放り投げられたおひねりの中から幾つかくすねた結構な額の現金。

うん、大丈夫。たぶん行けるはずだ。

私の事は、私だって、もつと知っておきたい。

新人類の先達が何を意味するのか。

私が特別である事に意味があるのであれば、ちゃんと知っておきたかった。

……お父さん！  
尾行に勘付くの早過ぎ！  
手加減して！

## 12. 予想していたものとはちがったのです。

今日も勘付かれてしまった。

お父さんの移動手段は自動車で、軍属の方と一緒に移動している事が多い。

対して私は近場に居るタクシーを拾って移動する。訝しげに私の事を見つめるけど、先にそれなりのお金を見せると車を走らせてくれる。

まあダメそうだったり、悪そうな人だったら分かっちゃうので、タクシーに乗る前に逃げれば良いだけだし。

でも数十分も後を追いかけていると、お父さんは直ぐに後ろの車がずっと変わってな  
いって勘付いちやうのだ。

そこで私は尾行を中断し、適当な場所で遊んでから帰っている。今日クレーンで取った棒付きのキャンデーを口に咥えて、私室に戻った私は床に地図をバツと広げる。そしてマジックで×印を付けてやり、今日、辿った進路を線で書き記す。

半年間、積み重ねた成果を遠目に眺める。ぐぬぬ、と腕を組んだ。

法則が、あるようでない。毎日のように進路を変えて進んでいる上に、尾行を始めて最初の数十分程度で気付かれてしまうので目的地を絞り切れなかった。はたして何処

に向かっているのか、私では推理するのに限界がありそうだ。

もういつそシンプルに聞いてみた方が早いかも知れない。

だから、私は駄目元でひとつ、お父さんに頼みごとを試してみた。

「ほら、お土産だ」

渡されたのは月の名産だ。

これを見て、そりや特定できない訳だと溜息をひとつ零す。

勿論、お父さんに気付かれないように。

お父さんの前では大喜びでハグをしておいた。

お父さんから貰った月見饅頭を頬張り、次の計画を立てる。

お父さんが仕事でドッキングベイに向かうよりも先に、ドッキングベイで待ち伏せする。私がずっと尾行をしていたせいか、お父さんが使う進路は複雑になってしまっている。私がいま直接線に向かえば先回りできるはずだ。

そこで、お父さんがどの便に乗るのか確認できれば、そのタイミングで私も同じ便で月に向かえば良い。

翌日、私はドッキングベイまで行って下見をする。

あのお父さんの事だ。下手な尾行では、絶対に見抜かれる。

だから、こうした入念な準備が必要なのだ。

調べるべきは月の便、それが何処から出て行くのか。というものだ。

その時に下見の際に売店で見た商品の中に昨日、お父さんが買って来てくれたお土産と同じ商品を発見する。

……：コロニーの外に出たのは、たぶん本当。でも、月には行っていない可能性が出てしまった。直接、お父さんに場所を聞く事はできない。それをしてしまつては、私が探りを入れていことが勘繰られる。そうなつてしまつては、私がお父さんの後を付けることが難しくなる。

月に行っていないのであれば、それはきつと、擬装する必要があるつて事だ。

……：私は、本当の親を知らない。

いや、親という意味であれば、ランバとハモンの二人が居れば良いと思つている。

でも私は、自分が何者なのかを知らない。

この特別な能力の事とか、私が特別な事に答えがあるとすれば、  
やっぱり知りたいて思つちやうのだ。

◆ もう何度目かになる人型機動兵器の戦闘試験。

連邦軍が使用するガンタンクのコピーを相手にした戦闘試験は疾うの昔に終えており、今は人型機動兵器同士を戦わせている。



月面開発用の作業機械に偽装する為、名称はモビルワーカーとしている。型番はMW—01。まだ核融合炉の小型化に難航している事もあり、むき出しの核融合炉を背負ったままの状態という、兵器としてはなんともお粗末な代物となっている。それでも議会を納得させる為に一定の成果は出し続けられないといけない為、こうやって、お披露目の意味も含めて試験を積み重ねていた。

戦闘試験が行われる時は、ドズルが視察に来る事が多い。

今日もまた同じようにドズルが足を運んでいるはずなのだが——あと少しで戦闘試験が始まるというのに彼は姿を現わさなかった。

戦闘試験でモビルワーカーに乗るのは、マツシユとオルテガだ。二人にガイアを加えた三人は、対ダイクン派との戦闘でも過激な戦果を上げ続ける事で、兵卒から将校に成り上がった叩き上げの戦争屋だ。三人のまとめ役であるガイアは少尉、マツシユとオルテガは准尉となっている。

ちなみに俺は、この任務に就いてから大尉から少佐に格上げされている。

さておき、時間になってもドズルが姿を現わさなかったので、試験は俺の判断で予定通りに進める。

試験場に現れる二体のモビルワーカー。片や通信機からの反応はなく「行くぜエツ！」とオルテガは血気盛んに飛び込んだ。まだ開始の合図もないのに元気の良い。対す

るマツシユのモビルワーカーは棒立ちのままだった。何時もなら、相手を迎え撃つ為に駆け寄っている所だ。通信機にも出ないし、マシントラブルでも発生したのかも知れない。スタート地点に着いてから、身動き一つ取っていないかった。

こちらから映像通信でマツシユに話しかけようとした時、二体のモビルワーカーは衝突する。

オルテガは前進する勢いを乗せて、大きな爪の付いた右腕を突き出した。

それをマツシユは左腕で華麗に外に弾いた。その見事な動きに二人の対戦を見ていたガイアが、身を乗り出す。

身を晒したオルテガの胸元に、マツシユが左肩で体当たりを噛ませる。

オルテガが後方に大きく仰け反った。

なんとか踏ん張って、オルテガが右腕を振り回そうとする。

しかし、マツシユは己の右腕の爪を使って、相手の右肩に当たる部分を押しえつけた。

「やるじゃないか」

と思わず、呟いた俺に被せるように、

「違う」

とガイアは二体のモビルワーカーを険しい顔で睨み付けた。

「おい！ ランバ……いや、ラル少佐！ カナリアを見なかったか!？」

「……は？」

情報収集の為に多くの計器が持ち込まれた観戦室にドズルが慌てた様子で飛び込んできた。

カナリアが、こんな所に居るはずがない。今頃はズム・シティにある酒場エデンで俺の帰りを待っているはずだ。

と思ったところで「大変だ！」と、

モビルワーカーに乗り込んでいるはずのマツシユが部屋に駆け込んでくる。

「腹の調子が悪いから……ちよつと離れた隙にモビルワーカーが盗まれちゃった！」

嫌な予感に、冷たい汗が頬を伝った。

「鍵は、どうしたんだ！ 鍵はッ!？」

「す、すまねえ……!! 操縦席に乗った後だったからよお、差しっぱなしに……」

「この馬鹿者がアツ！」

ガイアの怒声にマツシユが萎縮するのを余所に、試験場で大きな衝撃音が響き渡る。

どうやら、オルテガの機体が仰向けに倒されてしまったようだ。立ち上がるうとするオルテガのモビルワーカーを足で踏みつけて、右腕の接合部を重機の爪で切断する。ドズルは啞然とした顔を浮かべており、ガイアは何時でも動けるように臨戦態勢を取っていた。



先程よりもひと際大きな怒声を上げれば、今にも泣き出しそうな幼子の悲鳴が観戦室に響き渡る。

この状況、どう收拾を付ければ良いのだ。

頭を抱える俺から、ドズルが通信用のマイクを奪い取る。

「カナリア！ 聞こえるか!？」

『ドズル！ 閉じこめられちゃった、たすけて!』

「手元にレバーがあるはずだ！ それを引いてみる!」

『えつと……あ、これだね!』

「あ、馬鹿！ それは……!」

ドズルが言い切る前に思いっきり引いたのは、緊急脱出用のレバー。

操縦席のハッチが勢いよく開け放たれて、幼い少女が甲高い悲鳴と共に勢いよく宙を舞った。室内で花開く落下傘、着地で大きな怪我をしなかった事だけ確認した。

この後の事を考えると、気が重くて仕方ない。

……今はもう、何も見たくない。

何も考えたくない。

## 13. とり返しのつかないこと。

カナリアです。少し前、八歳になりました。

今、私は、取り調べを受けています。小さな個室に寿司詰めの状態になる大人の皆様方、机を挟んで私の対面に座るのはドズル。その隣にお父さん、反対側にガイア、マツシユ、オルテガというドズルにも負けず劣らずの強面三人衆が腰を下ろしている。此処は即席の軍法会議場、私の沙汰を下す為に皆が集まっていた。

ちなみに今、この場で余裕を保っていられているのはガイアだけだ。

私は、ロボットに乗るまでの一部始終を全て話す事にした。

お父さんを追跡する事に始まって、地図で行く先を特定しようとしても失敗した話。だから出張先の土産を買って来て貰うことにしたのだけど、それがドッキングベイにある売店と同じ商品から行く先が月ではない事を特定する。待ち伏せした後、お父さんが一般客が使う通路を使っていなかったので向かう先が軍が利用する宇宙船だって事もわかった。

此処で、お父さんを追跡しても勘付かれるのは今までの経験で分かっていたので、お父さんと何時も一緒にいる人を追跡する。

それで、お父さんが乗る宇宙船を特定できたので、その貨物に紛れ込んだ。

「ずっと追跡されている感覚はあったが、それもお前だったのか……」

お父さんが頭を抱える横で「なあ」とガイアが声を上げる。

「こいつ、諜報部にでも突っ込んだ方が良いんじゃないか？」

その問いにドズルとお父さんは苦い顔で口を噤んだ。

話を続ける。

この基地に入ることが出来たのは、ドズルの名前を出した為だ。

お父さんが基地に入る時、ドズルが出迎えに来ていたので此処にドズルが居る事が分かった。

だから、基地の入り口のところでドズルの名前を出したら絶対に飛んできてくれる。

この辺りで姿を隠すのはやめて、カナリアって名前も出している。

「何故、俺じゃなくてドズル大佐なんだ？」

お父さんの問い掛けに「だって、中に入れてくれないでしょ？」と答える

「どっかのへやで閉じこめて待たせるんだろうなって」

私が拗ねるように答えれば「ああつ！」とドズルが今、思いついたように両手を叩いた。

「ドズルッ！ お前、機密がどういものなのか分かってるのか！」

「い、いや……放っておくわけにもいかんだろう!？」

「だからといって中に入れてどうする!!」

「俺は……とりあえず、お前に会わせただ方が早いって思ってたな……」

「俺を連れて行けば良いだろう! とうか真っ先に俺に報告しとけ!」

お父さんが本気で怒っているのを尻目に私の前にストロー付きのオレンジジュースが置かれる。

見上げてみると髭面のガイアで「あの二人を手玉に取るたあ大したもんだ」と頭を撫でられた。

これは、果汁20%! ……喉が渴いていたので、ありがとうって笑顔を返した。

「それで、どうしてモビルワーカーに乗っていたんだ?」

二人の言い争いに痺れを切らしたのか、ガイアがマツシユを睨み付けながら問い掛ける。

「ここがすぐに私の求めるものがないってことはわかったんだよ? でもね、ここにはワクワクするようなロボットがいっぱいあってね! ちよつと見つめている内にドズルがいなくなっちゃったの!」

「えっ? はぐれたのって俺のせいなのか!？」

それは酷くないか? と零すドズルにガイアが呆れ顔で答える。



「こんな幼子から目を離す方が悪いだろ」

お父さんとドズルが納得がいけない様子で私を見つめた。なんで？

巨大ロボットのコックピットに入ったのは好奇心からだ。

ちよつと座つて遊ぶだけなら良いかなつて思つただけ——鍵を使わないと車とか動かないつて事は知つてたから——操縦桿を触つてみた。すると動いちやつた。いけない事をしたつてわかつたけど、勝手にハッチは閉じちやつて出られないし、バレたら怒られるつて分かつてたから、とりあえず周りの指示に従つて動かした。

そこまで話して「待て」とガイアが口を挟んだ。

「色々と言いたいことはある。マツシユがエンジンを掛けたまま、コックピットを抜け出した事とか、中身が入れ替わつていても気付かなかつた周りの整備班とか……」

「整備班の話を聞くと、マツシユとオルテガは何時も合図なしで動かすから危なくて確認できなかったとの事だが？」

「……ラル少佐、その話は置いておこう」

そんな事よりも、とガイアが半ば強引に話を戻す。

「なんでモビルワーカーを一目で動かせているんだ」

「人が作つたものなら、見ただけで大体わかるよ？」

それがある明確な理由がある時は、なんとなしに読み取れる。

知らないものは分からない。

過信すると結構見落とすことが多いので感覚を頼りにし過ぎるのも危険だ。

でも、ロボットを歩かせるだけなら簡単だったし、

周りの指示に従って動かしている内に大体の感覚は掴んだ。

「よくぶつけないかったな」と話しかけたのはオルテガ。その言葉に私が「……？　気をつけたらぶつけないよ？」と可愛く首を傾げれば「俺、自信なくしそう」とマツシユが頭垂れてしまった。初めて動かした時、マツシユは何度も壁に機体をぶつけてしまったとの事だ。程度の差はあれどもガイアとオルテガも初めて動かした時はふらついていと零す。

まあ、その後は、みんなの知つての通りだ。

周りの指示に従ってロボットを動かしていると広場に出た。正面には私と同じ巨大ロボットが立っていて、それが急に襲い掛かって来た。だから返り討ちにした。

以上が、事件発覚までの流れになる。

「それで、この件はどう処理をするつもりなんだ？」

ガイアが暗い顔をする皆に問い掛ける。

先ず最初に、ドズルは私という幼子を機密のある区画に連れ込んだ失態がある。次にマツシユは私にモバイルワーカーを奪われた失敗があり、お父さんにはモバイルワーカーの

パイロットを確認せずに戦闘試験開始の合図を出してしまった。最後にオルテガは幼子に負けた実績が残る。

この場にいる中で失態のない者は、ガイアだけだ。

「まあ幸いにも、何か問題が起きたという訳でもない。不祥事は、このまま隠蔽してしまうのが一番だと思いがな」

ガイアもマツシユとオルテガを裁きたい訳ではない。

二人を庇う意味でも提案し、お父さんとドズルは私の為に唸りつつも首肯するしかなかった。

こうして私の沙汰は、お父さんの拳骨一発で済まされる事になる。  
はずだった。

私達が部屋を出ると、白衣の研究員が慌てた様子で駆け寄って来る。

彼の手には何枚かの書類が握られており、興奮した顔でドズルに詰め寄った。

「見てくださいよ、このデータ！ 今までの中で一番の情報です！ 重心移動、姿勢制御、まるで人間のような動作！ これを使えばモバイルワーカーの動きをもっと改善できますよ！」

言い寄って来る彼にドズルは気まずそうに視線を泳がせる。

「あー……すまないが、その戦闘記録は消して欲しくてな……」

「……消す？ なにを言うんですか！ そんな勿体ない事ができるはずがないでしょう！」

「いや、そのう……だな？」

「あれに乗っていたのは君だったのだな！ こんな幼い子がアレを動かしていたなんて驚きだよ！ 次は何時、来てくれる!? 明日？ 明後日？ 君が乗った一回が、我々の研究を数ヶ月縮める事に……いや、この効率は辿り着けなかったかも知れない！ ブレイクスルーだ！ 我々はより一層に素晴らしいものを作り上げる事ができる!!」

「おい、待て、誰も乗せるなんて……」

お父さんの言葉も無視して「早く情報を精査して、まとめないと！」と彼は研究室へと駆け戻ってしまった。

「すまないな。彼は、ああいう奴なんだよ」

また別の若い研究員が私達に、というよりも私に興味を持って話しかけてきた。

「ところで君、あれに乗った時に気になった事とかなかった？」

「あ、なんかね！ 反応がすごくおそかった！ のっそりというか、すごいもっさり！ もっと早くしてくれないと動かしにくいかなって！」

横から別の研究員に急に話しかけられたので、思わず返事をしてしまった。

「カナリア!」とお父さんに怒鳴られる。私が悪い事をしたのは分かっているんだけど、今日は怒鳴られたり、叩かれたりばかりで散々だ。

来なけりや良かった。とも思うんだけど、あのロボットを操縦するのは楽しかった。

「大佐。これ、もう隠蔽できないんじゃないか?」

「……年齢と名前の改竄はしておかないとな」

ガイアの問いかけにドズルは大きく溜息を零した。



ジオン・ズム・ダイクンがニュータイプ論を提唱した事に感銘を受けて、サイド6からサイド3に引っ越して来た。

元より私は「人類が宇宙での暮らしに適應する事による進化について」の研究をしていたのだが、その結果をまとめた論文は地球連邦政府に差し止められてしまったし、翌年以降の私の研究予算は大幅に減額される事になってしまった。明らかに政治的な何かに触れてしまった事は確かなのだが、こうも一方的に迫害を受けてしまつては反発するのも当然の話である。

だから私はジオン共和国に移住し、その国内で研究を続けていた。

ニュータイプ論という人類の革新をテーマに研究を続けているので、医学的な知識も多く有している。

そんな私が、このダーク・コロニーと呼ばれる場所に来たのは巨大な人型ロボットを開発する際に、骨格等といった身体に関する知識が欲しくて招集されたという事情がある。正直、私の知識がロボット開発に関係あるとは思えない。実際、ロボット開発にはほとんど関わっていない。健康診断と称して「宇宙的環境が身体に与える影響」を調べている事もあり、このコロニーに居るほとんどの人間が私の事を医者と認識している。

……まあ、風邪薬くらいなら処方する事もあるしな。

お偉いさんの考えている事は分からないが、私の研究を続ける為の予算と環境は与えられているので文句は言うまい。

「フラナガン先生、ちょっとここいつを診てやってくれないか？」

その日は珍しくドズル大佐が幼子を連れて来た。

話を聞けば、どうやら強い衝撃を受けてしまったようで精密検査をして欲しいようだ。

相変わらず、私に頼むような事ではない。まあ設備はあるから良いのだが。

とりあえず血を抜き取り、MRIやレントゲンといった検査に掛ける。

軍事施設の此処では、子供の遺伝子を頂ける機会は珍しい。彼女の検査結果を機械が出すのを待つ間、事のついでにと鼻の粘膜と唾液も採取し、他とは分けて冷凍保存して

おく事にする。髪の毛も落ちてるな。念のために取っておくか。

検査結果は良好、脳波もパツと見た感じでは問題なさそうだ。

「部下が骨を折った！ 先生、助けてくれ！」

……私の専門は、脳に関する事なんだがな。

まあ骨の位置を戻して、固定する程度の事は出来るから構わないのだが。

後でちゃんと病院に行くんだぞ。

とりあえず幼子を帰して、怪我人の対応をする。

此処に来てから随分と応急処置が上手くなった気がする。

応急処置をしている間、怪我人を担架で連れて二人組が会話を始めた。

「そういえば今日、モビルワーカーに幼子が乗っていたっていう話を聞いたか？」

「その話はデマだって聞いたぞ。実際には、忍び込もうとしたドズル大佐の娘が捕まっ

たっていう話だ」

「え？ 大佐、あの顔で結婚してたのかよ!？」

「まあ噂だけだな。幼子の方だって、オルテガ准尉を倒したって話だし、嘘に尾びれが付

き過ぎなんだよ」

……ふうん。へえ、ふむふむ。

少し調べてみようか。

## 14. モテる女はたいへんなのです。

次兄のサスロがダイクン派の人間に暗殺された時、私はまだ13歳の小娘であった。

その時から勉強に励む事、三年間。最初の一年間で父デギンと次兄サスロの書庫にある書物を全て読み漁り、必要だと思つた文献は全て取り寄せた。女というだけで見縊られる事もある、そういう事情もあつて我武者羅に知識を身に着けた。知識を得た後は力を欲するようになり、かつてサスロが築き上げた独自の諜報機関と接触する。

通称、サスロ機関。次兄のサスロは己の役割が父とギレンとは違う事を理解しており、独自の判断で行動する事も少なくなかつた。それ故に自分が自由に動かせる配下を生み出す為に作り上げた組織である。

本来、サスロ機関はドズルが引き継ぐ手筈となつていた。

しかしサスロ機関を特殊部隊の延長線上としか捉えられなかつたドズルに彼らの事を使いこなすことはできなかつた。精々、情報収集に使うのが関の山。その上でジンバ・ラルが叛乱を企てた時、サスロ機関は亡きサスロの命令に従つて関係者の暗殺を実行した事がある。その標的にダイクンの遺児も含まれていた事がドズルの虎の尾を踏み抜く事になり、以後、彼らは冷遇される事になる。



そんなドズルに不満を抱いた人物と接触し、引き抜く事で私は私が自分の意志で動かせる諜報機関を新設した。

組織の名は、サスロ機関に合わせる形でキシリア機関とする。

今年、18歳の誕生日を迎えた私は、ジオン公国の中で地位を高める為の案を求めた。ジオン公国はジオン・ズム・ダイクンが掲げる理想の実現を国是とする国家である。即ち、エレズムとコントリズム、ニュータイプ。エレズムとコントリズムに関しては父と長兄の尽力により、今や二つの思想を合わせたジオニズムとして昇華されてしまっている。その為、今更になって私がエレズムとコントリズムに関して叫んでも意味は薄い。軍事方面もギレンとドズルが協力して事に当たっている為、正攻法では割って入る余地はない。

残されたのはニュータイプ。しかしニュータイプというのは、エレズムやコントリズムと比べて荒唐無稽が過ぎる。

折角のキシリア機関も使う目的がなければ、宝の持ち腐れだ。

父と長兄も使い勝手の良い諜報機関がひとつ増えたといった程度であり、私自身の力を見せつけたというには程遠い。

もつと自分の存在を周りに認めて貰う為に、何か良い案はないかと資料を精査する。

「フラナガン・ロム。医師資格を持つ研究者か……」

今はドズルが管理するダーク・コロニーでモビルワーカーの開発に携わっている。

モビルワーカーというのは、次世代兵器を開発する為の計画のひとつだったはずだ。……ニュータイプ論の検証と研究をする為にサイド6からサイド3に引っ越してきた研究者が何故、モビルワーカーの開発に携わっているのだろうか？

それとなしにズム・シテイに帰ってきたドズルに話を聞いてみた。

「フラナガン博士？ ……ああ、あの医師の事だな。良い腕をしていて助かっている！ ……私は一度、ドズルを殴っても許される気がする。」

さておき、私はフラナガン博士と接触する為にダーク・コロニーに向かう事を決意した。

良くも、悪くも、時間には余裕がある。

ダーク・コロニーに着いた後、モビルワーカーの開発に興味がなかった私は一直線に彼の研究室を目指す。

扉の前でノックをした後で「キシリアだ、キシリア・ザビだ」と言えば「入ってくれて構わんよ」と中から声が聞こえたので扉を開け放った。

消毒液の臭いがする。ほとんど医務室となっている部屋の中、白衣を着た褐色肌の中  
年男を見つめる。

「あれー」

その前に幼い少女が机の上に伏せられたトランプを指で差した。

「なるほど、百発百中だな」

「すごいでしょ！ もっとほめてくれても良いんだよ！」

「ああ、凄いな。最早、超能力の領域だ」

「完全にランダムだとわかんないけどね」

「是非とも研究がしたい」と零す彼に「おかしの分だけだよ！」と少女が返した。

「では最高級の菓子を用意するから是非とも……」

「そういうのもふくめて、おかし分まで。あんまりやりすぎるとお父さんとドズルが来るからね」

めっ、と少女が両手の人差し指で作ったペケ印に「残念だ」と彼は両手を上げて降参の意を伝える。

「今日はもう帰っても良いぞ。これから大事な話があるからな」

「あんまりひどいことをやっちゃダメだよ？」

「試せるものは、なんでも試すのが研究者だよ」

「そ〜いうとこ〜！」

もう！ と少女は私の横をすり抜けて、部屋から出て行った。

……此処は機密を保持する軍事施設のはずだよな？

「彼女はランバ・ラルの養子でカナリアと云う。モビルワーカーのテストパイロットを務めているらしいよ」

「兄は子供を兵器に乗せているのか!？」

「ドズルの事は考えなしだと思っていたが、ここまでとはな! この事をギレンは知っているのか!？」

「私も驚いたが、実際に彼女の運転技術を見てみると理由が分かる。実際、彼女が来てから格段にモビルワーカーの動きも良くなっているからな」

後で資料を見ると良い。と彼はトランプや菓子などを片付ける。

「珈琲はいるかね?」

「……頂こう」

「軍支給のものだがね」

彼は言いながらカップにインスタントコーヒーの粉を注ぎ入れる。

「……私は、人類の可能性を知りたい。だが、いかにせん今の世の中では出来る事が限られている」

「何が言いたい?」

「人類の神秘を探求する上で、ある程度の倫理は無視して然るべきだと考えている」

しかし、と彼は白い湯気の立つ珈琲が入ったカップを私の前に置いた。

「私も人の子でね。あのような幼い子には手が出せない。バックも怖い」

「……あの子がニュータイプだということのか？」

「そこはまだ分からん。人類の革新と呼べる存在なのか、彼女だけが特別なのか」

ただの天才という可能性もある、と彼は珈琲を啜ってみせた。

「彼女だけが特別だとしても興味はある。興味はあるが、再現性のない研究はクソだとも思っている。人類の革新、その可能性を追求する事は私の研究のテーマだが……彼女の場合は度が過ぎてている。特別な個人を調べる事は私の研究ではないのだよ」

私も彼の淹れた珈琲を啜る。

クソ不味かった。思わず、咽せ返りそうになる私を見て、彼は初めて歯を見せる。

揶揄うように笑う彼の事を思わず、睨み返してしまった。

「まあ、どちらにせよ彼女を手に入れる事は難しい」

「何を考えている？」

「だが、もし仮に彼女が人類の革新、その先達なのだとすれば、このまま見逃すのは余りに惜しい」

「さっさとしたい事を言うのだ」

「彼女が彼女であるが為に人体実験に踏み切れないのであれば、人体実験をする為のモルモットを自らの手で生み出してしまえば良いのではないかな？」

それまで、のらりくらりとした彼の焦点が初めて、私を見定める。

「ニュータイプの研究が貴女の力になれるのかは、まだ分からない。だがニュータイプには「ただ宇宙に適応した人類」以上の可能性が生まれたのも確かだ」

「……不確かなものに私は協力する事はできないのだが？」

「その時は、まあ、器官培養の研究でもして人類に貢献してみるのも良いのでは？ 医師もそう悪くないものです」

医務室としか思えない空間で白衣をきたおっさんが満更でもなさそうに微笑んでみせる。

私は、その日。考えを保留にした後、あのカナリアという少女がモビルワーカーを動かす場面を実際に見た。

そして支援を決意する。最悪、医学の発展に大きく寄与する事を信じて。

翌年、クローンはモデル元の名になぞらえてBBと呼称される。

ブルーバード。即ち、青い鳥だ。

◇

とある通信記録。

「……設備を整えてやってから一年が過ぎた。進捗はどうだ？」

「ああ、キシリア様。無事に作れましたよ。髪は青っぽい銀髪になってしまったがね」

「ニュータイプの研究はどうしたんだ」

「素体もないのに研究ができる訳ないでしょう……ああ、宇宙に適應する事による空間把握能力の向上についてのデータはいりますか？」

「いらん。先ずはニュータイプの存在を証明するんだ」

「善処します。ところでキシリア様、ひとつ要望がありまして……」

「なんだ？」

「横漏れしないオムツの交換方法に関しての情報不足しているのです」

「……もう知らん、勝手にせよ」



時が経つのは早いもので、更に二年の歳月が流れて私は十歳になった。

ドズルは、今年から士官学校の校長に抜擢されており、顔を合わせる機会が減った。本人は「名ばかりの役職がまた増えた」と高らかに笑っていたが、目元の隈が更に濃くなっているのでもちよつと心配だ。疲れが吹き飛べーって抱き着いてあげたら、めっちゃ元気が出たけども、彼にはちよつと刺激が強過ぎたようなので以後、自重。

月に一度か二度、ダーク・コロニーでモビルワーカーを動かしている。

開発者の指示に従って動くだけの簡単な仕事。戦闘試験に参加はさせて貰えないけども、月面開発に関わる作業の試験などをやらせて貰ったりしている。

ただまあ兵器としての開発は半年前に行き詰ってしまっていた。

その原因は核融合炉の小型化を達成できていない為だ。宇宙空間用に姿勢制御スラストとバーニアを増設してみたり、モノアイから受け取った映像だけで動かせるようにと機能を増やしているのだけど、機体としてはほとんど完成してしまっている。

もうやることのない状態が、ずっと続いてしまっていた。

丁度、私が宇宙仕様のモビルワーカー動作試験を終えた時の話だ。

おもちゃ感覚で存分に遊び倒した私を待ち受けていたのは、何時の日か見た眉なしの怖い人だった。

それは急な視察であり、誰も対応する事ができなかつた。

「ふむ、優秀なテストパイロットを雇ったという話は聞いていたが……まさか、こんな子供だとはな」

心を読むまでもなく怒っているのが分かった。とりあえず、にへらと笑って誤魔化した。

「ドズルを呼べ、今すぐだッ！ アイツは何を考えているッ!!」

しかし私の可愛さは彼には通用せず、彼は怒声を張り上げた。

ごめんね、ドズル。私には、どうする事もできないや。

部屋の外まで聞こえる程の叱責を受けるドズル、開発者の皆々様は今日の情報を精査



する為に各々の仕事に取り掛かる。

皆、遅しいね。

勢いよく開け放たれる扉、ギレンが額に青筋を浮かべながら宣言する。

「MS計画は中止だ！ 話にならんツ!!」

えー、そんなー。せつかく、みんなでここまでがんばったのにー。

「お待ちください、ギレン閣下」

呼び止めたのは、スーツに白衣を羽織った老人の研究者。彼は静かな目でギレンを見つめていた。

「……貴様は？」

「はじめてお目にかかります。本計画の技術顧問、トレノフ・Y・ミノフスキーです」

「子供に頼らなければ、完成させられない計画なんて続けさせられるか！」

「……それは、まあ、そうですが」

ミノフスキー博士は、ちらりとドズルを流し見る。

「元々彼女が機密のある軍事施設を出入りするようになったのは、ドズル大佐が軽率に彼女を招き入れてしまった為です。彼女の存在がなくなると計画は完遂できる、と断言させて頂きます。……彼の失態で研究を取り上げられてしまったのは、我々の立つ瀬がありません」

「……ドズル、後で詳しく話を聞かせて貰うからな」

がつくりと肩を落とすドズル。

ふむ、とギレンが私に乗っていたモビルワーカーを見上げる。

「だが、これでは話にならない！ 一番重要な動力系が未解決のままだ！ 剥き出しのエンジンンを背負ったままの不格好な姿で兵器が務まるかつ！」

「閣下のご指摘は、まったく正当です」

「私は官営の工事を始める気はない、子供じみたロボットバトルをするつもりもな  
いっ！ ましてや子供の玩具を作るつもりもなっ!!」

ギレンの張り上げた声にミノフスキー博士は動じず、御安心ください。と落ち着いた  
声を返した。

「核融合炉の小型化には目途がついております」

「ほう？」

「詳しくは部屋で説明します」

案内するミノフスキー博士にギレンが続いた。

二人の後をドズルがすすごと追いかける。なんだか悪い気がするけども、私に何か  
できる訳でもない。私は適当にジュースでも飲みながら時間を潰す。

そういうえば、いつの間にかフラナガン先生は異動していた。

残念だ、お菓子くれる人だったのに。

数時間が過ぎた頃、ギレンに首根っこを掴まれる。

「お前の顔は覚えている。確か、ダイクンの屋敷に居た小娘だな？ 私と一緒に来い」

えー？ 今時、強引な男はモテないんだよ？

そんな私の不満ましまししかめっ面を無視して、彼は自分の宇宙航空機に私を放り込んだ。

ドズルが心配そうに私を見ていたけど、大丈夫だよって窓から手を振っておいた。少なくとも、彼から私に危害を加える意思は感じられない。

## 15. それもラブ、これもラブ。

プロト・ゼロ。

そんなふざけた名前が、虎の子のMS計画の報告書に記されているのを発見する。

弟のドズルに話を聞けば、新しく雇ったテストパイロットという話だ。実際、彼女が出す結果は他のパイロットと比べると質が良い。兄の俺が口出しし過ぎるのも健全ではないと考えた事もあって、他にもミノフスキー粒子散布下でも活動できる兵器の開発を進めていたのもあって、MS計画はドズルに一任すると決めていた。

その結果がこれだ。子供に兵器開発を関わらせるとか、ドズルは本当に何を考えている。

「月面開発用の作業用機械だよ?」

「……それは詭弁だ」

「安全確認はできてるって言ってた!」

彼女の言うように実際、彼女が任されていたのは安全な試験ばかりだ。

腕が立つのは情報を見ているだけで分かる。彼女にも戦闘試験に参加させるように言い付けた事もあった。

だがドズルは愛想笑いで話を誤魔化すばかりで話を聞かなかった。ドズルも考えなしに不合理な行動を取る奴ではない。

何か理由があるのだと考えて、その時は引き下がったのだが……

「——それが、まさかこんなガキを使っていたとはな！」

「ちゃんと他の人には話してないけど？」

「子供の話を信用できるか！」

むうっ、と頬を膨らませる彼女に頭を抱える。

この事は絶対に隠し通さねばなるまい。連邦に新兵器開発計画を悟られない為に彼女を匿う必要があった。

スケジュールに余裕はない。

とりあえず秘書に手を差し出して、溜まっている書類を要求する。

「おお……まるで小さな戦艦……！」

開いた図面、許可も得ずに膝の上に座る少女。軍事機密のひとつが暴露された瞬間であつた。

「……………おい」

とりあえず少女の頭を鷲掴みにして、握力任せに握り締めた。

「いたい、いたい！ やめて、バカになっちゃう！ あだだだだだだっ！」

このまま彼女の頭を搾り続けられれば、機密などを取り除けないだろうか。

……阿呆な事を考えている。秘書見習いのセシリアに指示を出し、膝上に座るクソガキを降ろさせた。

書類を睨みつけること数十分、喉が渴いてきた頃合いだ。

手元に珈琲の入ったカップが差し出される。

「気が利くな……何故、まだ貴様が此処にいる?」

満面の笑みを浮かべた小娘が、私の隣で立っている。

「私もダイクンの家では、メイド見習いをやってみました!」

「そういう事を聞いている訳ではない」

えっへん、と自慢げに胸を張る少女を無視して、白い湯気の上がる珈琲を啜る。

「……甘いな」

「コーヒーは甘い方が美味しいからね!」

「それは貴様が子供だからだろう。私は無糖派だ」

「でも、頭が疲れている時は甘い方が良いんだよ?」

フラナガンも言っていた! と、語る少女を胡乱げに見つめた後、甘さ増量の珈琲を口に付ける。

後でセシリアに無糖の珈琲を用意させよう。

「フラナガン……確かダイクンのニュータイプ論に触発されてサイド6からサイド3に移住してきた変わり者だったか？」

「よくそんな細かい事まで覚えていられるなあ」

「見たもの全てとまでは言わないが、情報として頭に入れたものは忘れていないつもりだ」

ふ、と鼻で笑ってやれば「さすが！」と彼女は元氣よく両手を叩いてみせる。

とりあえずセシリアに頼んで膝上からどかし、小娘の相手をさせる。

MS計画と並列して行わせているMA計画。

人型に拘らないアプローチで戦場を支配する新たな兵器の開発、というコンセプトで進められている本計画。その実情は戦闘機と戦艦の合いの子という非常に中途半端な代物しか開発できていなかった。核融合炉の小型化が進められない以上、メガ粒子砲といった戦艦に搭載する武装を使おうとすれば、既存の艦艇では持ち運びできないサイズになるのも大きな欠陥である。

現状、幾つかある案の中で最も効果的な兵器を開発できているのは、モビルタンクMT計画。

これは既存兵器をミノフスキー粒子に適応させるといったコンセプトにした兵器の開発で、一定性の成果は認められている。しかし、これは言ってしまうと、連邦軍が開発したガンタンクと同じ大型戦車にカテゴリーズされるものであり、地面がなければ展

開できないという致命的な欠点を抱えている。当然ながら艦隊戦で使う事はできず、戦争の決定打になる兵器とは呼べない。

現実的な路線で考えるのであれば、ミノフスキー粒子に対応した新型戦闘機の開発。

しかし、既存兵器の関連技術は、連邦に一日の長がある。

地球連邦政府に国力で負けている以上、戦争で勝つ為には技術力で勝る他にない。

しかし、その技術力も、やはり、真つ当にやっていたら、連邦には勝てないのだ。第二次世界大戦期、機動性に優れた戦車を開発した事によるドイツの快進撃。大艦巨砲主義に対する日本の航空母艦を中核とした機動艦隊。今、ジオン公国に求められているのはソレだ。……確かにミノフスキー粒子には誘導兵器を無力化し、戦争の歴史を逆行させる力を有している。しかし今、地球連邦軍はメガ粒子砲を搭載した艦艇の開発を行っており、世は再び大艦巨砲主義に回帰しようとしていた。この情勢に機動艦隊を持って来ても第二次世界大戦の焼き直しに過ぎず、戦争の決定打には成り得ない。

ならば、なればこそ。必要なのは、既存兵器の新規開発ではなく、全く新しい概念を持った新兵器の開発だ。

「戦争は数、確かにそうだ。しかしジオン公国には、その数がないのだよ」

ランチェスターの法則に従うのであれば、数以外の方法で相手の戦闘力を上回るしかない。



將兵の数が多くなればなるほどに將兵の質で相手を上回る事は難しい。資源には限りがある。だからこそ局地戦に特化した兵器の開発が急務であるし、それ故にジオン公国は兵器の運用と作戦で勝ち続けるしか手が残されていないなかった。

ミノフスキー粒子で勝てるのは、最初の数戦だけだ。

MS計画、MA計画。そのどちらも難航するのであれば、戦略を改めなくてはならない。

最悪、地球連邦政府に帰順することも考慮に入れる必要があるだろう。

しかし、それでは、遠くない未来。

人類の手によって地球を壊滅させてしまった後に起きるのは、コロニー間の資源戦争だ。

中世以前、かびたパンを得る為に人は人を殺す時代があった。

今度は、酸素を得る為に人と人が殺し合う時代が来る。

そうなった時に問題となるのは、地球とは違って、コロニーには自然治癒力がない事だ。

故に人類は滅亡する。それだけならまだ良い。

地球上に存在していた全ての生命体が人類の手によって絶滅する。

だからこそ、人は、まだ地球に余力がある内に、地球の庇護下から脱却して、宇宙へ

と旅立たねばならないのだ。

「……遠くない未来といつても数世代も先の話、誰も納得はしまいな」

それは今も地球に戻りたいと願いつける宇宙移民の数が物語っている。

故郷は、やはり、故郷なのだ。

人は郷愁から逃れることはできない。

私はニュータイプ論を信じない。

人類の進化と宇宙への適応は、全く別の話だ。

「おい、小娘」と私が呼びかければ「小娘じゃない、カナリア!」と返された。

もし仮にニュータイプを新しい人種と定義した時、

ニュータイプというのは、きつと、

この宇宙を故郷にする人類の事なのだとは私は考える。

「地球に行きたいか?」と問い掛けると彼女は「行きたい!」と即答する。

「自然の景色がキレイだって話だし、遺跡もいっぱいあるからね! 行けるなら一度、

行ってみたい!」

「そうか」

では、と質問を変える。

「地球で過ごしたいと思うか?」

「うーん？ それはないかな？ ずっと重力に縛られてるのって不自由じゃない？」  
「そうか」

私は甘い珈琲を啜り、椅子に体重を傾ける。

珈琲で温められた息を大きく吐いた。

魂は地球ではなく、宇宙に還る。

かつて、天に召される。などといった言葉あつたように。

そういう時代が訪れる日が、何時かやって来る。

人類の為とは言わない、自分の為なんてエゴイズムに開き直るつもりもない。

守るべきを守る為に、為さなければならぬ事がある。

◆  
今から数世代先の彼女達子供が殺し合わない為に、私は近い将来の来たるべき戦争に勝利するのだ。

◆  
今から丁度十年前、宇宙移民時代と呼ばれる御時世にて。

旅客用の宇宙船のひとつが、スペースデブリと衝突する事故が発生した。

こんな事は珍しい事ではない。ニュースで一度、取り上げられる程度。交通事故が必ずしも新聞に載る事がないように、この事故が広く知れ渡る事はなかった。

数週間後には、もう話題にする者はほとんどいない。

世間では、ありふれた不幸な事故の内のひとつとして処理される。

普通と少し変わっていたのは、乗客の行動であった。

スペースデブリが衝突した際、宇宙船は航行不能の状態に陥る。同時に脱出艇も破損してしまっており、乗組員が宇宙船から逃げる事はできなくなってしまうた。

酸素も限られる状況下、極限状態にあった乗客の取った行動は極めて不可解なものであった。

乗客の中に子供が居た。まだ首が据わったばかりの赤ん坊だった。

十数名の乗客は、残された大人用の宇宙服に赤子を詰め込んだ。

船内に残された全ての酸素ボンベと連結し、どうか彼女だけは、とありつただけの想いを込めて送り出す。

無重力の宇宙空間に、どうか、どうか、と数十分後には尽きる命で祈りを捧げる。

今となつては、誰も知らない物語。

ぷかり、ぷかり、と浮かぶ無重力の中で赤子は世界を見ていた。

泣くこともせず、星々をただただ眺めていた。

◆

俺、ランバ・ラルは愛娘の出生を確かめる為に有給休暇を取っていた。

ダイクン家が支援していた孤児院は、彼の暗殺と同時に支援が打ち切られた事で閉鎖

されてしまっており、その関係者を探すのに四苦八苦する羽目となつてしまつた。それでも自分の過去を知りたいとダーク・コロニーまで付いてきてしまつた愛娘の為に調査を続ける。

当時の院長はザビ派とダイクン派の抗争の際にサイド3から逃げてしまつていた。見つける事ができたのは職員の一人、彼女はカナリアの事をよく知つていた。

以下の話の信憑性は定かではない。

元々カナリアは運送業者から手渡された赤子であつたとの事だ。その運送業者の間から聞いた話では、運送業務中にSOS信号が発せられている事に気付いた為、とりあえず信号の発生源に近付いてみると無重力空間を宇宙服が漂つていたのでという。見た感じ、中身はない。だが、どうせ立ち寄つたのだからと拾い上げてみれば、なんと中には赤子が入つていたので。

しかし男は運送業務に明け暮れる日々を送つており、一ヶ所に留まり続けることもできな

きない。自分の生活だけで精一杯だつた彼は、赤子を孤児院に預けることを決める。

当時の事件を追いかける。

航行時の事故は珍しくもない頻度で起きている為、特定する事は難しい。

それでも、それらしい人物を見つけることができた。

カナリアの両親は特筆することも無い一般人だった。

日頃から貧困に喘いでおり、当時、自活できるようになったばかりのサイド3への移住を決めた矢先の出来事だった。

俺は——この結果を、愛娘に伝えるべきか悩んだ。

確かな信憑性はない。であればこそ、必ずしも伝える必要はない。

……それに、カナリアにちゃんとした親がいた事実を伝えるのは、なんとなく嫌だった。

彼女の親としての自負がある。引き取ってから愛情を込めてきた自信がある。

俺は娘を愛している。故に、伝えるのが、嫌だった。

しかしだ。愛娘を想えばこそ、調べた結果は伝えるべきだとも考える。

ドズルに預けた愛娘がギレンに連れ去られたと聞いた時は、思わず鳩尾にパンチを入れた。

しかし官邸で不自由のない生活を送るカナリアを見て、とりあえず溜飲を下げた後で「これは間違っているかも知れない」と但し書きをした上で彼女の出生について調べた事を伝える。

カナリアは、彼女には珍しく、黙って話を聞いていた。

全てを伝え終わった時、

彼女が先ず最初に口にした言葉は「お父さん」だった。

「私ね、今、すつごく幸せだよ」

溢れそうになる涙を娘に見られたくなかったから、

俺は力いっぱい娘を抱き締めた。

俺のポケットから、封筒が落ちる。

封は切られていない。毎月のように酒場エデンに届けられる彼女の家族からの手紙だ。キャスバルとアルテイシアの手紙は、アストライアが亡くなってからも続けられていた。

これは、その手紙だった。

送り主の名は、セイラ・マス。アルテイシア・ソム・ダイクンの今の名前だ。

書かれていたのは、エドワウ・マスの訃報。

つまり、キャスバル・レム・ダイクンが亡くなった事を伝える手紙であった。

## 16. 見捨てられないから家族なのです。

父であるジオン・ズム・ダイクンが暗殺されてから三年余り、僕は十三歳になる。妹は十歳になった。

ラル家の当主であるジンバ・ラルと共に地球に亡命した僕達は、地球の資産家であったテアボロ・マスのお世話になっている。

資産家であるテアボロには、家庭がなかった。子供ができない内に妻に先立たれてしまった彼は事業の成功を生き甲斐にしていた。人生の大半を仕事に費やした彼は、僕達を受け入れる事で人生観が変わったと述べている。特に妹のアルテイシア……今はセイラ・マスと名を改めた彼女の存在は、テアボロにとっては、それはもう可愛かったに違いなかった。

テアボロは良い人だと思う。父に会いに来た多くの政界人よりも印象が良い。

もし此処にカナリアが居れば、恰幅の良い彼のお腹に飛び込んで、そのお腹の弾力を楽しんでいた姿が容易く想像できる。

彼女は今、元気にしているだろうか。

まあ、ランバとドズルなら悪いようにはしないとと思うのだが……



同行人であるジンバ・ラルは、相変わらずだ。

ジオン・ズム・ダイクンの代弁者を騙り、ジオン共和国——今はジオン公国か、その代表者へと返り咲く事を夢見ている。

厄介なのは、ジンバは自らが思想の殉教者だと思い込んでいる節がある事だ。

僕達を復讐者に仕立てあげる事が、まるで自らの使命であるかのように思い込んでい

る。  
そんな怨讐にも似た念が見て取れてしまうので、彼の話も、まともに聞こうとする気が起きなかった。実際、自分で父の著書を読んでもみると——全くの別だとは言わないが、彼の解釈によつて捻じ曲げられた点が多く見られた。テアポロにも話を聞けば、彼は微妙な顔を浮かべた後で「これは私が勝手に思っていることだが」と前置きした上で日々、豪邸の下で増え続ける難民キャンプを眺めながら「君のお父さんは、このような光景が広がるのを少しでも抑えたかったんじゃないだろうか」と言っていた。

ジンバはよくニュータイプという単語を使っている。

ニュータイプと絡める事で宇宙で生活するスペースノイドの優位性を語り、アースノイドと比べて優良な人種であると訴えた。不完全な言葉による相互理解を超えて、誤解なく互いを理解できる新人類の可能性こそがニュータイプである。というような彼の熱弁が僕の心に響く事はない。宇宙に住んでいる程度の事でニュータイプの可能性に

触れられるのであれば、目の前のジンバが僕の思っている事を理解できないはずもない。それに妹と僕は、互いを思いやれるし、お互いに考えている事もある程度なら分かる。

その程度の事であれば、本当に相手を思いやる心を持っていれば、少なからず分かるものだ。

相手に共感する。という意味であれば、難民キャンプでボランティア活動を続ける妹こそがニュータイプになる。

あとはまあ、ジンバの言を鵜呑みにするとして、それで思い当たる人物が問題であった。

ヒヨコ頭のクソガキ。人類が進化した結果が、あんな悪戯好きのクソガキとか救いがないにも程がある。数億人のカナリアだと？ まじで勘弁してくれ、想像しただけで寝込んでしまいそうだ。彼女が特別であることは認めるが、あんなものに人類の可能性を背負わせるとか正気の沙汰ではない。もし神が居るのであれば、せめてもっとマシなものを用意してくれ。あんなクソガキに世界の舵取りを任せられるか。もしそうなった時は僕は世界に叛逆する、復讐のキャスバルだ。

あれは人類の革新というんじゃない、小悪魔と呼ぶんだ。

彼の頭の中では僕達の父を殺したのはザビ家の連中ということになっているが、その

話も怪しいものだ。

ジンバが口にするのは状況証拠ばかりで、确实といえる証拠がひとつもなかった。それに僕は父には余り、良い印象を持っていない。父を殺されたことに思うことはあるし、父の名があるからこそ、サイド3を追い出されても良い暮らしができていた自覚はある。それでも僕達の物心が付いた時には父は仕事人間となっており、ほとんど会話をしたことがなかった。

だから、妹の人生をなげうってまで、父の復讐をしたいとは思えない。

心残りには、あの小悪魔。不本意だが、彼女もまた僕達の家族であり、小憎たらしい妹の一人だ。

可愛くはない、僕の可愛い妹はアルテイシアだけだ。だが、守るべき妹の一人にカナリアも含めてやっても良いとは思っている。いずれ、カナリアも地球に呼んで、家族三人で過ごせる日が来れば良い。カナリアならきつとテアポロも気に入ってくれると思うし、カナリアと一緒にならアルテイシアに寂しい想いをさせずに済む。

ジンバだけは厄介だが……ランバに頼んで、カナリアを地球まで送り届けてくれた時でも彼を引き取って貰えないだろうか？

まあ不自由に思う事も多々あるが、こんな日が何時までも続けば良いと思っている。

このまま、何事もなく、地球で大人しくしていれば、ザビ家の連中も僕達を殺したい

とは思わないはずだ。

そこまで考えて僕がジンバの話に付き合っているのは、

僕が目を離れた隙にジンバが余計な事をアルテイシアに吹き込もうとする為だ。

カナリアがジンバを嫌っていた理由がよくわかる。

テアボロも彼には良い顔をしていない。本当に厄介者だ。

とある日の事だ。アルテイシアが熱を出した。

ジンバの手前勝手な思想話を打ち切って、僕はアルテイシアの看病をする。

果物ナイフでリングをウサギさんカットで切つてやる。

「ウサギつてまるでカナリアみたいね」

風邪で赤くした顔でそんな事を呟く妹に「アレはそんな可愛いもんじゃないだろ」と素っ気なく返す。

「いいえ、ウサギよ。だって彼女、ウサギみたいに何時もぴよんぴよん跳ねてる」

「……ああ、忙しない奴だったな」

リングを切り終えた後、僕は彼女が寝付くまでの間で手紙を書くことにした。

母のアストライアは日に日に弱っているようだ。その事をアルテイシアは悲しんでいたけども、あの塔を脱出する時の別れで全てを察していた僕は来るべき時が来たかといった感じだった。正直、会いに行きたい。でも、それが出来ないことは理解してい

る。サイド3に残したカナリアが毎週のように彼女の見舞いに行っている事だけは、サイド3にカナリアを残してきて良かったと思える唯一の事だった。

母が亡くなった後、カナリアには地球に来るようにと手紙に書いた。

アルテイシアが寂しがつている、と。

——エドワウが素直になつたら考えてあげても良いよ。

僕はカナリアからの手紙を思わず、破り捨てそうになつた。

アルテイシアに止められなかつたら、そのまま燃やしていたところだ。

返事は、誤魔化されたままで。

その日、僕はずつとアルテイシアの部屋に居た。

妹に夕食を食べさせた後、身体を拭いたり、歯磨きをさせた後にアルテイシアの様態が急変する。

アルテイシアの熱が急に上がり、すぐに医者を呼ぶ事態になつた。

医師の診断では、サハラ熱とのことだ。

あまり深刻ではないというのが医師の見立て。ちゃんとした処置を続ければ、大丈夫との事だ。

僕は朝まで妹の看病をすると名乗り出て、ひとまず解散となつた。

真夜中、書齋から適当な書籍を引き抜いた僕は薄暗がりの中で活字に目を通す。

外で犬が吠えている。五月蠅いな、アルテイシアが起きなければ良いのだが……キャワン！ という犬の悲鳴が上がり、そのまま鳴き止んだ。

……何が起きたんだ？ と窓から外を見下ろした時、突如として銃声が鳴り響いた。

この時の僕にはまだ、分からない事だが——ザビ家の者が刺客を送り込んできた。

僕はアルテイシアを守る為に必死で屋敷内を駆け回り、反撃して、なんとか九死に一生を得る。

全身をミイラ男のように包帯で巻かれたテアポロの話によれば、ザビ家の手先との事。ジンバ・ラルがアナハイム社と接触した為にテアポロも巻き込まれて、屋敷の中にいるほとんどの人間が銃器によって撃ち殺された。……当時、サハラ熱を患っていたアルテイシアには分からなかったかも知れないが僕には分かった。襲撃犯の狙いはジンバ・ラルだけではない。テアポロの生死確認はしていない癖に、執拗に僕とアルテイシアを殺そうとしてきた。

ダイクンの遺児である僕達も標的にされていた。

ドズルは信用できる。でもザビ家を信用する事はできないと思ひ知らされた一件だ。

父の血を引き継ぐ以上、僕達はこれから先もなにかと理由を付けて狙われ続ける事になるはずだ。今回のように何かの事件に巻き込まれる形でも、事故死と見せかける事ができる機会があれば、積極的に命を狙われる立場にある。

ザビ家、もしくはザビ派の連中にとつて、僕達は消し去りたい存在だった。僕には力が必要だ。今のままでは守るべき存在を守れない。

サイド5のルウムにあるテキサス・コロニーに引越す時、そこでの生活。注意深く周囲を観察すれば、何時も僕達の事を見張っている影がある事に気付くことができた。……結果的にカナリアを呼び出さなくて良かった。父の血を継いでいる僕達は刺客の目から逃れる事はできないけど、父と血縁のない彼女なら僕達のように刺客に怯える事もない。

テキサス・コロニーで息を潜めながら過ごす毎日、僕は妹達を守るだけの力を得る機会を虎視眈々と狙っていた。

ジンバ・ラルの暗殺が起きてから二年、僕は十五歳になる。

母のアストライアが亡くなってから一年が過ぎる。これから先も刺客に怯える毎日を過ごし、鬱屈した想いを抱えて生きて行かなくてはならないのかと辟易していた頃。黒猫のルシファーも喪ったアルテイシアが、名前のない墓石を前に母の墓参りに行きたいと言った。この頃の彼女も憔悴しきっており、僕達は心身共に憔悴し切っていた。生きる目的のない人生、眠るアルテイシアの口からアストライアとカナリアの名が紡がれる頻度が増え続けている。僕も、アルテイシアも、限界が近づいていた。

だから僕は自分の命を犠牲に、テキサス・コロニーからの脱出を試みる。

何かをしようという訳でもない。

検閲に引っかけたりそんな文章で手紙に墓参りをしたい事、近々にテキサス・コロニーから出る旨を書いておいた。

事のついでのようにルウムムの学校に行つて、勉強をしたい事も書いた。

「ええっ!!? なんで持つて行つちやいけないんだい!!? 弾なんて入つてないし、持つてすらいらないじゃないか!」

テキサス・コロニーから出航する時、ジオン公国の士官学校に受かつた少年が手荷物検査の職員に声を荒らげている。

彼の名前はシャア・アズナブル。

テキサス・コロニーに來た後で出來た友人で、僕と顔と声が瓜二つの生き写しのような姿をしている。

そんな彼は馬鹿な事に骨董品の古式拳銃を家から持ち出しており、銃弾を撃ちだす機構が死んでいる為、殺傷能力もないのだが……そんなことは調べてみないと分からない。更には彼の好物である包装紙に包まれた羊羹までもが検閲に引っかけたり、爆発物か判別する為の成分分析が必要となつてしまつた。

なにをバカな事をしてるんだ。と思う僕の隣で泣き叫ぶ彼。

どうやら士官学校の入学手続きに遅れると、大きな失点になつてしまうようだ。



そんな彼に、大きく溜息を零す。

「ちよつといい考えがある」

半分は彼の為、もう半分は自分の為。

何事もなければそれでよし。仮に何か起きたとしても、それは僕のせいじゃない。乗り込んだ人間を、ちゃんと確認しなかった相手が悪いのだと考えた。

服装と手荷物を入れ替える。

手荷物検査に引つかかった彼は、エドワウ・マスとしてテキサス・コロニーから旅立った。

ふと手渡された鞆の中身を確認すると、そのまま入学手続きの書類が入っていた。

「……これでは結局、入学手続きができないではないか」

本当に慌ただしい友人の馬鹿さ加減に呆れ果てる。

さて、どうやってサイド3で落ち合うべきか。

予定表を確認し、どう考えても期限内には間に合わない事を知って失笑する。

「失点するのがお似合いだよ」

そう呟いた時、ドッキングベイにある大型の液晶に旅客船のひとつが爆発したニュースが流れる。

ジオン行きの便。これによって百名近くの間人が死んだ。怯えはなかった、ジンバ・

ラル暗殺事件の時に僕はアルテイシアを守る為に一人の人間を殺してしまっている。ザビ家の連中はここまでののか……僕のせいかも知れない。でも、僕が殺した訳ではない。僕が動いたせいで死んだ命はあつたのだとしても、あの船に乗っていた人を殺す判断を下し、実行したのは僕ではない。ジンバ・ラルの時も殺したかつた訳じゃない。殺さなければ殺されていた。僕だけならまだしも、アルテイシアも殺されていた。だから殺さざるを得なかつただけだ。

ああ、でも、シヤア・アズナブル。彼に関しては、どうだろうか？

死ぬかも知れない死地に、何も知らない彼を送り込んだのは僕だ。僕が死ぬと命じて、彼は死んだ。

そう、言い換える事もできるのかも知れない。

「力が欲しいな……カナリア。僕には、皆を守るだけの力がない……」

その後で僕がシヤア・アズナブルに成り代わつたのは、刺客に怯える毎日に辟易していたせいかも知れない。

彼を殺してしまった贖罪の意味も込められていたのかも知れない。ザビ家を恨む気持ちもある。こんな思いをさせ続けて来たザビ家に復讐したいという気持ちはある。でも、それが目的ではなかつたはずだ。

もう、僕には自分の本心がよく分らない。

言語化できないこの想いすらもニュータイプは汲み取ってくれるのだろうか。

……ニュータイプはそんなに万能じゃない。

少なくとも、彼女はそうではなかった。

「会いたいな、カナリア」

別に誰かに救いを求めている訳じゃない。

心を許せる誰かに会いたかった。

アルテイシアに頼る訳にはいかなかったから、他に心を許せる相手となれば必然的に彼女になる。

あの頃に戻りたい。と、強く想っている自分がある。

弱くなった自分を自覚する。

## 17. 人付き合いは難しいものです。

ダイクンの遺児は殺さなければならぬ。

そうしなければ、ダイクン派の人間が息を吹き返して、再びジオン公国は内乱の災禍に陥る事になる。

そんな余力は今のジオン公国にはない。

故に、キャスバル・レム・ダイクンは確実に葬らなければならなかった。

ジオン公国を思えばこそ、だ。

次兄のサスロも内乱を恐れて、ダイクンの遺児を葬る機会を窺っていた。

「だから殺した、と」

まあ判断は悪くはない。と長兄のギレンが呟いた。

此処は首都バンチの官邸にある執務室。キャスバルが乗る旅客機を爆破して少しした後の事、呼び出しを受けた私は入り口の前で立たされている。

紫色のマスクで口元を隠す。だが、と口にする長兄に警戒心を高めた。

「旅客機を落とすのは、やり過ぎではなかったのか？」

「もし仮にダイクンの遺児がこの公国に足を踏み入れることを考えれば、精々百名を超

えない程度の犠牲は少ないと思えますが？」

「その計算は間違つてはない。間違つてはいないが、貴様が謀略に巻き込んだのは民間人だ」

ギレンは、咎めるように私を睨み付ける。

「確かに為政者は人を数字で見なければならぬ時がある。私情を挟んでは的確な判断ができなくなる為だ。冷徹にならなくては事を為す事はできまい」

「ええ、ですの……」

「私は……キシリア、時と場合と場所を選べと言っているのだ」

ギレンは大きく息を吐き出した後、トントンと指先で机を叩いてみせる。

「祖国を守る、大義を為す。その為に私は万を超える将兵に死ねと命じよう。必要とあらば、億を超える民間人を殺せと命じる覚悟もある」

しかし、しかしだ。とギレンは目を伏せた後、薄く開いた目で私を見据える。

「私は謀略の巻き添えで民間人を百人も犠牲にする策を命じる事はない」

「……兄上も、お優しいことで」

「もつとスマートにやれと言っている。国民から血税を搾り取るのが為政者の役目であれば、国民を慰撫するのもまた、為政者の役目なのだよ」

歯を、食い縛る。拳を握り締める。

でも感情は表に出さないように、涼しい顔で笑みを浮かべる。

キヤスバルは今、確実に殺しておくべきだったのだ。

あの逃げ場のない旅客機の中で、万が一も起こさぬ為に。

それを臆病と罵られる事はあっても、判断を間違えたとは思っていない。

ジオン公国の為に、兄上と父上の為に、これは慎重に事を推し進めた結果なのだ。



「難しいな」

キシリアを部屋から返して数分後、執務室に一人。愚痴る。

最近、妹が増長を始めている。裏でコソコソと動くだけならまだしも国家を左右し兼ねない事にも、私は勿論、父にさえも相談せずに独断で行動するようになっていた。目を親指と人差し指を抑えてやれば、手元に珈琲とも呼べない何かが置かれる。

隣を見ると、ヒヨコ頭の少女が私のことを見上げていた。

「……何時から居た？」

「少し前から、珈琲を挽いて淹れる程度の時間はあったよ」

ふむ、と珈琲豆の戸棚の入った方を見れば、珈琲を煎れた跡がある。

手元には大量の書類、どうやら無心で書類整理を行っていたようだ。

「……それで、その衣装は？」

「メイド服。セシリアさんが用意してくれました」

似合ってる？ と、その場で回る少女を見て、無視を決め込んだ。

珈琲とも呼べない何かを啜る。

「甘い、な」

「難しい顔をしている時は、甘い方が良いんだよ」

「……私は、難しい顔をしているか？」

「近頃は、ずっと。その内、眉間の皺が取れなくなるよ」

言われて、眉間を指で触れる。

するとノックを三回、入れ。と私が言えば、扉が開け放たれた。

金色の髪、見習い秘書のセシリア・アイリーンだ。

「失礼します。ギレン閣下、此処にカナリアはいらっしゃいませんでしたか？」

「ああ、それなら……」

つい先程まで隣に居たはずのヒヨコ頭の姿がない。更に視線を椅子に座る自分の背後に向ければ、メイド服のスカートを隠し切れていないカナリアの姿があった。

「やっぱり、ここに居ましたね！ もう、貴女も一端の侍女を名乗るなら礼儀作法くらいは身に付けなければなりません！」

「やだ、面白くない！ セシリアの話、つまんない！」

「そんなことでギレン閣下の侍女が務まるとお思いですか!？」

「私、ギレンのメイドになるつもりないから!」

「閣下とお呼びなさい!」

「ギレン閣下!」

んべー、と舌を出した後、上手いことセシリアの脇を擦り抜けて部屋の外へと出て行ってしまった。

そんな二人のやり取りを見届けた後、書類のひとつを手取る。

「……………これは?」

「ああ、ツイマッド社のMS開発許可の申請ですね。何処から聞きつけたのか……………ジオニック社が我らに鼻肩されているのを見て、ツイマッド社も次世代兵器開発の事業に参戦させて欲しいみたいですよ」

「ふむ。商圏はサイド3に限定。機密を守るのであれば、構わないが……………」

調べてくれるか。と問い掛ければ、仰せのままに。とセシリアが頭を下げる。

「でも、先にカナリアを躱してからです! あの子ったらちっこい癖に素早いし、上手いこと避けるし……………ああもう!」

ドンドンと足音を立て、執務室を出る彼女の背中を見届ける。

珍しいものを見た。と笑みを深めて、甘ったるい珈琲を啜って次の書類を手を取っ



た。

◆ キシリアの事は、また後で何か手を打つことにしよう。

「……どうしてこうなった」

ニュータイプ研究所の一室にて、頭を抱える。

私の名はクルスト・モーゼス。脳科学を専門にする研究者だ。ニュータイプ研究所が稼働にするに当たって駆り出された研究者の一人が私であり、所長のフラナガン・ロム博士の下で働いている。

はずなのだが、肝心のニュータイプと目される少女の素体が此処にはなかった。

「本人が居ないのに、何を研究しろというのだ……!」

人類の革新として最も可能性が高いとされる人物が此処にはおらず、代わりに彼女のクローンは居るがまだ赤子でまともな研究もできない。

「モーゼス君。君もこっちに来てBBの子守りを手伝いたまえ」

「私は託児所に転勤してきたつもりはないんだぞ!」

やれやれ。とフラナガンは困った風に肩を竦めた後、ガラガラを片手にクローンの元へ赴いた。

……本当に私は、此処に何の研究をしに来ているのだ。

設備だけは整っている為、脳科学の研究を続けることは出来るのだが——それでは、ニュータイプという御題目で此処に來た意味がない。まさかBBが研究に耐えられる年になるまで待つとか言い出すのではないだろうな。元よりニュータイプなんてものは机上の空論、まだ何も実証されていないものに十年以上も待たされてたまるか！

「バンツ！」と机を叩いた時、間が悪く眼鏡を掛けた女性職員が部屋に入ってきてしまった。

「……なにかね？」

「あ、あのう……キシリア機関の者がフラナガン所長にお届け物があると……」

「キシリア機関？ そんなもの受け取ってしまえば良からう」

「いえ、それがですね……」

女性職員は言い淀んだ後におずおずと告げる。

「人、なんです」

「……なんだって？」

「人が、届けられました」

私は、BBをあやしているフラナガンの元へと駆け出した。

「入るぞ、フラナガン！」

「静かにしろ……BBが驚くだろう」

「……お前はもう研究者を止めて、彼女の父親にでもなった方が良いのではないか？」  
そんなことよりもだ。と私が話を切り出せば、フラナガンは眉間に皺を寄せながら耳を傾ける。

「キシリア機関の者から届け物が来ている」

「おお、そうか。今日だったか」

「……何が届けられたんだ？」

言っていないなかったかな。と彼は惚けるように顎を撫でてから答える。

「ニュータイプの可能性がある人物が今日、届けられる事になっていたんだよ」

「そういうことは……ッ！」

思わず、怒鳴りつけようとした時「えっ……えう……」とクローンの愚図る声が聞こえたので、

「……先に言っておいてもらわないと困る、フラナガン所長」

と精一杯に声量を抑えて睨み付ける。

しかし、まあ、これで本格的にニュータイプ研究所として稼働できる訳だ。長かった、実に長かった。転動してからまだ数ヶ月程度の話だが、それでも丸一年以上が流れてしまったのかと思えるほどに長かった。先程の眼鏡の女性研究員も「まだ独身なのに育児がどんどん上手くなる」って嘆いていたほどだ。

調べたい事は山ほどにある。

ダーク・コロニーから送られてくるプロト・ゼロのデータは、実に興味深いものであり、空間認識能力が冴抜けているのは勿論の事、乗っている機体の調子すらも計算して動いているのが分かる。実際、彼女が乗った後は、彼女の指摘で整備不良が多数発見されているし、不自然に負荷がかかっている箇所の特定までしているとの事だ。

そんなことをされてしまったのは、彼女の正体が如何に十歳程度の小娘であったとしてもテストパイロットとして起用したい気持ちには分かる。

ちなみにプロト・ゼロの本名がカナリアであることは研究所に所属する全ての人間が知っている。

何故ならば、フラナガンがプロト・ゼロの名を呼ぶときにカナリアと口になっているのだ。わざわざ偽名にしている意味を考えるんだ、フラナガン。その優れた頭脳を少しでも良いから一般教養に向けるべきだと私は進言したい。

さておき、表に待たせているニュータイプ候補生を早速、研究所に迎え入れようではないか。

「モーゼス君。風呂を沸かして来たまえ。その眼鏡の君は空いている部屋を片付けて、とりあえずベッドの準備だけしておきなさい」

フラナガンは、ガラガラを片手にゆっくりと研究所の入り口に歩を進める。

「……フラナガン所長、この研究所が何の為にあるのか分かっておいでで？」  
そんな彼の背中に思わず、問い掛ける。

「言われずとも分かっているよ。人類の革新、ニュータイプの可能性を確認するのが当面の目的」

だが、と彼は半身で私を見て続ける。

「今回、研究所に来るのは少女なのだ。そして私はカナリア君にレディの扱いというのは叩き込まれている、安心したまえ」

「……そのカナリアというのは十歳の少女のはずでは？」

「新たな知見を得るのに、相手の年齢も肩書きも関係ない。よく覚えておくのだな」

「……………いや、限度がある。承服しかねる」

「では、技術士官として命じる。君よりも私の方が階級が上だ、上官からの命令に従事せよ」

納得が、できん。できん、が軍に所属する以上、上官の命令は絶対だ。

私は、澁々と研究所内にある生活空間に備え付けられた風呂を沸かしに赴くのであった。

まあ、良い。明日からは試したいことが山ほどにある。

ニュータイプ研究所の記念すべきニュータイプ被験者一号の名は、マリオン・ウエル

チ。

まだ九歳の少女であつた。

## 18. ちやんとお勉強もしていますよ！

キヤスバル・レム・ダイクンの訃報を聞いた時、

衝撃的だったのは確かなんだけど、不思議と思っていたよりも悲しく感じなかった。

それは彼を喪ったという自覚が薄かっただけなのか。

少なくとも、涙が零れ落ちる事はなかった。

機密を知った私は、機密保持の意味を込めて、首都官邸で日常を過ごしている。

とはいえだ。お父さんは頻繁に会いに来てくれるし、ドズルもよく顔を見せてくれた。ダーク・コロニーの研究者からは早く帰ってきて欲しいと言われているみたいなんだけど、たぶんそれって機体のテストをして欲しいって意味だよな？

ま、良いんだけど。

私が11歳の時にダーク・コロニーでは、それまで人型機動兵器開発における最大の問題点とされていた核融合炉の小型化に成功したようだ。ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉というよく分からない名前なんだけど、ドズルが凄いつて言っていたので、兎に角、革新的で凄いい発明なんだってことは分かる。流体パルスシステムとか、AMB ACシステムとか、なんだかよく分からない単語がたくさん出て来たけど、私が乗って

いた時と比べて全くの別物になってるのはわかった。

乗りたい！ って私が言ったら、無言でギレンに睨まれた。

……良いじゃん、別に良いじゃん。私が一番、人型ロボットを上手く扱えるんだ！

12歳になった時、ドズルが私の誕生日にモビルスーツのシミュレーターを首都官邸に持って来てくれた。

形式番号がMS-03のヴァッフを飛び越えて、MS-04のブグのデータが入っている。ダーク・コロニーでは、更に新型の開発が進められているようだ。まあ、それも一週間程度で飽きちゃったんだけどね。中に入っているステージはもう全て、ハイスコアを塗り替えちゃったし、完全にランダムにしちゃったり、理不尽な難易度にされると面白くない。

ドズルが顔を合わせる度に新しいステージを用意してくれるけど、それもドズルが帰る前にクリア出来ちゃってやるのがなくなる。

偶にキシリアもシミュレーターに新しいステージを入れてくれるけど、能力試験みたいな内容で面白くなかった。

まあ実際、そんなものだと思うんだけど。一度、私がクリアするとキシリアは満足して、プレイデータを抜き取って帰る。

私はあまり、キシリアの事が好きじゃない。



あの人、私の事を実験動物かなにかだと勘違いしてるっぽい。

今はまだ、なにかをしてくるつもりもないみたいだから、別に良いんだけど。

ギレンに会いに来る人達の方が余程、あくどい人が多いし。

あとはデギンに会いに行く機会も結構ある。

禿頭で中年のおじさん。ドズルやギレンの父親で、ジオン公国の公王。なんと、この国の王様である。

今はもう実権の大半をギレンに譲っているけども、彼が持つ影響力は大きいままだ。

私がかいに行くと、何時も高級菓子を用意してくれるのだ！

あとセシリアは嫌い。セシリアの人柄は嫌いな訳じゃないんだけど、頼まれてもいないのに私の教育係として張り切ってて、それを押し付けてくるのが嫌だった。勉強するのは良いのだけど、侍女としての立ち振る舞いとか、パーティーのマナーとか、そういうのはどうでも良いじゃんって思うのだ。今はギレンに保護されている形になっているけど、何時までも此処に居るつもりはない！

「カナリア、近々外に出かけるぞ」

私が飽き飽きしたシミュレーターでハイスコアを叩き出していると、ギレンが話しかけて来た。

外に出られるのは嬉しいけど、急な話だ。あまり良い意味ではない感じがする。

「ニュータイプ研究所とツイマツト社、どちらが良い?」

そう問いかけてくる彼に「ゴースト・コロニーが良い」って返すと「駄目だ」とすげなく断られた。

まだ試作段階にあるMS-05を見てみたかったんだけどね。

……少し考え込んだ後、注視してギレンの心を読んだ。それからツイマツト社と答える。

「承知した、三日後だ」

そう言うのと彼は記憶媒体の端末を私のシミュレーターに差し込んだ。

……このシミュレーターも、せめて対人ができれば良いんだけどね。機密情報ばかりなので、回線を繋げることができないのは分かるんだけどさ。何かの情報をインストールした後、選択できる機体の中に新しいモビルスーツが増えている。

形式番号EMS-04。正式名称ツダ。ザクとは違う青い外装のMSは、異常なまでに中毒性の高い速度を備えていた。

でも、これは――

「……ねえ、ギレン。これ、おかしいよ」

「ほう、何がだ?」

「私の知識は数年前のだから、今だとわかんないけど……たぶんこれ、機体が耐え切れな

い動きをしてる気がするかな」

実際に乗せてくれるとはつきり分かるよ。と私が言えば、ギレンは顎を撫でながら暫し考え込んだ。

「少し、考える」

「……あれ？ てつきり乗せてくれないと思った」

彼から感じる気配は明らかで、私が兵器開発に関わる事を否定している。

「事情が変わったからな」

ギレンは、それだけを告げると部屋を出て行ってしまった。

とりあえず、私は、このツダを使って、シミュレーターにある全ステージの記録を塗り替える。

今までの半分程度のクリアタイムを見て、こんなチートだよ、チート。と溜息混じりにシミュレーターの電源を落とした。



「ふむ、断られたか。残念だ」

ニュータイプ研究所が本格的に稼働を始めて一年程度が経過している。

マリオン・ウェルチの他にも被験者は次々と送り続けられており、目立つところではクスコ・アルが良い結果を出している。新しく当研究所に配属された技術士官、シムス・

アル・バハロフの主導で開発が進められているサイコ・コミュニケーター（略称：サイコミュ）も悪くない進捗であり、今はマリオンがサイコミュ技術を用いたラジコンを脳波でコントロールできる段階まで研究が進められていた。いずれ、クスコも同じことができるようになるはずだ。

ただニュータイプが発する脳波にも個性があるようで、サイコミュによる操作が苦手な者もいる。その典型例がアルマ・シユテイルナーという少女であり、サイコミュ技術を用いた玩具で遊べない彼女はモビルスーツの戦闘シミュレーターに噛り付いている事が多い。

そんな彼女もダーク・コロニーに所属するパイロットと遜色ないスコアを出しているのだから、驚きである。

「そんな彼女達をも圧倒するスコアを出し続けているのが、最初のニュータイプ。カナリア。マリオンは追い縋っているがな……」

記録によれば、モビルスーツ。当時はモビルワーカーだったか、それに初めて乗った時ですらも自分の意のままに機体を操っていたという話だ。

「もし仮に、それが本当だとすれば……ニュータイプというのは末恐ろしい才能だな」

私は、ニュータイプ候補生の中でも特に成績の良いマリオン・ウエルチを中心に脳波の研究を続けている。

薬物でも投与して、分かりやすい反応を得れば、もっと研究を捗らせることもできるのだが……

「まあ今となつては急ぐ研究でもあるまい。まだ、この能力と技術を活用する方法も見いだせていないのだからな」

一定の成果を出したことでニュータイプ研究所の規模は徐々に大きくなりつつある。

脳波でニュータイプの適性を見分ける手段も確立できている為、ここに来るニュータイプの数も増える。

そうすれば研究は更に捗るようになり、予算は勿論、研究員や職員の増員も承認して貰えるはずだ。

「……所長も、なんだかんだで優秀なのだがな」

B Bの子守りを続ける彼は、ニュータイプ能力が先天的なものか、後天的なものか調べる研究を進めている。

まあ、これらの研究が人類の革新に繋がるかどうかなんて私には分からないし、興味もない。この未知への探求、最先端の技術と知識に触れている今にこそ私は生き甲斐を感じている。

◆ そして、この研究で私、クルスト・モーゼスの名は歴史に刻まれるのだ。

士官学校にも休日はある。外出届を出せば、外に出る事も難しくはない。

暫くズム・シテイを離れる事になる為、その前にと私は末弟のガルマを首都官邸に呼び出した。

扉をノックする音。入れ、と言えば、ガルマがおずおずと部屋に足を踏み入れる。

扉の前で直立する末弟の姿、肩肘が張っていた。

「よく来たな」

「は、はい!」

緊張しているようだ。とりあえず私は末弟を応接用の椅子に座るように促した後、部屋に備えておいた珈琲豆の入った袋を手取る。

「学業、頑張っているようだ。ドズルからも聞いています」

コーヒーミルで豆を挽く、その香りを楽しんだ後で粉をドリッパーに移した。

部屋に備え付けの電気ポットからゆっくりと二人分の湯を注ぎ入れる。

コーヒーカップに白い湯気の立つ黒い液体を移して、大量の砂糖と牛乳を入れた。

「……………」

自分用に淹れた無糖の珈琲はガルマに出し、砂糖入れと牛乳の入った小瓶を添える。

自分は薄茶色の——最早、珈琲とは呼べない別の何かを啜りながら腰を落とす。

「飲め。私、手ずから淹れた珈琲だ」

美味しいぞ。と告げれば、彼は何も入れずに口を付ける。

「苦っ」

思わず、口にした言葉にガルマは気恥ずかしそうに私を見上げた。

そんな末弟の姿に私が鼻で笑ってやれば、ガルマは顔を真っ赤にして一気に珈琲を飲み干すのだった。

さて、揶揄うつもりはなかったのだがな。

とりあえず私も珈琲に口を付けて、珈琲の風味もあつたものではない味に一言零す。

「……甘い」

「ええ……なんで、そんなに砂糖とミルクを入れちゃつたの?」

「疲れている時は目一杯に甘くした方が良いらしいぞ」

そう言い返してやれば「なんだよ、それ」とガルマがはにかんだ。

冗談を言つたつもりはないが、ともあれ緊張は解れたようだ。

さて、伝えたい事がある。しかし、どう伝えれば良いか。

言葉に悩んで視線を落とす。薄茶色の水面に、ヒヨコ頭の少女を思い出す。

最近、彼女は執務室に入ってくる事が多い。

どんな事をされた時に、彼女は喜んでいたか。

セシリアとカナリアの触れ合いを思い返して、彼女が笑顔を浮かべた時の状況を思い

返す。

椅子から立ち上がる。そしてガルマの隣に立った。

不思議そうに私を見つめる末弟の頭を、くしゃりと掻き乱した。

「遅れてしまったが、入学試験の首席合格。よくやったな。今も、特に座学は良い成績だ」

ガルマは顔を真っ赤にした後「きゅ、急に何をするんだ！ 気持ち悪い！」と私の手を振り払って、部屋を飛び出してしまった。

「……ふむ、難しいものだな」

ジンジンとする振り払われた手を見つめる。

珈琲のような何かを飲み干した。牛乳で柔らかくなった甘い味が心に染み入る。



国家間の緊張の高まりつつある中、それでも戦争には届かない。

まだ平穏と呼べるこの時代で、11歳の少女は機械弄りに明け暮れる。社内で破棄されたジャンクを漁り、自分だけのモビルスーツを組み立てる為に日々を費やす。大きさは1メートルを少し超える程度、二足歩行の下半身に操縦席を付けたロボット。彼女が作る二足歩行機体はダーク・コロニーで開発されているモビルスーツを比べれば、お粗末なものだ。



それでも彼女は作り上げつつある。人型と呼べずとも、二足歩行する機動兵器の開発を完成させようとしていた。

ここはツイマツト社、少女の名はミア・ブリンクマン。

将来はツイマツト社を導く有能な技術者になる。と云われる天才少女は、この時はまだ機械弄りが好きなだけの少女であつた。

## 19. 超絶美少女テストパイロットカナリアちゃん

私、ミア・ブリंकマンは少し変わった女の子です。11歳です。

幼い頃からロボットというものが大好きでして、親のPCから盗み見たデータでモビルスーツを見つけた時は胸が躍る想いだった。ミノフスキー博士とイヨネスコ博士が共同開発したミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉の基礎技術は、ジオン公国の方から開示してくれた事もあり、新しい熱核エンジンの開発は順調に進められている。

元々、ツイマツト社は宇宙船の開発を優先していた企業。それだけをして来たって訳じゃないが、エンジンやブースターの開発はお手の物だ。

しかし、ロボット技術に関しては、まだ経験が少ない。地球連邦軍から鹵獲したガンタンの情報は開示されているけども、あれは大型戦車でモビルスーツではない。機体フレームの設計に難航してしまっているのが現状だ。今、装甲に使っている超硬スチール合金の強度不足も指摘されている。

ついでにいうと開発途中の新型エンジンにも問題がある。現状では、一定以上の出力を出すと暴走するという致命的な欠点を持っていた。

ならばリミッターを付けて、ブースターの出力を抑えれば良い。という単純な話にも

ならない。

EMS—04 ヅダの売りは、大出力のエンジンを活用した爆発的な推進力にある。それをなくしてはツダに非ず。逆に言うと、エンジンとブースター以外はジオニック社のザクにも劣る性能なのだ。

地上での歩行は必要最低限、走るよりもブースターで飛び跳ねながら移動する事を想定している。その余りにもピーキーな性能に今も事故が多発しており、完成までは程遠い状況にあった。

しかし、ツイマツト社も此処で退く訳には行かない。

軍事産業に参入してから今日に至るまで、これまで事業で稼いできた資金を全て使い潰してしまっていた。

今はジオン公国に資金援助を求めているが、この話も成果次第で消える話だ。

今日は、そのジオン公国のギレン議長が視察に来る日だ。ツイマツト社の皆がピリピリとしている。

私に、出来る事は何もない。

今日も倉庫でジャンク品を漁り、二足歩行ロボットを組み立てる。

これは下半身だけのロボットで腰の部分に人が乗ることを想定している。だけど姿勢制御のプログラミングが上手くいかなくて、乗ると転ぶか振り落とされてしまうので

ある。まるでツダのようにピーキーなじゃじゃ馬だ、今のままでは乗り手を選ぶどころの話じゃない。

大人は手間のかかる子ほど可愛いというけども……私にはまだ分からない感覚だった。

「はあ……」

「ん〜、浮かない顔をしているね？」

棒付きの飴玉を啜えた黄色い金髪の女の子が急に私の隣に来て、興味深そうに私と二足歩行ロボットを見つめた。

身長は、私よりも少し小さいくらいだ。歳下だろうか？

ひらひらしたものではない動きやすい服装をした彼女は、目の前のロボットを指で差して問い掛ける。

「乗りたいの?」

「ふえっ?」

「乗せてあげよつか?」

先ずは感覚から、と彼女は止める間もなく笑顔で二足歩行ロボットに飛び乗った。

「あ、あの、あぶ、あぶな……」

「うおお!! 思った以上のじゃじゃ馬!! この、この……! どうどうどう……!」

ガツシヤン、ガツシヤンと二足歩行ロボットが勢いよく前後に身を振った後、程なくして揺れが収まっていった。

冷や汗を流しながら力強く操縦桿を握る少女。しかし二足歩行ロボットは今まで見た事もないような安定した優雅な動きで歩みを進める。

彼女は強気に笑顔を浮かべて「どうよ!」と私を見た。

「えっ? えっ、えっ!? なんで歩けてるのっ!?!」

「気合! あと根性! それで世の中の七割程度はなんとかなる!」

それでなんとかならないものは根本が間違っているんだよ。と彼女は答える。

「それで乗るの? 今なら乗れるよ?」

「あ……はい! 乗ります! 乗せてください!」

「ゆ、ゆっくりね! ゆっくり! 本当に危ないから!」

逸る気持ちを抑えながら、恐る恐ると彼女が操る二足歩行ロボットに乗り込んだ。

すっかり掴まっててね。と言われたので、彼女を背中からギュツと抱き締める。行くよ、と言われた。ガツシヤンと動き出すのを肌で感じる。気付けば、閉じていた目を恐る恐ると開けてみる。今までは何も乗せずに歩くことが精一杯で、人を乗せれば立つことすらも難しかった。

それが今、ゆっくりとだけど、地を踏み締めて歩いていた。人を乗せて!

「わあっ!」

私は今、自分が一から作った二足歩行ロボットの上面に乗っているんだ!

「んじや、このままギレンに会いに行こう!」

「えっ?」

「出発進行! 行くぞー!」

「えっ? えっ?」

「動くといけないから大人しくしててねー」

「ええー!?!」

私、今日、顔出しちゃダメだって言われているんですけどー!

心の叫びも虚しく、自分が作った二足歩行ロボットにドナドナと連れ去られる。

今、私が強く抱き締めている小柄な彼女は、カナリアと名乗った。

なんと私よりも年齢が一つ上の12歳である。

落ち着きが、驚くほどにない……!!

いや、平静ではあるんだけど、落ち着かない性格をしていた。

◆

目指す先は試作モビルスーツの格納庫。

私が二足歩行ロボットで逸れたギレンの居る場所に向かえば、私達の姿を見たギレン

は無言で人差し指と親指で目元を押さえた。彼の前に整列するのはスーツ姿や白衣を着たツイマツト社の社員、そしてシミュレーターで見た事がある青い巨兵のツダが佇んでいる。

……私は今日、これに乗れるんだあ。久しぶりの巨大ロボット、モビルスーツの操縦だ。

「ミア、どうして此処に居るんだ!？」

「あ、いえ……それは……」

「ギレン閣下! 彼女、凄いんだよ! これ作っただよ!」

私が新しくできた友達を紹介すると「ほう」とギレンは自らの顎を撫でてミアの顔を見つめた。

「……ギレン閣下、この子供は一体?」

「ああ、それはだな」

ギレンは自分の額を指先で何度か叩いた後、問い掛けた研究員から顔を逸らして告げる。

「プロト・ゼロ、だ」

「……それは、ジオニック社が秘匿しているという……凄腕のテストパイロットの名では?」

「彼女が……その凄腕のテストパイロットだ」

言いたいことは分かる。とギレンは研究員と一向に目を合わせようとしなかった。

私は、二足歩行ロボットをゆつくりと座らせた後、地面に降りて、ギレンの隣に立つて直立不動の敬礼を決める。

「ジオニック社のモビルスーツでテストパイロットをしていたカナリアです！ よろしくお願います！」

ふふん、と鼻を鳴らしてみせた。

私がテストパイロットに来たのだ。早速、ツダを評価しようじゃないか！

ウキウキでコックピットに歩を進めれば、途端にツイマツト社員の皆々様がオドオドとし始める。

……あ、カナリアわかつちやった。これ、ダメなヤツだ。

「やっぱりこれって欠陥が残ったままなの？」

詳しく話を聞く必要がありそうだ。

私の問い掛けに先ず最初に反応したのは、ギレンだ。ギレンは薄く開いた目でツイマツト社の社員を睨み付ける。

社員の一人が言い訳のひとつも口に出そうとした時、先んじてギレンが告げた。

「これ以降の嘘偽りが発覚した場合、その時点でツイマツト社のモビルスーツ開発は永



久に凍結する」

鶴の一声とは、この事か。リーダー格の一人が観念したように肩を落としてポツリ、ポツリとツダの懸念を吐露する。

機体フレームの強度不足は勿論、エンジンにも問題を抱えていることが分かった。

ギレンの判断は早い。この話を聞いた時点で、資金援助の取りやめを決めようと息を吸い込んだ。

「ギレン閣下、ちよつと待って……ください」

でも、それは得策ではない。

何故なら私は、この機体のカタログスペックをシミュレーターを通して知っている。問題が発生しなかった時の数字に嘘がないことは今日のやり取りで分かった。

だから、分かっちゃうのだ。

「シミュレーターの情報に過ぎないけど……私、このツダがちゃんと稼働したらね。ダーク・コロニーに居る皆を一人でやつつけられる自信あるよ」

MS-05ザクとEMS-04ツダには、それだけ隔絶した性能差があった。

「……そこまでか？」

「ガンタンクだっけ？ あれだとザクで十分なんだけど……これからの主力がモビルスーツに変わるなら、その内連邦だってモビルスーツ作るよね？ モビルスーツに勝て

るモビルスーツって必要じゃないの？」

「ザクの高性能化は検討している」

「うーん、私が言いたいのはね。ミノフスキー博士が作ったジェネレーターよりも余程、

凄いいものを作っているんだよ。もちろん、今のままじゃ使えないんだらうけどね」

ツダはザクに勝てるモビルスーツなんだよ。と私が伝える。

ギレンは再び研究員の一人に向き直り「資料」と片手を突き出した。

おずおずと渡されたファイルを受け取り、パラパラと中に目を通す。

「出力1150キロワット、推力58700キログラム……この数字に嘘はないか？」

「は、はい！ ありません！」

ギレンはチラリと私を見つめて来たので、私は小さく頷き返す。

すると彼は顎に手を添えて、再び考え込んでしまった。

現状のザクの出力は899キロワット、推力は40700キログラム。

これを見るだけでも両者の違いは桁外れだし、ここで切り捨ててしまうのは勿体ないと思うんだけど。

稼働時間や現状での完成度を聞いた後、カナリア。とギレンが私の名を呼んだ。

「乗って良いぞ」

「えっ、本当!？」

「ただし、ブースターは吹かすな」

了解。と私は敬礼を取った後で研究員の指示の下で幾つか簡単な動作を取らせて貰った。そして乗ってみた感想を率直に告げる。

「歩くだけならザクの方が絶対に良い」

「何がいけなかった？」

「歩き心地とか動作がぎこちない。その辺りはジオニックの方がずっと良いね。あとザクの方が手先が器用かな？」

関節部に問題がある気がするよ、と答えておいた。

「姿勢制御もあまりから操縦に苦労するね。たぶんこれAMBACもでしょ？」

「綺麗に歩行していたように見えたが？ ザクと遜色ない」

「私の腕が良いおかげなの！ その二足歩行ロボットに乗ってみると私の腕の良さを実感できるよー！」

ギレンはミアをチラリと見た、ヒツと悲鳴を上げるミア。それを受けて、ギレンは目を伏せる。

ゆつくりと視線をツイマットの社員達に戻し、決断を下す。

「元々予定されていた来年のコンペティションまでは支援する」

「あ、ありがとうございます！」

「ただし、そこで……そのカナリアを乗せても良いと思えるモビルスーツを作ることが最低条件だ」

以上だ。とギレンが踵を返したので、私も慌ててギレンの後を追いかけた。

ミアには大きく手を振って、帰りの宇宙船に乗り込んだ。

その数日後、珍しくギレンの方から私を執務室に呼び出した。

メイド服の私。ギレンが言うには、ツイマツト社から名指しで私を派遣して欲しいと要望が来ているようだ。私が乗った時のデータを回収し、検証した結果をツダのプログラムに反映すると劇的に姿勢制御が良くなったという事である。

人気者だな。とギレンは一笑し、定期的にツイマツト社に通っても良いと告げられた。

「今のキシリアにお前は任せられないからな」

どうやら私は、私の知らないところで守られていたらしい。

まあ、なんでも知った気になれるこの特別な力も万能じゃないってことだ。

## 20. イエスロリータ、ノータツチ!

プロト・ゼロ。ことカナリアの情報はキシリア機関を通じて、ニュータイプ研究所にもたらされる。

最近ではツイマツト社に足を運ぶ機会が多いようで、大人顔負けの腕を披露しているとの話だ。モビルスーツ開発は黎明期、皆が皆、経験もない状態からのスタートになる為、この時期はまだ大人も子供も関係ないのかも知れない。しかし、それでも、異彩を放つのがカナリアの存在だ。マリオンやクスコ、アルマが彼女がシミュレーションで出したスコアを抜こうと切磋琢磨するも、カナリアの記録には及ぶ事はない。

やはり、彼女には、彼女にしかない特別な何かを持っているようにしか思えなかった。現状、最高のニュータイプである彼女は、やはり被検体として手に入れない。

私を作り上げたシミュレーターのステージをクリアさせるだけでは物足りない。改めてニュータイプとしての彼女が優秀であると思いき知らされるだけだ。本当ならばシミュレーターだけではなくて、もつと色んな実験に参加させたいのだが——それをフナガンに進言しても動かず、キシリアに進言するもドズルやギレンといった連中が邪魔をする。

何故、カナリアには人類の可能性が詰まっていることが分からないのか。

今、私が調査しているのはニュータイプが何を感じ取って反応しているのか、というものだ。

ニュータイプ能力の中で最も顕著なのが勘の良さである。空間認識能力は勿論、その空間にある情報を瞬時に読み解く能力にも長けていた。瞬時に得られる情報が多ければ、多い程に勘の精度は高くなり、時には相手の心を読んでいるのではないかと思える時もある程だ。シミュレーターのステージの配置も、何かを意図して置いた物が多ければ多い程にニュータイプのプレイヤーは的確に先読みして行動するし、ランダムな情報は無意識に排除する能力も備えている。マリオンは、単純なシミュレーターの腕前は平均よりも少し上といった程度のもではあるが、それでもダーク・コロニーにいるパイロットよりも高いスコアを出せるのは、この優れた勘の良さ。即ち、先読み能力がある為だ。

……実践で培われた豊富な経験と判断力の高さでニュータイプに引けを取らないスコアを叩き出すダーク・コロニーのパイロットも大概おかしい訳だが、そこはまあ今はニュータイプに関係がないので省く事にする。

珈琲を啜り、キーボードを叩いて今日の研究をレポートに纏める。

ニュータイプ同士が対戦した時、高度な先読み合戦が多発する。

ずっとシミュレーターに嘯り付いているアルマとマリオンを戦わせた時、最初の何戦かは、どうか先手を取ろうと牽制合戦が始まった。それが何度も続いた後は、如何に相手に与える情報量を増やすか。という点にシフトした後、相手に与える情報に複数の意味を持たせるといふ数に質を伴わせるようになった。今となつては二人を戦わせると脳を酷使し過ぎてしまう為、日に何度もテストを行う事ができなくなる。

相手の情報を読み取り、読み取らせる。そうして相手の反応を少しでも鈍らせて隙を作る、というのがニュータイプ同士の戦い方であった。

しかし、此処でもカナリアは異質だった。

彼女はシミュレーターをプレイする時、ステージに配置されたギミックの意図を読み取った上で踏み込んでくる事が多々ある。この程度の罠であれば踏み抜いても問題ない、と言わんばかりに猪突猛進のプレイングをするくせに操縦は繊細だった。瞬時に自分が今、置かれている状況を把握する能力に長けており、高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応するというバカの考えなしを実戦レベルに落とし込んでいる。

それでいて不意打ちにもしつかりと対応してくるのが厄介極まりない。

最近ではステージギミックを破壊する事を目的にしているような節さえあるほどだ。

まるで「これが一番早いと思います」と言わんばかりにギミックを突き抜けて、最短距離でゴールを目指してくる。

おかげで欲しい情報が手に入らない時もあつた。

彼女に提供するステージは、如何にして、ギミックを攻略させるのか。という点を重視しなくてはならない。

なんで私は、こんな研究に関係のない所で頭脳を酷使しなくてはならないのだ……! 偶にフラナガンが制作するステージは、ちゃんと真面目に攻略しているのが一層に腹立たしい。そして恥を忍んでフラナガンに助言を請いに行けば「モーゼス君、君はレディの扱いがなつておらんようだな」とすました顔で言ってくるのが更に私を苛立たせる。

そうして彼女から得られた情報を精査するのだが——やはり、彼女は被験者としてニュータイプ研究所に来るべき人間だ。

人間の可能性は、彼女の身体にこそ詰まっているのだ!

とはいえ、今はあるもので研究を続けるしかない。

先日もまた新しくキシリア機関の者によって、新しく被験者が届けられた。

名前は、ペツシエ・モニターニユ。赤髪の少女。カナリアよりもひとつ上の13歳だ。フラナガンが今、研究しているニュータイプ能力の後天的発現の可能性を確かめる為に研究所へと連れて来られた女の子である。その為、彼女はまだニュータイプと呼べるだけの素質を持っていなかった。全くないという程でもないのだが——「なんでまた女性



なのだ？」と私がフラナガンに問い詰めれば「ここに居る被験者は皆、女性ではないか」と返された。

ペツシエはニュータイプとしての素質が低い。

その為、被験者の中では、何をやらせても最下位という成績を残してしまっている。

……フラナガンは近頃、私の集めた資料を持っていく事が多かった。

それはカナリアの過去に関する情報であり「孤児院は……まあ、此処が孤児院みたいなものか」と呟いていた。

あれでちゃんと研究はしている。

サイコミュを用いた玩具のアイデアは、フラナガンが関わっていることも多いのだ。

いずれ、何時の日か、私は人類の可能性を解き明かしてみせるのだ。

……このタイミングでペツシエが来たのは都合が良かった。シミュレーターで他の子に負けて、何時も落ち込んでいる彼女に話しかける。

君も彼女達のようにならないか？ と。

フラナガンが人工的にニュータイプを生み出す研究をするのであれば、私はニュータイプを解明し、外付けでニュータイプの力を得られる手段を探る。幸いにも、この研究所には被験者が残した莫大なデータがあった。それを分析する事でニュータイプの何たるかを解明する。

これは、その一步目だ。

ニュータイプとの戦闘能力を再現したサポートシステムの開発、シミュレーターで他の被験者を倒す事から始める。

◆ 時は流れる、今年で18歳になる。カナリアはもう13歳になっている頃だ。

私は今、シャア・アズナブルとしてジオン公国の士官学校にいる。

もう三年目だ。私が成り代わったシャアとでは瞳の色が違う為、出生を悟られない為にサングラスを常備している。

わざわざ眼底色素異常という診察結果を出して貰った上での話だ。

特に身を入れてきた訳ではないが、学業では首席に近い成績を収めている。

そのおかげで出生がバレる訳にもいかないのにザビ家の末弟であるガルマには絡まれるし、気付けば同室にもなっていた。彼はしきりに立派なザビ家の男になると意気込んでいたが、私から言わせて貰えば、そんな風に周りの目を気にしてばかりな所が坊ちゃんなのだ。

君の兄であるドズルをもっと見習うのだな。

君の歳にはもう少佐として立派に職務に励んでいたし、今は大佐で士官学校の校長を兼任している。

……カナリアの消息は、未だに分かっていない。

私の正体が知られてしまった時、ザビ家が何をしてくるのか分からない為、あまり目立つた行動を取る訳にもいかなかった。私だけが危険に晒されるのであれば、それで良いのだが、テキサス・コロニーに居る妹に手出しされるかも知れないのだ。カナリアには申し訳ないが、私の優先順位はカナリアに会うことよりもアルテイシアの安全の方が上にある。そんな事なので目立つこともできず、ランバ・ラルの行方も掴めていなかった。

ドズルは、人柄は信用できる。しかし、彼も私よりも家族を優先するはずだ。私も、ドズルやランバよりもアルテイシア一人を優先する。

だから、彼がザビ家に所属している以上は私の正体を明かす訳にはいかない。幸いにも、鈍感であった彼は、この三年間で私の正体に気付く事はなかった。

時間は、あつという間に過ぎていったように思える。

ジオン公国と地球連邦政府の間で高まっていく緊張も、まるで他人事のように、血気盛んにジークジオンと拳を突き上げる同級生を冷めた目で見つめていた。ジオン・ズム・ダイクンが望んだ革命は、こんな形じゃなかっただろうに——振り上げた拳の行く先は地球連邦政府にあり、今も国民と駐屯軍の間で小競り合いが起きている。

理想だけで、大義を為すことはできない。そんな事は今時、子供だって知っている事

だ。

最後の実施訓練、目立つのは嫌だった。

だから私は、あえて問題を起こすことで首席をガルマに譲った。

今は目立つかも知れないが、後々の事を考えると今、リスクを背負ってでも為すべき事だ。

翌日の成績発表では、私の思い描いていた通り、私は次席に落ちていた。

「シヤア、居るのか!？」

成績発表された日の事、私が小天体観測センターから公開されている情報を眺めている時の話だ。

私は数日前に、ひと目見て嫌な予感を感じた小天体を見つけた時から観測を続けている。それが今日はずきりとした感覚で分かった為に計算式を打ち込んでみた。その結果、その小天体が首都バンチのコロニー群に突っ込む事が分かった。

計算通りに、行けば、という話だが。あくまでも素人の計算だ。

「どこからこんなデータを？」と部屋に戻って来たガルマが問い掛ける。

「連邦の観測局にアクセスして見つけた」

私がそう言う。「なんだ。じゃ、大丈夫だ」と彼は安堵し、椅子に腰を下ろした。

「観測局がキャッチしていて警報を出していないのなら危険じゃないということだろ

「？」

「そうかな。逆に警報を出しそびれているのなら……これは、重大な失態だぞ？」  
今でさえも公国と連邦の関係は悪い。

何がきっかけで破裂するのか分からず、そのまま戦争に突入する事も考えられた。しかし、彼は軽い調子で「専門家に任せておくさ」と云うと世間話を始める。

まあ、確かに私も考え過ぎたかも知れない。

パソコンの電源を落として、インスタント珈琲を淹れる。

するとガルマが「僕の分も頼む」と言ったので、二人分のカップを取り出した。

砂糖を入れる。スプーンで一杯、二杯、三杯……冷蔵庫から牛乳を取り出し、たつぷりと注ぎ入れたのを手渡す。

「どうぞ」

「ありがとう、シヤア」

ガルマは、受け取ったカップをそのまま口に付ける。

「……………ぶふっ！ ……なんだこれ、激甘じゃないか！」

「くく……………あっはっはっはっはっはっはっ！」

思わず嘖き出したガルマの姿を見て、つい私も笑い声を上げてしまった。

そんな私の態度に機嫌を悪くしてしまったのか、彼は不貞腐れるように私を睨んだ。

「……つたく、君の甘党にはほとほと呆れているよ」

「特別に甘いのが好きな訳ではない。疲れている時は甘くする方が良いと聞いたことがあったんだ」

「疲れている、君が？」

彼は激甘の珈琲を啜ると「あまつ」と改めて呟いた。

「……まるで兄さんと同じことを言うんだな」

「私が、ドズル校長と？」

「ギレン兄さんの方だよ。兄さんも同じことを言っていたんだ」

「……ほうっ？」

ところで、と私は話を切り替える。

「君の実家は豪邸だったね。使用人もさぞかし多いのだろうな」

「なんだい、急に？ ……まあ兄さんが使っている官邸は広いからね。使用人の一人や二人は当然いるよ」

「それなら……幼いヒヨ、金髪の少女とか。居たりしたのかな？」

もしかすると、メイド服を着たと付け加える。

「……シヤア、僕は君の事を尊敬している」

彼は静かに激甘の珈琲の入ったカップを机に置くと、急に真剣な眼差しで私の事を見

つめてきた。

「君が、その……少し特殊な性癖を持っていても、僕は咎めないよ。いや、人類誰しもが、そういった誰にも言えないような想いを胸に抱えているものだど理解している。……僕にだって、胸に秘めているものが……その、だ。……ひとつやふたつくらいは、ある……」

「……君は何を言っているんだ？」

シヤア、と彼は母以外の誰よりも優しい声で語り掛ける。

「手を出すのだけはやめておけ」

「本当に何を勘違いしている？」

その時、ガルマの瞳には強い意志が宿っていた。

か弱い女の子を悪逆非道の輩から何がなんでも守るといふ騎士のように強い目をした一人の男がいる。

「シヤア、僕は真面目なんだぞ！　ちゃんと話を聞くんぞ！」

とりあえず、私は彼の頬を強めに張っておいた。

そんな掛け合いのあつた数日後、卒業式の最中。

小天体が首都パンチのズムシティのあるコロニーに衝突する事故が発生した。

## 21. すれ違い宇宙。

南米、地球連邦軍司令部。ジャブローにて。

今しがた観測局の失態を耳にしたゴツプは、受話器を置いて、豪華な執務椅子に体重を傾ける。

如何に機械といっても、人が管理する以上はヒューマンエラーが発生する。それが言い訳の利く事故であれば、まだ仕方ないと言える。だが、それが初歩的な入力ミスとなれば、頭が痛いものであり、その為に30tの氷塊がジオン公国の首都バンチであるズムシテイに衝突するとなれば、胃に穴が空くなんて話ではない。今回の件で責任を取り、クビを飛ばされるなんてまだ良い方だ。

問題は残された側であり、この後始末を押し付けられる上、引き継ぎもなしに総とつかえされてしまうのである。

懲戒免職で罪を償えるなんて、良い御身分だな。とゴツプは水の入ったペットボトルに手を付ける。

水で舌を潤した後、再び受話器を手に取る。

政府高官の中では、未だにサイド3は統治下にあるという解釈だ。



それ故、想定される暴動に備えて、強襲揚陸艦の派遣。更には軍艦船の随伴も緊急会議で議決されるに違いない。

少なくとも、ズムシテイに駐屯している連邦軍の将兵を守る意味でも派兵する必要はある。

「……ああ、そうだ。私だ。強襲揚陸艦一隻と軍艦を何隻か直ぐに動かせるようにして  
いてくれ。ああ、天体衝突の件だよ」

受話器を戻し、誰を派遣するのが良いかな。と思索する。

テイアンム少将は……まだ荷が重いか。一歩間違えれば、戦争に突入するこの局面。七〇年代軍備増強計画もまだ中途である今、まだ地球連邦軍は戦争する準備が整っていなかった。……正直、戦争に勝利する事だけを考えるのであれば、今すぐにも攻め込むべきではある。しかし地球連邦政府は、あくまでも民主政治。その成り立ちを思うに国家と呼ぶには憚られるが、民衆による選挙を以て連邦議会の議員は選定されている。故に戦争を起こすにも、鶴の一声という訳にはいかない。

それにだ。それが如何に合理的な判断であったとしても戦争は避けるべきだ。このまま冷戦状態を継続していけば、いずれジオン公国は膨大な軍事費を前に自滅する。かつての冷戦でアメリカにマネーゲームを仕掛けられたソ連のように——逆に中途半端なところで軍事費を削るのであれば、ジオン公国を事実上の支配下に置く事も可能だ。

いずれにせよ、時間は連邦に味方をしている。

……自分の派閥から出せるのは、そう多くはない。

交渉の事を考えるとワイアット中将の方が良いが、彼は御世辞にも艦隊運用が得意という訳ではない。万が一の事を考えるとレビル中将、しかしレビルはあの見た目で好戦的などころがある。他に派遣される可能性のある将校と高官を見比べて、自分の派閥から出す将校を選定する。

◆ こういう頭が痛くなる時は、悪い事が重なるものだ。

首都バンチ、ズムシテイに衝突した小天体。

質量30tの氷塊は、農業ブロックの一つを破壊し、集約設備の損傷によって残る二つも機能を停止する。

これにより、ジオン公国の全農業生産力の80分の1が失われる計算となった。元よりジオン公国は、ジオン共和国と名乗った日から経済の締め付けを受けており、その上で宇宙に住む人類の義務として、更なる食糧農産物の納入を求められ続けていた。尤も、食料農産物の納入を増やしたのは、サイド3に限った話ではなく、サイド全てが一律で納入量を増やすように要求されただけの話だ。

しかし地球連邦の怠慢により、計三つの農業ブロックを損失したジオン公国の国民と

しては納得できる話ではない。

そもその話として、今の地球は痩せ細っている。

年々進行する砂漠化に効果的な対策も打てず、地球での生産量は落ち込み続けている。故に地球に住む人類を養う為に、宇宙からの納入量を増やすしかない。この事実をエレズムを提唱し、コントリズムを達成したジオン公国が納得するはずがなかった。議会は熱狂し、民衆は怒声を張り上げる。鉄パイプを片手に駐屯軍へと襲い掛かり、即席のカクテルに火を付けた。

そんな暴動が頻発する中、宇宙では破壊されたブロックの掃海作業に明け暮れる者達がいる。



『エリア30に航路確保しました。小型船舶に限り、通行できます』

『エリア31はまだです。農産物ダストの密度が濃厚で、大型の残骸も浮遊しています』  
目下、掃海作業中。と通信機を片手に持ったガルマが、港湾局と連携を取っている。

この掃海船の艦長はガルマ。そんな彼の手となって、私は船に取り付けられたアームで肅々と残骸の改修業務に明け暮れる。大型の残骸は爆薬を仕掛けた後、爆破で細かくしてから回収し、回収した物は指定された区画にまとめて運び入れた。こういった残骸や農作物もサイド3にとってはリサイクルすべき大切な資源である。

規模に対して、明らかに手が足りておらず、手を休める暇がない。

「外洋より大型船接近！」

そんな折、オペレーターの一人から声上がる。

「ダメだ、停めろ！ まだ作業中だ！」

「交信不能、連邦コード以外受けつけません！」

「なんだって!？」

ガルマとオペレーターの言葉に掃海作業の手を止めた。

接近する大型の強襲揚陸艦と衝突する訳にもいかず、ガルマは横に躲すように指示を出した。強襲揚陸艦は残骸を意にも介さず、ズムシティへと直進を続ける。その光景をガルマは歯を食い縛って見送る。

念入りな事だ。こんなものがなくてもガーディアンパンチの駐屯軍ぐらいはすぐズムシティに移送できるだろうに。

「屈辱だ……! シヤア、何故こうも奴らはでかい顔ができる!？」

「……連邦政府には、サイド3が自分達の統治下であるという矜持があるのさ」

「厚顔無恥も甚だしい！ サイド3はジオン公国が自活できるまで発展させたのだ！」

搾取するしか能がない連中が、自分達の落ち度でサイド3に大被害を与えた癖に……責任を取らないだけでなく、不平不満は力で押さえつけようとかつ！」

熱くなる友人から目を外し、外を見た。人型の巨大ロボットが残骸を集める姿、見た事もない作業機械に声を上げる。

「ガルマ、あれはなんだ!？」

「どうした? ……ああ、あれはモビルワーカーだ」

「モビル……ワーカー……」

彼の話によるとジオニックス社が開発中の人型汎用作業機械との話である。本来は月面開発の為に作られた作業機械なのだが、汎用と名が付くだけあって、こんな風に残骸の掃海作業にも運用する事ができるようだ。

「ドズル兄さんが、開発の最高責任者なんだ」

「……ドズル………校長か」

懐かしく、今は遠い名を想起しながら人型の作業機械が動くのを見つめる。

「シヤア、これはトップシークレットだ。君だけに言う」

そんな私の郷愁も露知らず、彼は聞いてもいない事を口にする。

モビルワーカーは軍事に転用が可能である事、故に軍人であるドズルが監督をしてる事。そしてジオン公国は今、モビルワーカーの開発に御執心だという事。この三つを聞いた私は、戦争の臭いを感じ取った。そうか、戦争が起こるのか。とモビルワーカーを観察する。あんなものが艦隊戦に役に立つとは思えないが……しかし、あのドズルとラ

ンバの二人が居て、無意味なものを作るとも考えにくかった。

モビルワーカー以外にも、とっておきを用意してあるはずだ。

「……………ん、あれは……………」

そんな折、モビルワーカーの一機が私達が乗る掃海船の前まで接近した。

モノアイがガラス越しに私達を見つめる。少し、懐かしい感覚があった。ぼんやりと眺めていると「なんだあつてえ!」とオペレーターが声を荒らげる。それに気を取られた時、モビルワーカーがブースターを吹かせて、掃海船から離れて行ってしまった。

あの感覚は……いや、彼女が此処に居るはずがない。ドズルやランバが、彼女を兵器開発に関わることを許すはずがない。良識がある大人として二人を信じているが故に、考え得る可能性のひとつを振り切る。

たぶん、きつと、気のせいだったのだ。と怒るガルマに意識を戻す。

「どういうつもりだっ!? 誰の為にこういう事態になっていると思ってるんだっ!」  
「どうやら彼は傲慢な連邦の軍艦相手に怒鳴り散らしているようだ。」

◆  
めでーめでーで、こちらカナリア。13歳です。

只今、宇宙での掃海作業中。久しぶりに搭乗するモビルワーカーの感覚を嬉しく思いながら残骸だらけの宇宙を駆け抜ける。数年ぶりに会ったマッシュとオルテガに、誰が

一番多くの残骸を集められるのか。と勝負を挑まれたからにはハリキリガールまっしぐら！ お父さんの制止を無視して、モビルワーカーで運べる大きな残骸を目指す。残骸を手にして嵩む重量すらも利用して、集積場へと次から次にシュートを決め込んだ。トップは私。二位はお父さんと、三位がガイア！ 私は通信機のスイッチを押し込んで、マッシュとオルテガに連絡を取る。

「ねえ？ もうすぐダブルスコア付けられそうだけど大丈夫？」

『こんのお、クソガキめえーっ！』

『ちよつと出だしと場所が悪かったただけだ！』

「ええーっ？ 張り合いがなさすぎるから、二人のスコアを足して勝負する？ 私は構

わないよ？」

『ああん、言つたな!? 子供だからって容赦しねーぞ！』

『すぐに分かせてやらあつ！』

煽るだけ煽って通信を切り、キヤツキヤと笑い声を上げる。

久しぶりに会う気心の知れた相手という事もあって、今日の私はテンション高めだ。大きな網を持つてきたお父さんと協力して、四方に散らばる農作物を回収する。その農作物は、お父さんが残骸とは別の集積場へと持つていった。待つている間、私はまた残骸の掃海に努める。近場に居た掃海船の中に集めた残骸を押し込んで送り出し、また

別の掃海船がチマチマと細かい残骸を回収する姿を見て、また残骸を押し込んだ。そうしているとお父さんが空になった大網を持つてくるので、同じように農作物を回収し、また大量の農作物を抱えたお父さんを見送るのだ。

そんな事を繰り返している内に、奇抜な形をした大型の宇宙船が私達の横を通り過ぎる。

「ねえ、ガイア！ ねえ！」

『……お嬢ちゃんか、急に通信して来やがってなんだ？』

「あれ、なに!? でつかいのが横切っていった！」

『あれは……連邦の強襲揚陸艦だな。あの中に大量の兵隊を詰めてやがるのさ』

「はえー、すつごい大きい……! シミュレーターとは全然違うね！」

『……俺達の住んでいるコロニーはあれとは比べ物にならない程、でかいけどな』

それもそうだ。と私が笑えば、ガイアも小さく笑みを深めて通信を切った。

さて、もつと仕事しないと。そう思つて操縦桿を握り締めると、ふと、なんか懐かしい気配を感じ取った。感覚の訴えるままにモノアイを動かせば、一隻の掃海船がある。なんとなしに近付いてみた。船内を覗き見ようとしてみたけども、流星にモビルワーカー越しでは見るのが難しい。

そんな折にお父さんが戻つて来る気配を感じ取ったから、中を見るのを諦めて父の側



までブースターを吹かした。

『カナリア、どうかしたのか？』

「うん……ちよつと気になっただけ。なんでもないよ」

『そうか。さあ、もう少しだけ気張るぞ』

「うん！ 張り切っちゃうよ！」

通信画面越しにサムズアップを決めれば、お父さんは歯を見せて笑ってくれた。

モバイルワーカーを使った初めての任務は大成功を収める事になる。

ギレンは、これでもつと予算を下ろせる。と、ほんの少しだけ嬉しそうに語っていた。

後日、マツシユとオルテガには行列のできるケーキ屋のロールケーキを買いに行つてもらった。

ダーク・コロニーの皆で食べて、すつごく美味しかった！

## 2.2. 謀ったな!?

ズムシテイに小天体が衝突する一週間前の話。

ジオン公国には資源採掘用として、アステロイド・ベルトからサイド3の宙域内に運び入れた二つの小惑星が存在している。

その内の一つは、後から更に一つの小惑星を結合する事で宇宙要塞としても転用した。これをア・バオア・クーと呼称する。現時点で地球連邦政府は、わざわざ外部から運び入れた資源採掘用の小惑星としか認識しておらず、こうでもしなければ満足に資源も手に入れないとは大変な事だな。と鼻で笑って、重要視をしていなかった。

そんな監視の薄いア・バオア・クーの宙域に、何体ものモビルスーツが運び込まれる。この日はジオン軍にとっては、次世代の量産機を決める重要なコンペティションが開催される事になっている。

ジオニック社が資源運搬用の貨物船を流用して持ち込んだのは、緑色の塗装が特徴的な人型汎用兵器。形式番号MS-05、正式名称はザク。武装には開発途中のヒート・ホークを模した武器の他に、マシンガンとバズーカを模したペイント銃が用意されている。これを計五体分、パイロットにはランバ・ラルを始めとし、ガイア、マッシュユ、オ

ルテガの三人組。そこに新しくダーク・コロニーに配属されたククルス・ドアンが居る。対するツイマツト社が擬装した輸送トラックで持ち込んだのは、青色の塗装が施された人型汎用兵器。形式番号EMS-04、正式名称はツダ。武装はザクと大差はない。違いがあるとすれば、ツダの左肩にはシールドクローが装備されているという点がある程度だ。パイロットの中の一人に、ジャン・リュック・デュバル少尉が居る。

そして、派遣された整備員の一人にミア・プリングマンの姿もあった。

「今回のツダに搭載されている土星エンジンと前回の木星エンジンでは、性能に大きな違いはありません。改良点は、ただひとつ。どれだけ出力を上げても暴走事故を起こすことがなくなった点に尽きます……というよりも一定以上まで出力を上げると、自動的に出力が落ちる構造にしたといった方が正しいですね。これによって、飛躍的に安全性を向上させることができました」

ですが、と彼女は語気を強めて、コックピット席に座る少女に言い聞かせる。

「決して無理はしないでください。私達はツダの機体フレームの強度問題は解決できていません。いや、出来たんです。リミッターを付ける事で出力を抑えれば……しかし、それはザクも一緒。無茶な扱いをすれば、ザクだって自壊します」

今回の戦闘試験では、ザクもまたリミッターの制限を緩めている事をミアは知っていた。

「……それが出来るのは、相手のパイロットもまたエース級だからです。とはいえ……ツダのフレーム強度だって、最初の視察の頃に比べると二割増しです。これ以上は素材の問題だと断言できるところまで持って来たんです。でも、これ以上はありません。より高価な素材に手を出してしまえば、量産機の体裁を保てなくなります」  
今でさえもザクの八割増しのコストが掛かっている。つまり、ツダの生産には、ザクの二倍近いコストを支払っても良いとジオン公国に思わせられる結果を出さなくてはいけなかった。

「既にザクのロールアウトは決まっています。ツダには高性能量産機として生き残る道しかありません。ここで決められるのは、ツダの生産の有無。ザクとツダの生産数です。……デュバル少尉も優秀なパイロットです。しかし、残念ながらダーク・コロニーの練度には敵いません……ツイマツト社の命運は、貴方と共にあります。どうか……月並みの言葉だと思えます。でも、どうか——」

御武運を、と彼女は開いたコックピットから離れた。

子供向けに特注されたパイロットスーツ、その胸元にはツイマツト社のロゴが刻まれている。少女は、少しずつ離れていく友人に親指を立てた後、コックピットのハッチを閉じる。

真つ暗に閉ざされるコックピット。すぐに光が灯り、モニター越しに外の景色が見え

た。

「ミア。私ね、宇宙が好きなんだよ。なんでかな、無重力に漂いながら見る光景が、凄く綺麗に映るんだ」

◆ 先鋒として出た新米のククルス・ドアンが宇宙空間を縦横無尽に駆け抜ける青い影に翻弄されていた。

ドアンも、経験の面ではガイアやランバに劣るが、マツシユとオルテガが相手の時は良い勝負をするようになってきた将来有望なパイロットの一人だ。先の格闘性能試験、飛行性能試験でザクを凌駕する結果を出していたデュバル少尉が拳を握り締める程度には腕が立つ。その彼を、まるで子供でも扱うかのように翻弄し、ワンサイドゲームの様相を見せていた。

ツダが持っていたのは、バズーカを模したペイント弾。分かりやすく狙撃を受けて、ドアンが回避をした所をツダが急加速による接近からのシールドクローでコックピット付近を打ち抜いた。無論、模擬戦である今、シールドクローに攻撃力はない。胸元に大きくピンク色の塗装を受けたところで、最初の戦闘が終わる。

ガイアとオルテガ、マツシユが感心するように頷く中、ランバだけが注意深くツダを睨み付けた。

「なかなかやるな。次は順番的にマッシュユカオルテガか?」

「いや、俺が行く」

言いながらランバがノーマルスーツのヘルメットを被る。

「俺が負けたら、マッシュユとオルテガの二人で戦わせるんだ。性能では、ザクでツダに勝てんよ」

「じゃあ、採用も決まったものか?」

「いや、ツダのコストはザクの1.8倍だ。二体同時に相手にする事が出来て、初めてコストに見合う事になる」

だが、その前に。と彼は自分用に改良をしたザクに足を動かす。

「試さずには、認めてやる事が出来んだ。父として」

マッシュユとオルテガは首を傾げる中、ガイアだけが得心して笑みを深める。

「子って、そんなに良いものかね?」

「お前も子を取ると分かる」

「お嬢ちゃんみたいなのがいたら考えるよ」

「なら無理だな」

「ほう、何故だ?」

うちの子が一番だからな。と告げた彼はコックピットの中に入り、ハッチを閉じる。

「手間がかかる子ほど可愛くなるってのは、本当のようだな」

◆ ガイアは肩を揺らし、ブースターを吹かして子を迎えに行く親の背中を見送った。

「二人目で、もうお父さんなの!?!」

真正面から接近してくるザクにバズーカ砲の銃口を合わせる。

しかし、お父さんは機体を僅かに左右へと揺らす事で、上手く照準を定める事ができない。舌打ちを零す。手に持っていたバズーカをお父さんのザクに投擲し、切断能力のないヒートホークを片手に構えてから相手との距離を詰める。

投げたバズーカを避けるか、受け止めるか——お父さんは姿勢を屈めて、頭突きでいなした。

「上手いなあ、もう!」

衝突する。瞬間、お互いのヒートホークで二度、三度と切り結んだ後、ザクが蹴り上げてきた足をブースターの噴射で回避した。

お互いの距離が離れる。お父さんは、左手にマシンガンを構えて、点よりも面で掃射する。それを宇宙空間で無作為に漂う岩を盾代わりに防ぎ切って、バズーカを回収。気持ちよくマシンガンを撃ち続ける彼の動きを止める為、バズーカを撃って牽制する。お父さんのザクもまたブースターを吹かした。機動戦では、ザクでツダには勝てない……

いや、持久力と安定性では、ザクの機動力はツダを越え得る。

モノアイを動かす。時間にして数秒、モニターに映った物質を脳に叩き込んで周辺情報を一新する。

「お父さんは……ッ!」

宇宙上に存在する岩石同士がぶつかり合いながらツダに襲い掛かった。

それを右へ、左へと機体を動かして回避する。直感——頭上から降り注ぐ、マシンガンの掃射を間一髪で回避した。これがゲリラ戦術、引き出しの多さならお父さんの方が上か……ッ!

目の前の事だけを見てられない。

「だったら……もう、腹を括るしかッ!!」

視野は空間的に捉えて、思考は多角的に、背中にも目を付けるんだ!

ツダに搭載したエンジンへの負荷を軽減する為に、思いついたのは進行上に浮遊する岩石を蹴って推進力の足しにする事だった。お父さんのような相手の本能に訴えかけるような操縦は無理だ。ならば、もっと派手に動き回ってやる! モニターがグルングルンと回る中、的確に岩石を足場に着地し、直線的な機動を描いてお父さんとの距離を詰める。

肉薄する。振り上げたヒートホークの模造品を——手放した。



思考の空白、一瞬の迷い。勢いのまま、ザクの胴体に蹴りを入れる。ここぞとばかりにバーニアをフルスロットル。警報が鳴るのを無視して、その身ごとザクを岩石に叩き付けた！

「……もつと綺麗に勝てたら良かったんだけどね」

距離を取る。最後の一発、残していたペイント弾で岩石に埋まるザクのコックピット部分を撃ち抜いた。

◇

三戦目は、なんとガイアとマツシユ、オルテガの三機で襲い掛かってきた。

流石にエース級が三人も相手となれば、防戦一方。最後は三位一体の連携による攻撃を受けて、一機を撃破。二機目を中破判定まで追い込んだけども、三機目のガイアに隙を突かれて逆に撃破されてしまった。流石に二戦した後に三人相手は酷過ぎると思うんだ！ 私がコックピットの中で文句を宣っていると『ツイマットの隠し玉が、まさかお嬢ちゃんだったとはな』とガイアがオープン回線から通信を掛けてきた。

「三対一とか、どうやっても勝てないに決まってるんじゃない！ バーカバーカ！」

『そう言ってくれるな。俺達の連携はエースパイロットが相手でも通用するのか試してみたかったんだ。お嬢ちゃんはお嬢ちゃん俺達を知る中で最も腕の立つモビルスーツパイロットだからな。それが高性能機に乗っているとすれば、そりやもう機会を逃す訳にはいかない

「……私、一応、このツダの生産をギレンに認めさせる為に来てるんだけど？」

大丈夫だろ、とガイアが無責任に答える。

『既にツダの有用性は示されている。少数の生産になるだろうが——あの機動力は俺達から見ても魅力的だからな。それに兵器つてのは汎用性も大事だが、多様性も重要だ。戦車にも色んな種類があるように、戦闘機が多岐に渡るように、汎用機だからってなんでもかんでも一つの機体に任せるのには限界がある』

「……高性能量産機つて聞いてるけど？」

『そりゃ売り込み方が悪い。高機動量産機だよ、そいつは』

ザクには安定性と操縦性がある。

その為、拡張性が高くて汎用機としては非常に優れた性能を持っていた。元々がモビルワーカーとして開発されていた経緯を持つ為か、作業用としても使い勝手が良いのも優れている点のひとつだ。次世代機が開発されても後方支援に回すことができる。

故にザクは幾ら量産しても腐ることがない利点があった。

対するツダは完全に戦闘用として開発されている。

戦闘用に特化している為、ザクと比べると拡張性や汎用性という面では劣る。操縦性の難度から気軽に後方支援機として扱う事もできず、技術の進歩と共に時代遅れの機体

へと成り下がる弱点を抱えている。今はまだモビルスーツの黎明期。これから先、様々なモビルスーツが開発される事を考えれば、あまり多くの数を発注する事はできない。

しかし、今が黎明期であればこそ、ツダを作り上げたツイマツト社を切り捨てる選択もない。

ツイマツト社が存続するのに困らないだけの数を発注するのが、正しい政治的な判断だ。とガイアが告げる。

『俺達の大將は良い顔しないだろうがな』

「ドズルが？ どうして？」

『軍の偉い人としては信頼性の低い機体とか扱いたくないだろうよ』

「慣れたら難しくないと思うけどね」

『デュバルは難儀していたみたいだな』

ああそうだ、と通信を切る直前にガイアが口を開いた。

『後でパパにごめんなさいってしとけよ』

「……やっぱり、怒ってる？」

『そういう言い方をしてやるな、心配してんだ』

通信が切断される。ツダの中で、私は何度か逡巡した後、通信機のスイッチに手を伸ばした。

「お父さん? ……えつとね、うん。最初はね、ギレンが私を守る為で……ああ、いや。私ね、モビルスーツ。大好きみたいで……うん、うん……あのね、その………わかっている、うん……」

◆ お父さんとの会話は、思っていたよりも長くなってしまった。

時は今、掃海任務を終えた後の話だ。

食堂にて、ガルマは生徒達に取り囲まれていた。

「ガルマさん、僕らは黙っていて良いんですか!」

「このまま連邦に好き勝手にさせて、サイド3が乗っ取られても良いんですか!」

「どうなんですか、ガルマさん!」

士官学校を卒業した直後、准尉の階級を得たばかりの彼は苦境の最中に立たされていた。

卒業生は勿論、士官学校に在籍する生徒達が暴動を起こす寸前の所まで来ている。皆が口にする不満の数々はガルマ自身も思っていた事だけに否定し辛く、彼も感情だけを優先するのであれば、共に決起して連邦軍の兵營を攻撃してやりたいくらいの想いはある。

しかし、だがしかしだ。

そんな事をしてしまつては戦争の引き金になりかねない。

合理的に物事を考えるのであれば、拒否一択。しかし、ガルマを包围する生徒達が目  
が、彼の事を見定めようと目をギラギラと輝かせている事に気付いた。

今、この場で断れば、何かしらの危害を加えられることをガルマは察する。

そうなつてしまつては、兄に報告をすることもできない。

「……そう、だな。僕も、君達の想いには賛同するよ……」

とりあえず、ガルマは事なかれに肯定の意を示す。

今をやり過ぎして、隙を見て兄と連絡を取る。これしかない。

その後は、出来る限り、時間を稼ぐんだ。

「ガルマさんも賛同してくれるようで良かった!」

「実はもう計画は立ててあるんです!」

そういつて彼らは机の上を片付けると、連邦軍兵營の見取り図を広げた。

「決起は今夜!」

「やるならば、早い方が良い」

「先ず私達は——」

「兵器庫を——」

「そのためには——」

してやられた。と気付いた瞬間、視界がぐにやりと歪んだのを感じた。

両肩に手を乗せられて、そのまま椅子に座らせられる。眩暈のする頭で地図を見た。攻撃目標、幾つもある矢印。頭がまともに回転しない。でも、直感的に理解できたことはあった。この作戦は成功しない。皆が語る言葉には希望的観測が余りにも多すぎる。このままでは全員で連邦軍に捕まるのが目に見えていた。それならまだ良い。問題なのは、皆が過激な行動に出る事に躊躇をしてない事だ。このままでは、此処に居る全員が連邦軍に殺される。

ガルマは考える。今の自分の立場を、テロリストの首謀者として殺される未来を悟った。

「……シヤア………そうだ、シヤアだ。シヤアは何処にいる!?!」

このまま無駄死にするだけならいざ知らず、僕達の蜂起が連邦軍に治安部隊を動かす口実を与えるかも知れない。

そうなれば最悪だ。血の大弾圧が起こる。それはザビ家の男として、看過できない! 「シヤアを呼んでくれ……この作戦には欠陥がある! 僕には……僕達には、シヤアが必要だ!」

真つ白になった頭の中で、彼が縋ったのは三年間の学校生活で友情を育んだ友であった。

## 23. 金糸雀は、まだ鳴かず。

BBです。正式名称はブルーバード、皆からはビービーと呼ばれています。

今年で3歳になります。親は居ません。研究所の皆には居るのですが、私には居ないようです。私の事を育てたフラナガン博士がいうには、私はクローンと呼ばれる存在なので親が居ないとの話です。でも、マリオンやアルマ、ペツシエ。他の被験者にも、此処に親が居ないので結局、皆一緒なのかも知れませんでした。

私は、ニュータイプPの被験者になる為に生まれました。

それが、どういう意味なのか。私には、よく分かりません。ニュータイプが何の事かも知れませんが、私には、よく分かりません。

私には、親が居ないようです。フラナガン博士は、親ではないみたいです。

ああ、でも、と彼は言います。

「カナリア、彼女は君の親と呼べるかも知れない。いや、年齢的には姉と呼ぶべきかも知れないな」

彼は、ぶつくさと呟きながら簡単な健康診断を終えて、仕事に戻って行きました。

「……かなりあ？ きいろいろいとり？」

どうやら私の親は、鳥だったのかも知れません。

子は、キャベツ畑で採れます。コウノトリが運んでくる時もあれば、橋の下で拾う事もある。

だからカナリアが私を運んで来ても不思議じゃありません。

私は、この衝撃の事実をアルマに聞かせてあげました。

大爆笑されました。不愉快です。

「貴女の親？ に当たる人物の戦闘データならあるよ」

観たい？ とマリオンに訊かれたので私は力強く頷きました。

それは、とある宙域で開催された戦闘訓練。シミュレーターでも見た事がある緑色の人型汎用兵器が、見た事がない青色の機体に翻弄されている姿がありました。被験者の中でも彼女のよう動かせる人はいません。

「……このなかに、わたしの……おねえさん？」

言葉だけではなくて、映像として観たせいだろうか。

その存在が、急に現実味が帯びていくようで……

なにか、胸の奥に灯った、ような気になれたのです。

「思ったよりも脳波の基準が上がらないな……」

「……被験者の中では、優秀な成績を収めているようですが？」



「やはり、カナリアが優秀なのか。彼女は物心が付いた時から、ああだったと聞いています。元が素体として優秀なのだろうな」

しかし、と彼は顎を撫でる。

「ニュータイプ能力が、先天的な素質が必要なのか。先天的だとして、ニュータイプ能力は成長させる事ができるのか」

ニュータイプ能力の成長を促すのに必要な要素があるのやも知れんな。とフラナガンが語ってみせる。彼の隣には、クルスト・モーゼスが立っていた。わたしはおやつを食べた後、おねむの時間が来たので部屋のベッドで横になる。

「……………ふえ？」

次に起きた時、ガラス張りのカプセルの中に閉じ込められていた。

野菜や建物や機械の残骸に紛れて、ぷかり、ぷかり、と無重力の海に浮かんでいる。

これは……………どうなって？ その時、背後から強い光が放たれた。数瞬、遅れて爆発音。最後に強い衝撃がカプセルを大きく揺らす。その場でくるくる回転してのたうった。ガラスに額をぶつけた時、目の前にはコロニーがあった、コロニーが遠のいている。ペタリ、とガラスに手を触れる。先程の爆発に押し流されて、他の野菜や残骸と共に宇宙の果てに追いやられようとしていた。血の気が、引いた。ペタリ、ペタリとガラスの向こう側へと手を伸ばす。なにもできない、どうしようもない無力感。そして、もう二度

と、あの場所に戻れない恐怖が身を襲った。

助けて、と叫んだ。ガラスに爪を立てる、引つ掻いた後を血が這った。

歯を食い縛り、喉が裂けても、掠れて声が出なくなっても、誰か助けてください。と強く訴える。

心からの叫びは、誰にも――

『……子供、なのか？ こんな所に……ッ？』

その時、目の前に現れたのは緑色の人型汎用兵器。モノアイが私の顔を捉える。

搭乗者はククルス・ドアンと言った。わたしは彼に救助された後、ドック・ベイまで送られる。

すぐに迎えは来た。キシリア機関の人間だ。

このまま、私は、あの研究所に送られるんだと思う。

次の日、少しだけ人の声が鮮明に聞こえるようになった気がする。

翌年、妹ができる。

増えた、と言った方が正しいのかも知れない。

◆

掃海任務を終えた私は、学寮の自分の部屋にあるシャワー室で汗を流していた。

冷蔵庫の中からコーラを取り出し、肩にタオルを掛けたまま椅子に腰を下ろす。卒業

式を終えた後の進路について、思案する。正直、ジオン公国という国に対して、そこまでの思い入れはない。父が作った国が元になっているという意味では、思うところがない訳でもない。だがジオン共和国からジオン公国に名を改めた時に、ザビ家の国という認識であるし、ジオン共和国は亡国と呼んでも差し支えない。少なくとも民主主義から専制政治に変わっている時点で国としては別物だ。

愛国心もなければ、母が亡くなった日から郷土愛もない。

このまま軍人になったとしても守りたいのは精々、母の墓くらいなものだ。今が平穏な時代であれば、まだしも、命を投げ打つてまでする事ではない。やるべき事を整理する。カナリアだ、カナリアを見つけて連れ帰る。そしてアルテイシアに全てを話してから出来るだけサイド3から離れたコロニーに移住する。その為には、やはり私は、軍人になるべきではなかった。

そこまで考えた時、部屋の扉を力強くノックされる。

「シャア！ シャア・アズナブル！ 今すぐに扉を開けてくれ！」

……不穏な気配だな。少し、警戒しながら扉を開ける。

四人の同級生が、扉の前を取り囲んでいた。

「ガルマが君の事を呼んでいる！」

「……ガルマが？」

「至急、食堂まで来てくれ！」

少し待ってくれ、着替えてくる。と私は手早く制服に袖を通した後、近場にあつた刃物を制服の中に仕込んだ。

嫌な、予感がする。四人に四方を固められての移動、とりあえず食堂に辿り着くとガルマが多くの子徒に取り囲まれていた。シヤア、と駆け寄ろうとするガルマを手で制止して、周囲の雰囲気を探る。物々しいな。これは、そういう事なのだろうな。蜂起したのはガルマか? ……今、泣きべそをかいているガルマが首謀者とは考え難い。では、他に誰が、いや、この空気は、誰が始めたという訳ではなさそうだ。蔓延した不満と不安が、まだ精神的に未熟な彼らに焦燥感を植え付けて今、何かしなくてはならない。という強迫観念に囚われてしまったのか。

首謀者すらも不在のまま、突発的で杜撰な計画が進められている最中つてところだ。

ガルマは、まあ体良く担がれたのだな。

「ガルマ、聞こえているか?」

「ああ、シヤア。よく来てくれたな……迷惑を掛けてすまない」

肩を落とす彼に、私は失笑する。

「大変だな、君の生まれの不幸でも呪ってみるか?」

「何、不幸だと!」

私の皮肉に反応したのは、ガルマではなく、彼を取り囲んだ一人だった。

「ガルマ。君は良い友人ではあるが、君の父上と兄上がいけないのだよ」

「……シヤア。迂遠な言い回しで僕を慰めてくれるのは良いが、父さんと兄さんを貶すことは許せないな」

「すまない、ガルマ。訂正する」

私が肩を竦めてやれば、ガルマも幾分が気を持ち直したようで小さく笑みを浮かべた。

このまま、私はガルマの隣に座り、机の上に広げられた地図を見る。

「なるほど、連邦軍の兵營を襲撃するつもりなのだな」

「話が早いな」

「……しかし、この杜撰な計画では失敗するだろうな」

君が？ と私が声には出さず、視線だけでガルマに問い掛けた。すると彼は小さく首を横に振る。

「ガルマ、君はどうしたいんだ？」

君、という部分を強調すれば、彼は真っ直ぐに私を見た後で答える。

「シヤア、この作戦が成功するように修正して欲しい」

私は少し考えた後、私を見た彼の目の輝きを信じて作戦の修正案を考えた。

もし作戦を成功させるのであれば、攻めるのは今夜。あの強襲揚陸艦がサイド3に來た以上、日が経てば経つ程に相手の援軍が集まって不利になる。

ガルマに、その事を伝えれば、彼は神妙に目を伏せた。



シヤアが食堂に來るまで、ずっとジオン公国を守る方法を考えていた。

結論をいうと、兵營襲撃を成功させる他に道はない。

僕が拒否をしても兵營襲撃そのものは決行される。

その時の僕は校長のドブル兄さんと連絡を取り合えないように縛られた状態で監禁される事になり、兵營襲撃は失敗に終わる。その結果、起きるのは地球連邦軍による武力に対する武力制圧。ただの民間人の暴動なら駐屯軍も鎮圧に銃器と戦車は使わない。だが、僕達は士官学校に所属している。卒業式の途中で小天体がズムシテイに衝突した為、まだ正式な軍人として配属された訳ではないが、それでも武器を持って制圧しようというのだ。多くの死者が出るはずだ。僕達が攻める側とはいえ、学生が駐屯軍に殺されることは、民衆の更なる暴動を加速させることにもなりかねない。そうなれば、もう世界は止まらない。治安出動の口実としても十分に満たしている。

血の大弾圧。ジオン公国の国民達は、僕らのせいで殺される。

故に今、選ばなくてはならない。

進むのか、逃げるのか。二つに一つ。もし仮に兵營襲撃を成功させてしまえば、駐屯軍は拠点を失う事になり、直後、すぐに治安出動には出られなくなる。それに元はといえば、地球連邦が小天体を見逃した事に非があるのだ。その後の対応だって悪い。事実として連邦軍は何時でも制圧できるように艦艇を集めているし、戦車も揃えていることも交渉時の好材料となる。今はまだ死者こそ出ていないが、多くの民間人に被害が出ているのだ。だから、勝てば……勝ちさえすれば、きつと父さんと兄さんが上手い事やってくれる。

これが悪手だって事は分かっているさ。

希望的観測が多分に含まれていることも自覚している。

でも、僕には皆を止められない。これが今の僕の限界だ。

止められないなら、勝利するしかない。

「人を殺させない為に人を殺す。ははっ……矛盾しているな」

学生達に暴走をさせない為に、僕が指揮を執る他にない。

とんだ貧乏くじを引いたものである。

頭が痛くなる、胃が締め付けられるようだ。

## 24. 暁の蜂起。

深夜。ズムシテイは緊張の最中にある。

民衆の天体衝突を機に噴出した連邦への怒りは凄まじく、警察の制止を振り切つて暴動を続けている。

既に連邦駐屯軍にも被害が出ている状況。翌日には、首都バンチにガーディアンバンチに駐屯する治安部隊の主力が到着する予定となつており、既に連邦治安部隊の本格投入までのカウントダウンは始まっている。

少なくとも、それが実行できる状況にまで持ち込まれる事になる。

士官学校に所属する低学年の者達は、明日の不安に眠れぬ夜を過ごしている。

連邦軍兵營に滞在する駐屯軍の数は二千名、対する士官学校の卒業生は二百名。戦力は十倍、実弾の銃器を使ったテロリズム。相手を殺すんだ、殺されもする。三年間、同じ屋根の下で勉学に励み、同じ釜の飯を食べて来た誰かが死ぬ事になる。

ジャケットの首元にあるフック。上手く嵌らなくて、カチャカチャと音を鳴らす。

同室のシヤアが見かねて僕の首元に手を伸ばしたが、そんな彼の気遣いを僕は首を横に振つて拒絶する。



「僕は、同級生の皆に死ぬと命じるんだ。今から君に頼っていたのでは、身が持たないよ」

僕が強張った笑みで粋がつてみせれば、彼は含み笑いを零す。

今、僕は監視されている。家族と連絡を取らせない為だ、トイレに行くのも誰かからの護衛が付いて回る。これが正しい事だとは思わない、やらされている事だと思う。でも、今は、そんな自分の気持ちに蓋をする。卒業生は全員、兵営襲撃に参加する事を決めた。

その言葉を待っていた、と。僕の名前で集まった人も多い。僕が居るから、死んでやる。と言ってくれる人がいる。

だからこそ、僕は担がれた。

「……今からでも、遅くはない」

そんな彼の言葉に、またしても僕は首を横に振った。

「シヤア、もう遅いんだ。手遅れなんだ。僕は学生という身分に胡坐をかいて、同級生を統率する意味を理解していなかった」

だから謀られる、利用される。と自嘲した。

「足を固めなければ、足をすくわれる事になる。僕はザビ家の男としての矜持を大事に思っておきながら、ザビ家の男である意味を理解できていなかった。僕は、僕自身の

影響力をあまく見ていた……これは、その報いなんだ。大いなる力には責任が宿るというけども、僕は反対だと今、実感している。立場には責任がある、責任には力が宿る。君の言っていた通りだ。僕は何時まで経っても坊やだから、担がれて利用される事になる」

ジャケットにあるフックが漸く嵌る。大きく息を吐いた後、サンングラスの先にあるシヤアの瞳を見据える。

「これは……仕組まれた事だったのかも知れない。でも僕の名前で集まってくれた人もいる以上、僕は、僕の選択に責任を持たなきゃならない」

シヤアは彼には珍しくキョトンとした顔を見せた後、ははは、と肩を揺らす。

「笑うなよ、皆が見ている」

ちらりと監視の一人を見やる。シヤアは部屋に入る前に自分を慕う同級生から受け取ったフットボールのヘッドギアを改造した仮面を被り、ああそうだ。と思い出したように声を上げる。

「私には妹がいる」

「へえ、そうなんだ。そんな話は聞いたこともなかったな」

「……正確には、妹のような存在だな。おそらくズムシテイに居るとは思っているのだが、この三年間で見つけられなかった相手だ」

シヤアは、何時もの気取った雰囲気とは違う柔らかい笑みを浮かべた。

「ガルマ、この戦闘が終わったら妹を探すのを手伝って欲しい」

「……そんな事で良いのかい？」

「ああ、十分だ。ただ、内密に頼みたい」

何故、と口にしようとして、首を振って疑念を振り払った。

「わかったよ、シヤア。ザビ家の一人としての僕の力が必要なんだな」

「……もう坊やとは呼べないな」

彼と笑い合って、共に部屋を出る。

シヤアは相手を攪乱する為に先行し、その後に僕が率いる本隊が続く。

大丈夫、模擬戦の要領だ。それに、これはシヤアの立ててくれた作戦でもある。

最も信頼する参謀の意見を信用せずして、何が将だ。

気休め程度だが、僕の用兵学はA評価。

僕が上手くやれば成功する。そう思うと少し気が楽になる。

「ガルマさん、ゼナさんをお連れしました。やってくれるそうです」

足を止める。ゼナは同級生の一人、彼女にはドズル兄さんを足止めする重要な任務が与えられている。

「君なら出来る。とても重要な任務だ」

そう言つて彼女の肩を叩いて、先を目指す。

シヤアとは途中で別れる。僕は一人で、集まつた同級生の前に赴いた。

……ザビ家の男なら腹芸のひとつもやってみせるんだ！

◇

軍人とは、何たるか。

今一度、皆には思い返して欲しい。

軍人の本懐とは何か、今一度、思い返して欲しい。

僕達が士官学校に来たのは——様々な理由があつたに違いない。

強い正義感を持つて入学した者が居る。学費が掛からず、生活費も要らない点に惹かれた者も居るはずだ。安定した高収入を得る為に軍人を志した者も居る事は分かつている。皆がそれぞれの事情を抱えて、僕達は同じ場所で寝食を共にして、勉強に励んだ。

僕達が出会つた事に必然性はなかつたかも知れない。

だが！ 僕達が今、此処に立っている事には、必然性があるはずなんだ！

強い正義感に駆られたのであれば、警察や消防士になつても良かった！

学費を掛けたくなければ、国立の高校や大学を目指せば良い！

安定した高収入なんて、もつと他に道があつたはずだ！

それでも、あえて、この道を選んだ事には理由があつたはずなんだ！

この国情が不安定なこの時期に、あえて軍人である事を選んだ意味が!!  
入学試験で落ちた者がいる。訓練が厳しくて、志半ばで学校を離れた者もいる。それでも、僕達が今、此処に立っている事には理由がある!

あの辛い日々を思い出せ!

総重量三〇キログラムの装備を背負って、五〇キロメートルを踏破した重装行軍訓練にも耐えて来た!!

何故できた! 僕達は何故、出来たのか考えてみるんだ!!

僕達には……信念があつたからだ!

今一度、思い出すんだ!

軍人とは、何たるか! 軍人の本懐とは何か!

スペースノイドの生命と権利と財産を護る為……いや、そんな難しい言葉はいらな  
!!

僕達は、隣人を守る為に立ち上がるんだ!

思い出せ、家族と過ごした日常を!

幼馴染や友達、いや、買い物をした時の店員や犬の散歩をしている御老人!

公園で遊んでいる子供達! 野球少年、今もオフィスで働く大人達!

カフェテラスで談笑する淑女、遊園地で過ごすカップル!

これまで出逢つて来た全ての人間の顔を思い出せ！

その笑顔を思い浮かべるんだ！

これは、始まりだ！

僕達にとつての始まりじゃない、駐屯軍による虐殺の始まりだ！

連邦軍の駐屯部隊を治安出動させてはならない、ズムシティの市民を殺させてはならない！

いいか、これはズムシティだけの問題に留まらないぞ！

これは、僕達の国を守る為……国とは何か！ 国とは人だ！

今から行うのは、国と人を守る為の戦いだッ！

誰かの待ち望んだ明日を守る為に戦うんだッ！！

誰かが謳歌する素敵な日常を守る為に僕達は今、立ち上がっているッ！！

……弾薬は実包、実弾だ。当たったら死ぬんだ！

これは訓練ではない、模擬戦でもない！

死ぬんだ！ 我々の内の何人かが確実に！

それでも……死なせるな！

僕達の誰かが死んでも、民間人を死なせるな！

愛する誰かを死なせるな！ 誰かが愛する誰かを守るんだッ！

守る為に戦うんだ、守る為に殺すんだ！

このガルマ・ザビが命じる！

死ね、と！ 死んで来い、そして勝利せよ！！

僕達の撃った一発の銃弾が、受け止めた一発の銃弾が数千、数万の人間を救う事になる！

ジーク・ジオン！ 出陣だツ！！



翌日、ガルマの起こした連邦軍兵営襲撃は瞬く間に市民の間に広がった。

これをメディアは「英雄的快挙」の文字と共に大々的に報じており、昼過ぎにはパレードまで開催される始末となっている。実際問題、まだ正式に配属もされていない士官学校生が兵力差が十倍もある駐屯軍の武装解除に成功した事例は、そう多くはないはずだ。

市民はまるで戦勝ムード、指揮を執ったガルマが手を振るだけで黄色い歓声が飛び交う程であった。

ガルマは先頭で手を振り続ける。

あまいマスクで心を隠し、嗚咽を押し殺して笑顔を振りまいた。官邸に戻った彼が、家の扉を閉じると同時に床に倒れた事を知る者は——少なくとも民間人の間に知れ渡る事はなかった。

ガルマが指揮した「暁の蜂起」は以後、開戦するまでの間、華々しく語り続けられる事になる。



## 25. 暁の蜂起、裏舞台。

士官学校生が地球連邦駐屯軍の兵営を襲撃した事件。

首謀者はザビ家の御曹司であるガルマ。これをジオン公国の民衆は、暁の蜂起と呼んで持て囃した。

しかし、ある程度の権力を持つ人達、もしくは民衆よりも少しだけ情報収集に手間を掛けている人達。教養として勉学を嗜んでいる人達の見識は変わってくる。それはその人達に与えられている情報でも変わる不確かなものであるし、そもそも話。誰が正しくて、正しくないと言った話でもない。それは、人が今、持っている手札と開示された情報だけで最善の選択を選び続けなくてはならない為だ。

世界は巡り、廻る。

誰が何をせずとも、時の流れが止められないのと同じように。

自分が今、真つ先に何をすべきか。何のために進むのか、逃げるのか。それとも今は待つのか。

人は、常に選択を迫られ続けている。

選択を突き付けられて、なおも選択ができない者は、緩やかに衰退する。

停滞は、緩やかな自殺である。

◆ 「なに？ 俺に会いたい？ この時間にか？」

屋敷の使用人に問い返す。今年、士官学校を卒業する一人の女性が悩み事の相談をしに来たとの事だ。

名前はゼナ・ミア。卒業席次8番の筋の良い生徒であり、卒業後の進路についての相談があるとの事だ。まあ、最近では世間の目から見ても物騒になって来たし、勘の良い者であれば、数年後の戦争が既定路線だと云う事も察している。

そんな状況では、臆してしまうのも仕方ないのかも知れない。

とはいえだ。戦争が起きるのであればこそ、優秀な人材は手放したくないというものの。彼女の成績を確認した後、目を通していた論文を整理して、部屋に通す。

失礼します。と彼女は扉の前で直立し、敬礼する。その仕草を見て、少し嫌な予感があった。

「何時もなら、もう起きてさえない時間だ」

俺は十八歳の時には、もう既に実戦の場に立っていた。

相手は連邦軍ではなかったが、ダイクン派との抗争で多くの将兵を死地へと送り出す。良い意味で覚悟が決まっている人間というのは、新兵であっても良い敬礼をするも

のだ。逆に相手への畏敬が勝っている時は、身体が強張ってぎこちなくなる。そういう傾向があるってだけで、全員が全員に当てはまるものではない。

だが、俺が彼女の敬礼に覚悟を感じ取れたのは確かな事実だ。

「御無礼をお詫びします」

椅子に腰を下ろすのをやめる。座れ、と彼女に促した。

「いえ、私はここで結構です」

この時点で疑惑は、確信に変わる。俺は遮蔽物にもなつて、相手にも投げつけられる椅子に手を掛けた。

「話せ。何を、とは言わずとも分かるな？」

「……………閣下のお時間が頂きたいのです」

「お前の役割を聞いているのではない。何を隠している？」

睨みつける。臆してなお、目から強い意志を失わせない覚悟。そんな黙する彼女を見た俺は、簡単には吐かないと察してポケットに入れていた通信機に手を掛ける。視線を外したのは一瞬だった。

「閣下！ 動かないでください」

彼女の手には拳銃が握られていた。手に震えがない、怯えがなかった。

「……………空砲だろう、それは」

「閣下、止まってください！」

「まだ未熟だな。俺を止めなければ、脅すよりも先に口を動かすんだったな」

俺は椅子に腰を下ろし、笑みを浮かべて問い掛ける。

「さあ、面白い話でもしてみるのはだな」

そう言つて、改めて椅子に座るように促すと外からエンジン音が聞こえてきた。

これはジオン公国で採用している装甲車のものだ。音の数からして、一輛や二輛ではないな。

なるほど、連邦の駐屯軍に攻め込むつもりのようなだ。

「残念だったな。時間切れだ」

先ずは事実確認からだ。俺が屋敷の者を呼ぼうとした時、女性生徒は大きく口を開いた。

「ガルマ様です！ ガルマ様が檄を飛ばされたんです！」

「……ガルマ、だと？」

その言葉を聞いた時、頭の中が、真っ白に呆けてしまった。

「校長ッ！ 起きてください!!」

「大佐殿ッ！」

「教導隊の暴発です!!」

扉の向こう側から屋敷に住まわせている使用人に混ざり、教師の声が聞こえてくる。

「……………あのガルマが、そんな事をするはずがないだろう……………」

「事実です。櫓を飛ばし、指揮を執るのは閣下の弟様です！ だから私も、加担して……！」

「例え、それが事実だとしても……………ッ！」

感情のままに振り上げた拳で、目の前にあつた机を粉碎する。

「ああ、今の言葉で分かった。お前は俺の障害であつても敵ではない」

机を壊した時に傷付いた右手から血が滴る。こんな時こそ冷静に、だ。大きく息を吐いて、怒りを発散させる。

「犯人捜しは後だ！ あの馬鹿共を今すぐに止めに……………!!」

「閣下！ もう交戦は始まっています、兵營で火の手が上がりました！ 先遣隊が居た

ようです！」

「くそッ！ 後手、後手かッ！ 小僧共がやってくれるッ!!」

もう止められない、賽は投げられている。

先ず、俺がやるべき事は——

「車を出す準備を……………それから、戦闘車両も準備しておけ！ 出せる分、全部だ！ 出ら

れる奴は全員叩き起こせ、残すのは必要最低限で良い！ 生徒は出すなよ！ 連邦と交

戦する事になるかも知れないからなアツ!!」

扉の向こう側にいる者達に指示を出す。ギレン兄に連絡をしたのは、その後になる。御丁寧に自家用車のタイヤがパンクさせられている事に気付いた時は、自転車で追いかけてようかと思つた程だ。

誰だ、こんな用意周到な策を立てたのは!?

ランバの奴が居たら、ゲリラ学A判定が貰えそうだな、この野郎!!



私が弟のドズルから情報を受け取った時には、もう事は手遅れの状態となつていた。

数年後には連邦との戦争が始まる。そのつもりで準備を進めて来た。しかし今、開戦するのは拙い。モビルスーツの配備が間に合つておらず、モビルスーツを輸送する為の軍艦の竣工もまだ終わつていなかった。ア・バオア・クーとソロモンの要塞化計画も中途であり、今、戦争を起こされるとジオン公国は成す術もなく敗北する。

危険を承知で工業化を推し進めてきた政策が、裏目に出てしまったか。

……現場は、ドズルに任せておけば良い。

私が考えるべきは、今後の身の処し方。少なくともガルマの身は守つてやらないといけないな。

ガルマの勝利が前提になるが、情報統制はしておかなくてはならない。

「キシリア。キシリアが良いよ」

応接用の机で珈琲のような何かを啜り、洋菓子を口に運んでいる小柄な少女が口にする。

「……キシリアは、まだ考えが浅い。このような重要な局面では使えないな」

「キシリアはまだまだでも、彼女が抱えているキシリア機関つてのは優秀なんですよ？ 私も何度か見たことあるけど……凄いよね、本気で隠されたら私でも腹の内が読めないんだから」

ま、感情は分かるけど。と彼女はクツキーを啜える。

「あとは……そうだね、指示を授ける時は苦言じゃなくて、一言。誉め言葉でも添えれば良いんじゃない？」

「……指示を出す時に、そうする意味はあるのか？」

「フラナガンも愛用するレディの扱い方のひとつだよ」

良いからやってみなつて。と言った後に彼女は数枚のクツキーを片手に腰を上げる。

「何処に行く？」

「風呂掃除と布団乾燥機の準備。ああ、あと、簡単に作れる料理の下拵えも頼んでおかないとね」

「……使用人が板に付いて来たな」

「その一言を妹にも分けてあげなつての」

あと私だつて伊達に何年も使用人やつてる訳じゃない。と彼女はンベールと舌を出してから部屋を出て行つた。

私は、軍事機密であるはずのツダがラテアートで描かれた珈琲を啜る。

「甘い、な。甘さ控えめで、これか」

愚痴の少々、指先でトントントンと机を叩いて思案する。

そして電話の受話器に手を掛けた。

『……何でしょう、兄上様』

「キシリア、頼みがある」

『おや、兄上が私に頼み事とは珍しい』

棘のある言い方、私は改めて甘めの珈琲を啜つてから口を開いた。

「士官学校生が兵營を襲撃した事は耳に入っているな?」

『ええ、今しがた、報告がありました。なんでも……ガルマが指揮を執っているようですが』

「あのガルマが、本当にあんな事をすると思うか?」

『……彼もザビ家の男という事ですよ』

ふむ、と言いたくなる事を飲み込んでキシリアに指示を出す。



「キシリア機関、動かせるか？」

『命令とあれば』

しかし、とキシリアは疑念を口にする。

『……どうして今、このタイミングで？』

「それが最善だと私が判断したからだ」

『本当で？』

「私の手駒は公国の為にいるからな。貴様の機関なら私用で使う事も許されよう」

その後は、出来るだけ穏便な手段でガルマを助けるように指示を送る。

今のままで連邦政府からガルマを要求された時に差し出さざるを得なくなるし、仮に突っぱねようにも連邦政府に大きな借りを作り兼ねない。であれば、お互いにとってガルマを差し出せない理由を新しく作れば良い。

幸いにも、その為の下地はあるのだ。

「メディアアの統制は私がやる。お前には民衆の扇動を任せる」

指示を伝え終えた時、そのまま電話を切ろうとし、受話器を置く手を止める。

数秒、悩んだ後で思いついた月並みな言葉を口にした。

「キシリア」

『なんででしょう？』

「期待している」

受話器を置いて、珈琲を啜る。

やっぱり、味は変わらず甘かった。

あの小娘は、人の好みに合わせることを知らない。



多数の将兵と兵器を詰め込んだ強襲揚陸艦。その他、砲撃能力を持っている二隻の艦艇。

この艦隊を率いるのは地球連邦軍のレベル中将である。暴動の最中にあるズムシテイの宿を取る訳にもいかず、この強襲揚陸艦で寝泊まりをしていた時の事だ。駐屯軍の兵營が、ジオン公国の士官学校生に襲撃をされたとの報せが入った。

もう、この時には手遅れとなっており、出陣準備を始めた五分後には続々と制圧を受けた報告が入る。

「閣下！ 出陣許可を！ 今こそ治安出撃する機会です！」

血気盛んな士官の一人を手で制して、白くなつた髭を撫でる。

「もう遅い。今、相手には二千人の捕虜がいる。そして今や民衆は全て私達の敵だ」

仮にも地球連邦政府は、民主政治の政体を保っている。

故に、開戦になると分かっているながら出撃する事は、一軍人の権限を大きく逸脱して

いた。勿論、ある程度の権限は与えられている。しかし、それは天体衝突の件に関する事であり、士官学校生が地球連邦の駐屯地を襲撃する事態までは想定されていなかった。

その為、レビルは行動を起こす前に事の成り行きを地球にある連邦政府に報告する義務がある。

「……結果的に私が適任か。保険なんて適用されて欲しくなかったのだがね」

レビルは愚痴り、ゴップと連絡を取る為に艦長室に戻る。

スペースノイドに参政権がない。

それがスペースノイドに与えられていない事には、言い訳にもならない理由がある。

単純な話。宇宙移民が実施された数年間、地球とコロニー間を繋いだ選挙システムの構築がままならなかった為だ。やりようはあったという話もあるが、それには莫大な資金が必要となる。スペースコロニーの建造費用は勿論、その維持費と宇宙移民の打ち上げ費用で連邦政府の懐事情はカツカツとなっており、宇宙全域まで対象にした選挙は現実的ではないと判断された。

より安価な方法を模索すると同時に、宇宙移民計画が落ち着いてから段階的に参政権を戻す計画は確かにあったようだ。

しかし、ここで関わってくるのがラプラス事件。

これは地球連邦首相官邸である宇宙ステーション「ラプラス」が、改暦セレモニーの際に爆破テロを受けて破壊された事件だ。実際には、政権転覆を狙った身内の犯行ではないかという陰謀論も囁かれているが、その可能性は低いとレビルは考えている。少なくとも、それらしい証拠でもない限り、信じる気にはなれない。

さておき、重要なのはラプラス事件の後。

改暦をされた22年後に地球連邦政府は「地球上からの紛争の消滅を宣言」している。つまり、これはそれまでの地球上では少なからず争いが絶えなかつた事を意味しており、それを理由にスペースノイドの参政権が後回しにされ続けた結果、話はうやむやとなつてしまった。

この頃にもなれば、地球連邦政府の体質も変わっている。

弾圧を続けた結果として国家的基盤を築き上げた地球連邦政府は、常習的にスペースノイドの参政権を認めないまま、それを当たり前にしてしまった。実際問題、各サイドを対象にした選挙は費用が跳ね上がる為、簡単にはできない事情はある。

しかし、それでは、スペースノイドが納得できないのは自分でもわかる。

だが、あくまでもサイド3は地球連邦の統治下だという建前がある。

勝手に共和国や公国と名を改めて、此処が自治領だと宣言されてしまったのは、出て行かない訳にはいかないのだ。今は最低限の税として、ジオン公国から農作物が送り続け

られている為、地球連邦も大目に見ている。経済制裁という形で制裁を続けている建前もあつた。

とはいへだ、もうサイド3を地球連邦の統治下と言い張るのも限界だ。

事ここに至つては、地球連邦とジオン公国は分けて考えるべき状況まで来ている。

「いつそ、政府が相手を国として認めてくれれば、こちらもやりやすくなるのだが……」

レビルは愚痴り、首を横に振る。

相手が国家であれば、もつと簡単な話だ。それ相応の扱いをすれば良い。

まあ、それを連邦政府が認めた時点で、手前勝手な篡奪者に屈した事を意味するので出来るはずがない。サイド3が認められるのであれば、と他のサイドも続くのが目に見える。

そうして訪れるのは宇宙戦国時代。舞台を宇宙に、世界は大戦前に逆行する。血で血を洗う戦争の始まりだ。

それこそが今、自分が想定し得る最悪だった。

地球連邦政府が行つた唯一の偉業は、人種を統一した事だ。

今はアースノイドとスペースノイドに分かれているが、西暦以前では、もつと多種多様に分かれていた。人種による戦争、宗教による戦争。文化、信仰を否定する訳ではないが、そういった争いは今の世の中で失われたのだ。イデオロギーによる争いは絶えな

かったが、それでも争いの火種のいくつかは確かに消えた時期があった。

しかし今、新しくアースノイドとスペースノイドという人種が生まれて、新しい人種の間で戦争が起きようとしている。

「歴史を紐解けば、連邦政府に正義がない事は確かなんだろうな」

だが、とレビルは受話器を手に取る。

「役目は全うする。それが軍人だ」

少なくとも以上の事は、駐屯軍兵営が襲撃される理由にはならないのだ。

## 26. エクストリーム機密漏洩!

士官学校生による連邦軍の兵営を襲撃した事件。

この事件は翌日、多数のメディアで駐屯地を占領した士官学校生を持て囃す。これに呼応して民衆も「暁の蜂起」と称賛する。連邦軍駐屯地から士官学校までの道程に、戦闘車輛の車列が出来ていると聞けば、ジオン公国の若き英雄達の姿をひと目見ようと駆け出した。瞬く間に民衆が集まり、それを知った警察が緊急出動で治安活動に赴いた。警官の制服を着た者が道の両脇を固める中、悠々と走行する戦闘車輛の数々。その盛り上がりは、まるで軍事パレードの有り様である。

指揮を執ったガルマ・ザビは若き英雄として、車列の先頭で黄色い歓声を浴び続けた。いた。

連邦軍の駐屯地は今、首都パンチ司令部が連邦兵を民衆から守る為に捕虜としたまま、駐屯地の占領を続けている。

「なんであるか!? 街頭のあのバカげた騒ぎは! まるで犯罪者を英雄視するが如きだっ!」

同日同時刻、首都官邸にある会議室では、ジオン公国と地球連邦のお偉い方が集まっ

て会議が行われている。

これは本来、ジオン公国が地球連邦政府に対して、天体衝突事件の責任を追及する目的で開催される予定の会議であったが、昨晩の連邦軍兵營襲撃事件により、急遽、議題の内容が変更される事となった。参加者は双方5名ずつ、ジオン公国からはギレン、ドズル、キシリアが参加しており、地球連邦からはレビルが出席している。

レビルは、真つ白な髭を撫でつつも注意深くザビ家の三本柱を観察する。

「この新聞の見出しはなんだ!?! 我が軍には、多くの死者が出たというのに!!」

プロパガンダ用の記事が記載された新聞を両手に声を荒らげるのは連邦軍の将校。天体衝突の件で散々にイビられ続けてきた彼は反撃の種を見つけるや否や、此処ぞとばかりに一転攻勢へと打って出た。

「責任者を出せ、と本来なら言うところだ! いや、連邦は要求する。今回の事態、背景の調査、責任の明確化! そして——」

——当事者の引き渡しだ! と彼は感情のままに相手を恫喝する。

今回の彼の役回りは、地球連邦の遺憾の意を示す事。感情面でもジオン公国に良い印象を持っていなかっただけ彼は鬱憤晴らしを兼ねて、これを快諾し、会議の最前列であらんなりの罵声を放った。とはいえだ。彼の言っている事は正論であり、地球連邦軍に所属する者達が実際に感じている怒りの一端でもあった。



しかし、この要求が如何に正論であったとしても、非現実的である事は彼も自覚している。

ギレンは此処までの流れを読んだ上でメディアの情報を統制し、キシリアにパレードを開催させたのだ。あくまでも民衆の自主的な行動という体を取る事によつて、地球連邦の批判から逃れると同時に天体衝突によるジオン公国の怒りを訴え掛ける。

尤も、これらのプロパガンダにザビ家が関わっている事は地球連邦の高官もお見通しではあつた。

証拠がないので、ザビ家の関与を強気に訴える事ができないだけで。先程の連邦軍将校のように恫喝するのが精一杯だった。

「ガルマ・ザビを引き渡せと？」

故にギレンは強気に問い返す事ができるし、

「……場合に、よつては！」

その後に起きる惨状を理解している為、連邦軍の将校も一步退いた形となる。

「彼を引き渡したらどうなるか、ご存知のはずだ」

最後の確認作業を以て「ガルマは引き渡す事は現実的でない」と、この議題は一つの終着を見た。

では、と次の議題に移る前にギレンが口を挟む。

「死者、死者と仰るが……天体衝突によって、我が農業施設で幾人の死者が出たかは御存知か!？」

少しでもジオン公国の優位に働くように地球連邦を糾弾する。

「……不幸な事故による死者と、今回のケースは比較は出来ませぬ。ギレン閣下」  
これに受けて立ったのは、レベイル。

「当方の被害は野蛮な奇襲攻撃によるもの。違いはお判りでしょう」

そう問い掛ける彼にギレンは閉口し、代わりに口を開いたのはキシリアの方だった。

「確かに事故と事件では、内容が異なります」

しかし、とキシリアがレベイルを睨みつける。

彼女は十数枚の書類の束を取り、それを地球連邦に見せつけるように机の上へと放り投げた。

それは何かの数値の統計のようだ。

「事件を起こさせるまでに我らを追い詰めてしまったのは、そちら側の不手際では？」

確かに事故と事件では罪の重みが違いますか——天体衝突の件でジオン公国は困窮し、その実害は数百万人の死者にも及ぶ程です。その補償と補填をせずして更なる農作物の納入を求められては、ジオン公国の経済が回りませぬ……おや? まさか、サイド3が自活できる状態を壊そうとして、あえて……?」

「キシリア閣下、あまり憶測で語らないで頂きたい。そんな事では、まとまる話もまとまらんよ」

レビルの言葉に、失礼。とキシリアが佇まいを直す。

「しかし、既にジオン公国は先方から経済制裁を受けている身の上。その上、首都バンチの農業施設を全壊した現状で農作物の更なる納入を求められてしまつては、経済戦争を仕掛けられている。と誤認しても致し方ない事ではありませんか？」

「本来、今日は、その話し合いの為に来たのだがね」

「そうでした。しかし、あのような大仰な強襲揚陸艦を持ち出されてしまつては民衆も萎縮してしまうというものです。備えがあれば憂いなし。ですが、過剰な備えは、そう意図せずとも相手に不信感を与えるもの。ましてや後詰め艦隊まで用意されてしまつては治安出動の意図を探られても仕方ないでしょう」

「治安出動の意図はない」

「そうでしょう、私は信じています。此処にいる我らも。地球連邦が軽々と治安出動には出られない事は国民も分かっております。しかし疑念の種は植え付けられます。種は不安を以て発芽し、誰も思いもよらぬ花を咲かせてしまう事もあるのですよ」

レビルは息を吐くと「君は話が長いな」と零し「失敬」とキシリアが身を退いた。

「問題は、ジオン公国が地球連邦に対して如何様に責任を取ってくれるか。という事だ」

「天体衝突に対して、地球連邦からジオン公国に対する責任の処し方も、ですよ」  
「……厚顔無恥という言葉は知らんのかね？」

「それとこれとは話は別、という事ですよ」

でもまあ、とギレンは嘯くように話を続ける。

「士官学校生が連邦軍駐屯地を襲撃した件に関して、そちらが寛容な態度を示してくれるのであれば、我らも天体衝突の件で金品での補填と補償は求めませんよ」

ギレンの提案に、レビルは静かに目を伏せる。胸の内で憎たらしい紳士面の旧友を思い出し、私ではこの辺りが限界だな。と白髭を僅かに揺らした。

「ザビ家の大切な御曹司、差し出せる訳もない。だが、地球にある古の民族にはハラキリという解決法がある」

「ハラキリ……随分と物騒な字面だな？」

「実際に腹を切って貰おうって訳ではない。処刑されれば名誉に傷が付く、そう考えたサムライの身の処し方に、自らを罰して事を収めるといふのがあるという話だ」

解決法の参考にはなりません。と、これはレビルがジオン公国と地球連邦の関係性を鑑みた上での提案だった。

「ガルマ君ではなく……もつと大人の然るべき立場の者が腹を、切る」

レビルが、そう口にした時、全員の視線がジオン公国の軍服を着た大柄な男へと注が

れる。

「なるほど、それは良い解決法かも知れん……」

「ギレン兄!?!」

「落ち着けドズル。将軍も言っていたではないか、実際に腹を切る訳ではない」

「しかし、しかしだな……!?! 俺は、来年の計画も既にもう……!?!」

ドズルは、心から悔しさを吐露する。

実際の話、ここまでは既定路線。最初からドズルは、ガルマが起こした事件の責任を取る為に会議に出席をしている。その事は予めギレンから伝えられていたし、ドズルも承諾していた事だ。しかしドズルが来年の計画をまとめていたのも事実、士官学校の校長業務にも手慣れてきた頃合いだった事もあり、漸く士官学校を改善していこうという段階に入った直後の話だったのだ。

その無念は今、この場で思う存分に吐露される。

そんなドズルを見て、地球連邦の高官は、同情をせずとも本当に嫌がっている事だけは伝わった。

これは職務に忠実なドズルだからこそできた演技である。

実際には、予定が一年。早まっただけの話。

「責任は明確にした上で厳正に処罰する。地球市民と捕虜の安全と帰還も保障する」

ただし、とギレンは最後にジオン公国からの要求を突きつける。

「ジオン公国は連邦軍の撤収を要求する。斯様な事態の再発せぬようにな」

「……この災禍を糧として、連邦とジオン公国の新しい関係を築けると良いな」

レビルの言葉を耳にして、ギレンは彼の瞳の奥に隠された強い力を垣間見る。

ギレンは黙した。小さく頷き返し、会議は終わりを迎える。

解散した後の話。キシリアの元に一人の男が来て、一枚のプリント用紙を手渡した。

それを流し読んだキシリアは、用紙をギレンに手渡す。それは連邦軍兵営襲撃事件の調査内容であり、ガルマを誑かした首謀者は存在しないというものであった。正確には、意気投合した20名程度の同級生が周囲の人間を巻き込んで、勢いとノリで兵営襲撃の計画を立てた。との話だ。

その杜撰な計画を見たガルマは作戦の失敗を悟り、シャアなる人物を参謀に計画を練り直す。

「この始まりの20名はどうするつもりだ？」

「適当な閑職に。勿論、全員をバラバラに振り分けた上での話になります」

「それで良い。任せた」

この翌日にドズルは士官学校校長の他に首都バンチ司令官の任を解かれた。

そして、ア・バオア・クーという僻地に飛ばされる。然るべき時が来るまで、艦隊の

編成に従事する事と相成った。

モビルスーツ部隊はソロモンの方で訓練と編成がされる事になる。

◆ 「ドズルを虐めちゃダメだつてー」

会議が始まるまでの間、憤慨するデギンの前でヒヨコ頭の少女が宥めている。

ドズルを士官学校校長の任に就けたのはデギンの提案であり、これはザビ家を敵視する者の悪意からガルマを守る為の采配であった。しかしドズルは学生生活を満喫するガルマに深く関与しようとせず、粛々と士官学校の運営に精を出していた。

その結果、士官学校生の暴走を抑え切れただけでなく、ガルマまで巻き込んだ事に怒り心頭であった。

「いや、一言だけでも言つてやらねばならん！ それが親の務めであるし、ジオン公国の公王の責任でもある為だ！」

「だーかーらー、ドズルは悪いかも知れないけど仕方ないんだつてー」

「仕方ないとはなんだ、仕方ないとは！」

「だつて、今のドズルの役職を全部、思い返してよ」

カナリアは濃い目の珈琲に砂糖と牛乳を混ぜ込んで、クリームを増し増しに乗つける。

スプーンで形を整えたクリームに竹串とチョコレートソースでアクセントを付けた3Dラテアート、ザクⅡを生み出した。ちなみにこれはまだ開発段階にある新兵器であり、つまり、割と冗談では済まされないレベルの機密漏洩である。

最後に削ったチョコレートを塗せば、出来上がりだ!

写真。パシヤーツ! 画像送信!

「ジオン公国軍大佐。首都バンチ司令部司令官、士官学校校長。新兵器開発の監督責任者……」

「それだけ役職を兼任していたら、そりゃ不備も出るつて」

ズズーツ、ぶはあつ! とカナリアは景気よくザクⅡを飲み干した。

ドズルは18歳の時から前線に出て戦っていた。門外漢であるはずの新兵器開発の監督責任者にも選出されており、その間も司令官になる為の教育を受けている。その二つだけでも手が回らないはずの状況で更に士官学校の校長にまで選ばれた彼は明らかにオーバーワークであった。

むしろ彼はよくやっている。今回の件だけを見て、怒鳴りつけるのは違うのだと彼を側で見続けて来たカナリアは考える。あと自分の役目に加えて、サスロの後を引き継いだギレンも多忙を極めており、ザビ家の人材不足が露呈する形となっていた。

ドズルは超人的な体力、ギレンはIQ240の超頭脳で今の体制を維持しているが、



いずれ限界は来る。

「その内、ギレンもドズルも倒れちゃうからね」

隠居中のお爺ちゃんやんが二人に言える事はないよ。とカナリアが続ければ「むう」とデギンは口を噤んだ。

「あとガルマが可愛いのは分かるけど、可愛がり過ぎるのもいけないよ」

「……息子を可愛がることの何が悪い？」

「息子だから。孫なら良いけど、親は子を叱らなきゃいけない時があるんだよ」

私のお父さんが教えてくれた。とカナリアは飲み干したカップで新しくラテアートに挑戦する。

「叱られた事があるのか？」

「頬を思いつきり叩かれた事があるよ」

「女子の頬をか！」

「女だからって関係ない。おかげで今の私があるのです」

カナリアが両手を腰において、ふんす、と胸を張ってみせた。

もし、この場にギレンが居れば「あと二、三発は必要だったのでは？」と口を挟んでいたに違いない。

しかしデギンは、言い返す気力が湧かず、ただ黙り込んでしまった。

「……老いてから子など作るものではない」

「作ったからには責任を取らないと、親ですらいられなくなるよ」

「その通りだ」

デギンは杖を片手に立ち上がり、何時もよりも風格のある佇まいで眼下の街を眺める。

「儂にはギレンの考えている事には付いて行けぬ。故に身を引いたのだが……まだ、この老骨に出来ることが残っておるのやも知れんな」

珈琲を淹れてくれるか? と問い掛ける彼にカナリアは静かに笑みを浮かべる。

「喜んで」

と彼女がラテアートで描いたのはジオン公国の国章。

それを受け取ったデギンは、物憂げに水面の絵を見つめた後、一息に飲み干した。

「……苦い、な」

「デギンには砂糖、いらないでしょ?」

「そうかな。いや、その通りだ」

目を覚ますのに丁度良い。と彼は笑ってみせた。

「ガルマを休ませた後、此処に来るように伝えておいてくれ」

「叱るだけじゃダメだよ?」

「そのくらいの事は分かつとる」

ああ、そうだ。とデギンがカナリアを見据える。

「目上に対する言葉の使い方、少しは叩き込んでやらんといかん」

「不肖、カナリア！ これから家事任務に従事する為、失礼いたします！」

ヒヨコ頭の少女は綺麗な敬礼を取った後、急務でございます。と呼び止める間もなく

早足で逃げ出した。

デギンは手に取ったカップに乗せられたラテアートのクリームを口に啜えてみる。

「……少し、甘いな」

笑みを浮かべた後、彼は受話器を片手に昔の伝手を辿ってみる事にした。

半月後、退職したドズルの代わりに士官学校の校長を新しく務めるようになったのは、ちよび髭の似合う恰幅の良い男であった。

名をコンスコンと云う。

彼は校長室の高価な椅子に座りながら、首を傾げる。

「どうして、私が？」

デギンが古い伝手を使った時、見込みのある男として紹介を受けた結果なのだが、その事を彼が知る由はない。

そんな彼が引継ぎのひとつとして任されたのは、モバイルスーツを用いた新しい戦術と

戦略の研究であった。このモバイルスーツの関連資料をドズルから受け取った時から彼の苦勞人としての人生が始まっている。

あからさまな軍事機密の山を紐解いた彼が項垂れるのは、数分後の話。地球に攻め込んだ時の想定や防衛計画までも研究の対象に含まれていた。

とりあえず彼は総帥府に人手を要求することを決断する。

なおカナリアはギレンに両頬を思いつきり抓られた。

## 27. 青春シンドローム

士官学校生による地球連邦のズムシティ駐屯軍への襲撃事件が昨晚の話。

翌日の昼には凱旋パレードが開催される事になり、同じ時間帯にジオン公国と地球連邦の間で会議が行われた。

そして、今は同日の夕方話になる。

士官学校、校長室。カナリアに作って貰ったサンドイツチを片手に後任の為に引継ぎ資料の作成をしていた。

体育館では、襲撃事件で亡くなった者達の弔いが行われている。あんな馬鹿共の葬儀なんて、公共機関がやるべき事ではないと思うが、ギレン兄がいうには民衆に対する体裁を取る意味が込められているらしい。あくまでも地球連邦と戦った英雄として扱ふ事によるプロパガンダ的な意味合いもあるのだとか。

まあ、こういう事はギレン兄に任せておくのが良い。俺は俺のやるべき事を為すだけだ。

「シヤア准尉、入りますー」

そんな折、威勢の良い声と共に青年が部屋へと入ってくる。

何度か写真を見た事がある。しかし実際に顔を合わせるのは、これが初めての事だ。ガルマから事情聴取をしている内に分かった事だが、襲撃事件の時に彼が考えた作戦の数々は見事なもので、かつて過激なダイクン派を相手取っていた時のランバ・ラルを髣髴とさせる程だった。

今、実際に彼の事を目の当たりにして、頭の奥に多少の引っかけかりを覚える。

「……何処かで会ったことはあるか？」

「はい、何度か。ドズル校長の顔は拝見させて貰っています」

「そういう意味ではない。もっと、昔に……」

はて、と惚けた顔で首を傾げる彼に「まあいい」と俺は本題に入る。

時間に余裕がある訳でもない。士官学校校長だけではない、この後には首都バンチ司令部司令官の引き継ぎ業務があるのだ。些細な違和感よりも、今は兎に角、業務を推し進める事を優先した。

執務机にて、手元の資料を確認しながら彼に辞令を伝える。

「貴様は待命——予備役編入だ。本学の履歴も抹消される。一兵卒に格下げと云う事だな」

彼が小さく溜息を零したのを確認し、だが、と付け加えた。

「ある程度の内情は知っている。ガルマの身代わりで割を食わせてすまないな。数年以

内に階級をひとつ上げた上で呼び戻すことを約束する。なんなら配属先の希望を聞いてやってもいい」

「……随分と買ってくださいっているようですね」

「兵營襲撃の際に負けてしまうのが最悪の展開だったからな。あそこで勝利したから治安出動を免れたと言っても良い」

出来る事ならば、ガルマの相方として同じ場所に配置してやりたかった程だ。

しかし襲撃事件には、明瞭な黒幕が居なかった。事件の中心人物といえば、ガルマかシャアの二人であり、どちらか一人を処分しておかなければ、地球連邦に対しての示しが付かない。……ここでガルマを処分してしまつては、あの会議やギレン兄のプロパガンダ。キシリアのパレードが意味をなくす。

消去法的にシャアを処分する他になかった。

処分といえば、俺は校長をクビになるし、司令部の地位からも追われる事になる。来年明けに少将へと昇進する事になっていた話も消えてなくなり、半年間の減棒まで言い渡されていた。どうか給与ゼロである。まあ実家が太いので給与がなくなるとも実害はないのだが、体裁的な節制は求められる事にはなる。

その上、単身でア・バオア・クーに赴くことが決まっていた。

ダーク・コロニーの面々はソロモンに配属だ。

「ほとぼりが冷めるまでは、ズムシティには置いておけん。サイド3からも出た方が良いかもな……それで、お前は、何処か行きたい場所はあるのか?」

俺の事はどうとでもなる。問題は、コイツだ。

シヤアは飄々とした態度を崩さないまま、僅かの間を置いて口を開いた。

「……地球へ、行ってみようかと思っっています」

「地球にか」

「はい、この機会に」

「ふむ、偉いな」

俺は少し考え込んだ後、「頼まれごとをしてくれないか?」と手元の資料を眺めながら告げる。

「頼まれごと、ですか?」

「地球の地理や気候、地形に関する資料が欲しい。スペースコロニーとの違いをレポートで提出してくれるのであれば、旅をするのに不自由しない程度の路銀も付けてやる」

「……それは、ありがたいのですが……」

彼は言い淀んだ後、覚悟を決めたように問い掛ける。

「失礼ながら、ドズル校長。このまま私が軍を離れる可能性を考えていないのでしょうか」



か？」

「……軍を辞めたいのか？」

「いえ。ですが可能性のひとつとして考えています」

サングラスに隠れた彼の目を探るように見据える。

あまり軍に執着していないのは、本当か。反連邦の機運に熱狂して入学する他の生徒とは違う雰囲気を感じ取った。

だからこそ軍に残って欲しいのだがな。と今、手に入らない事に溜息を零す。

「最悪……そうなくても構わない。いや、お前には、軍属になつて欲しいのだがな」

「この場では、期待に応えられず申し訳ありません」

「ハッキリとした物言いをする奴だ」

変に媚を売ってくる奴よりも余程、気持ちが良い。

「構わん。その時は、その時だ。だが、レポートは必ず出せ。それが条件だ」

「寛容な処置をありがとうございます！」

「シャアは踵を打ち鳴らして敬礼を取る。兵卒として除隊します！ お世話になりました、大佐

殿！」

「ああ、元気でな」

彼は一度、背を向けた後に「あ」と今思いついたような声を上げる。

「大佐殿。配属の件ですが、希望があります」

「図々しいな。まあ良い、希望を聞くと言ったのは俺の方だ。言ってみろ」

「はっ！ 現役として再召集される際には、モビルスーツのパイロットの任に当ててください」

「……モビルスーツ。聞き間違いではないな……誰に聞いた？」

いや、と苦虫を噛み締める。

「ガルマに決まっているな、あの小僧」

機密漏洩はカナリアだけにしておけと——メールにはモビルワーカーとして、通してあつたけどな。

「わかった、留意しておく。ただし訓練は厳しいぞ」

「ご配慮に感謝しますっ！ では！」

そう言つて、彼は扉の向こう側へと消えていった。

……やっぱり何処かで会つたような気がする。しかし俺はテキサスコロニーには行つた事がないし、アズナブル家とも縁がない。誰かと間違えているのかも知れない。そこまで考えた時に「ああ、あいつか」と金髪の悪ガキを思い出した。

キャスバル・レム・ダイクン。旅客機の事故に巻き込まれて亡くなったダイクン家の

遺児。……あれはキシリア機関。というよりもサスロ兄の遺志で行われた暗殺だったのだが、まあ、もう少し大人しくしといってくれば、もつと長生きも出来ただろうに……知った時には後の祭り、今でも悔やまれる事件のひとつだ。

「政治は嫌だな、サスロ兄。だが政治を知らねば、守れない命もある」

キヤスバル・レム・ダイクンの件は、自分の力のなさが招いた結果だと戒めている。

「次にゼナ・ミア准尉、入ります！」

その言葉を聞いた時、少し待て。と俺は彼女が入るのを止める。

手鏡を片手に髪を整える。鼻毛が出ていないかもチェックし、その後で「入ってよし！」と威勢よく伝えた。

彼女と共に入って来る二人の軍人を下がらせて、二人きりの空間を作る。

「……………」

戸惑い表情を浮かべる彼女を前に、俺は視線を右往左往とさせる事しかできない。

前々からギレン兄に言われている事がある。それは所帯を持つ事であった。ザビ家の跡継ぎは作っておかなくてはならない。と迫って来る長兄に「ギレン兄の方こそ所帯を持ってば良いじゃないか」と言った事がある。

兄は小さく笑みを浮かべると「私はサディストだ」と聞きたくもない兄の性癖を知らされた。

「じゃ、じゃあキシリアは？」と問い掛けた時は「アイツも同じだ。縄で縛り、鞭で叩くのが趣味だ」と身も蓋もない事を口にして「スキヤンダル待ったなしだな」と気障っぽく肩を揺らして笑うのだ。

頭が痛くなる。そんな兄と妹の性癖のせいで、俺にお鉢が回って来たという訳だ。ちなみにガルマは、まだ若い。との事。

「……………」

俺は、自分でも分かるように強面だ。

生まれてこの方、カナリア以外の異性に好かれた覚えがない。そのカナリアは今、13歳。俺は26歳だ。事案にも程がある。そもそもの話、今日まで妹として扱ってきた彼女を今更、恋愛対象として見ることでできないという事情もあった。あとランバ・ラルが義父になるのは、御免被る。という思いもある。

年齢以外の諸々の事情を含めても、カナリアはありえない。

……正直な話、結婚願望はある。

モテたいと思った事もある、今もモテたいという願望は持っている。しかし、この顔ではナンパしても相手を怖がらせるだけだ。実際に声を掛けて、事案になりかけた事もある。だから、俺は、俺の事を恐れない良い女でも居れば考える。とお茶を濁してきた。しかし、ア・バオア・クーへの転属が決まった時、唐突にギレン兄が最後通告をして

来たのだ。

「ア・バオア・クーに行けば、出会いはないだろうな。安心しておけ、こちらで選んだ嫁を送つてやる」

そういう事情もあつて、俺は早急に嫁探しに奔走せざるを得なくなつた。

俺にだつて、好みはある。前提条件として、俺の顔を見ても臆さない度胸がある事。絶世の美女だとか、そういうのは求めていないが、愛嬌がある方が好みだ。できれば、優しくしてくれる相手の方が良い。等と色々と考えながら襲撃事件の書類整理を行つていたところ、ゼナ・ミアの写真を見つける。

そこで思つたのだ。あ、良いな。と。

彼女は18歳、俺との年齢差は8歳。これなら、まあ、珍しくもない年齢差だ。

ア・バオア・クーへの転属まで一ヶ月もない。

「……今日は、玩具を持つていないな?」

「はいっ!」

威勢の良い声、見え隠れする気丈さが好ましい。

「今度の事で俺は、ここの職を辞する事になった。監督不行届、引責辞任。つまりは、腹切りだ」

「は、はい……」

追い詰められていた俺は、一世一代の大勝負を決断した。

艦隊決戦主義。玉砕覚悟の一発勝負。策はない、確かに政治は学んだ。しかし、これが俺だと思ふから小賢しい事をせずに真つ向勝負に打つて出る。

だって、誠意を見せるのが告白というものだと思うから、

誠意を見せずは、成るものも成らず！

「こんな男だが、時には、傷つくこともある……人に慰めて貰いたいと思う時も、ある……」

ポツリ、ポツリと並び立てる言葉には嘘偽りはない。

ギレン兄に嫁を持つように言われ続けた事情もあり、それも語り聞かせた。

追い詰められたから今、俺は告白をしているのだと。

「俺は……ザビ家の人間だ。いずれ、妻子を持たなくてはならない事は分かっている。しかし、誰でも良いという訳ではない。ギレン兄の事だ、良い縁談を持つて来てくれると信頼はしている。だが、傍に誰が居て欲しいのか……追い詰められて、初めて真剣に考えた時、思い浮かんだのが君の顔だった」

その上で、俺は思いの丈を口にする。

「不純な思いがないとは言わない。だが、こんな俺だが一応、それなりに顔も広い。色んな異性を知る中でパツと思ひ浮かんだのが君であり、もう他には誰も思ひつかなくつ

た。俺は、この好機を逃したくはない！」

意を決して放った言葉は、余りにも月並みだった。

「毎日、俺の為に味噌汁を作ってくれないか？」

そう問いかけた時、彼女は嘔き出した。

「ふふ……失礼しました。しかし、それは少し古いのでは？」

むう、と顔を真っ赤にする俺に、彼女は背筋を伸ばして笑みを浮かべる。

「思っていたよりも校長……いえ、貴方は愛しい人だったのですね」

薄っすらと赤らめた頬で答えた。



同時刻、僕は父親のデギンに叱られる事になった。

足腰の弱くなった体で、父さんは僕の頬を張った。ロリコン疑惑でシャアの張り手を

受けた時よりも痛くはなかったけども、それでも心の奥底に響く痛みだった。父さん

は、サングラスを外し、真剣な目で僕を見た。目と目で向き合った。

「ごめんなさい。と僕は痛む頬で謝るしかなくて、

「違うのだ、ガルマ。謝らせたい訳ではない」

父さんは下唇を噛み締めた後、大きく息を吐いた。そして、ゆっくりと椅子に腰を下

ろす。

「ケガがなかったのはなによりだ」

サングラスを掛け直した父さんは、優しく微笑んだ。

「ひとつしかない大切な体だ、粗末にしてはならん。親不孝者にだけはなつてくれるな」

僕に向けた言葉は、それだけだった。

少し寝る。と彼は椅子に身体を預ける。

僕は黙って頭を下げた後、部屋を出た。

「……悔しいな、僕は何時まで経つても子供のままだ」

自然と出てきた涙が何を意味するのかよく分からない。

服の袖で拭い取り、一人で部屋に戻る。

あの時は、ああするしかなかった。

でも、それがどれだけ周りに心配をかける事だったのか、理解できていなかった。

どう足掻いても同じ結論だったと思うけど、

それでも、ちゃんと理解して、行動できていた訳ではなかった。

部屋の机には、少し冷めたラテが置いてある。

水面には、金糸雀のラテアート。誰が淹れたのか一目瞭然だ。

それを一気に飲み干した。

甘かった。少し胸がホツとする。



ふと携帯端末を見ると、シヤアからのメールが入っていた。どうやら、ほとぼりが冷めるまで地球に行くようだ。

彼も僕のせいで迷惑をかける事になってしまった。巻き込んでしまつて、本当に申し訳ない。

僕は、まだ独り立ちできていない。

だから周りに迷惑をかける、不要な心配をさせる。

本当の意味で男にならなきゃいけない。

「……そういえば、シヤアの人探しの件も考えておかないとな」

シヤアから聞いた話によると、彼の義妹はカナリアという名前のようだ。

年齢は今年で13歳、金髪少女。これだけ聞くと首都官邸でメイドをやっているカナリアが思い当たる。しかし、シヤアから聞いた人物像を鑑みれば、別人だという事はすぐ分かる。

シヤアが語る彼の義妹は、常に人を食つたような性格をしており、自由奔放。勤は良い癖に相手を気遣う事をせず、悪戯ばかりに精を出す。他人を貶める事ばかりを考えるクソガキで小悪魔のようだった。悪い意味で良い性格をしている。との事だ。

とてもじゃないが僕の知るカナリアとは、似ても似つかない。

そもそもだ。カナリアは幼い頃、ダイクン家に引き取られていた。

彼女の幼馴染と呼べる相手はキャスバル・レム・ダイクンとアルティシア・ソム・ダイクンの二人だけであり、そのキャスバルは事故で亡くなっている。彼女の口からシャア・アズナブルという名前を聞いたことがない。実際、彼女にシャアの名前を出して聞いてみても知らないと言っていた。

だから、シャアの義妹であるカナリアとザビ家のカナリアは、別人だと断言できる。「それに……こんな気遣える子が、シャアのいう義妹と一緒にいるはずがないじゃないか」  
食器を返しに行くついでに、お礼のひとつも言っておこうと部屋を出る。

ありがとう。と言った僕に彼女は、優しく頭を撫でて来た。

「ぼ、僕は年上だぞ!？」

「ムキになるから坊やって言われるんだよ」

彼女はキヤツキヤと笑いながら食器を両手にキッチンへと消えていった。

……別人のはずだけど、良い性格をしているのは似ているのかも知れない。

## 28. 問題児も、三人揃えばなんとやら。

襲撃事件から数ヶ月後の話。

ドズル前校長が使っていた屋敷は今、社宅として現校長のコンスコンが利用している。

リビングには多量の書類が持ち込まれ会議室となっており、壁には大きなホワイトボードが幾つも用意されていた。その全てがピツシリと文字と写真で埋め尽くされた軍事機密の塊だ。本棚が幾つも増設されており、資料をファイルに綴じたコーナーもある。

会議室と呼ぶだけでなく、資料室とも呼べる一室。四人の男達が熱く議論を交わす。

その中の一人が、社宅の借主であるコンスコンだ。士官学校の校長も務めるジオン公国、国防軍の大佐である。

恰幅の良い身体付きでちよび髭が似合う彼は、珈琲を啜りながら手元の資料に目を通す。

「コンスコン、地球の資料はまだ届いていないのかな？」

そんな彼に問いかけるのは、癖のある髪をした痩せ形の男。名をマ・クベと云う。

彼もまた国防軍に所属する人間であり、階級は中佐。地球に対する知見の深い人物として、デギンが招集した一人だ。

葡萄ジュースの入ったグラスを指先でチンと鳴らし、この場に居る全員を苛立たせる事得意技にしている。

「地球に入った調査員が地球の書籍を買い込む予定になっているはずなのだがなあ」

「検閲、検閲と全然、送られて来ないではないか。これでは作戦も立てるところか、考えることもできん」

「ジオン公国の国立図書館も、意外と残っていないものだ」

ジオン公国には、宇宙で自活する自分達こそが優良人種と考える土壤がある。

かつてはジオン・ズム・ダイクンが提唱した「優性人類生存説宇宙に進出したスペーノイドこそが選ばれた民であるとする説」から始まり、今では「ニュータイプ論」という名で民衆に広まっていた。

故にジオン公国の国民性は地球の歴史を軽視する傾向にある。

この事実を憂いたのがマ・クベであった。戦術の上に戦略があるのは、今時の子は誰もが知っている。しかし戦略を決定するのは外交が強く関わっており、外交を左右するのは経済。経済の更には、文化がある。経済と外交の順番は、人によって上下する事があっても、文化が最上位にあるのは誰であつても変わらないはずだ。そして、文化

とは、歴史だとマ・クベは考える。

築き上げてきた歴史が、国の基盤を確かなものにするのだ。

「歴史、歴史と……まるでジオン公国が地球連邦に劣っているかのようなわけではないか」

そう口を挟んだのは、輝く頭部と口髭を特徴に持つダンディーな男だ。彼は、エギーユ・デラーズ。戦術から戦略まで幅広く知識を修めており、兵站や補給にも造詣の深い人物でもある。

「地球連邦に劣っているとは言いませんよ。しかし宇宙の歴史はまだ三四半世紀程度、それにスペースノイドが地球を起源に持つ民族なのは紛れもない事実。地球の歴史を知る事は、そのまま私達自身を知る事にも繋がるのですよ」

これだから浅学の輩は困る。とマ・クベは指先でグラスをチンと弾いた。

そんな彼にデラーズは静かに拳を握り締める。

デラーズはジオン公国を愛するが故に、地球の文化を重要視するマ・クベとの相性が致命的に悪かった。

「まあ、いずれにせよ。地球の地理が分からなければ、満足に地球侵攻計画の立案もできんわな」

そう零すのはコンスコン。現に今日まで彼らを取り組んで来たのは、宇宙における侵攻計画。もしくはミノフスキー粒子の電波障害を用いた新しい戦闘教義の研究であつ

た。そんな三人の会話を耳に入れず、自分の研究に関連する資料に没入する男がまた一人。彼はギニアス・サハリン。凋落したジオン公国の名家、サハリン家の嫡子である彼は、デギンの取り計らいで技術将校として招集されている。彼は今、ミノフスキー粒子の特性を、戦術的且つ効果的に運用する方法を肅々と模索している所であった。

「艦隊の主砲がメガ粒子砲となった今の時代、たつた一度の攻撃を受けるだけでも致命的だ。これだけ武装が強くなってしまった以上、散開し、機動戦に持ち込むのが常套手段であるが……それでレーダーを用いた自動照準を用いられるよりもミノフスキー粒子の散布下でジツとしていた方が被弾率が低い。故に時代は更に逆行し、艦隊運用は陣形を組ませた方が効率が良いのだろうか。出来る限り攻撃を一点に集中させて……攻撃の密度を上げる事を……」

ぶつぶつと彼が独り言を呟くのは何時もの事、残った三人も必要のある時だけギニアスに話を振るようにしていた。

若干、混沌とする環境にて、コンコンと部屋の扉がノックされる。失礼します。と部屋に入ってきたのは緑がかった銀髪の少女、彼女はアイナ・サハリン。ギニアスの妹である。彼女の両手にはトレーが握られており、淹れ立て珈琲の他に洋菓子が用意してある。

少し休憩を挟んでは如何でしょうか。という彼女の言葉に、いつもすまないな。とコ

ンスコンが返す。

そんな二人のやり取りにデラーズとマ・クベは一旦、矛を収めた。

ギニアスは妹を一瞥するだけで、すぐ自分の世界へと戻る。そんなどうしようもない兄の手に、アイナは珈琲と砂糖を添える。

「ああ、そういえば——つい先程、キシリア機関の者から荷物が届きましたよ」  
「なんだと？」

マ・クベは珈琲を優雅に一気飲みした後で、そそくさと部屋を出る。

その彼の後をデラーズも続く。ンスコンだけが、ゆつくりと珈琲を堪能する。

「すまないね、アイナ君。落ち着きのない人ばかりだね」

「いえ、そんな……私の事は別に……お仕事頑張ってください」

「ありがとう。ところでこのクッキー美味しいな、銘柄を教えてくださいも？」

「あ、それは私の焼いたもので」

「ほう、大したものだ。君が此処に来てくれて本当に良かったよ」

ンスコンは、美味しい。美味しい。と肥えた腹を更に育てる。

「少し良いかね？」

幾つかの資料を手には部屋へと戻ってきたマ・クベはしかめっ面でンスコンを睨みつけた。

「どうしたかね?」

「これはなんだ、小学生向けのものではないか」

そう言つて彼が突き出してきたのは、確かに子供向けの動物図鑑であつた。表題として印字されている文字も「どうぶつずかん」と全てがひらがなで書かれてしまつてゐる。そのすぐ後で段ボールを抱えたデラーズもまたリビングへと戻つて来た、眉間に皺を寄せて。その中身は、小中学校で使う参考書といったものばかりであり、これを資料と呼ぶには余りにも稚拙であつた。

マ・クベとデラーズが憤慨する中でギニアスは、マ・クベが手に持つていた動物図鑑の中身にパラパラと目を通す。

「数字や文字を見るよりも余程、わかりやすいな」

子供向けに写真が多く使われた動物図鑑。そこには地球の生態系を通じて、地球の風景が分かりやすく掲載されている。

コロニーでは珍しいサバンナや湿地帯、銀景色。一目見るだけでも行軍が難しいと分かる地形にマ・クベとデラーズが息を呑んだ。他にもサバイバル技術の指南書があり、生水を飲むと危険なので一度、沸騰させる必要があるといった事などが書かれてある。蚊を始めとした虫対策、日本の歴史に詳しいマ・クベは知識として、蚊と鼠が病原菌となる可能性を知つていた。



スペースコロニーでは、伝染病は半ば根絶されてしまっているが、これが地球となれば話は別だ。段ボールの中身が、途端に宝の山のように思えてくる。

勿論、これで全てが学べるとは考えていない。しかし、触りとしては、これ以上に効果的なものもない。

「今の緊張状態だ。余りにも露骨なものでは、今までのように検閲されるだろうしな」

呟いたのはギニアス。実際、これは孤児院の寄贈用としてグラナダを経由し、サイド3に持ち込まれている。

「……………これ、他の部署にも送っておいた方がよくないか？」

コンスコンの呟きにマ・クベとデラーズが頷き返す。

こうして地球の諜報員によって、サイド3に齎された小中学生用の教材や入門書はジオン公国の上層部に広く知れ渡る事になる。

新婚のドズルは地球の資料よりも擬態の為に詰め込んだ絵本等の方が喜んだという話は、ミンナニハナイシヨダヨ。



アマゾナス州、州都。マナウス。

ドズルから十分な路銀を受け取った私は地球の各地を自由気ままに散策する。最初はヨーロッパから始まり、地球連邦の重要拠点を辿りながら東へ東へと渡って東洋の島

国からアメリカ大陸に移ったのが先日の話だ。ズムシテイで見つからなかった三年間、もしかするとカナリアは地球に降りたのかとも考えて、戦争が起きる前に探すつもりで来たけども、手掛かりひとつ見つけたりはしなかった。

意気消沈とする中、通り道で軍事基地の反対デモを見た。看板にはジャブローの文字が書かれている。

そんな彼らの熱狂を素通りして、気晴らしに立ち寄ったカジノでルーレットを少し嗜んだ。結果は惨敗、一週間分の生活費が高々三十分程度で消し飛んでしまった。まあ、こんな日もある。と席を立ったすぐ後で頭にターバンを巻いたマフィアの男が椅子に座った。

別に、その男の事が気になった訳ではない。

興味を持ったのは、彼の後ろに立つ褐色肌の少女。

彼女は男に指示を出す、一目賭けだった。つまりは36分の1を三連続で当てた後、ディーラーを交代した後で二連続で外す。

特別な能力を持つ少女。

特別な能力といえば、思い出すのは可愛くない方の妹だ。

妹もまた、伏せたトランプの数字と絵柄を絶対に当てる事ができた。

## 29. ボーイ・ミーツ・ガール

少し大きめのクルーザーなら停められる程度の棧橋にて。

褐色肌の少女を見つける。別に彼女を目的に探していた訳じゃない。カナリアを探索す為に歩き回っている時の事、ふとした瞬間に、なにか引つ張られるような感覚がしたので足を運んでみた。すると不貞腐れた顔で棧橋に座る彼女を見つけた。その手に持った写真を見る彼女の目が悲しそうだったから、放っておく事もできなくて、もう亡くなってしまうた方のシヤアの真似事を試みる。

片手を挙げて、気さくな感じに「やあ、また会ったな」と告げれば、彼女は私を一瞥した後は無視をした。

……もう放つておいても良いかな。と思いはする。

しかし、彼女の腫れた頬に気付いてしまったので、ただ立ち去るのも憚られた。

背後に周り、彼女の持つている写真を盗み見る。

どうやら彼女の家族のようだ、大勢いる。しかし、写真は水に濡れて、ボヤけてしまっている。服装から察するに「中東か？」と問い掛ければ「ムンバイ」と返事があった。

「ああ、インドか。カレーが美味かったな」

「知ってるの?」

「数ヶ月前まで旅をしていた。インド門も見た」

歩き回ったのは都心部ばかりだが、と付け加える。

小憎たらしい妹を探すのに見落としやすれ違いの心配はしていない。何故ならカナリアが通った後には必ず爪痕が残る。その場に居れば、隠しきれない存在感を放つ。あの妹は一度、接するだけでも強烈なインパクトを残すし、彼女自身も大人しくしているような性格でもない。

そう確信しているので適当に聞き込みをするだけで十分に調査できていると断言してきた。

彼女の隣に腰を下す。

「近付かないで」と睨みつけられた。威嚇する目、その瞳から私の身を案じている事が読み取れた。避けられている訳ではなかったので、距離を詰める。

その分だけ、彼女も距離を取った。

「私に話しかけて痛い目にあつた人、たくさん知ってるのよ」

「それは恐ろしいな。その怖いおじさん達は、あの船に?」

丁度、停泊中の船を見やる。彼女は俯き、押し黙った。

「……その写真、大切なのか?」

「大切よ」

「家に帰りたいと思つたことは？」

「……それは良いの」

私が居るよりも、お金を送つてあげた方が良いんです。と答える彼女の横顔を見て、放つておきたくない。と、そう思つた。

「貴方には探し人が居るわ」

「ほう？」

「こんなところで道草を食つている場合じゃないはず、貴方には貴方の待つべき人の場所があるはずよ」

そう言つて、懐に写真をしまう彼女に「それはどうかな？」と返す。

「今の私には、自分の為に生きる目的がない。やるべき事も分からないままだ。幼い頃に生き別れた義妹も居る。彼女を見つければ、何か変わるかも知れないと期待しているが、てんで足取りも掴めない状態だ。三年前に私のせいで、友人と呼べる男を亡くした事もある。こんな私だが、死んでしまえば悲しんでくれる相手がいる。こんな私の為に悲しんでくれる妹達の為なら今少し生きても良いと思つている」

妹二人は余計なお世話と言うだろうがね。と笑つてやれば、彼女は初めて私に同情的な視線を向ける。

「ララア!!」

その時、ターバンを頭に巻いた男が大声で歩み寄ってきた。

「お前は、また! こんな、男とオツ!!」

俺は立ち上がり、その男に立ち向かった。まるで痲癩を起こしたDV彼氏のような。と思いつつ、彼の振り上げた手を右手で受け止める。

「良い船をお持ちだ。安い買い物じゃなかったはず……」

「……お前ツ!」

「今、彼女から聞いたが、ずっと仕送りを続けているらしいな。どれだけ彼女に金を渡し  
ている?」

「お前の、知った事では……!」

「彼女の稼いだ金で豪遊するのは、さぞかし気分が良いんだろうな!」

彼の服の袖を取り、そのまま一本背負いの要領で地面に叩き付けた。

カヒュツ! と息が零れる音。

海の内こう側から水を掻き分けるエンジン音が聞こえてくる。

武装船舶。と私が確認した時には、ララアが抱きつく形で私を押し出していた。直後、機銃を発砲する音と共に、停船していた彼の大型クルーザーが破壊される。爆発音と共に  
に棧橋が崩れる。

ラリアと共に逃げる私の背後で、男は海に転がり落ちてしまった。

「君の旦那は、随分と恨みを買っていたようだな！」

「違うわ！ マナウスのマフィア、私のことをずっと狙っているの！」

「ええい！ 兎に角、今は逃げるしかないな！」

路上に停まっていたタクシーに駆け込んだ。

狼狽する男。私は輪ゴムで留めた札束を叩きつけて、早く走り出すように命令した。人の多い場所へ。十分に距離を取った後、余った資金分で郊外まで走るように指示を出す。さりげなく、飛行機でインドに向かう事も口にしておいた。携帯端末で飛行機の予約を取る。

その時には、わかりやすく彼女の名前を使った。

今は市内にあるラブホテルを利用している。

こういう場所は、身元がバレないように配慮してくれるので、身を隠すのに丁度良かった。

備え付けのシャワーを浴びて、部屋に戻る。

ダブルベッドの上に座る褐色肌の少女は、そわそわと身を揺らす。

「どうした？ シャワーは使わないで良いのか？」

「こんなところに連れ込まれて、落ち着いていられますか！」

「普通のホテルだと足取りを掴まれるから仕方ない」

部屋に備え付けの冷蔵庫から飲み物を取り出し、椅子に座る。

「別に手を出すつもりはない。望むのであれば、今から一人で外に出ても良いが？」

「今更……ッ！ 拾ったのですから、最後まで面倒を見てください！」

「面倒を、か。まあ妹があと一人、増えた程度では気にしないがな」

「何か飲むか？」と彼女に問えば「頂きます」と答えたので「自分で好きなものを取つてくれ」と促した。

瓶に入ったオレンジジュースの蓋を開けるのに苦戦する彼女を眺める。あまりにも上手くできないので、彼女から栓抜きを受け取つて代わりに開けた。

嬉しそうに微笑む彼女。本当に家に帰るつもりがないのなら、と前置きした上で問い掛ける。

「私に、付いて来るか？」

「……迷惑に思っているのでは？」

「可愛い妹達のおかげで面倒と迷惑には慣れている」

「本当に？」

「嘘かどうかなんて、君にはすぐ分かるだろう？」

そう問い掛ければ、彼女は嬉しそうに目を細めた。



「私の特別な力を見た人は皆、薄気味悪く思うか、利用しようと考えたわ」  
「特別だとは思っている」

「でも、私の事を力ではなくて、私自身を見てくれようとしている」  
「私は、知っているだけだ」

あの小憎たらしい妹の事を思い出す。

特別な力を持っているからといって、その精神性までも特別だとは限らない。  
彼女から特別な能力を除けば、ただの悪戯好きのクソガキだ。

「私と同じ能力を持っているのに……そんな風に思って貰えるなんて嫉妬するわ」  
「アイツは、家族だ」

「ええ、そうね。それも含めて、羨ましいいわ」

私の、家族は、と彼女は俯いてしまった。

「……遠い、場所に行こうと思っている」

「どこ？ 遠い場所って？ アメリカ？ それとも日本？」  
「もつと遠い場所だ」

天井を見上げる。地球に降りてからの半年間、もう主要都市は見終えていた。

なんとなく分かっていった。地球には、カナリアは居ない。地球に来た時から感じていた事、特に確証はないけども確信している。

ならば、もう、これ以上は地球に居続ける意味もない。

幸いにも、地球から宇宙に出る分には、面倒な手続きは必要ない。

金さえ払えば、身元不明でも旅客船に乗る事ができる。精々、持ち物検査をされる程度だ。

それは一人でも多くの人間を宇宙へと送り出したい地球連邦の怠慢だった。

翌日、宇宙へと飛び出す。

褐色肌の少女。彼女の名前はララア・スン。

カナリアと同じ不思議な能力を持つ少女は、カナリアとは似ても似つかない性格をしていた。

特別な能力を持っているからって、特別な人間になれる訳ではない。

カナリアも、ララアも、普通の女の子なのだ。

◇

宇宙に戻った時、ア・バオア・クーに転属したドズル大佐の指示で私はダーク・コロニーの配属となった。

モビルスーツ部隊の編成と訓練は全てソロモンで行われる事になっており、モビルスーツ開発を終えたと同時にダーク・コロニーは役目を終えた。はずだったのだが、コンソコンを始めとした四人の男の要望により、今はモビルスーツを用いた実験施設とし

て再稼働をしている。

そこにモビルスーツパイロットの訓練兵として赴くことになった。

階級は准尉、今年中に少尉への昇格が内定されている。

今はパソコン相手に、地球での環境についてのレポートを作成している。

出航の際にカメラは没収されてしまった。監視も少しずつ厳しくなっている。レポートと格闘しているとラアアがココアを淹れてくれる。此処はパイロット専用の士官室、本来は一人で使う用の部屋に二段ベッドが設置されていた。ルームメイトには今、ベッドでココアの入ったコップに、ふうふうと息を吹きかける褐色肌の少女。ラアア・スンである。

何を思ったのか。あのドズルは、男女を同じ部屋に詰め込んだのだ。

「あら、如何なさいました？」

視線が合えば、彼女はクスクスと肩を揺らす。

頭を抱える。そういうえば、ドズルは結婚したばかりという話だったな。

ええい、色ボケしよって！　なんていう仕打ちだ！

元教職者としての肩書が悲鳴を上げているぞ！

「私は気にしていませんよ」

「私が、気にするのだ！　まだ16歳の娘と一緒に居ると知られてみる、ガルマがなんて

「うーか!？」

「ガルマ……まあ! 可愛らしい人なのですね」

「ララア!？」

「准尉、御安心ください。ただ私は貴方にも家族以外の友達がいるようで安心しているだけですわ」

私は、くしやり、と自らの髪を掻き上げる。

このままでは、どうもいけない。カナリアは知った上で悪戯を仕掛けて来たが、彼女の場合は知った上で揶揄ってくる。性質が違うだけで、性質が悪い事には変わらない。この能力の事を「ニュータイプ」と定義するのは好きじゃないが、もしやニュータイプ能力を持つ人間というのはクソガキしか居ないのではあるまいな？

いずれにせよ、だ。主導権を取られたままでいるのは、私の趣味ではない。

私はパソコンを操作し、加工した画像をプリントアウトする。

「まだ作業途中だが」

そう言つて、プリントした用紙を彼女に見せる。

「まあ、これは!」

「本当は写真に印刷した上でラミネート加工をしてから見せるつもりだったんだがな」

「准尉、ありがとう!」

彼女は、年相応の笑顔を浮かべて、家族の写真を印刷した用紙を胸に抱き締める。

「そこまで喜んでくれるのであれば、頑張って編集した甲斐もあるというものだよ」  
綺麗になった画像をニコニコ顔で見つめる彼女を確認し、私はレポート作成に勤しんだ。

彼女が私の事を、シャア・アズナブルの名で呼ぶ事はない。

たぶん、これは分かかっていてやっていることだ。

### 30. 幸せは、傍にある。

目覚めは珈琲の一杯で始まる。

部屋に持ち込んだ電子ポットで水を温めて、珈琲の粉の入った袋を開いた。

その香りが鼻先を擦り、まどろみかかった意識の覚醒が促される。珈琲の粉をドリッパーに移し替えた。最初に少しだけ、湯を垂らして蒸らした後で二杯分の湯を注ぎ入れる。

珈琲の香りが部屋の中に漂う頃、二段ベッドの上段にいるラレアがヒョッコリ顔を出す。

私の淹れる珈琲は味が濃くて、苦味が多い。それをたつぷりの砂糖と牛乳で薄めたものを「おはようございます」と眠たげに目を擦るラレアに手渡した。牛乳は冷蔵庫に入っていたものだ。丁度良い具合に冷める為、彼女でもすぐに飲むことができる。

手元の携帯端末を操作する。

ニュースを確認し、それを確認した後は適当な書籍に目を通す。

「何を読んでいるのかしら？」

頭上から問い掛ける彼女に「星の王子さま」と答えた。

地球に居る時に幾つか購入しておいた有名な著作物の一つ。まだ地球から宇宙に飛び出せずにいる人々が、この星々の世界に夢想を抱いていた時に書かれたものだ。「可愛らしいタイトルね」と答える彼女に「まあ、童話に近いかな」と返す。色んな星々を渡り歩き、様々な偏屈家との出会いを経て、地球へと辿り着いて、最後は最初にいた星に帰る。そんな王子とぼくの出会いと別れの話だった。

私が読み終えた小説を机の上に置くと「少尉！」と彼女がベッドの上から飛び降りて来た。

そんな彼女を咄嗟に受け止めてやる。

「いけないな、ララア。そんな事をしていては怪我をする」

「あら、少尉なら受け止めてくれると信じていましたわ」

「お手柔らかに願いたいな。何時でも受け止められるとは限らない」

「大丈夫よ、少尉なら絶対に受け止めてくれるから」

「そこまで信頼されると一度、落としてみたくなる」

ララアが私の首に抱き着いて、離れない為、仕方なしに彼女をお姫さまスタイルで抱えたまま洗面台に向かった。

「不自由はないか？」と問い掛ける。すると彼女は、おかしそうに笑って「今が一番、幸せですわ」と返してきた。「そうか」と適当に聞き流した私は、彼女に身嗜みを整えるよ

うに促す。

彼女は名残惜しそうに床に足を付ける。

別々に使うコップと歯ブラシ。

彼女が使った後、何故か同じコップに差してある事が多い。

それを戻すと彼女は不機嫌に睨んでくる。

知った事ではない。

ああいう輩は、隙を作るとつけあがると相場が決まっている。

「……カナリア、まだ知らない難敵……そうまでして私の前に立ちはだかるなんて……」  
「あまり、無作為に人の心を読むとうとするのは感心しないな」

「少尉にしかしませせんわ。他の人の心なんて知りたいとも思わないもの」

ふん、と顔を背ける彼女を尻目に自分も自分で身支度を整える。

余談だが、アルテイシアも我儘を覚えた時は大変だった。カナリアがアルテイシアに色々と思いを教えていた事もあり、二人が結託すると手が付けられない。カナリアと別れた後もアルテイシアには手を焼いたものだ。

ララアが部屋で着替え出す前に一人、先に部屋を出る。

軍務がある時、食事は食堂で摂っている事が多い。

後からララアが追いかけてくる頃には食べ終わり、午前の鍛錬を終えてから昼食を摂



り、午後にはモビルスーツの操縦訓練に入る。モビルスーツを動かせない時は、シミュレーターを用いた訓練になる。

このシミュレーターのスコアには、ダーク・コロニーの前任パイロットのデータも入っている。

そこにランバ・ラルの名前を見つけた時は驚いた。ズムシティで幾ら探しても見つからない訳だと納得が行ったし、士官学校での三年間でカナリアが見つからなかったのも同じ理由だと察する。

パイロットとしての腕を磨き続ければ、ランバと接触できるかも知れない。

「いや、できるはずだ」

彼ならばカナリアの居場所も知っているはずだ。

幸いにもランバはダイクン派の人間。ドズルとの距離が近くとも、すぐザビ家の人間に報告をするような真似はしないはずだ。少なくとも私の立場を知る彼ならば、黙っていてくれる程度の配慮は期待できる。今、カナリアがどういう状況にあるのかは分からないが、それを知る為にもまずはランバと接触する必要がある。

今の環境に満足しているのであれば、それでも良い。

その時は、その時に考える。

「それにしてもこのプロト・ゼロという人物は……本当に、人間か？」

全てのステージでスコアトップを維持し続ける異次元のパイロット。あからさまな偽名はジオン公国、延いてはザビ家の隠し玉であることが見て取れる。そういえば、ズムシティにはニュータイプ能力を調べる特別な研究施設があるとの話を聞いた事があつた。

……もしかすると、そこにカナリアも居るかも知れない。

ドズルに頼めば、見学させて貰えないだろうか。ニュータイプ能力に興味がある。とても言えば、あのドズルなら入れてくれそうな気がするな。

兎にも角にも、今はスコアトップのプロト・ゼロを抜かす事を目標に訓練を続ける。数週間後、ランキングの最上段にはララア・スンの名前が新たに刻まれていた。

その数日後にニュータイプ研究所の見学許可が下りる。



地球連邦軍。ジャブローにある司令部にて。

「どうしたものかね」とゴツプが溜息を零し、角砂糖を何個か入れた紅茶を啜る。

彼の手元にはひとつの封書、これには地球連邦の諜報部門が集めてきた情報が書かれている。内容は、ミノフスキー物理学の権威であるミノフスキー博士がサイド3からグラナダを経由し、アナハイム・エレクトロニクス社（以下A E社）に亡命するという情報だ。

ゴツプは、ミノフスキー粒子を用いた技術には関心を持っている。

しかしモビルワーカーの兵器運用に関しては、懐疑的だ。

ジオニック社のモビルワーカーは、そのまま人間を大きくしたような人型の作業用機械だ。手先が器用という話も聞いているし、実際、月面の開発事業はモビルワーカーの開発から急激に効率が良くなっている事から作業用機械としては優秀だと思っている。

実際、月面都市グラナダを拠点にするA.E.社が「ジオニック社に後れを取って堪るか」と独占市場を恐れて、人型の作業用機械の開発に取り組んでいる。

この事からもモビルワーカーの有用性が認められていると言っても良い。

だが、人型は戦争に特化した形ではない。とゴツプは考えていた。

それは戦車が車高を低くする事に労力を費やしたように、戦闘機が装甲を捨てて、速度と機動力を重視するようになったように、戦争には、その戦場に合った適した形があるとゴツプは信じているのだ。

故にモビルワーカーは戦争の道具には成り得ない。仮に兵器運用をしたとしてもコストが見合わない。モビルワーカーを作っているよりも戦車や戦闘機を大量に作っている方が効率が良いに決まっている。

モビルワーカーは戦争の革新に足りえる存在ではない。とゴツプは結論を出している。

「とはいえ、ミノフスキー物理学の権威だ。現代科学の最先端にいる人物を見殺しにする訳にもいかないな」

ゴツプは、まだ宇宙のグラナダに滞在するレベルに指示を送る。

ミノフスキー博士の亡命を受け入れてくれ、と。そのすぐ後でA E社からの協力要請が地球連邦軍に届けられる。

モビルワーカーに対する認識が甘かった。

とゴツプが認識したのは全てが終わった後の話になる。



後世。ミノフスキー博士が亡命した理由に関して、様々な憶測が飛び交っている。

彼の弟子であるA E社のテム・レイ博士は、ジオン公国の技術力がミノフスキー博士を必要としない段階に入ってしまった為だと言っている。実際、ツダに使われた技術力を鑑みるにモビルスーツの開発に、必ずしもミノフスキー博士が必要なくなってしまったのは事実だ。しかし、それでもミノフスキー博士は優秀な科学者であり、その功績をジオン公国が軽んじるとは考えにくい。

また別の理由は、ジオン公国の軍事力が突出し過ぎるのを恐れて、それらの技術をもつて地球連邦への亡命を決心した。という話もあるが、これもまた考えにくい話だ。

そんな事をしてしまえば、より激化する事は目に見えている。

動機とは意外と単純なものである事が多く、それを社会が複雑にする。

ミノフスキー博士にはミノフスキー粒子の論文を発表した際に「そのような粒子は一度も検出されなかった」と現代物理学の権威から自分の論文の検証結果を出された過去がある。これによってミノフスキー博士は「ミノフスキー粒子は、あります！」という悲痛の訴えと共に学会から永久追放を受ける事になった。

業界から詐欺師の汚名を着せられた彼は、所属していた研究所からも追い出される事になる。路頭に迷っていたところで手を差し伸べてくれたのがザビ家の人間であり、以後、彼はジオン公国の保護下で研究を続けることになった。

何時か見返してやる。という執念が今のモビルスーツ開発に繋がっている。

そんな彼がミノフスキー物理学の権威と呼ばれるようになった後の話だ。

モビルスーツ開発の研究が一段落ついた時に彼が思ったのは、遠い地球の事であった。彼はサイド4の生まれだが、彼の両親は地球で生まれ育った過去がある。また故郷の地球に帰りたい。という両親の話を聞いて育った彼は、地球に対する強い憧れを持っていた。

彼がモビルスーツ開発に執念を燃やしていたのも、両親への恩返し気持ちがあった。

両親が生きている内に地球の市民権を得て、両親を故郷のロシアに返してあげるのが

彼の目的のひとつだった。それが目の前で潰されたのが先の論文発表の話である。そして、その時の物理学者は現在、ミノフスキー物理学の権威を追い出した愚か者として、世に知れ渡っている。

で、あれば、自分には、ジオン公国にいる意味はなかった。

義理はある。しかし、エレズムを信仰するジオン公国では、たとえ戦争に勝つても両親を地球に住まわせてやることはできない。それに戦争となれば、何年もかかるのが通例だ。古い先の短い両親に、再び地球の地を踏ませてやれない可能性の方が高い。

あとは、やはり自分は地球に強い憧れを抱いている。

地球に足を踏み入れてみたかった。

今の自分なら地球連邦も自分の亡命を受け入れる。

地球の市民権だって与えてくれるはずだ。そこに身内を含めるのは、難しい事ではない。

しかし、戦争が始まった後では難しい。

私は地球を侵略する兵器を作った地球連邦の反逆者であり、罪に問われる可能性すらあった。

今しかない。今を逃せば、次はない。

その想いが、ミノフスキー博士を後押しする。

◆ ミノフスキー博士の亡命は許されない。

何故ならば、彼はミノフスキー粒子が引き起こす電波障害に関する技術を誰よりも熟知している為だ。

これが地球連邦に知られてしまつては、ジオン公国の優位性が保たれなくなる。

「殺すべきだ」

ミノフスキー博士が亡命する気配をキシリア機関が捉えた時、映像通信で情報を共有したドズルの決断は早かつた。

同じく通信を？げているギレンが同調する。キシリアは殺すべきだと分かっているが、ドズルの決断の早さに驚愕する。彼は、もつと甘い人間だったはずだと。しかしギレンが重用するドズルが、ただ甘いだけの人間であるはずがなかった。18歳の時に戦場を経験し、現場を駆け回っていた男だ。幾度と修羅場を潜り抜けてきた。

ザビ家の中で、誰よりも戦場を知る彼はモビルスーツの派遣を提案する。

「一任する」

ただ一言、ギレンが告げる。

モビルスーツの秘匿は、重要ではない。

これは地球連邦に難癖を付けられないようにする為の方便に過ぎない。

重要なのは、ミノフスキー粒子の特性に関する情報だ。

「モビルスーツ部隊を出すのであれば、ひとつ提案があります」

キシリアの言葉にドズルとギレンが画面越しに視線を向ける。

「ニュータイプ研究所から一人、パイロットを派遣したい」

「ああ、あの託児所の？」

「託児所は最初の数ヶ月で閉鎖しました。今は優秀なパイロットが育っています」

「だが、若くなかったか？」

「それを言ってしまうえば、士官学校の卒業生も18歳の未成年ですよ」

難色を示すドズルに、ギレンは少し考え込んだ。

「使えるのか？」

「動かすだけならば。しかし実戦は初めてなので、戦力としては未知数です」

「……ドズル」

「なんだ？」

「引率してやれ」

「分かったよ。最悪、逃げる程度の事はできるんだろうな？」

ドズルの言葉にキシリアが頷き返す。

「操縦技術だけならダーク・コロニーの面々にも引けを取りません」



「ならば、後はパニックを起こす事だけが怖いな」

着々と役者が揃い始める。着々と歴史の刻が進められる。

後に「スミス海の戦い」と呼ばれる戦鬪は、こうして始まる事になった。

### 31. スミス海の戦い。

ニュータイプ研究所にて。

「カナリアは4歳の時に初めて人を殺した可能性がある」

口にしたのはフラナガン。唐突な言葉に思わず、クルストが振り返る。

ニュータイプ研究所は現在、貴重な被検体を壊さない為に負担の少ない研究に留めてある。それはクローン体であるBBも基本的には変わらない。何故ならば、彼女もニュータイプ能力を持った人間を複製できる可能性を持った希少な被検体である為だ。

しかし、BBには人権がない。故に、倫理問題は起きようはずもない。

「BBは4歳、そろそろ人殺しを経験させても良い頃合いだ」

宇宙空間に放流したのは、思っていた以上の成果を上げられなかったしな。とフラナガンは零す。

クルストは時折、思う事がある。もしかして自分達の研究は、とんでもない化け物を作ろうとしているのではないか。普段はレディの扱い方などと宣う癖に、彼は人としての情を欠片も持ち合わせていない。かといって言動が非情という訳でもなかった。彼は理解している、自分が異端である事を。その上で彼なりに人の心を理解する意思を見

せる。

何故ならば、感情を理解する事が彼の研究には必要な為だ。被験者の感情を理解することは、そのまま研究の効率化へと繋がる。

彼は学習する。トライ&エラーを繰り返す事で、自分の行動が他人にどのような影響を与えるのか観察し、得られた情報を元に分析して、改善する。その在り方は研究者としては、余りにも正し過ぎた。誰も踏み入れた事のない暗闇の中を、一步、また一步と進み続ける様は世界の真理を追い求める探究者のようでもある。

よし、楽しく話せたな。と彼は人相手にパーフェクトコミュニケーションを取る為に検証を続けている。

「……まだ4歳だが？」

「この研究所の中での成績は、既にかから3番目以内に入り続けている」

彼は淡々と告げた後、感情の籠ってない瞳でクルストを見る。

「私は天才でもなければ、神でもない。凡人にできる事は試行回数を延々と積み重ねる事だけだ。一度の試行は一步分の歩みであり、試行を積み重ねる事は歩み続ける事と同義になる。地面を踏み均し、踏み固めれば道になる。新雪の中に足を踏み入れるのが先駆者であれば、前人未到の地に道を生み出すのは凡人の役目だ。人類は歩みを進める事で道を作り、後続の者達が更に先へと道を伸ばす。そうやって技術を継承し、進歩を続

ける事で文明を發展させてきた過去がある」

さあ、と彼は口の端に皺を寄せる。

「クルスト君。研究者の端くれとして、共に道を敷こうではないか」

結局の話、彼もまた数字の信奉者。延々と情報を収集し続ける事を趣味とする研究者の鑑であつた。



宇宙は、怖いです。

ザクのコックピットの中で三角に足を畳んで身を震わせる。

此処は月面、スミス海の近場にある丘の頂上。あの時に放流された恐怖が身を巢食う、宇宙の黒は今にも吸い込まれてしまいそうな暗黒に見える。モニターを見ているよりも、何も無い真っ暗闇の方が怖くないから必要最低限の機能だけ残して、後は全部、電源を落としてしまった。

操縦系統は子供の私でも動かせるようにした特注の配置となっている。

正直、もう宇宙には出たくない。しかし、私には拒否権がない。私は人間ではなかった、だから私は偉い人の命令を聞かなきゃいけない。それが私が産まれた意味で、理由であるから、私は今日、この怖い宇宙で戦わなきゃいけなかった。

ギョツと自分の身体を抱きしめっているとコックピット内に電子音が響き渡る。

『通信、聞こえるか?』

私は慌てて、ヘルメットを操作してマイク機能を音にする。

「は、はい! きこえます!」

『やはり、若い声だな。まあいい。こちら、ランバ・ラル少佐。そちらは……』

「にゆうたいぶけんきゆうじよのび……じえーんともうします!」

通信画面はない、音声のみだ。

私の声は変成器で誤魔化している為、相手には十代半ば程度には聞こえるようになってる。

今日はミノフスキー博士の亡命阻止を目的とした任務だと聞いている。亡命が確認され次第、殺すことが予定されており、その際に戦闘が予想されるという話もだ。

だから、私が派遣された。私は今日、人を殺す為に此処に来ている。

その事を改めて自覚すると、身体が震えて来た。

呼吸が荒くなる。はっ、はっ、と息を零す。カチカチと歯を鳴らす、操縦桿を握る手が震える。

大きく深呼吸をした。私は人ではない、と言い聞かせる。

この身に流れる血は、鉄の味がする。心の奥底まで凍えるように、感情を凍らせる。

鉄の心、鋼の意志。私は人ならざる者、従順な人形。

だから傷付いても大丈夫。

今日、作戦に参加するのはソロモンの皆々様。

ランバ・ラル少佐をリーダーにガイア、マツシユ、オルテガ。ククルス・ドアンの編成となっている。「ドアン、彼女の援護を任せる」とランバが指示を出し、相手が動くのを待つ事になった。

そして、「ウサギ」は来る。というガイアの報告と共に巨大な、人々の気配を遠くに感じた。

皆が標的を追いかけけるのに夢中になる中で、私だけが一人。皆とは外れた方向へとブースターを吹かした。見つけたのは巨大な輸送船、私は丘の上に立ち。持っていたバズーカを構える。

火器管制の射程外。だけど、行ける。と確信を持って、マニュアル照準でロケット弾を放った。

バズーカの弾は輸送船の艦橋を直指して、ゆるゆると吸い込まれる。

着弾。艦橋は爆発で全壊して、輸送船が大きく傾いた。慌ててハッチが開かれる。中から飛び出す人型兵器。幾つかは輸送船に巻き込まれて、一緒に墜落してしまった。

人の思念が聞こえてくる。悲鳴が、怨恨が、直接、脳に叩き込まれた。

声が消える。悲鳴の数だけ、声が消える。人を殺してしまったのだと、十や二十では

済まない数の人間が、あの輸送船には乗せられていた。それを、私が、たった一発放つただけで殺してしまった。

ボタン、ひとつ。余りにも、余りにも、あっけなさ過ぎる。

「……………う……………う……………」

込み上げてくる吐き気、そのまま胃液を吐き出した。

視界が霞む、意識が朦朧とする。ズキズキと痛む頭で、辛うじて気絶するのを免れる。私は人形、私は人形。暗示するように唱え続けて、意識を繋ぎとめた。此処は戦場。私だって、さっきの輸送船と同じように何時、死んでもおかしくない。

人を殺したんだ、それも呆気なく。なら殺されもする。次が私でもおかしくない！

『ジエーン!? おい、待つんだ!』

ブースターを吹かせる。通信機越しに制止する声も無視して、ヒートアックスを片手に敵の人型兵器の中へと突っ込んだ。次は私の番かも知れない。という思いが、私の背中を後押しする。

殺される、次は私だ。なら、なら！ 殺される前に皆、殺してしまえば良い！

敵を圧倒し、蹂躞する。気付いた時には、立っているのは私だけで、周りは皆、死んじやった！

「あは、あはは……………あはははは……………ッ! ……………は、はは……………ウツ……………うぶつ……………うええ

.....」

またパイロットスーツの中に吐瀉物を吐いてしまった。

私は、私自身が思っているよりも、ずっと生きたがりだったようです。



「……これは、想像以上と想像していた以上に想像以上の結果だな。圧巻と呼ぶ他にな  
い」

遠くから戦鬪を観察していたレビル中将は嘆息する。

ジオニック社によるモビルワーカーの軍事利用に対抗したA E社の軍事用モビルワーカー、通称モビルスーツ。この開発には、地球連邦軍も少なからず関わっているのだが、ゴツプ大將は興味を持たずにいる。実際、レビル中将も期待していた訳ではない。その事はA E社が開発したモビルスーツを見て、所詮は大型戦車RTX165の延長線。民衆に対する示威効果を期待したデカいのに過ぎなかった。

しかしジオニック社が開発したモビルスーツは、自分が考えていた以上に機敏に動いている。

バーニアを吹かし、跳躍するように前進を続ける有り様は既存の戦車では対応できない。当たり所が良かった事もあるが、中型以上の輸送艦を一撃で撃墜できる武装を携行できるのも驚異的だった。また、マシンガンのような武器も持っており、対空掃射で戦



闘機に対する備えもある。

宇宙で活用すると、どうなるか。陣形を組んで機敏に動き回れる分、小型艦を揃えられるよりも厄介かも知れない。

「……きつと初めて、航空艦隊を目の当たりにした人物は今の私のような心境だったのだろうか」

単体では戦場の決定打に成り得る存在では、ないのかも知れない。

しかしモビルスーツの存在は、新たな戦場を築くだけの力を持っている。

研究と開発を後押しするだけの価値があった。

「それだけに、惜しいな」

少し前に届いたミノフスキー博士の死亡報告に溜息を零す。

先の天体衝突の件で、本格的な介入を遠慮したのが拙かった。建前はA E社とジオニックス社の小競り合いであり、地球連邦とジオン公国の戦闘は発生していない。という事になっている。とりあえず、見た事をゴツプに報告しなくてはならぬ。と今日、見た出来事を頭の中でまとめる事にした。

……とは言っても、ミサイルという兵器がある以上、速度がなければ、モビルスーツが良いのである事実は変わらない。地球上で戦場を支配するのは空であり、宇宙ではミサイルとメガ粒子砲を装備した戦艦で事足りる。かといって、現代でも戦車や空母とい

う兵器が廃れないように一概に必要な。と断じる事も難しかった。

最悪、作業用にも転用できるという点を鑑みて、開発自体は続けさせるのが正解だ。少なくとも戦車では、歯が立たない兵器である事は見て取れる。



ニュータイプ研究所に足を運んだ時の話、

中身は意外と綺麗にされた一室にて、私、キャスバル・レム・ダイクンことシャア・アズナブルがニュータイプ能力検査を受ける。

その結果、サミュコンと呼ばれるサイコミュ技術を活用した脳波コントロールできるラジコン玩具で遊ぶ事ができる程度の能力を持っている事が判明した。数値としては、この研究所でニュータイプ能力を持っていると認識されている中では、最低の数値との事だ。逆にラアラは、この研究所で最も高い数値を記録しているとの話である。

シミュレーターを用いた訓練では、常に先読みをしてくる少女達に最初こそ敗北を積み重ねてしまう事になった。しかし、過去にカナリアとチェスをしていた時の事を思い出し、モビルスーツの操縦技術の力勝負を押し付けてやる事で勝ち切る事ができた。ラアラにも勝つてやれば、彼女は頬を膨らませて拗ねてしまった。

一通りの訓練を受けた後、フラナガン博士が単刀直入に話し掛けてくる。

「ラアラを預けさせてはくれぬか？」

「嫌ですわ」

私が答えるよりも先にララアは私の背中に隠れてしまったので、私は肩を竦めるしかなかった。

「これではな」

「では、シヤア少尉もニュータイプ研究所に転属されるとよろしい」

「まあ、少尉と一緒なら……」

「そう簡単にコロコロと転属できるものじゃないだろう」

靡きそうになるララアに、私は溜息混じりに答えた。

一応、私の所属はドズル麾下となっている。ニュータイプ研究所はキシリア機関の者が関わっている事からキシリア派閥に所属する組織だと推測できる。これでは、転属も上手くいかないだろう。それにドズルとキシリアならば、ドズルの方が良い。そもそも、此処は窮屈過ぎる。あまり自由に動く事もできないのも問題だった。

今、手に持っているニュータイプ研究所に所属する被験者リストの中にもカナリアの名前がない為、これ以上長居する理由もない。

「……そういえば、プロト・ゼロという人物に心当たりはあるか？」

フランガン博士に問い掛ければ、はて、と彼は首を傾げた後に、ああ、と声を上げる。

「ジオン公国における最初のニュータイプ能力の発現者であり、最強のニュータイプ能

力の持ち主ですな」

最初のニュータイプ能力。という言葉聞いて、思わず鼻で笑ってしまった。

ニュータイプ研究所が開設されるよりも早く、私はそれらしい能力の持ち主を知っていたからだ。

ララアでコレなのだ。

あのクソガキのニュータイプ能力も最高峰に違いない。

「それはララアよりも強いのか？」

事のついでに問いかけてみれば「まあ、どっこいどっこいですな」と彼は答える。なるほど、世界にはカナリアレベルがあと一人いるらしい。

世の中クソだな。

そういえば、ほとんどの被験者の顔を合わせたはずなのだが、一人だけ出会ってない人物が居る。

彼女は？ とブルーバードの名を指で差した。

「出張して、今は研究所にいませんな」

とフラナガン博士は答えた。



「これ！ どうですか、これ！」

「どうって言われても、私、こういうのは分からないんだけど……」

「土星エンジンの出力があれば、モビルスーツは列車砲だって牽引できるんですよ!!」

「え、なに？ 相手は何を想定しているの？」

ツイマツト本社にて、ミア・ブリンクマンは親友に彼女自作のモビルスーツの設計図を披露する。

私の考えた最強のモビルスーツ案にカナリアは苦笑する他にない。きっと彼女のような人間が、ゲームとかでよくある用途不明な派生機を大量に造ったりするんだろうな。と思いつつも適当に聞き流す。

今のカナリアの立場は、ジオン公国の国防軍からツイマツト社に派遣されたテストパイロット。便宜上、プロト・ゼロの名で特別少尉となっている。この特別というのは、少尉の中でも特別という意味ではなくて、特別に少尉待遇で扱いますという意味なので、少尉よりも立場が低かったりする。

しかし、ツイマツト社でカナリアの事を見縊る人間は誰一人居なかった。

「嬢ちゃん！ テストの準備ができたぜ！」

スタッフの一人から声を掛けられて「わかったー」とカナリアは席を立った。

「あ、私も乗せてください！」

「あー、うん、皆が良いって言ったたらね」

「おじさんー」

「おう、監督が良いって言ったらな」

ミアにはモビルスーツの搭乗経験がある。

カナリアが操縦するのを後ろで見ただけだが、それ以後、モビルスーツに乗るのが癖になってしまっていた。

あまりに興奮するので、カナリアとしては操縦しにくい。

耳元で叫ばれたりするので、周りの声が聞き取れなくなる事も多々あった。

そんな彼女に呆れたカナリアが「もういつそ、自分で乗ったら？」と口にするのは、もう少し後の話。

鱗が落ちた彼女の目は、宝石を詰め込んだ宝石箱のようにキラキラと輝いていたという。

## 32. 政略のちよつと小難しい話です。

小惑星アクシズ。

それは火星と木星の間にあるアステロイドベルトの小惑星をジオン公国が資源発掘に徴用した小惑星の一つである。

ア・バオア・クーやソロモンと違って、これはアステロイドベルトに置いたままとなっており、周辺にある小惑星群の資源発掘用の拠点としても活用されている。また木星に存在する希少な資源を調達する為の中間地点としても機能している為、ジオン公国の生命線とも呼べる拠点のひとつとなっていた。

故に此処に配置する人材は優秀である事は勿論、絶対に裏切る事のない人間であることが条件に挙げられる。

そこでジオン公国の公王であるデギンが推薦したのがマハラジャ・カーンになる。

彼は、ジオン・ズム・ダイクンが提唱するコントリズムに共感し、サイド3に移住した生粋のダイクン派であった。だがデギンは彼の能力と人格を信用しており、サイド3から遠く離れたアクシズを任せられるのは彼以外に居ないと断言する。

ジオン公国の実質的な指導者であるギレンは、アクシズには身内を置きたかった。

しかし、公王であるデギンは勿論、軍事の要であるドズルも送り出せない。まだキシリアの事を人格的にも、能力的にも、精神的にも、信用し切れないところがある為、手元に置いておきたい。ガルマは論外である為、ザビ家以外の人間に任せなくてはならなかった。

だがマハラジャは、ダイクン派の人間だ。

更には、彼の人格と能力を信用する事はできても、それ故に、故があれば裏切る可能性も孕んでいる。

例えば、子を人質に取られた時、彼が子を犠牲にできる人間であるとは限らないのだ。であれば、とギレンが考えた策のひとつがマハラジャ・カーンを身内に招き入れる事だった。

これにデギンも賛成する。

次に問題となるのは、誰と誰を結婚させるのか。という話になる。

ここで白羽の矢が立ったのがドズルであった。

しかし、ドズルは、あんな顔をしている癖に繊細なところがある。恋愛結婚に理想を抱くタイプだ。その上、彼は奥手でもある。マハラジャとの関係を考えれば、政略結婚を無理強いする事は好ましくない。

これでドズルに好きな相手でもいれば、別の案を考える手もあった。



だが、彼が恋慕を抱いている相手が居ない事はキシリア機関の調査で分かっている。故にギレンは期限を設ける事によって、恋愛願望に区切りを付けさせようとした。そうする事で出来るだけ、自然な流れで縁談という形に持っていきたかったのだ。

実情は政略結婚だが、縁談という形にすれば、ドズルの心情的にも悪くないと考えての事である。

余談だが、今回の件でギレンが婚約相手に自分を選ばない理由の一つは年齢にある。

ギレンは今年で34歳。対するマハラジャの娘は、19歳。流石に15歳の年齢差では、マハラジャも良く思わないはずだ。対してドズルは27歳であり、19歳と27歳であれば、まだ面目は保たれる。

……年齢だけをいえば、同年代で19歳のガルマが適齢だ。

しかし、ガルマが暁の蜂起で英雄視される現状をマハラジャが良く思っていないかった。それ故にガルマを避けた事情がある。またギレンの知るガルマが、ドズル以上の口マンチストの坊やである事も、この重大な政略結婚の駒として使えない理由の一つとなっている。

なんかの拍子に問題を起こされては困るのだ。

話を戻す。

ギレンが自分を政略結婚の駒に使わない理由は他にも、自身がサディストである事が

上げられる。下世話な話になるが、彼は女性を乱暴に扱わないと勃たない難儀な性質を持つている。流石に今回の件で相手に乱暴する訳にもいかなかった為、彼は自分を使う事を見送る理由の一つになった。

ちなみに今、語る必要はないが秘書のセシリアはマゾヒストである。

事のついでに語ると、

キシリアがサディストというのはギレンの偏見である、少なくとも彼女自身にサディストの自覚はない。ギレンがあえて、ドズルにキシリアがサディストと言ったのは、ドズルを追い詰める為に適当に言った事である。

本当の理由は、マハラジャに息子が居ない事だった。

あとは、まあ、キシリアと結婚する相手は大変だ。とギレンが勝手に考えている為、政略結婚の駒に使えないと思いついでいる事も理由の一つに上げられる。

後日、この話をドズルから聞いたキシリアは、ギレンの背中を足蹴にした。

キシリアは純愛も、嗜虐も、被虐も全ていけるのが本当だ。

可能性の獣である。

閑話休題。

以上の事が、ギレンが、ドズルを政略結婚の駒に選んだ理由になっている。これが達成された暁には、ザビ家は背中を刺される心配をする必要がなくなるのだ。

しかし、ドズルに期限を言い渡した翌日の話だ。  
ギレンにとつての誤算が生じる。

彼は、窮地に追い詰められた時のドズルの決断力をあまく見積もっていた。少なくともドズルの本領の一つである即断即決が、色恋沙汰にまで適応されるとは考えていなかった。

奥手で恋愛弱者のドズルの結婚相手の面倒は、自分が見てやらなくてはいけない。とギレンは勝手に思い込んでいた節がある。

ギレンがドズルに縁談を提案した翌日、

ドズルは士官学校の卒業生であるゼナ・ミアに求婚した。

これが上手くいってしまった。

これを知ったギレンはキシリアを通じて、キシリア機関にゼナ・ミアの身边調査を依頼した。

彼女の実家は一般家庭であり、特別に何かある訳でもない。親戚も似たようなものであり、ゼナ・ミア自身はジオニズムに感銘を受けたザビ派の人間だ。

つまりはまあ、何もなかった。

良い事も、悪い事も無い。毒にも薬にもならない結婚相手だった。

下手に変な相手を連れてくるよりも余程、ましではあるのだが、政略結婚をまとめて

いたギレンとしては、なんともつまらない結末であった。

デギンがマハラジャの屋敷まで頭を下げに赴いた事で、この縁談は御破算となる。

「貴方の嫡男であるギレンの意向は分かっています。万が一にも裏切るかも知れない可能性を消しておきたいのでしょうか？」

屋敷まで足を運んでくれたデギンに、それならば、とマハラジャは提案する。

「マレーネとハマーンをサイド3に置いていきましょう。マレーネはザビ家の手元で雇って頂けると良いでしょう。ハマーンにはサイド3でしつかりとした教育を受けられるようにして欲しい」

セラーナは、まだ幼いので連れて行きます。と彼は告げる。

独りは寂しいので、と付け加えて。

こうしてマハラジャは末娘を連れて、総括責任者として小惑星アクシズに赴くのであった。

サイド3に残された2人の娘、この処遇をギレンはドズルに一任した。

ドズルが悪い事をした訳でもないのだが、まとまりかけていた政略結婚を駄目にされた腹いせに面倒を押し付けたのだ。ドズルは二人の対応に頭を悩ませる事になる。マレーネは侍女にでもしておけば良い。立場を求めるのであれば、長兄のセシリアと同じように秘書として扱えば良かった。

しかし、ドズルが着任するア・バオア・クーは前線基地。

子供を置いておく余裕もなければ、同年代の子供が一人もおらず、遊ばせてやれる環境もなかった。

かといって、自分の管轄に子供を置いておける場所なんて……

「あ、そういえばあったな」

ダーク・コロニー。モビルスーツを開発する時に子供用のスペースが設けられている。

軍事機密を扱う施設であるにも関わらず、何故か不思議な事に子供が遊んだり、勉強をする為の空間が設けられているのだ。スミス海の戦いでニュータイプ研究所の有用性が示された事もあり、モビルスーツパイロットとしての実験もダーク・コロニーで行われる予定になっている。

ハマーンの年齢と比べれば、どうしても差ができてしまうのだが……それでもア・バオア・クーに置いておくよりも余程良い。マレーネも偶に会いに行く事ができる。

これは妙案だ。とドズルは、即断即決で手続きに移った。

更に数週間後、自分の膝上に座って勉強する少女に金髪の青年は頭を抱えている。

「どうしてこうなった」と天井を見上げる彼の悲痛な背中には、不機嫌に頬を膨らませる褐色の少女の姿があった。

最後に苦勞を被るのは、何時だって末端の人間である。

## 33. 這い寄る混沌。

ニュータイプ能力を持つ者に性格の悪い者が多いのは、

その感応力の高さに胡坐をかいて、無意識に相手を見下す傾向にあるからだ。

と、シャア・アズナブルは考えている。

相手の考えている事を手に取るように分かる為、貴方の考えている事なんてズバツとお見通しだ。と言ってくるのがカナリアという幼子であり、その事を利用して擲揄うのがララア・スンという少女である。

朝の珈琲を淹れる時、上段のベッドから寝間着を落としてくる。

下着姿を見せ付けるのは、年頃の娘としてどうかと思う。これでも男だ。意識をしていない訳ではないのだが、こうも露骨に誘われてはそそられるものもない。牛乳をたっぷりと淹れた珈琲を手渡した後、彼女の寝間着を洗濯籠に放り投げてやれば、彼女は拗ねるように頬を膨らませる。知った事ではない。

「何時か痛い目を見るぞ」

そう私が警告してやれば、

「あら、痛い目を見せてくれますの？」

と彼女は期待するように問い返す。

三年早い。とラアラが二十歳になる年齢を口にして、彼女が何時も着ているワンピースをベッド上段に放り投げた。珈琲で人心地を付ける、すると外側から部屋の鍵が開けられた。ツインテイルの少女、ハマーンだ。部屋に上がって来た彼女は、寝間着姿で両手に枕を抱えている。眠たそうに目を擦り、そのまま私の目の前を通って、少し前まで私が寝ていたベッドの下段に身を放り投げた。そのまま、くうくうと可愛らしい寝息を立てる。

まるで凶々しさが、そのまま形になったような奴だな。

「少尉！ どうして彼女は許すのですか！」

「相手はまだ子供だ。親元から離れたばかりで寂しくもあるだろう」

「私だって寂しいです！ 人肌が恋しいですわ！」

「夜中にトイレへ行った後に寝惚けたふりをして、布団に入って来ようとする奴に遠慮はいらないと私は思うのだがね？」

「蹴飛ばされました！ 女性を足蹴にするなんて信じられません！」

煩わしくなってきたので、珈琲を一気に飲み干した。

簡単にコップを洗った後、今日の訓練の為に部屋を出る。

自分に課される訓練が日に日に厳しくなっていた。



あの二人のせいだな。と憂鬱に溜息を零す。

◇

ダーク・コロニーは元々、モビルスーツの開発拠点として機能していた。

現在はモビルスーツの開発は行われておらず、モビルスーツの性能と武装のテストを主に行っている。他にも士官学校でモビルスーツを活用した戦術の研究を続けている者達の申請で、有効性の検証に付き合う事もあれば、ニュータイプ能力者の実践的なテストに協力する事もあった。

ニュータイプ研究所から派遣されてきたニュータイプ能力者は、二十歳未満の少女ばかりだ。目立つ所では、マリオン・ウエルチ、クスコ・アル、アルマ・シユティルナー等。他にもメカニックとして、一人の少女が同行している。また彼女達を管理する為の区画が新たに制定されており、ニュータイプ研究所の出張所として機能している。

この出張所の責任者の名前は――

「シヤア少尉。ララア君も、ハマーン君も、私の研究に付き合ってくれないのだ。なんとか言ってやってはくれないか？」

――朝食を摂る私に、困り顔で話しかけてくる褐色肌の中年男性。彼の名は、フラナガン・ロム。ニュータイプ能力研究の第一人者である彼が直接、ダーク・コロニーまで出向いていた。

「いくら検査の為とはいえ、年頃の女性が複数の男性相手に全身を見られるのは堪えるだろうな」

「そういうものか。次からはシムス中尉に協力して貰うとしよう」

「その方が良い」

レディの扱いは奥が深い。と彼はしみじみと零す。

どうしてニュータイプ研究所の所長でもある彼が研究所を離れて、ダーク・コロニーの出張所に身を置いているのか。疑問に思った私が問い掛けると「研究所の被験者のほぼ全員がダーク・コロニーに行く事が決まった。その上、ニュータイプ能力の素質の高いうらラア君までいるとなれば私が行かなくてどうする？」との事だ。

彼がダーク・コロニーに足を運んだ時、健康診断という体でコロニー内の全員が簡単なニュータイプ能力の診断を受けている。

その中で見つかった新たなニュータイプ能力者が、ハマーン・カーンだ。早速、フランガンは彼女を被験者として徴用しようとうきうきで申請したのだが、その翌日、キシリアから棄却される事になる。流石に人質に手を出すのは不味いとの話だ。

それを何故、私が知っているのかというと、その当日に彼は心底、ガツカリとした様子で私に愚痴っていたからだ。そのついでにと、ハマーンには自主的に協力して貰えるように言ってくれと私に頼み込んできた。

「どういつもこいつも、どうして私に厄介事を持つてくるのだ。

「お先に失礼する」

手早く朝食を済ませた私は、自分のモバイルスーツを確認する為にハンガーへと赴いた。

そこには最近、ロールアウトされたばかりのザクⅡがある。配備されたのは全6機、その内の1機が私に回される事になった。自分のモバイルスーツの側まで近づいてみると、既にコックピットのハッチが開いていた。中を覗いてみれば、栗色の髪をした少女がシートに座っている。

「どうやらコンソールを操作しているようだ。」

「やあ、何か新しい機能でも追加してくれるのかな?」

「シヤア少尉。今日の任務内容をインプットしてただけです」

期待に添えられず、ごめんなさい。と彼女は晴れやかに笑ってみせた。

彼女の名前はアルレット・アルマージュ、整備士だ。三つ編みで栗色の髪を纏めている。彼女もまたニュータイプ研究所から派遣された少女の一人だ。彼女はニュータイプの中でも特異な素質を持っており、機械に対する力学や構造に直感を働かせる事ができるとの事だ。

人相手に作用する能力を持っていない為か、カナリアやララアとは比べられない程に

素直で良い子だ。

涙が出てくる。

そんな彼女は、他の男性スタッフからの人気も高く、アイドル的な扱いを受けていた。素直といえば、マリオンとアルマの二人も良い子だ。特にアルマは持ち前の明るさもあり、ダーク・コロニーの人気はアルレット派とアルマ派に二極化している。対するマリオンは大人しい性格をしており、よく独りになつてい事が多い。面倒に思いつつも、彼女には積極的に声をかけるようにしている。

肝心のモビルスーツの腕前だが二人共、他の一般的なパイロットとは比べ物にならない程に優秀だ。

先ず第一に、勘の良さが尋常ではない。

カナリアを知っている私だから、まだ対応できている。ニュータイプ能力を体験した事がないパイロットでは最早、手も足も出ない。しかしニュータイプ能力者は勘に頼り過ぎるのが悪い癖だ。その鋭すぎる反応の良さを逆手に取ってやれば、呆気ないほど簡単に墜とすこともできる。

とはいえだ。今のダーク・コロニーで彼女達を倒せるパイロットは私以外に居ない訳だが。

その事もあつてか、私はアルマとマリオンから慕われている。

アルレットとも仲が良い。「操縦が上手いってのは、こういう事ね」と戦闘記録を見て目を輝かせていた。

おかげで訓練は日に日に厳しくなっていくばかりだ。ダーク・コロニーに来たばかりの頃は動けなくなるまで筋トレに付き合わされた事もあり、その事が悔しくて今となつては周りが倒れるまで肉体を鍛え直した。そうなると不思議な事に、周りは私に親しみを以て接するようになる。

事ある度に「女たらし」と言われたり、ハマーンを引き合いにロリコン扱いを受けるのは癪に障るが……居心地は悪くない、と思つている。

今日は腕立て伏せ百回、誰が一番早く終わらせられるかで競つた。

体力を限界近くまで使い果たした時、眠りが深くなる。

余談だが、ララアの男性人気は低い。

影の差した顔で告げる彼女の話では、勘が鋭過ぎるせいで距離が置かれる事も多いようだ。

私は、性格だと思う。

深夜に目を覚ます。ララアが丁度、布団に潜り込もうとしている所だった。

「……何をしているっ!」

ララアは観念したように溜息を零す。

そして、おずおずと布団に潜り込んでくる。とりあえず蹴り落とした。



首都バンチにあるニュータイプ研究所にて。

多くの被験者がダーク・コロニーに出張した今、研究所に残る被験者は数少ない。今はBBだけとなっている。新しくカナリアのクローンを二体も作っているが、まだ生まれたばかりの赤子で研究には使えない。

そのBBは今、二人を相手に戦闘シミュレーションを繰り返している。

一人はペツシエ・モンターニュ。もう一人は、ニムバス・シユターゼン。ペツシエは少なからずニュータイプ能力の素質を持っている人間だが、人工的にニュータイプ能力の発現をさせる研究をする為にニュータイプ研究所の被験者として徴用されている。最初から研究所にいる人間だ。もう一人、ニムバスはモビルスーツパイロットとしての素質を見込まれたが「性格に難があり、軍人としては持て余す」と、されていた人物だ。そんな左遷一步手前の彼を、テストパイロットとして、私がニュータイプ研究所に招き入れた。

やはりオールドタイプでは、ニュータイプには敵わない。

まだ4歳の少女にペッシェとニムバスは翻弄されていた。時折、経験不足が露呈する事もある。しかしBBが学習すればする程に二人は、為す術が失われる。今はもうBBに手も足も出ない状態になっていた。

スミス海の戦い。そこでもBBは4歳とは思えない結果を残す。

あの戦いでA社が使用したモビルスーツは、ザクIと比較すると性能的に劣る。しかし、それでも戦車を相手にするには十分な性能を持っていた。それをBBはI機で5機以上のモビルスーツの撃破に成功しており、これはダーク・コロニーの中でトップスコアだ。更に彼女は輸送船も、たった1機で撃墜している。

記録映像も観たが、圧巻と呼ぶ他にない。

私は、恐ろしく思う事がある。

カナリアのようなニュータイプ能力を持った人間は稀だ。しかし、まだ4歳の少女が大人にも顔負けの操縦技術を見せる。BBはまだ成長過程にある。それでもモビルスーツパイロットとしては破格の適性を持っているはずのニムバスが勝ち切れず、連敗を積み重ねる。

あり得ない、非常識だ。

BBで、これだ。オリジナルのカナリアは勿論、マリオンやララアだと、果たして、どの程度だ？

最近、被験者として研究所に来たアルレットを見て分かるようにニュータイプ能力は多岐に渡る。

今はまだ10にも満たない数だが、近い将来、世の中はニュータイプ能力を持つ人間で溢れるはずだ。そういう時代が訪れた時、オールドタイプと呼ばれる旧人類が虐げられる事になるのは目に見えている。ニュータイプとオールドタイプの間で格差が生じれば、両者で戦争が起きるのは目に見えていた。その戦争で負けるのはオールドタイプだ。

私はカナリアが百人も居れば、世界を取る事も可能だと確信している。

だから、この研究が必要なのだ。

ニュータイプが特別になり過ぎない為、新人類と旧人類が手を取り合う為、もし戦争が起きた時にオールドタイプが生き残る為、今の内にニュータイプを科学的に解明する必要があるとクルスト・モーゼスは信じている。

◆ 科学にオカルトとファンタジーはない事を、証明しなくてはならなかった。

◆ ジオン共和国がジオン公国に名を改めてから長い歳月が過ぎた。

ジオン公国と地球連邦政府の緊張はもう限界まで高まりつつあり、地球連邦政府に対するスペースノイドの不満は抑えきれないところまで来ていた。サイド3だけではな



い。全てのサイドで暴動が頻発するようになっていく。

そんな中、ジオン公国は引き返せる最後の一线を越えようとしていた。

宇宙世紀0078年、10月。

ジオン公国、国家総動員令を発令する。

後に一年戦争と呼ばれる戦禍が、目前まで迫っていた。

### 34. 案外、自分ではわからないものです。

宇宙世紀0078年、10月。

ジオン公国が国家総動員令を発令した直ぐ後の話。

ズムシテイの公王庁にある一室に、息子ギレンの主導でジオン公国の中心人物が招集されている。

予定の時間よりも五分程度、遅らせてからの出席。ギレンの筆頭秘書であるセシリアに部屋の扉を開けて貰って、足を踏み入れる。召喚した者は、皆一堂に会してくれたようだ。足腰の弱くなった身体を、セシリアに支えて貰いながら玉座に腰を下ろす。周りを見る、上座から階級順に座っているようだ。

私の右手側には、ジオン公国で唯一の大将となるギレンが座っている。

国家総動員令を出した時、ジオン公国の在り方は名実共に一新する。

先ず、ジオン共和国時代から続いた国防軍の名は、法改正と共に公国軍と名を改める事になった。これは単純に公国軍が、領土を防衛する為だけの軍隊ではない事を意味している。公国軍の権力は、総司令部に集中しており、後述する組織のほぼ全てが総司令部に帰属すると考えて貰って構わない。

総司令部の総司令官には、ギレン・ザビ大将。彼が公国軍を統括する立場にある。総司令部の下には、主に3つの組織で分けられている。

先ず、宇宙攻撃軍。突撃機動軍、技術本部。

宇宙攻撃軍は、公国軍の本隊に当たる軍だ。

総司令官は、ドズル中将。ドズル自らア・バオア・クーで秘密裏に建造と編成、訓練を手掛けた艦隊を保持しており、ジオン公国軍が保持する戦力の6割が集められた。ダーク・コロニー時代からドズルが手掛けてきた虎の子のモビルスーツ部隊もまた、宇宙攻撃軍に着任する事が決まっている。

本日、招集した人物の内一人であるコンスコン大佐もまた宇宙攻撃軍として艦隊を率いる予定だ。

次に突撃機動軍、司令官にキシリア少将。

この軍は機動力の高い艦船を中心に編成されており、戦場では遊撃隊としての役目を担っている。大きな戦いがない時は、特殊任務や教導を請け負う特務隊としての活躍も期待されており、キシリアが擁するキシリア機関との連携も考えられていた。

今日の作戦会議に出席する者の中では、キシリアの補佐としてマ・クベが突撃機動軍に所属する予定である。

最後に技術本部。主に兵器の技術評価、検証などを専門に行っている部隊だ。

本部長には、アルベルト・シャハト技術少将が選ばれており、ギニアス技術少佐もまた技術本部に所属している。コンスコンとマ・クベが大佐に昇進している中、彼だけが技術少佐となっている事には理由があるのだが、それを語ってしまったては丸つと一話分の物語になってしまう為、今は割愛する。

彼が起こした事件で、サハリン家は復興を果たした結果だけを添えておく。

さて、以上の軍事組織の他に、総司令部に所属しない組織として、

総帥府と親衛隊がある。

総帥府は、諜報機関としての性質が強い組織だ。

今はギレンの筆頭秘書であるセシリアが統括している。

親衛隊は、ザビ家に忠誠を誓う軍事組織。今は首都防衛を担っている。

この親衛隊からは、デラーズ大佐が出席している。

デギン公王。

ギレン大将。ドズル中将。キシリア少将。

デラーズ大佐。コンスコン大佐。マ大佐。

アルベルト技術少将。ギニアス技術少佐。

セシリア筆頭秘書。

カナリア侍女。

部屋の隅に、何食わぬ顔で居座るヒヨコ頭の少女。

来年で15歳になる彼女を会議室に居る全員で睨み付けた時、彼女は誤魔化すように笑ってみせた。

私はギレンに目配せする。ギレンはセシリアに顎で指示を出した。

それを受けたセシリアはカナリアの首根っこを掴んで、部屋の外へと放り出した。

咳払いをひとつ、ギレンは何事もなかったかのように口を開いた。

「ブリティッシュ作戦の概要。及び、地球侵攻作戦の概要を説明する」

その言葉と共に会議の出席者は、セシリアから配られた資料を手取る。

戦争は避けるべきだと考えていた。しかし、事ここに至っては仕方ない。

少し前、ギレンと話した事を思い返しながら資料に目を通す。

◇

天体衝突事件が落ち着いた頃、

着々と戦争準備を進めるジオン公国の現状を憂いて、私は嫡男のギレンを部屋まで呼び出す事を決断する。

ノックを三回。入ります、という言葉と共にギレンが姿を現す。

「言いたい事はわかつているな？」

私の問い掛けに、ギレンは背筋を伸ばす。

真つすぐに私を見る彼の目には、強い信念が感じられる。

何かに憑りつかれたような感じはしない。

不思議な事に、戦争を推し進める息子の目は理性的だった。

私は慎重に見極めなくてはならない。

「父上。戦争は、必要な過程なのです」

ポツリと零す息子の言葉に耳を傾ける。

「彼のジオン・ズム・ダイクンがインド独立の父であるマハトマ・ガンジーのように高潔な精神を持って地球連邦政府の悪行を批判しようとしていた事は知っています」

ダイクンの最終目的は、宇宙移民計画の完遂にある。

その第一段階としてコントリズムがある。自活可能な経済圏の名の下にジオン共和国が誕生している。

第二段階は、地球の経済を宇宙に依存させる事にある。その後の第三段階で、非暴力不服従の戦術を用いた独立運動の蜂起をダイクンは考えていた。宇宙の経済に依存した地球は、宇宙からの供給が途絶えるだけで経済が破綻する。そういう状況であれば、如何に地球連邦軍が強大であったとしても、スペースノイドを弾圧する事ができなくなる。そうしてしまえば結局、自分の首を絞める事になる為だ。

地球の民は、宇宙の民によって生かされている。この構図が出来れば、自然と宇宙移

民計画は再開される事になるだろう。

以上が、ジオン・ズム・ダイクンが考えた戦略の全容になる。

この考えに私、デギンも賛同している。

「ですが、父上。これでは地球連邦政府を追い詰める事はできない」

ギレンは、この戦略の不備を語る。

先ず最初にダイクンが死んだ事が挙げられる。

サイド3が僅か6年の短い期間で自活可能になってるのはダイクンの政治手腕があつての話だ、彼の存在がなくなると同じことはできない。現にコントリズムが実証された宇宙世紀0058年から宇宙世紀0078年の二十年間で、サイド3以外で自活可能な経済圏の構築が出来たサイドは一つも存在していない。

この事実は、計画の第二段階の達成が不可能である事を意味していた。

仮に他サイドでコントリズムが達成されたとしても、第三段階に入る前にジオン公国が崩壊する可能性の方が高い。

地球連邦政府は、常にジオン公国の破綻を狙っている。

かつてイギリスがインドにそうしたように、年収と同額の税金を課すことが考えられる。スペースノイドが相手の時は捜査と令状なしで逮捕し、裁判もなしに有罪にできる法律を作る事も可能だ。実際に、実行するかどうかは問題ではない。スペースノイドに

参政権が与えられていない現状、アースノイド最頂の法案を通し、これが実行できてしまう事実が問題なのだ。

手っ取り早くジオン公国の国民による暴走を誘発し、これを地球連邦軍が弾圧しても構わない。

「そんな事をしてしまえば、世論が黙っていないですと?」

違います。とギレンは答える。

地球連邦政府は、サイドの一つから全人口が消えても困らない。地球からサイド3の空いたコロニーに労働者を送り込めば良いのだ。幸いにも地球には不法居住者が沢山いる、摘発してサイド3に追放して働かせる。そうして世間的には、宇宙移民計画の進捗として発表すれば良いだけの話だ。

それが出来るだけの力が地球連邦政府にはある。

「……ギレン、それは飛躍し過ぎだ。如何に地球連邦政府といえども、そこまではすまない」

「ええ、そうですとも。そこまではしないでしよう」

しかし、とギレンは続ける。

「先程も申しましたが、それができる」ということが重要なのです」

地球連邦政府の余裕は、そこにある。



いざとなれば、どうとでもできる。煩わしくなれば、暴力で黙らせれば良い。そう思っているからこそその傲慢だ。

「マハトマ・ガンジーの独立運動が成功したのは、暴力では、どうにもならないという点が必要でした」

今のジオン公国は、とギレンは諦観を込めた笑みで告げる。

「暴力で、どうにかできてしまうのです」

◇

ジオン公国、延いてはサイド3はダイクンが死んだ日から詰んでいる。

その事をいち早く察したギレンは二十一年間、ジオン公国が生き残る為の方策を考え続けていた。

何故、地球連邦政府は傲慢で居続けられるのか。

この問いに対してギレンは、痛みを知らないからだ。と結論を出す。

地球連邦政府が樹立されて以後、一世紀半。敗北の痛みを知らずに存在し続けている。

かつて、地球では白人が有色人種を迫害し続けて来た過去がある。敗北した過去がないから横暴に振舞える。絶対に勝利すると確信しているから好き勝手ができる。それが今のアースノイドとスペースノイドの関係であり、地球連邦政府はスペースノイドを搾

取できる奴隷としか考えていなかった。

だからジオン公国は、地球連邦政府の遺伝子に敗北を刻まなくてはならないのだ。かつて東洋の島国が巨大帝国に勝利し、白人無敗神話に終わりを告げた時のように。闘争には、痛みを伴う事を教えてやらねばならない。

他の誰かを虐げる事には、痛みが発生する事を教えてやらねばならない。

自由を勝ち取る事には、痛みが伴う事を我々は知っている。

「ジャブローだ」

作戦の概要を説明する時、それがギレンの最初に告げた言葉だった。

「まずは地球連邦軍の中枢に打撃を与える」

ブリテイッシュ作戦。即ち、コロニー落とし。

この空前絶後の作戦は、決して狂気の中で生まれた訳ではない。

作戦の立案者は、むしろ理知的で、理性的だった。

地力で負けている状況であるが故に、そうならざるを得なかった。

ジオン公国には物量がない、核兵器の数では地球連邦軍に劣る。

物量で敵わないのであれば、質量と。

発想を転換させた結果、コロニーを落とすという発想に辿り着いた。

コロニー落としが地球に与える影響を一念に計算した。

これなら行ける、と確信を持てる段階まで考え尽くされている。戦争に勝利する。その一点にのみ集約された作戦が、ブリティッシュ作戦である。

ジオン公国の戦闘教義は、経済に強く紐付いている。

何故ならば、ジオン公国という国家は、その成り立ちからして経済と深い結びつきを持つている為だ。

経済を、延いては兵站を破壊してしまえば、戦争を継続する事はできなくなる。

またジオン公国は、地球連邦政府との国力の差を理解していた。

故に戦争の長期継続が不可能である事も分かっていた。その為の短期決戦。自分が戦闘不能になる前に、相手を戦闘不能に追い込めば良い。

そういう考え方が、ジオン公国の根底にはある。

以上の二つが結びついた結果。

コロニー落としは、ジオン公国にとっては理想的な作戦となる。

誤算だったのは、

自分達が理知的で理性的である事を当然だと認識していた点だ。

ならば、相手も当然、そうだろうと考えてしまった。

戦争が理性的なものであると捉えている時点で、

それが狂気である事を知る者は、

この作戦会議に出席していた者の中に、誰一人として存在していなかった。恐ろしい事に、この作戦。

反対者が一人も居なかったのだ。

地球連邦政府は敗北を知らなかったかも知れないが、  
ジオン公国は戦争を知らなかった。

## 幕間・ヤードポンド法、滅ぶべし。慈悲はなし。

気付いた時、握り締めた右拳はジオニック社の技術者の顎を打ち抜いていた。

地面に散らばる設計図。ザクIIを手掛けたジオニック社が、新たに設計した陸戦型モビルスーツ。形式番号MS-07、正式名称グフ。技術本部へ持ち込まれた設計図を評価していた最中の話だ。主兵装に5連装75mm機関砲という見慣れぬ文字が記載されていたので私、ギニアス・サハリン技術中佐はジオニック社の技術者に問い掛けた。

なんと左手の五指すべてがマシンガンの砲口になっているという話なのだ。

嬉々として語る若者の顎を右拳のアップパーカットで綺麗に打ち砕いた。無意識だった、しかし、殴らずにはいられなかった。錘揉み回転しながら宙を舞った技術者は、そのまま逆さの姿勢で顔を地面に打ち付ける。

こうして私の技術大佐に昇進する話が消えた。

なおフィンガー・バルカンの開発者は、

「内蔵武器は浪漫、武器は仕込むもの」という言葉を最後にジオニック社から更迭される。

今は、ツイマツト社に転職しているとの話だ。

私、ギニアス技術中佐は、量産型グフの設計図を見た時から頬に伝う嫌な汗を感じずにはいられなかった。

コンスコン、デラーズ、マ・クベの話を片手間に聞いていたので、ジオン公国がブリティッシュ作戦と連動した地球侵攻作戦まで計画しているのは理解している。少なくともコンスコンは休戦協定が結ばなかった時の事を考えて動いており、マ・クベはブリティッシュ作戦が失敗した時の事を考慮している節がある。

マ・クベが提案したア・バオア・クー及びソロモンの全面改修は、正にジオン公国が敗戦した後の事を考えての話であった。

「負けた時は負けたなりの戦い方がある」

というのは、マ・クベの言だ。この身も蓋もない言葉にデラーズは「もつと言い方があるだろう」と難色を示していた。

ブリティッシュ作戦の後、休戦協定を打診する所までは既定路線。

休戦協定が締結されるまでの間、コンスコンは地球に侵攻をするべきだと進言した。宇宙は、各サイドの反応を見る必要がある。様子見ならばよし、中立宣言は認める。しかし地球連邦軍の艦艇を収容するような親地球連邦派のコロニーは敵と見做して、攻撃を仕掛ける。コロニーを制圧する時は催涙ガスを使用、しかし地球に落とす為のコロニーだけは毒ガスを使用する事が予定されている。

……ブリテイッシュ作戦が実行された時、混乱する地球連邦軍の隙を突いて、オデッサとキャリフォルニアベースを占拠する。

別に休戦協定が結ばれた後であれば、明け渡しても良い。これは休戦協定の交渉材料を増やす為でもあるし、地球連邦政府が継戦を望んだ時に真価を発揮する。戦争を継続する事が決まった際、オデッサとキャリフォルニアベースを抑えている事は大きな意味を持つ事になる。オデッサは純粋に資源採掘拠点として、キャリフォルニアベースを占拠する事は地球連邦政府の首都を抑える意味があった。

オデッサ、キャリフォルニアベース、ダカール。資源、政治、軍事の根幹となる三つの拠点を落とす事は、盤面をコントロールする上で大きな意味を持つ事になる。

そういう構想で作戦を立てている為、必要になるのは軍事基地を制圧する為の兵器の開発であった。

とある調査員の情報を得た時、地球上では思っていたよりも機動力を確保する事ができないという問題が発生する。この課題に意気揚々と名乗りを上げたのがジオニツク社だ。かの社は新しいモビルスーツの開発に着手し、国家総動員令が発令される土壇場でプロトタイプ・グフと呼ばれる試作機を完成させた。スミス海の戦いから地球連邦もモビルスーツの開発に着手していた事が分かった為、本機は対モビルスーツ戦も想定されている。

正直に告げる。プロトタイプ・グフは良い機体だ。ランバ・ラルも、そう言っていた。宇宙で開発をしている為、実際に地球の環境でも通じるかどうかは試してみないと分からない。だが宇宙用の装備を取っ払ったザクⅡを降下するよりかは余程、信頼性のある機体となっている。この機体を基に開発を進めれば、より良い量産機を作る事も可能だ。実際、グフの開発に携わった技術者の一人が量産機として更に改善させる為の案があると設計図を見せてくれた。

それがMS-07グフである。左手にフィンガー・バルカンが取り付けられていた。

故に、私は技術者と名乗るのも烏滸がましい男の顎を打ち砕いた。

この件は、まあ良い。

結果的に産廃型グフの開発を止める事が出来た。武装にヒート・サーベルとザクマシンガン、シールドを用いた機体を先行量産型とし、少数の量産が行われている。ブリテイツシュ作戦の後に開始する地球侵攻作戦。そこで改めて地球に関する詳細な情報を仕入れた後に、完全版陸戦型モビルスーツとしてグフB型の開発に着手する事に決められた。

しかし私はグフの設計図を見た時に気付いてしまった事がある。

私は自室の机にしまってる資料を取り出し、表題にアプサラス計画と銘打たれた書類の束を捲った。



プロトタイプ・アップサラスとも呼べる機体の設計図。これはコンスコンの社宅で技術顧問をしていた時に自分なりのジャブロー攻略案を模索していた時に図面を引いたものである。理論上は可能だが、技術的に不可能な点から提出を見送ったものだ。

その設計図を覗み付けた。懸念していたものが事実である事を確認する。

「……規格を、統一していない……だと?! 単位すら違う箇所があるだど?!」

ジオニック社とツイマツト社、及びはMIP社、全て宇宙で起業した会社である。

特にジオニック社はジオン・ズム・ダイクンが宇宙に来る前からサイド3で商売をしていた老舗だ。最初は地球企業の下請けから始まり、近所の修理屋としても親しまれていた。しかし地球企業のスペースノイドに対する扱いの悪さに嫌気を差し、スペースノイドのスペースノイドによるスペースノイドの為の機械屋さんを目指すようになる。地球に依存しない会社を作る為、ネジ一本から地力で開発を行うようになった。

ジオニック社はコロニーの修理を請け負う事もある為、ある程度の規格は掌握している。

しかし、これがモビルスーツという大型の機械製品となれば話が変わってくる。ジオニック社の脅威のメカニズムが火を吹いたのだ。独自技術をふんだんに用いた結果、ジオニック社の関連企業でしか生産できない部品が大量に生まれる結果を生み出してしまった。とはいえだ。ザビ家はジオン公国の兵器産業はジオニック社の一強になると

予見していた事もあり、規格問題を重要視していなかった。

他がジオニック社に合わせれば良い。と、そのように考えていた。

しかし軍需産業にツイマツト社が参戦し、M I P社もこれに続いた。

M I P社は宇宙移民計画でサイド3にやって来た地球の技術者が開業した老舗であり、ツイマツト社は三者の中では最も新しい企業だ。M I P社の根本には地球で培った技術が根付いている。対するツイマツト社は完全に宇宙だけでやって来た為、独自路線を突つ走つた設計となつていた。

故に、この三つの企業。なんと規格が全然、合わないのだ。

私、ギニアス・サハリンは立ち上がった。

必ず、彼の邪知暴虐の規格を取り除かなければならぬと決意した。

私には政治が分からない。私は、一介の技術将校である。

図面に線を引き、様々な数字と殴り合つて生きて来た。

それ故に、ヤードポンド法に対しては、人一倍に敏感であつた。

「ヤードポンド法の過ちを繰り返させる訳にはいかぬっ!!」

別に各企業の単位にヤードポンド法が使われている訳ではない。

しかし、人類の悪しき風習は正されなければならない。規格を統一せねば、多くの技術者が涙を飲む事になる。規格を統一しなかつた為に事故が起こる事だつてあり得る

のだ。規格とは、ただの単位に非ず。規格とは、技術屋にとつての言語である。規格を統一しないという事は、それだけで製品の信頼性を落とすことになる。いわば、同じ機械製品に英語、スペイン語、日本語、アライさんと全て言語が異なる部品を用いており、意思疎通が不可能と言っているようなものなのだ。技術者はスペイン語と英語を勉強する羽目になる。

故に、私は己の正義を全うする為に規格統一運動を起こした。

この運動には技術本部だけでなく、国防軍の整備士は勿論、企業の垣根を超えて過半数を超える技術職の人間が参加する。

「ヤードポンド法は悪い文明、滅ぶべし。慈悲はなし」を標語に軽快なステップで大通りを練り歩いた。規格統一を押し進めなかったジオン公国の上層部に反省を促す為に横断幕を掲げて、左右にステップを刻んで、ボックスを踏むのだ。広げた図面に次と、その次と、その次と線を引き続ける。次の要求性能を、満たす設計図を画くんだ新兵器。このままパイロットを戦場に送り出すのだと丁寧、丁寧に、丁寧に描くと、揺れたり、震えたりする手で丁寧を描くと決めている。次の戦場に、その次も、その次もまた生き残れるように、理想の機体構想を、設計図を探すんだ新兵器。ちゃんとパイロットを送り出せるように、震えるペン先で魂を込めた線を描いている。設計図、君の新兵器を。

偉い人には、分からない。単位が違う、その意味を。

規格統一運動の完遂、それ即ち技術職の人間にとつてのバベルの塔を打ち立てる事に等しい偉業なのだ。

数万人の大行進、数万人のボックスステップ。

これを暴動と勘違いしたザビ家が緊急会議を開く事態となり、治安部隊まで出動する始末となる。

しかし、しかしだ。技術者達は手を挙げなかつた。

ただ怨念を込めて、親の仇の如く、規格統一を訴えるのみだ。

警棒で殴られようとも怯まない。ただ血涙を流して、訴え続ける。

ヤードポンド法は滅ぶべし、慈悲はなし。

後に単位の行進と呼ばれる前人未到の一大事件は、ザビ家が折れる形で終結した。

規格統一運動の首謀者である私、ギニアス・サハリンは技術中佐から技術少佐へと更に降格した後、統合整備計画の責任者に任じられる事になる。

アップサラス計画？ そんなことよりも規格統一だ！ 規格統一を前にすれば、アップサラス計画なんぞ些事も同然！ これを完遂する事で、数万、数十万。後世を含めて、億以上の技術者が救われる事になるのだ！ バベルの塔は此処にあつた！ 人類は宇宙に出る事で初めて、共通規格を以て分かり合うことが出来たのだ！

ニュータイプ論、此処に成熟せりッ！ ハアハッハッハッハッハッハッ！！

◆ 余談だが、統合整備計画とヤードポンド法は直接的な関係はない。

規格を統一して、部品に互換性を持たせた。事のついでにと企業間の情報交換により、装備の互換性と操縦系の規格の統一が図られる。この一連の騒動による成果に、末端にいる全ての整備士と技術者は涙を流し、酒を飲み交わしたという話がある。

ギニアスは一躍時の人となった。

サイド3に存在する工業系の学校では、文化祭で学校創設者の銅像の隣にギニアス像を並べる事が流行りとなった。

技術者の英雄ギニアス・サハリンの名は世代を超えて、語り継がれる。

秘蔵のボックスステップと共にギニアスの名は伝えられる。

### 35. キルスコア2千万。

宇宙世紀0079年1月3日、ジオン公国。地球連邦に宣戦布告。

後世では、この時点で地球連邦軍の戦力はジオン公国の三倍だと云われている。

事実、地球連邦軍は、サイド3がジオン共和国と名乗った日から軍備増強を続けてきた。

特に戦艦と巡洋艦を多く取り揃えた大艦巨砲主義を踏襲した、艦隊決戦を戦闘教義の主軸に置いている。60年代に建造された旧型マゼラン級戦艦には、メガ粒子砲を搭載する近代化改修を施しており、70年代に建造した新型マゼラン級戦艦を加えた。その数は、92隻。同じく新旧サラミス級巡洋艦473隻。補給艦が1340隻となっている。

以上の他にも宇宙空母を含めた戦闘用艦艇が1000隻以上が存在している。対するジオン公国軍は戦艦8隻、重巡洋艦42隻。軽巡洋艦108隻。補給艦240隻。

その他、宇宙空母を含めた戦闘用艦艇は200隻程度。

これだけを見て分かるように艦艇の数では、戦力比は3倍では済まされない。

しかし公国軍には虎の子のモビルスーツがあった。その数、実に3000機程度。

対する地球連邦軍の航宙戦闘機は、200機程度となっている。

この差が、戦力比3倍と呼ばれる所以だ。

故に迅速果断な侵攻が、明暗を分ける。

宣戦布告をした同日、

ドズル中将が率いる宇宙攻撃軍は先ず、地球連邦軍の巡航艦隊を奇襲し、これを撃破。同時に突撃攻撃隊が月面都市グラナダを制圧し、フォン・ブラウンも占拠する。月面を支配下に置く事で、サイド3は完全にジオン公国の支配下に置かれた。更に同時期、コンスコン大佐が率いる別動隊がサイド2にて、虎の子のモビルスーツ部隊を展開。ダーク・コロニー組が中心となって、コロニーを次々と落とし、8バンチコロニー「アイランド・イフィッシュ」だけを残して翌日に持ち越される。

その間にドズル中将の座乗艦で、本作戦の旗艦でもあるムサイ改型艦隊指揮艦「ワルキューレ」がサイド3からサイド2に移動する。その旗艦にモビルスーツ部隊の指揮を執っていたランバ・ラル少佐がドズル中将に呼び出された。



「聞いたぞ、ドズル！ 毒ガスで住民を殺すとなッ!!」

艦橋まで足を運んだランバはパイロットスーツのまま、出し抜けに言い放った。

ドズルは周りに「口外するな」と一言。

睨み付けるランバに、ドズルは咳払いをした。

感情を表に出さないように、ドズルもまた相手を見定める。

「地球連邦政府の高官共は、どれだけの血を国民が流しても痛みを感じる事はない。自分達の権力と生命が危ぶまれて、初めて腰を上げる！」

「それが毒ガスで民間人を虐殺する事と何の関係があるッ!!」

「先ず、否定しておくが、奴らは民間人ではないッ！ 銃を持ち、我らの命を脅かす武装した民兵ッ！ 立派な兵士だッ！」

「しかしッ!!」

「これは戦争なんだぞッ!? 我々は正当に宣戦布告して、サイド2は連邦に付くと言ったんだッ！ 中立宣言でもなく、我らと敵対したッ！ これを攻め落として、何が悪い!?」

この言葉に、ランバは言葉を詰まらせた。ドズルは溜息を零した後、モニターに作戦プランの映像を表示する。

「良いか。ブリティッシュ作戦の概要は、サイド2のコロニーをジャブローの真上に落とす事にある」



「なんと……いう事を……っ！」

ランバは菌を食い縛り、目を伏せる。そうして、覚悟を決めた瞳でドズルを睨み付けた。

「ジオン・ズム・ダイクンは、地球の環境保全を最終目的に宇宙移民計画の完遂を願ったッ！ それがコロニーを落とすだどッ!? まさか、ドズル。お前まで賛成した訳じゃあるまいな? ザビ家の連中は気でも狂ったかッ!」

「……俺は賛成したよ、少佐。二度、階級を省いたが見逃してやる。次はちゃんと呼べ!」  
「はい、中将殿。これでよろしいか? では、言わせて貰うぞー!」

ランバは大きく息を吸い込んだ後、怒声を張り上げた。

「コロニーは宇宙の民にとっての家、帰るべき場所だッ!! それを落とすとは、何事かッ!」

「サイド2の連中はスペースノイドではなかった。地球に定住する、地球連邦政府に帰属する。地球から宇宙に疎開されただけの地球の民なんだ! 未だに奴らの魂の故郷は地球にあるままだッ! そして、我らは地球連邦の所有物を地球に送り返すだけの事、送料は元払いでなッ!!」

「そんなトンチが聞きたい訳ではないッ!」

ランバは片手に抱えていたヘルメットを床に落とし、ドズルの胸元を両手で引き寄せ

る。

互いの目の位置が、同じ高さにして、至近距離でランバはドズルの瞳に問い掛けた。「目を覚ませ、ドズル！ これは、悪魔のする事だツ!! 今は勝てるかも知れん。だが、代償を支払う事になるぞ!!」

「今、勝たなくては、ジオンに次はないッ!」

ドズルは近場にあつた椅子に腰を下ろし、艦橋の大窓から外を見た。8バンチコロニーを眺めながら、肩を落とす。

「降伏勧告は出した、攻め入る時間も定めた。投降した者には手を出さないつもりだが……誰一人、コロニーから出て来ようとしなかった! それどころか、我らの軍服を見るだけで狙撃を受けて傷を負つた者もいる!」

時間は与えた、猶予もあつた。

無差別に虐殺する場合、もっと前の段階で攻め込まねばならなかつた。生き残れる道もあつたのに、彼らは自らの意思で戦う道を選んだのだ。

それはもう民間人の域を超えている。

「俺は殺すぞ、少佐。耐え切れないならそれでも良い。三度だ、次は営倉送りだ」

「待て、ドズル……中將!! コロニーを落とせば、地球はどうなる!! どれだけの民間人を巻き込む事になると思つている!?!」

「少佐は、ジオンと連邦の国力差を知っているか？　30倍。本気を出せば、日刊で戦艦が作れる国だぞ？」

「戦争が、合理性だけで終わらせられるものかッ！　お前はダイクン派の何を見て来た!?　感情だ、人の意思が戦争を継続させるッ!!　こんな事をやっても、戦争が長引くだけだッ！」

「それでも……地球連邦政府の高官共の心を挫くことはできるッ！　嘗て、ドイツに敗れたフランスが、ヴィシーフランスと自由フランスに分かれた時のように弱体化させればそれで良いッ!!　高がレビル一人、高が軍人一人に何ができるッ!!」

「その自由フランスは最終的に勝ったんだぞッ!!」

「はあ、はあ、と二人が肩で息を吐き出す。」

そんな大人達を遠目に眺めたヒヨコ頭の少女が溜息を零した。

何故、彼女が旗艦のワルキューレに居るのか、それは貨物と一緒に忍び込んだ為である。頃合いを見計らった彼女は、ドズルの前に姿を現す。出航してしまつた後だつたので引き返す訳にもいかず、仕方なしに戦場まで赴く事になった。勿論、民間人が艦船に乗り込む事は重罪だ。しかしドズルは彼女にプロト・ゼロの別名がある事を利用し、特別少尉の待遇で戦艦に居る事を許す。

彼女、カナリアは二人が言い争うのを尻目に人知れず、艦橋を離れた。

「今の世にシャルル・ド・ゴールが身を寄せられる連合国はないッ!!」

「ドイツは負けたんだぞ!？」

「我らがジオンはドイツではないッ! 地球の民に抑圧されてきた宇宙の民を解放するッ!! 宇宙の民は地球から解放放たれて、自らの意思で立ち上がる時が来たんだッ!!」

「随分と賢い事をいうようになったな、中将! 民族自決の真似事でもするつもりか!？」

「それこそ、第二次世界大戦の二の舞ではないかッ!!」

「第二次世界大戦は、核兵器の使用で終わっただろうがッ!!」

「どれだけ正当化しようとも核兵器による無差別な虐殺だッ!!」

二人の言い争いは、まだ続けられる。この間にも作戦は着実に進められていた。

突撃機動軍所属の海兵隊の艦隊司令であるアサクラ大佐が、キシリア少将から毒ガス設置の任を受けた。しかし戦後に戦犯として裁かれるのを恐れた彼は、配下の女性将校に与えた毒ガスを催涙ガスと称して毒ガス設置の責任を押し付ける。そんな事も知らない女性将校は申し訳なく思いながらも、手っ取り早く制圧する為だと考えて催涙ガスの設置に動いた。この間、アサクラ大佐は記録媒体の改竄に手を回しており、配下の女性将校から目を離す。

そうしている内に8バンチコロニーに毒ガスが撒かれる事になった。

「8バンチコロニー アイランド・イフィツシュ」に毒ガスの散布を確認ツ!!」  
「……よくやった」

ドズルが声を振り絞る。この報告を聞いたランバは拳を握り締めて、噛み切った口の端から血を流す。

「……ここまでだな、ドズル。俺はもう、ザビ家には付いて行けぬ!」

「待て、ランバ! 待つんだツ! カナリアはどうするつもりだツ!」

「俺の子だ! 無論、一緒に連れて行くに決まっている!」

「そんなことが今更、許されると思っっているのかツ!」

「許されざることをしておいて、よく言うツ!」

ランバがドズルに背を向けて、艦橋の扉から出ようとした時、新たに通信が入る。

「毒ガス攻撃の実行者のシーマ少佐から緊急回線を使った通信があります」

「……繋いでくれ。ランバ、少し待つておけよ!」

「ふん、知った事か!」

繋ぎます。との通信手が言った直後『違うんだツ!』という女性の声環境に響いた。

『アタシじゃないっ! ドズル中将に繋いでくれ、アタシはアサクラ大佐に騙されたんだッ!!』

「……聞いている。騙されたってのはなんだ?」

『毒ガスだと聞いてなかった!』

「……………そうか」

女性将校の悲痛の叫びに「ここまで落ちたか」とランバはジオン公国に完全に見切りを付けた。

もうこれ以上、聞いてられない。と一歩、進んだ時だった。

『それに行行したのはアタシじゃない、設置したのもだッ!!』

「……………どういう、ことだ?」

『わからない……………女の声だった。あれは海兵隊のザクじやなかったッ!』

この瞬間、ドズルはヒヤリとしたものを背筋に感じる。

周りを見渡した。こういう時に限って、したり顔で姿を見せる少女を探した。

そのドズルの様子に、ランバもまた嫌な予感に唾を飲み込んだ。

「……………おい、まさかと思うが……………ドズル、この船に……………まさか、カナリアが乗ってやしないな?」

「……………」

「おい、なんとか言え。なんとか言ってみろッ!」

「……………ランバ、違うんだ……………俺は……………」

「居ないと言えッ! 言うんだ、ドズルウウウッ!!」

ランバの悲痛の叫びも虚しく、艦橋にいる誰もが口を噤んだ。

数分後、少し前にワルキューレに搭載されていた予備のモビルスーツが哨戒に出たのを確認される。

パイロットはプロト・ゼロ特別少尉。

整備士は「上官にドズル中将の命令だと言われれば、従わざるを得なかった」と述懐した。

### 36. 殺すね、貴方を。皆も。

ザクIに乗るのは、久しぶりだ。

旧ザクと呼ばれる事もある当機は、作業用機械としても価値が高く、空いたハンガーに詰め込んでおくには丁度良い。出力も高くない上に燃費も良い。初心者にも扱い易い設計の為、整備士の人が荷物を搬入するのに使う事も多かった。

そんなザクIと共に宇宙を駆ける。

太陽の光に反射される星々は綺麗で、やっぱり好きだなんて思った。

私が軍規違反を犯してまで、ザクIを持ち出したのは——もの凄い自己中心的な理由からだ。

このままだとお父さんとドズルは破局する。破局なんて言い方をするのは変だけど、実際そんなもんなのだから仕方ない。それで私が何もしなければ、私はザビ家に残るか、お父さんに付いて行くかの二者択一を迫られる事になる。それが二人の言い争いをしていく時点で分かっちゃった。

だから、私は今、ザクIに乗り込んで宇宙を飛んでいる。

私は欲張りだ。逃げれば、一つ。でも、一つだけでは満足できない。どちらか一つな



んで選べない、お父さんとドズルはお互いに比べられない程に大切な相手だ。できる事なら、ずっと仲良くして欲しいし、その中に私も一緒に入れたら幸せだ。だから二つを勝ち取る。どちらか一つなんて認めない、進んで二つを勝ち取ってやるのが我儘娘の本領というものだ。

航行中、毒ガスのタンクを運んでいる部隊を見つけて接触する。

『ああん、渡せだつて？ ふざけんじやないよ！』

通信機越しに勝ち気な女性の声が聞こえた。

それを耳にして、ああ、彼女達はガスタンクの中身を教えられてないんだって事を直感する。本当に出世の為に汚れ仕事を受け入れているのであれば、申し訳ないって思う。でも、騙されているのであれば、容赦をする必要はない。幸いにも彼女達はザクIに乗っていたので「この中身が毒ガスだつて知ってる？」と問いかけた後、手早くガスタンクを奪い取って8バンチコロニーまで運んだ。

◆ 動揺する彼女達の追跡する足が鈍り、悠々と目的地まで辿り着く事ができた。

◆ サイド2、8バンチコロニー。アイランド・イフィツシュ。

ジオン公国の横暴に抵抗する為、数少ない軍人はドッキングベイにバリケードを作り、民衆から義勇兵を集って型落ちの銃器を与えた。

公国軍の戦力が相手では、敵わない事を彼らは理解していた。だが地球連邦軍が掻き集めた戦力をサイド2の援軍に向かわせている事を通信で知っていた為、士気は低くない。都市そのものを地雷や土嚢で要塞化しており、ありつたけの特製カクテルで公国軍を出迎える準備をして待ち構えた。

地球連邦軍の本隊がサイド2に来るまで時間を稼ぐことが、彼らにとつての勝利条件だ。勝算は低くない。嫌がらせを徹底し、耐え忍んで時間を掛ける。戦えない者はシエルターに送った。

降伏勧告があった。しかしサイド2の方針として、徹底抗戦が定められており、民衆の降伏は許されなかった。

シエルターに籠る、民衆の中に一人の女性が居た。

彼女には、両片思いの青年がいる。青年は、留学先に地球の日本を選んでいた。その事を彼女は知っていた。数年後には、別れる事が分かっていた相手なので想いは伝えなかつた、それは青年も同じ。二人は胸に想いを秘めたまま、今日まで生きてきた。

青年は、彼女の事が好きだった。好きだったから、突撃銃を手に取った。

最後にもう一度、彼女と話がしたかつたから、軍人の命令を無視して、感情のままに彼女に会いにシエルターまで向かつた。

そして、二人は偶然にも出会うことができたのだ。

もう、これで死んでしまうかも知れない。

その想いが、二人に想いを吐露させる。コロニーの全体を、広く見渡せる小高い丘の上で、二人は言葉を重ねる。

指を重ねて、手を繋いだ。身を寄せ合って、少し肌寒さを感じる風を温める。知っていた、最初から知っていたのだ。

お互いの想いなんて、辛い、想いをしたくなかったから、言葉にしなかった。それだけの話。少し勇気を持てば、もっと早く二人は結ばれていた。

◆  
幸いにもコロニーの基礎設計図は民間にも公開されていた。

簡単な図面は、私の頭の中に叩き込まれている。

ガスタンクを設置するのは、空調装置だ。

除染装置の次に繋がれたパイプに手早くガスタンクを接続し、装置を作動させる直前に大きく深呼吸をする。

ボタン一つで二千万人が死ぬ事になる。

目を閉じる。思い浮かべたのは、今まで出会って来た人々の顔だった。

大通りの交差点、行き交う不特定多数。子供が、風船を持っていた。手から手放された風船が空高くへと昇る。

どうせ、死ぬ命だ。と頭を切り替える。

私がやらなくても、誰かがやる。誰がやっても死ぬのであれば、私が殺しても大差ない。

それでも、手が震えてしまうのは、命の重みを感じての事か。

人を、殺した事がある。

思い返すのは、大型戦車に乗った時の事、人の意思が身体の中を吹き抜ける。

そして、蠟燭の火が消された時のように、ふつと声が消える。

息が震えた、呼吸が荒くなる。

今から、私が二千万人を殺すんだ。

思い返す、ランバが居て、ドズルが居た。キヤスバルとアルテイシアが居る。

紛れもなく、幸せだった日々を思い出す。

逃げれば一つ、進めば二つ。ならば、進んで二つを手に入れる。

臉を開ける。もう、手は震えていなかった。

私にとって、顔も名前も知らない二千万の命よりも、

また三人で過ごせる毎日の方が大切だ。



重ねた唇、互いの温もりを感じ取る。

腕を抱きしめてくる彼女は拒めるはずもない。

日本の話をした。

桜の花は薄桃色で、いつせいに咲き乱れて、すぐに散り落ちる。

とても綺麗なんだ。

青年の友人の多くが、サイド2を離れていた。

月に行った者がいた。

サイド3で勉強に励んでいる者もいる。

日本の大学は4月が始業式だったから、彼は出発をギリギリまで遅らせていた。

彼女との時間を少しでも長く過ごす為に。

だから、後悔はなかった。

バカげた事に巻き込まれてしまったけど、

こんな事が起きたから、僕達は結ばれたのだと青年は笑った。

今が、幸せだった。



だから、始めるよ。殺すね、貴方を。皆も。私の幸福の為に。

毒ガスを起動させる為の最後の操作、ガスタンクに取り付けられたスイッチをザク

で押すだけだ。

そのスイッチは、私が思っていた以上に軽かった。

◆ 日本には雪が降る。

秋には、山が燃えるように真っ赤に染まり、夏には海と山で遊ぶのだ。色とりどりの風景を思い浮かべて、良いなあ。と彼女は呟いた。

だから、呟いた。

「私も行きたいな、地球に」

男は驚いた顔を浮かべた後、笑顔で答える。

「行こうか、こんな事が終わったら」

一緒に？ と問い掛ける彼女を、一緒に、と青年は力強く抱き締めめる。

少し、肌寒くなってきた。咳をする。互いを温め合うように、強く、強く抱き締め合った。

唇を重ねた、柔らかい感覚。

特に味はしなかったけども、脳の奥が甘く痺れる感覚があった。

腰に回す手に力が込められる。

眠くなる、緩やかに。凍えるように寒い、互いが互いを抱き寄せた。

喉が重い、体が言う事を聞かなくなる。

おかしいな。戦いに、行かなきゃいけないのに。

彼女の手が地面に落ちる。自分も、もう腕に力が入らない。

でも、まあ、良いか。と青年は最後の力を振り絞って、彼女の身体を抱え直す。

こんなにも幸せなのだから、きつと目を覚ました時、全てが終わっている。

結婚しよう、地球に行ったら彼女と結婚する。

最初は生活が苦しいかも知れない……

子供は二人が良い……。男の子と……女の子……だ……

……今から、待ち遠しい……

こんなにも……幸せだから……サイド2に残ってて……

僕は……良かった……

……



数分後、コロニーの中で次々と倒れる人の感覚が感じ取れる。

意味も分からずに死んでいくのが大半で、異変に気付いた一割程度がジオン公国に恨み言を呟いて死んでいった。声が消える、眠るように。スイッチ一つで呆気なく、大勢の人が死んでいった。申し訳ない気持ちはある。でも、絶対に謝らないと心に決めていた。私の勝手に殺したのだ、やりたいようにやった結果だ。そんな私が悲劇のヒロイン

ぶつて良いはずがない。

残忍で残虐。私の胸の内は驚くほどに穏やかだった。

「思えば、あの時も。案外、大した事なかったな」

殺人そのものを忌避した覚えもなければ、恐怖した事もない。

そんな感性だから、初めて人殺しに吐き気すら催さなかった。

ただ子供心に悪い事をしたって事はわかる、それが私の心を蝕んだ。

私がやった事は決して正当化されて良い事ではない。

虐殺しても守りたいものがあつた。

だから、殺した。

それだけの、話だ。

私の価値観は、あの時から、ちつとも変わつちやいなかった。

倫理観は、欠片も成長していなかった。

人の命を奪つたんだ、大切な人の命を奪われもする。

こんな私のような人間が居るから、世の中つて末恐ろしい。

だから私が守る。守りたいものを。

誰かを守る為なら、誰かを殺せる。

そんなもんだ。



◆ 旗艦ワルキューレに戻って来たカナリアの姿を見たランバは、怒りの形相で歩み寄った。

振り上げられた手にギュツと目を瞑るカナリア。だが、その手が振り落とされる事はなかった。ランバの背中越しに、振り上げた右腕を手で握って止めるドズルの姿があった。

そのままランバを押し除けて、カナリアの前に立つてみせる。

「よくやった、プロト・ゼロ特別少尉。命令通りだ」

その佇まいは、何時もカナリアと接する時とは違っていた。

カナリアは慌てて敬礼を取る。その少女の姿にドズルは深く頷き返す。

「ブリティッシュ作戦を終えた後、宇宙に残存する連邦軍の本隊と一戦交える事が予想されている」

此処に勝利しなくてはジオン公国に未来はない。とドズルが断じた。

ドズルの隣に立つランバが口を挟もうとした。しかし、ドズルの手によって遮られる。

ランバを一度、睨み付けた後、ドズルは大きく息を吸い込んでから辞令を下す。

「ジオン公国に遊ばせておく戦力はない、使えるものは使う。プロト・ゼロ特別少尉、持

てる全ての能力を使って連邦軍を撃滅せよ」

これは命令だ。と締めたドズルにランバは思わず、声を張り上げた。

「ドズルッ！ お前は、子供に戦わせるつもりかッ!？」

「ランバ少佐、公の場で階級を省くなど何度言わせるつもりだ。おい、そこのお前、コイツを営倉に連れて行け」

「こんな事が許されると思ってるのか！ 俺は認めんぞ、ドズルッ!!」

「……少佐。もう、これ以外に道はないんだ」

ドズルは感情を押し殺した顔をする。二人の兵士による拘束を拒むランバを、僅かな情を込めた目で見つめた。

「たとえ、上官の命令だとしても毒ガスで二千万人を殺した、それも他部隊の任務を奪つての話だ。情報の隠蔽も改竄もままならぬ今、調べればすぐに分かる。このまま連邦軍との戦闘に負けた時、コイツは戦犯として裁判の晒し者にされる可能性が高い。こんな言い方は公国軍の司令官として相応しくないが……全てを守るには、もう勝つしかないんだ」

「これ以上、この子に背負わせる気か!? 戦場に出す必要など……!」

「わからないのか、ランバ!! もう背負わせるとか、そんな次元の話じゃないんだ！ このままでは、コイツはただの大量殺人者だッ！ 戦場で功績を上げて、英雄として祭り

上げるしかないんだよッ!! 言わずとも察しろ、この親バカがッ!!」

ドズルが張り上げた怒声の後、二人は睨み合った。口を噤んだまま、ただお互いを見つめ合っている。

そんな二人を前に、カナリアは困った風に、にへらと笑って口を開いた。

「えっと、ごめんなさい? 勝手な真似をしちゃって」

「本当になッ! 後で拳骨だッ!!」

「俺からも一発、殴らせて貰うからなッ!!」

やだあ、と零す少女の口元は嬉しさと綻んだ。

そんな彼女の気の抜けた様子に毒気が抜かれたドズルは肩を落とす、ランバは頭を抱えたまま艦橋から連れ出される。

同日、彼女の愛機であるツダを前線まで搬送するように緊急で要請が出された。

◆ プロト・ゼロ。即ちカナリアが毒ガスを起動した。

その話を聞いた時、そうか。と私は端的に返す。

公王庁の執務室、窓から外を眺める。

空を見上げた、特に意味はない。

天井に地球の空の景色が映し出されているだけだ。

此処からでは、宇宙を見上げる事も出来ない。

部屋に備え付けられた電子ポットの電源を入れる。

熱湯を作る時間、コーヒーマイルで豆を挽く。鼻先を擦る芳醇な香りを堪能し、ドリッパーに移し替える。最初は、蒸らすだけ。炭酸ガスでモコモコと膨らむ珈琲粉を眺めつつ、左手に付けた時計の秒針で時間を計る。

人の好みよりも、少し長めの時間。円を画くように湯を注いだ。

一杯分の珈琲、砂糖も牛乳も混ぜずに口を付けた。

懐かしい味がした。もう随分と味わっていない自分好みの味だった。

私は、窓の近くに立って、再び空を見上げる。

そして数年前まで嗜んでいた自分好みの珈琲を啜る。

「……苦い、な」

その味は、今となっては自分好みの味ではなくなっていた。

ブリティッシュ作戦は、道半ば。月の重力を受けて、地球への自由落下軌道に入る。

後戻りはもう、できない。

勝つか道は開けない。そんな事は分かっていた。

分かっていた、はずだった。

### 37. カナリアちゃんとの戦いはこれからだ！

宇宙世紀0079年1月4日。

ブリティツシユ作戦第二段階へ移行。アイランド・イフィツシユサイド2、8バンチコロニーに核パルスエンジンを装着した後、地球への降下を開始する。翌日、地球連邦軍はアイランド・イフィツシユの移動を察知。その移動に司令部本部は疑問を抱くもティアンム少将は、月を周回する軌道からコロニーを質量兵器として地球に落とす事を察する。地球連邦所属の観測局が軌道を計算し、コロニーの落下予測地点がジャブローである事が判明。レビル中将は、先遣隊としてサイド2に急行していたティアンム艦隊に転進を指示、コロニーの破壊を試みる。

1月8日、コロニーの落下軌道上にティアンム艦隊が展開するも、ジオン公国軍のコロニー護衛艦隊の強襲を受けて、ティアンム艦隊は半壊。コロニーの破壊にまでは至らず、1月10日。コロニーは地球の引力圏内に突入。しかし地上からの援護射撃もあつてか、大気圏に突入した直後、コロニーはアラビア上空で崩壊を開始する。

三つに割れたコロニーは、それぞれが地球に降り注いだ。  
軌道が、逸れた。

アイランド・イフィツシュの残骸は、地球に大きな被害を与えた。

コロニーの前半分がオーストラリアのシドニーに直撃、南部にある都市群は壊滅。太平洋に落下した残り三分の一が人口密集地である東アジアに地震と津波を引き起こし、カナダ南西部を襲った三分の二が北アメリカの全域に破片の雨を降らす。

地球の地殻と大気は引き裂かれた。

後に語られるコロニー落としの被害者は、余りに膨大な数となり、死者を正確に測る事は困難とされる。ライフラインの崩壊に伴う疫病の流行と餓死などの二次被害。戦争の直接的な被害も含めて、地球の総人口の約半数が死亡した事実が明らかとなった。

翌日、11日。以上の戦果を受けて、サイド6は中立を宣言。

ジオン公国軍はブリティツシュ作戦の失敗を認めて、地球への橋頭堡を確保する為にサイド5への侵攻を開始した。

開戦からブリティツシュ作戦までを後世では、一週間戦争と語り継がれる事になる。

サイド5ことルウムでは、徹底抗戦の機運が高まりつつある。

既にサイド5にはティアンム艦隊が収容されている。サイド2とサイド6でジオン公国に抵抗した残存艦隊も合流しており、更に数日内に地球からの本隊の到着が予定されている。レビル將軍はルナツールの後詰め艦隊の他、サイド1、サイド4に収容されて

いる艦隊も掻き集めており、サイド5に現存する宇宙戦力の全てを掻き集めていた。

これをジオン公国は危機と判断。サイド2とサイド6の残存戦力を集めたティアンム艦隊だけでも同等以上、レビル將軍が率いる本隊も合わせれば3倍以上の戦力差となる。故に宇宙での優位を確保する為にジオン公国軍はティアンム艦隊の撃滅、その後、サイド5にやって来るレビル艦隊を迎え撃つ策を取ることを会議で決定した。

その会議内容のリークを受けた地球連邦軍は、ジオン公国軍の思惑通りに部隊を動かす事になる。

地球連邦軍はミノフスキー粒子下での戦闘に不慣れであった。

メガ粒子砲の開発過程で地球連邦軍はミノフスキー粒子の電波障害の特性には気付いていたが、これをミノフスキー粒子を用いた兵器を運用する際の不具合と認識。最初から兵器運用を試みて、効率的に散布する方法まで研究し、戦術に組み込んでいたジオン公国とは、ミノフスキー粒子に対する認識に雲泥の差があった。これにより、従来の戦術が通用しなくなった事に地球連邦軍は、ミノフスキー粒子下の環境に対応できないまま大敗を喫する。

本隊は壊滅し、黒い三連星の活躍でレビル中将は捕縛される。ティアンム艦隊は決戦を避けて、ルナツーに引き返す。

後にルウム戦役と呼ばれる戦いは、ジオン公国の圧倒的勝利で幕を下ろす。

そのままジオン公国軍はサイド6を介して、休戦条約の締結を目指すと同時に残敵の排除を開始する。サイド5の制圧にはガルマ少佐が着任、宇宙攻撃軍はサイド1とサイド4の占領に取り掛かった。地球連邦軍がサイド1とサイド4からジオン公国を狙わなかったのは、宇宙要塞ソクモンとア・バオア・クーの存在があった事に加えて、サイド5を制圧した後、ブリテイッシュ作戦の再開を匂わされた事にある。

さておき、裏でキシリア少将が率いる突撃機動軍が着々と地球侵攻作戦の準備を整える。

◆ その表でズムシティでは祝勝祝典が開催された。

勲章伝達式。サイド5ことルウムの制圧部隊に配属されたガルマは祝典に間に合わなかった。

自分と同じく少佐に昇進した事だけは分かっており、同期としては少し鼻が高い。現在、モビルスーツパイロットの中で少佐は、非常に高い階級だ。自分は月面を制圧する時に階級がひとつ上がり、ルウム会戦では戦艦5隻を撃墜した事で中尉から少佐に二階級もの昇進を果たした。これは異例の出世だ。今や自分は赤い彗星と呼ばれており、ジオン公国の中でもトップエースの一人に数えられている。

知った名前では、ランバ・ラルが少佐から中佐に上がっており、今いるモビルスーツ



パイロットの中では最高位の階級となっていた。ただ話を聞くに彼はルウム戦役で、ほとんど戦果を上げられなかったようだ。公式記録で艦艇の撃破数はなく、戦闘機や補助艦の一隻も落とすしちやいなかった。

彼ほどの人物であれば、この好機に戦果を荒稼ぎできそうなものだがな。

代わりに突出した戦果を上げていたのが、プロト・ゼロ少佐。

戦艦8隻、巡洋艦5隻。戦闘機12機という異常な結果を残していた。写真を見た事がある。自分と同じく顔を仮面で隠した少女であった。「やあつておしまい！」とでも言いそうな仮面の趣味はさておき、背中を覆い隠す程に長く艶やかな金髪、茶色というよりも黄色に近い。年齢の割に幼い体格、頭の頂点でくるつと跳ねた二本のアホ毛が髷を髷髷とさせる。しかし露出した口元と顎のラインを見るだけでも美人の素質を持っていると分かった。瞳は茶色寄りの黒い色をしていた。

なんとなしにカナリアの事を思い出したが、私の妹がこんなに美人のはずがない。と直ぐに意識の外へと追いやった。

そもその話、なんで彼女が戦場に出ているのかっていう話だ。仮に戦場に出ているとして、彼女が乗っているのは金色に塗装したツダである。そんなバカをドズルとランバの二人が許すはずがない。あと、いくら何でも戦果を盛り過ぎだ。私が操縦しても、ある程度の地位を持つ人物が全面的に支援する事で、やっと出せるかどうかという戦果

である。

彼女はジオン公国軍の士気高揚の為、体よくプロパガンダ要員に扱われているだけだと結論付ける。

実際、メディア受けも良い。英雄視というよりもアイドル的な人気だが、まあ、こんな事で士気高揚に繋がるのであれば、安いもんなのだろう。

祝勝祝典を終えた一週間後、

地球連邦政府と休戦条約を結ぶ為、マ・クベ大佐を代表にした大使が地球に降り立つ。

その裏で、私はドズル中將に呼び出される。

「よく残ってくれたな」

迎え入れられた部屋には、ドズルの他に誰も居なかった。

椅子に座る事を促される。長めの話になるか。

正体がバレる事はないか細心の注意を払い、僅かに声色を変えて受け答えをする。

最初は世間話だった。……自分の正体に勘付いた気配はない。

「貴様を他にくれたくなかったのは、他にさせたい仕事があったからだ」

「それは、どのような？」

仕事の話に、先程までとは別の意味で身構えて問い返した。

ドズルの口元から笑みが消える。

目付きが軍人へと変わり、空気が僅かに張り詰めるのを感じ取る。

「連邦の新モビルスーツ開発計画が秘密裏に進行している。V作戦というらしい」

「……その、何が問題で？」

「ただのモビルスーツの開発であれば、問題ない。しかし、それがザクやツダを大きく超える性能を、となれば話は別だ」

書類を手渡される。中には本作戦に関連する情報が記載されていた。

そこにはジオン公国と地球連邦の国力比を数値化したものがあり、宇宙の大部分を占拠し、地球に大打撃を与えた今もまだ工業力は地球連邦の方が十倍以上も高い事が試算されている。即ち、これは地球連邦がモビルスーツの開発に成功した暁には、ジオン公国と地球連邦の戦力比が簡単にひっくり返ることを意味していた。

この脅威をジオン公国に所属する人間の多くが分かっていない。とドズルは愚痴る。

「俺達がルウム戦役で勝てたのはミノフスキー粒子の特性に関する情報のアドバンテージがあったからだ。これも先の会戦で連邦軍はミノフスキー粒子下の戦場を知った。我が軍が連邦軍に優位を持てるのは最早、モビルスーツ技術しかない」

だから貴様に命令するのだ。とドズルは告げる。

「あらゆる兆候を捉えて、V作戦の基地を探り出して叩き潰す事を！」

不意にドズルは窓から外を見上げた。ドックの中に格納される一隻の艦船を見上げ

て「おお、着いたな」と零す。

「ジオン軍きつての英雄といえども身ひとつで、これだけの任務を熟せるとは思っていない」

見ろ。と先程のムサイ級軽巡洋艦を指で差した。

「アレは貴様の船だ。俺のワルキューレ程ではないが最大級の改装をさせてある。ムサイを超えたムサイだ」

好きに使え。という言葉を聞いた時、少し胸を撫で下ろす。とりあえずドズルの傍に居続ける事はないようだ。

「何か、質問は？」

「ありません！ シヤア少佐、任務に邁進します！」

敬礼を返す私に「それと」とドズルが付け加えた。

「この広大な宇宙、船一隻では手に余る。だから同じ任務に就けられる部隊がある」

「……それは一体？」

「おそらく貴様もよく知っている名前だ。上手く協力するんだな」

そう言うと、入れ。と彼は促した。

少し間を置いた後、隣の部屋に控えていたらしい二人の人物が姿を現す。

共に女性だ、一人は黒い長髪をした体格の良い女性。175センチメートルある自分

よりも更に高い、ドズルと肩を並べる事もできそうだ。

もう一人は、ヒヨコ頭で奇抜な仮面を付けた少女だ。写真からも低い事は想像できていたが、こうして顔を合わせてみると思っていた以上に背丈が低かった。

彼女は、私を一目見た瞬間、さらりと口を開いた。

「キヤスバルじゃん、なんでここに居るの？」

瞬間、場の空気が固まる。

「あれ死んでなかったっけ？」と彼女一人だけがポケットとじていた。

## メアリー編

## 1. ゴツプの娘

深い眠りから目を醒ます。

視界には、小太りな初老男性の顔がある。男は驚愕に目を見開いており、慌てた様子で周りに指示を出していた。まだ頭の中がぼんやりとする。寒い、吐く息が白く凍った。狼狽する小太りな初老男性に手を伸ばす。身体の表面が凍っている。パキ、パキ、と音を立てる。冷たい、この箱の中は驚くほどに寒かった。助けを求めたかったのか、それとも温もりが欲しかったのか。彼と私を隔てる硝子の壁に手を触れる。男は困惑したまま、硝子越しに手を重ねてくれた。

それで彼の体温が伝わった来ることにはなかったのだけど、ほんの数分前まで凍っていた心に命の温もりが灯る。

「えへへ」

もう間もなく私の命は尽きる。最後に触れ合えた、僅か一瞬の出来事に笑みを零す。臃げだけど、覚えている。爆破から僅か十数分の出来事、宇宙ステーションが崩壊する中で頭から血を流す母親の姿を覚えていた。この冷たい箱に押し込められた、全身が

冷たく凍り始める。眠る前、最後に見たのは母親の笑顔。安堵半分、私を安心させる為に頭から血を流しながら意識を手放すその時まで私の事を見つめていた。

硝子に付着した母親の血は、今はもうない。

意識が遠のいていく、明確に迫る死の感覚。もうこれでおしまい、と瞼が落ちていった。硝子を叩く音がする、まだ薄っすらと開いた目には小太りな初老男性の姿がある。男は必死に何かを呼び掛けながら、硝子の壁を叩いていた。でも、もう駄目だ。寒いということすらも感じられなくなっていた。

程なくしてプシューという空気の漏れる音がする。

抱きかかえられる。

久方ぶりに感じる人の温もり、本当に、本当に久しぶりに感じられる。

長い、とても長い、夢を見続けていたようにすら思える。

幸せな温もりの中で、私は意識を手放す。

◇

朝、カーテンの隙間から差し込む光に目が醒める。

ふわりと大きく欠伸をする。ふんわりとした布団の中で身を振り、二度寝してしまいそうな気怠い身体を緩やかに起こす。キャミソールの寝間着、ウンと限界まで身体を伸ばす事でなんとか意識を保った。目を擦る。ベッドの上から脚を降ろし、部屋に備え付

けてある適温の湯と洗面器で顔を洗った。クローゼットの中にある着替えを適当に選んで袖に通し、洗濯する分は部屋の隅にある籠に放り込んだ。後で屋敷の使用人が取りに来てくれる。

まだ眠たい。ふらりと私室を出れば、赤絨毯の長い廊下が横に広がっている。

「おはようございます、メアリー御嬢様」

「どうも」

「もうすぐ朝食の準備が整います」

擦れ違った使用人と挨拶を交わし、ゆらゆらと食堂まで足を運んだ。

他の部屋よりも少し大きめの扉を開ける。

部屋の中心に置かれた長机には、でっぷりと肥えた初老の男が席で腰を下ろしていた。手には端末を持っており、たぶん朝のニュースを確認しているんだと思う。彼は私の姿を確認すると、にんまりと胡散臭い笑みを浮かべる。それが彼の浮かべる慈愛の笑みだと信じられるまで結構な月日を費やした記憶がある。

やあ、と彼は億劫そうに身を揺らす。

「君の寝癖は、絡み合うコードのように複雑怪奇だ」

彼は息を吐くように皮肉を口にす。

そんな彼の軽口には親愛の情が込められている。



だからなのか不快に思う事はない。

「後で直して貰うわよ」

私が素っ気ない態度を取る。

すると彼は嬉しそうに肩を揺らした。

彼は不器用というよりも変わり者だ。

もつと言えば、食わせ者である。

「ゴツプ様、メアリー様。朝食の準備が出来ました」

私が席に座って程なくすると朝食が運ばれてくる。

屋敷は豪邸だが住んでいるのは二人だけ、屋敷の主である義父の他に私が居るだけで後は使用人だ。義父は端末を脇に置いて、フォークとナイフを手に取り、私はバターがたっぷり塗られたトーストに嘔り付いた。

私は今、ゴツプの養子として生活を営んでいる。

冷凍睡眠装置から目覚めたのが丁度1年前、ほんの数日前まで西暦だったはずの世界は宇宙世紀に名を改めていた。それも70年近くの歳月が流れている。半世紀以上も睡眠状態にあった私を解放してくれたのは義父で、戸籍は勿論、身元も分からない私を引き取ってくれた。

……辛うじて、名前は覚えている。

でも長い間、眠っていた弊害か名字まで思い出すことが出来なかった。

両親の顔もよく分からない。

「今日の午後、予定を開けておきなさい」

朝食を摂った後、義父は政務の処理を始める。

屋敷に帰るのは週に一度か二度、屋敷に居る時も午前中は書類に目を通して。その事を不快に思う事はない。何故なら彼は地球連邦軍の偉い人。サイド3で頻発する暴動に伴って、軍政家である彼の仕事は加速度的に増えている。

私は、日に数時間、家庭教師から勉学を学んでいる。

学校には通わず、護衛もなしに外を出歩くことも許されていない。なんでも西暦生まれである私は、色々と面倒が多いようで人前に出たくないようだ。義父は、私では理解が及ばない事を多く考えている、秘密もたくさん抱えている。

それでも私を守ってくれる意志は本物だ、彼は私の幸福を願ってくれていた。

だから私も、彼の言葉に逆らおうとは思わなかった。

私には、生きる目的がある。

義父が偉い軍人だったので自分も軍人になる事は信じて疑わなかったし、軍人になった後は義父の力になると決めていた。なので私は勉学に励んでいる。義父の助けになるには、頭を良くする必要があるので。自分の身を守る為に銃器の扱いも学んだ、護身

程度に武術も嗜んでいる。

不自由も多かったけど、出来る範囲で自由にさせて貰った自覚はある。

だけどまあ不満に思う事もある。

それは友達が居ない事だ。冷凍睡眠装置から目覚めて丸1年、私には同年代の友達が一人も居なかった。学校に通えていないので、当然と云えば当然の話。私は友達に飢えている。士官学校に入学すれば、友達の一人や二人は出来ると思うのだけど、まだ私は10歳の少女なのだ。士官学校に入れるのは16歳からなので、あと6年も待たなくてはいけなかった。今の私は箱入り娘、あと6年も友達が作れないのは嫌だ。

だからといって何かできる訳でもない。

義父は何時も忙しそうにしているので、あまり私の事で面倒を掛けたくなかった。

本当は、もっと頼って欲しいのは知っている。だけど私の心情としても今の忙しい時期は休める時に休んで欲しいのだ。ダイクンが暗殺された直後、お腹は膨れているのに、どんどん顔がやつれていった時期を知っているだけに余計にそう思うのだ。

甘えていると捉えられる程度に不満を口にして、迷惑になる事は口にせず。深窓の令嬢気分を胸焼けするほど堪能する。

夜、夕食を摂る前に義父から呼び出しを受ける。

「メアリーです」とノックを4回、部屋の中から義父の「入りなさい」と言葉を受けてか

ら扉を開けた。書類の積み上げられた執務机に腰を下ろす義父——と、その隣に肩身狭しと佇む金髪の少女。私よりも年下の女の子であった。

私の頭の中で色々な憶測が飛び交う中、義父は口を開いた。

「誕生日プレゼントだ」

「……誕生日？」

「誕生日が分からなかったからね。君が冷凍睡眠装置から目覚めた日を誕生日にする事にした」

祝ってくれるのは、素直に嬉しい。しかし解せないことはある。

「はあ……ありがとうございます。それでプレゼントというのは？」

半ば察しは付いているのだけど、問わずにはいられなかった。

義父は金髪の少女を横目に合図を送る。彼女は一步、前に出る。

敬礼を取り、少し舌足らずな口で自己紹介を始めた。

「わたし、エリスといいます！」

元気の良い挨拶を見て、私は再び義父を見た。

猜疑心たっぷりだ。

「今、私の愛している娘はメアリーだけだよ」

家は継がせられないがね、と彼は自嘲するように笑みを深めた。

いや、聞きたいのは、そこじゃない。眉間に皺を寄せて、義父を睨みつけているとエリスと名乗った少女が動揺をし始めた。ちよつと可哀想な気もするけども、此処で折れると今後ずつと煙に巻かれる気がしたので義父を睨み続けた。

義父は溜息を零し、根負けしたように口を開いた。

「彼女を君に付ける。君のモノだ、好きに扱いなさい」

本当に人をプレゼントするのはどうかと思います、お義父さま。

## 2. 御嬢様の犬

「メアリー様、起きてくださいい！」

早朝、定時なると同居人が私を起こしに来る。

渡した合鍵で鍵を開けて、バンと扉を開け放つのだ。まだ眠たい私は布団の中に頭の先まで潜り込めば「だ〜め〜で〜す〜！」と同居人が布団をひっぺ剥がした。頭の中がまだぼんやりとしている。元氣印のエリスに上半身を起こされて、爆発した頭をせっせと整える。

そうしている内に少しは頭も冴えて来る。

ベッドから重たい腰を上げる。まだ寝ていたい、朝に弱い。一生分は寝ていただろうに、と義父は笑うけど何十年と寝ていても眠たいものは眠たいのだ。身体が睡眠を欲している。そんな私の事なんて露知らず、彼女は私の寝間着のキャミソールを一気に脱がすと下着に上着と手際よく替えさせた。見事な早業である。最後にもう一度だけ髪を整えて、準備万端。私はエリスを手招きし、ギュツと抱き締めて「よく出来ました」と頭を撫でまわした。

嬉しそうに目を細める彼女の額にキスを落とし、顔を真っ赤にする彼女を背に部屋を

でる。

エリスは私の所有物である。

彼女は朝から晩まで、ずっと私の傍に居る。

一緒に居るのに気を張るのも嫌だったので彼女の事は犬だと思ふ事にした。義父は好きにしても良いと言っていたので問題もないはずだ。勉強も一緒に励んでいるし、拳銃の訓練をする時も一緒だった。だけど義父は彼女の分まで家庭教師を用意するつもりはなかったようので彼女の勉強は私が教えている。上手く出来た時は彼女の頭を抱えるように胸元に抱き寄せて、頭を撫で回す。彼女は、こうされるのが好きで嬉しそうに顔を蕩けさせる。

これでやる気を出してくれるのであれば安いもんだ、と考えて兎にも角にも抱き締めて甘やかした。

その甲斐あって今では、彼女が私に勉強を教えてくれる時がある。拳銃で的に当てるのは、もう彼女の方が上手くなっていた。私よりも良い成績を出した時の申し訳なさそうな顔が気に入らなくて、何時もに増して目一杯に撫で回す。柔らかい頬を両手でもつちもちに撫でるのが好きだった。顎下を擦ると気持ち良さそうに目を細める。

可愛くなれ、と育てられた子は可愛く育つもので、気付いた時には可愛過ぎて手放せなくなった。

私のエリスに対する溺愛っぷりは義父が嫉妬する程である。

「ふんふんふん♪」

「あ、あの……自分で……」

「聞こえな〜い♪」

訓練の終わりは、お風呂である。

犬である彼女を洗うの飼い主である私の役目、金色の髪をくしゃくしゃつと洗ってやる。背中は勿論、手から足の指先まで全身くまなく洗って浴槽に放り込んだ。なんと、ウチのエリスは待てが出来る。お手もおかわりもできる偉い子なのだ。恨みがましく睨みつけてくるエリスの事なんて素知らぬ顔で、自分の体をゆつくりと時間をかけて洗った。

白い湯気が漂う空間、張った湯に足先を入れる。一人で使う分には広くて、二人で使う分には少し狭い浴槽。スペースを節約する為にエリスを抱き寄せる。背中から抱き締めると顎を上げて、上目遣いに私の顔を見つめるのが可愛かった。今日は正面に座らせて、抱き寄せる。人並み以上にはある胸元に顔を埋める彼女が、トロリと気持ち良さそうに目を細める姿は庇護欲を唆られる。

良い子、良い子と頭を撫でる。

優しい気持ちで接すると優しい子に育つようで、ちよつとした悪戯を仕掛けても驚く



ばかりで怒る事はない。

片手で前髪を上げて、その額に唇を落とす。

「ひゃッ!？」

深い意味はない、愛犬にキスをするようなものである。

耳まで赤くする彼女の反応が面白くて、つつい悪戯をしてみようのだ。

ちなみに彼女の方から私に触れるのは厳禁にしていた。



メアリーお嬢様の寝る準備を整えた後、時折、ポンポンと布団を叩く時がある。

これは私に添い寝しろという命令だ。逡巡するも私に逆らう術はない、私の衣食住を保証してくれているのは屋敷の主であるゴツプ。しかし私の私服と菓子類を提供してくれるのは目の前の彼女である。欲しいものがある時は彼女におねだりをすれば良い。しかし、その時に幾つかの芸を仕込まれたりする。人前で見せるのは憚られるものも多いのだけど——彼女の部屋の中だけでしかそういった命令を受けないし、良い子良い子と抱き締められるのが心地良かった。

私には、人の心が分かる。

人は相手に心を見透かされるのを嫌うようで、薄気味悪いと疎まれながら育った。心が読める私が原因で両親の仲も日に日に悪くなって父親が不倫し、母親は私を置いて家

を出て行ってしまった。そして父親も私の前から消えてしまう。孤児院に送られた私は、周りから疎まれて孤立する。なんでも分かっている風な目が気に入らないんだとか、そんな理由だった。

そんな私を引き取ってくれたのがゴツプというふくよかな男だ。

「娘の良き話し相手になって欲しい」

男は心を隠すのが上手く、言葉の真意まで読み取るのが難しかった。

だけど悪意はない、孤児院での虐めも酷くなっていた。衣食住が保証されるのであれば、と私は今よりも少しだけ良い生活を求めてゴツプを頼る。乗せられた高級車にも驚いたけど、想像以上の豪邸にも言葉を失った。孤児院に大金を積んで、半ば人身売買のように買われた私にゴツプが求めたのはひとつだけだった。それは、どんな時でもメアリーの味方で在り続ける事。その為に私は買われたのだと彼は言った。

私が曖昧に頷き返すと「今はそれで良い」と頭を撫でられた。

彼の執務室でメアリーお嬢様と引き合わされる。

私が一生仕える事になるかも知れない御主人様、意地悪じやなければ良いな。とか最初はそんな事を考えていた。お嬢様と一緒に私室まで案内されて、部屋に入って開口一番に彼女は「貴方を犬と思う事にしたわ」と今しがた思いついたように告げられた。その言葉が本心である事を読み取った私は、屋敷に来てまだ初日だというのに後悔と悲嘆

に暮れる事になる。

そして、それは後日、別の意味で残酷な意味を持つ言葉になる。

彼女は私を飼う為に犬の飼育本を読む事から始めた。飼い主だから責任を以て躰けるし、しっかりと育てるのだと。情熱が明後日の方向に向いているお嬢様の隣で悲嘆すること数日、良い子良い子、と私の頭を抱きしめて全身を撫で回すお嬢様の姿があつた。

お嬢様は良い事をしたら全身で褒めてくれる。本当に犬相手にするように全身をわしゃわしゃと撫で回される。まるで愛犬だ、複雑に思う事はある。だけど彼女の本心からの愛情に包まれるのは心地良かった。

彼女に抱き締められると良い匂いがする。

逆に悪い事をするとは叱られる。

先ずはベッドの上で「おすわり」と命じられて正座させられる事から始まる。お嬢様の機嫌の良い時は「ちんちん」と仰向けに寝転がり、衣服の裾を持ち上げてお腹を晒す。そして、お嬢様の気が済むまで延々とお腹を撫でられるだけで済んだ。偶に猫吸いされる。犬なのに、猫扱い。恥ずかしいからやめて欲しいけど、おしおきだから何も言い返せない。

お嬢様の機嫌が悪い時は、伏せを命じられて土下座をする。

謝罪の言葉を口にする事も許されず、その日、一日はワンと吠える以外に口を利いて

貰えなくなる。それだと仕事にならないので、どうしてもって時は自分から土下座をして許しを請うた。頭に足を乗せられた時がある、仰向けになり、無防備に晒したお腹を足で踏まれた事もあった。どちらもポンと乗せるだけだったのだけど、好ましい相手に無防備な場所を晒して、踏まれるというのはなんだか胸の奥がキュンとする。

調教されている、好きな相手に支配されるのは気持ち良かった。

添い寝の命令、私は唾を飲んで衣服の首元を緩める。

彼女の支配には愛が込められている。支配されるのは喜びだ。何故なら、それは相手が自分を必要としてくれていてる為だ。お仕置きの内容も彼女の欲求を満たす為だと考えれば、その捌口になれていてる事を嬉しく感じる。倒錯してると思う、歪んでいるのは分かっている。だけど私に意地悪をする事で満たされる彼女の心を知ると不思議と私の承認欲求も満たされてしまうのだ。無防備なお腹を見せる時、好き放題にされている時に自己肯定感が高められる。足蹴にされる時に私の欲求が満たされる。彼女の為に全てを捧げる瞬間が、どうしようもなく心にキュンとくる。

尊厳を破壊される事は、過去の私を壊してくれてるようで開放感があった。

私は彼女の犬である、なので全てを管理されて然るべきだと思っている。

衣服を脱いで、畳んで下着姿になる。彼女の隣で横になれば、ギュツと頭を抱えるように抱き締められた。

甘い香りに包まれながら、今日も今日とて撫で回される。幸せ過ぎて、胸が苦しくなる。

◆ こんなに幸せで良いのだろうかと何処かに落とし穴がありそうで怖かった。

おやつの間、テーブルの上に置かれた焼き菓子齧る。

背後にはエリスが控えているので「エリス」と彼女の名を呼んで隣に立たせる。まだ遠い、おすわり、と追加で命令すれば、彼女は私の隣に腰を下ろす。頭の高さが私よりも少し低くなったところで摘んだクッキーを彼女の鼻先に近付けた。お手、と私が左手を出せば、彼女は右手の私の手に乗せる。今日もエリスは良い子さんだ。クッキーを直接、口に咥えさせて、彼女の頭を撫で回す。可愛いねえ、偉いねえ、とたつぷりと言い聞かせる。

その一部始終を見ていたゴツプは珍しく引き攣った笑顔を浮かべていた。

「この通り、ちゃんと手懐けました」

エリスの駄目犬つぷりにゴツプは、

「これは予想していなかったな」と天を仰いだ。

クッキーを頬張る駄目犬は可愛らしく首を傾げてのけた。

その内、犬耳に尻尾と首輪を付けられていそうだ。

◆ 某日某連邦軍基地にて、ゴツプは執務机で書類に目を通してゐる。

同じ部屋の来客用の机に腰を下ろす男が一人、名をグレイヴと云つた。彼は憲兵隊に所属する地球連邦軍の高官、軍内部の秩序維持を主だつた任務として与えられている。連邦軍の内情を探る憲兵の性質上、連邦政府の高官との繋がりが太い中、彼個人は、あくまでも連邦軍に所属する一人として行動している。その為、ゴツプを始めとした軍政家にとって彼は扱いやすい人物であつた。

今はまだ連邦政府に嘯ませたくない案件を任せるのに重宝されている。

例えばそう、兵器の軍需に関わる情報を探らせたりとか。

ゴツプが目を通す書類には最近、ジオン公国で活発になつてゐる新兵器の開発に関する情報が纏められている。

気になるのはヒルドルブと呼ばれる超弩級戦車の開発だ。明らかに連邦軍の大型戦闘車両ガンタンクを意識したものであり、連邦軍に対する対抗心が見えている。他にもモビルワーカーと呼ばれる作業用機械の開発にも注力しており、これから先の拠点の開発と拡張にも力を入れてゐる事が手に取るように分かつた。これに地球連邦政府は遺憾の意を表明するも「自分の身を自分で守る事の何が悪い」とサイド3は突っぱねた。

これにより地球連邦とサイド3の軋轢は増すばかりだ。

なんとか戦争回避の道はないかとゴツプは思索していると「ところで」とグレイヴが問い掛ける。

「あの御姫様の様子は如何ですか？」

「ああ、元気にやつとるよ」

ゴツプは手元の紅茶を啜り、グレイヴの言わんとしている事を察して続ける。

「アレを使うつもりはないよ。アレは劇薬だ、劇薬の割に効能が薄い」

今は封印しておくのが最善だ、とゴツプが続ける。

その事はグレイヴも承知している。冷凍睡眠装置で眠り続けていた姫君の存在は、地球連邦に混乱を与える。ともすれば地球連邦の崩壊にも繋がり兼ねなかった。彼女が生きている事自体が時限式の爆弾だ。彼女の存在は、余りにも危険だ。今の世情で露呈する事だけは、絶対に避けなければならなかった。

例え、それが殺すことになったとしてもだ。

「では消してしまった方がよろしいのでは？」

グレイヴの問い掛けは、問い掛けではなかった。

ゴツプに決意を促すものである。

しかし、ふくよかな初老男性は首を横に振った。

「国家の未来は、子供達の為にあるのだよ」

現在は精々私腹を肥やさせて貰うがね、と笑うゴツプにグレイヴは不満げに眉間の皺を深めた。



### 3. 親の心子知らず、子の心親知らず。

地球連邦政府が地球上における紛争全ての消滅を宣言したのが半世紀前の話になる。

表立つ敵対勢力の消滅により、金食い虫であった地球連邦軍の規模を縮小させる。治安維持程度の軍事力を残し、積極的な兵器の開発も打ち止めとした。これにより軍需企業は力を失う事になり、方針転換を余儀なくされてしまった。連邦軍に残る兵器開発部門が細々と開発を進めるに留められる。

実際、この予算削減によってコロナーの開発は大幅に進められた。

今となつては90億人もの人類が宇宙で生活を進めており、新たなコロナーの建造を少数に留めている。軍需から民生の流れに乗って大きく力を伸ばしたのがヤシマ財閥で、元から一般家電製品の大御所であるアナハイム・エレクトロニクス社（以下、A E社）が台頭している。

つまりだ。

今の連邦軍の兵器開発に関する技術力は大きく衰退している、という事だ。

実用よりも示威行為を目的とした結果、開発されたのが大型戦闘車両ガンタンクである。実用から大きく離れた設計が、連邦軍が実戦から久しく離れてしまった事を意味し

ている。

サイド3ことジオン公国との緊張が高まりつつある御時世だ。

連邦軍の高官として、ゴツプは最悪を想定して動いている。そんな彼が今考えているのは、新兵器開発を担わせる企業を選定である。連邦軍が抱える開発部門は規模が小さい事もあり、既存兵器の改善と改良に終始しており、新兵器開発に耐え得る土壌がなかった。よって宇宙艦艇に関する事はヤシマ財閥傘下のヤシマ重工。戦闘機は老舗の航空機メーカーのハービックが主体となるのは既定路線。しかし共に兵器開発は不慣れな企業でもあった。君主制に移行したジオン公国は、今も恐るべき速度で新兵器の開発を進めている。

地球連邦には、危機感が足りていなかった。

そんな折、とある企業からゴツプに連絡が入る。

考えが煮詰まっていたゴツプは、話だけは聞いてみるかと客人を招き入れた。客人は体格の良い中年男性であった、彼の胸元にはA E社の社章が付けられている。彼の名前はメラニー・ヒュー・カーバイン、元軍人だ。彼が士官学校に入ったのは学費が掛からない為であり、軍隊へのサービスの義務を果たして直ぐ退役している。その後、中東紛争に巻き込まれた彼は難民となり、流れた先のニューホンコンで商売のやり方を学んだ。その後、A E社に入社。脅威の速度で出世を果たし、今では役員の一人名になっている。

彼は軍人時代に培ったコネを使う事で連邦軍中將のゴツプまで渡りを付けた。

「要件は？」

客間に招かれた彼は、部屋に入って直ぐゴツプの単刀直入な質問を受ける。

まだ椅子にも座らせていなかった。瞬間的にカーバインは脳裏に駆け巡る手練手管を検討した。

しかし、彼は思考を打ち切る為に数秒だけ目を伏せた。

この一手目を間違えてはいけない、と彼の商売人としての直感が策を投げ捨てる。

「我が社も七〇年代軍備増強計画に一枚噛ませて頂きたくて来ました」

「ほう？」

「公国軍が軍備増強を進めている事は知っています」

カーバインはチラリとゴツプの顔色を窺った。

無表情、感情が読み取れない。

此処は踏み込むべきだと判断して、カーバインは勇気の一步を踏み込んだ。

「モビルスーツなるものを知っていますでしょうか？」

「ふむ」

「……モビルワーカーは軍事転用できます」

ゴツプの目が僅かに揺れる。息を吐いて、深く思考した。

「座りなさい、詳しく話を聞こう」

カーバインは内心で胸を撫で下ろし、此処からが本番だと気を引き締め直した。

ゴツプと会話を交わしている内にカーバインは、当たりを引いた事を確信する。

カーバインは軍人時代に培ったコネから軍政を携わる人間で出来るだけ階級の高い人間に当たっていた。何度か話の分かる人間を経由し、最終的に辿り着いたのが目の前のゴツプ中將である。ゴツプ中將に兵器開発を差配できるだけの実権はない、しかし強い影響力を持っていた。連邦会議で七〇年代軍備増強計画を通したのは、彼が政府高官に根回しをしたおかげであり、これによつて得られる権益の配分で財界にも力を増している。

当たりを付けていた一人ではあつた。

しかし、全ての凶面を引く黒幕に辿り着くまで、あと一回は経由する必要があると考えていた。

ゴツプ中將までの道筋を作ってくれた同級生のジャミトフ中佐に感謝し、カーバインは本格的に商談を開始する。一方で話を聞いていたゴツプは、モビルスーツの有用性がいまいち理解出来ていなかった。作業用機械であればまだしも、兵器が人の形をしている意味がないと考えている。しかし、きな臭いものを感じるのも事実。公国軍がモビルワーカーの開発に力を入れる意味、その動力に核融合炉を使う意味。作業用機械として

は、過剰過ぎる面が多々あった。

そして、目の前の人物。彼のように貪欲で野心的な目を持つ者は連邦傘下の企業に欠けていた。

もしも、もしもだ、もし仮にモビルスーツを開発する事に何らかの優位性を公国軍が見出していた時、モビルスーツを開発する基礎すらもない状況は、もしかすると危険なのではないか？

ゴツプは軍政家ではあったが戦術家ではなかった。

故に彼は持ち前の嗅覚のみで危機を感じ取った。だが根拠はない、根拠がなければ投資は出来ない。資金は有限、投資は金持ちの道楽ではないのだ。

彼に投資をするには、何か理由が必要だった。

「……モビルワーカーは作業用機械としては優秀だ」

先ずは作業用機械としての開発を要求した。

実際、最初から軍事用モビルスーツが作れる訳ではない。

この提案はA E社にとっても有り難い申し出である。

最新機種を連邦軍に回してくれる事を約束に両者の間で密約が交わされる。

これが後の作業用モビルスーツ、ドラケンEへと繋がる。

そして、A E社が兵器開発に参戦する足掛かりとなった。

◆ 宇宙世紀0075年。

人型作業用機械ドラケンAが開発された、これはAE社が初めて実用化に成功したモビルスーツである。

尤も、この時はまだモビルスーツという名称が公式になかった為、ジオニックス社に倣ってモビルワーカーという区別で少数が生産される。連邦軍に回された少数の機体はルナツーに送られた。60年代以降、遅々として進まなかつたルナツーの軍事拠点化に大きく貢献した事でAE社は「これ、民生用としても売れるのでは？」とドラケンシリーズの開発を決断する。

本機の末尾にあるAの文字は、開発続行の意味も含めての事だ。

そしてドラケンAの一機が、ゴツプの豪邸の敷地内にも置かれていた。

AE社が個人的に贈呈したものであり、ゴツプは高級車を貰ったようなものだど軽く流した。

これに興味を持ったのが他にもないメアリーお嬢様であった。

御年14歳である。

遊び盛りの彼女は格納庫に置かれたドラケンAに試乗した。

膝の上には、エリスが乗せられている。

コックピットの中に放置されていた説明書を読み漁るも、自家用車とは訳が違った。メアリーがちんぷんかんぷんになっている前で、

同じく説明書を覗き見ていたエリスが、それっぽい場所のスイッチを入れる。

すると動力炉に火が灯り、電源が入った。

「え、どうやったの？」と困惑するメアリーを余所にエリスは操縦桿を手に取り、先程説明書で見た付け焼刃の知識を基にコックピットの配置を掌握していった。ペダルを踏もうとした、しかしメアリーの膝上に乗った状態では足が届かなかった。だからエリスは自身の御主人様にゆっくりとペダルを踏むように促す。メアリーは愛犬の指示に従って、緩やかにペダルを踏み込んだ。

するとドラケンAは前へと歩み出し、コックピットの中で二人は大はしやぎとなった。

動かしている内にエリスも慣れて、細かい動作も熟せるようになっていった。メアリーも自分でやりたくなって操縦を代わって貰うも上手く出来ず、操縦は全てエリス任せになる。そうして二人は思う存分にドラケンAで遊んだ後、ゴップにこっぴどく叱られる事になった。

流石のゴップも看過できなかつたので、二人は自室での謹慎処分が言い渡される。

その間、二人は接触禁止にされて寂しい夜を過ごした。

一週間の謹慎が解かれた後、暫く二人が離れる事はなかった。

◆ 同年、メアリーは義父の反対を押し切って士官学校を受験した。

というよりも勝手に願書を出して、家出をするように飛び出してしまった。ゴツプは直ぐにメアリーを捕えるように指示を出したが、彼女と一緒に行動するエリスの勤が鋭くて捕まえることが出来なかった。二人を捕まえる事が出来たのは受験が終わった後である。

ちゃんと話を聞けば、メアリーが今日まで敷地内で我慢して来たのは自分が士官学校に入學すると信じていたからだだった。もう自分は15歳になるとメアリーは猛抗議し、少し遅めの反抗期が訪れる。正直、ゴツプも愛娘の行動力を舐めていたところがある。今にして思えば、勝手にドラケンAを操縦するような子が大人しいはずがなかったのだ。これまでが大人しかったので完全に虚を突かれてしまった。

そして愛娘の言い分を聞くに此処で反対しても結局、同じことが起きるのは目に見えていた。

ゴツプには珍しく頭を抱える。

部屋に監禁はしたくない。愛娘は大事だが、出来るだけ窮屈な思いはして欲しくなかった。



メアリーの幸せを願う程度には、ゴツプにも愛娘に対する情を持っている。「どうせ外に出すのであれば、自分の影響下にあつた方が良いか……」

そしてゴツプは根負けする形で士官学校への入学を認める。

この時、ゴツプに誤算があつた。

メアリーは屋敷での生活に不満を抱いていた訳ではない。エリスが家に来てからは幾分か寂しさも解消されており、お出かけをする時に護衛が付く事にも慣れてしまつている。そしてメアリーにとって士官学校への入学は、エリスと離れる事になるのでマイナスの方が大きくなつていた。

それでもメアリーが士官学校への入学を決めたのには理由がある。

偏に義父への愛故に。何時も忙しくする義父の力になりたかつた彼女は士官学校に入学し、連邦軍に服役する事で高齢も近い義父の負担を減らしてあげたかつた。その為に今日まで勉強に励んでいる。出来る事であれば、義父の後を継ぎたいとも考えていた。

つまりはまあ、交渉次第ではメアリーを思い留まらせる事は十分に可能であつた。

ゴツプには珍しい判断ミス、それも愛娘に対する愛故にだ。

自分が自覚する以上にゴツプは愛娘を愛していた。

愛娘には出来るだけ自分のやりたい事をやらせてあげたかつた。

故にゴツプは探りを入れる前に受け入れてしまった。

しかし一人で士官学校に行かせるのも許せない。

故にゴツプはエリスの年齢を詐称し、士官学校に裏口で入学させる。幸いにもエリスの成績は基準に満たしていたので捻じ込むのは難しくなかった。学寮で同室になるように根回しもした。エリスには万が一の保険として拳銃を持たせて送り出した。

全てを終わらせた後、ゴツプは政務をしている時よりも疲れた身体で屋敷に戻った。寂しくなった執務室でゴツプは受話器に手を伸ばす。

「ワイアット君かね。ああそうだ、私だ。前に言っていたブランドー入りの紅茶が飲みたくなつてね。今度、近い内に寄るので頼めるかね？」

愛娘を引き取ってから六年、ゴツプは立派な父親になっていた。

## 4. 士官学校

76生には、秀才と呼ばれる二人の女性が居る。

片や綺麗に整えられた焦げ茶色の長い髪が特徴的な少女。地球連邦軍の中樞、参謀本部に務めるゴツプ中將の養子だ。名をメアリー、実技は平均以上で座学は主席を直走っている。もう一人は小柄で金髪の少女、名をエリスと云った。小柄な体格が災いしてか体力はないが、銃器の扱い方や格闘術でトップの成績を取り続けている。座学もメアリーの次に良かったが戦術面や戦略面といった分野でメアリーに大きく劣っていた。

そして、このエリスという優等生は、メアリーの子飼いとしても知られている。

才色兼備でゴツプ中將の養子であるメアリーを狙う男は多い。しかし彼女の隣には常にエリスがおり、許可なく異性がメアリーの身体に触れようとすれば、エリスが男の手首を取って締め上げる。まるで護衛である、というよりも実際、メアリーの護衛なのだろう。メアリーとエリスは一見すると仲の良過ぎる友人なのだが、二人の間には明確な上下関係があり、メアリーの言葉一つでエリスは態度を改めてしまうのだ。

エリスもまたメアリーを第一に行動している為、ゴツプ中將が付けた護衛役と考えられる。

それが可愛らしい愛娘に対する護衛であれば良いのだが、養子という点が気になった。とんでもない厄ネタを抱えていたりとか、周りから生命ないし身柄を狙われる背景を持つていて、護衛を付けざる得なかったとか。考えすぎかも知れない。しかし、自分のような堅実に出世したい人間からすると彼女達は積極的に関わりたいと思う相手ではなかった。

だから俺は二人から距離を取るようになっている。

「ねえブライト、貴方の番よ」

それが、どうしてこうなったのか。

此処は食堂、目の前には三次元チェスの盤がある。三つの透明の板の向こう側には焦げ茶色の長い髪をした少女が不貞腐れた顔で俺を見つめていた。その彼女の隣に座るエリスが睨みを利かせている。俺は居心地悪く頭を掻いた後、駒のひとつを摘まみ取って置き換えた。

するとメアリーは、ノータイムで駒を前に進める。

「……なあ、どうしてチェスの相手が俺なんだ？」

「？ エリスだと相手にならないからだけど？」

「相手なら他にも居るだろう……」

「他の皆はエリスよりも弱いからね」

正攻法だと普通に強いだよ。とメアリーはエリスに視線を送る。

僅かにエリスの口元が緩んで彼女から感じる圧がほんのり和らいだ気がした。

まあ周りからの視線で針の筵には、なっているのだが。

それもそのはずで二人は成績が優秀なのもあるが、容姿も良かった。

特にメアリーのの方は、雑誌のモデルと言われても信じてしまう程である。

胡散臭いものを感じなければ、俺も心から喜んでいい。

「俺も得意な訳ではないのだけどな」

「ブライトが相手の時は駆け引きあるから他とは雲泥の差よ？」

「全敗してるのに言われても、嫌味にしか聞こえんよ」

数手程進めると形勢は徐々に悪くなる。

幾つか罫も仕掛けておいたのだが、罫を仕掛けた分だけ形勢が悪くなって真正面から押し込まれてしまった。見抜かれていたのだろうな、たぶん。彼女は策を弄するタイプの人間だが素直な手を打ってくる時も多い。素直に打たれると策を弄した分だけ手数を損して、押し負けてしまうのだ。盤面を複雑にしようとするれば、彼女は少し考えた後、最善の手を打ってくる。

正直もう貴女の相手をするのも苦痛になってきている。

「……………」

これだけ頭の良い彼女だ。

何故、彼女は、ジオン公国が軍拡を進める今の情勢に士官学校に入学したのだろうか。お金に困っている訳でもあるまい。彼女には、もっと良い選択もあったはずなのだ。ふと思いついた疑問が「どうして」と口から漏れてしまった。

「どうしたの？」

「いや、何故、君が士官学校に入学したのか気になったんだ」

「お義父様の力になりましたのよ。あ、チェックメイト」

会話をしながらも進めていた手番に自分のキングが詰め寄られていた。

これで何敗目か、もう数えきれない程に負けている。

「ありがと、楽しかったわ」

彼女はエリスに三次元チェスの盤を片付けさせて、自分はウンと身体を伸ばす。

「ブライト、貴方はなんで士官学校に入ったの？」

「俺は……親が軍人だから……」

「なら私と一緒にね」

いや違う。という言葉は彼女の笑顔の前に飲み込んだ。

父親は今も軍隊で働いている。おかげで軍は俺にとつて身近なもので、自分が軍人になる事に忌避感はなかった。それに連邦軍の士官になれば、宇宙に飛ばされる事もなく

なる。宇宙に出勤する事はあるかも知れないが、生まれ故郷である地球に家を持つ事が許される。

スペースノイドの暮らしは苦しいらしい。

今はまだアースノイドという身分を捨てたくなかったのも理由にある。

自分が軍人になったのは、決して父親や家族の為ではない。

全ては保身の為だった。

「……誰もが聖人君子では息が詰まりますよ」

そう呟いたのはエリスだった。

唐突な言葉に俺が首を傾げれば、エリスはそっぽ向いてしまった。

彼女は俺に対する当たりが強かった。

「貴方は良い人よ、でなければ話しかけたりとかしないし。あと良い意味で無神経なこと

ことも得点高いよ」

メアリーが言つて、エリスと共に食堂を引き上げていった。

取り残された俺は首を傾げるばかりである。

……さて、俺も食堂を引き上げた方が良さそうか。

此処に居ると何時、背後から刺されるか分かったものではない。



「始めッ！」

教官の掛け声に合わせて、横一列に並んだ士官候補生が一齐に小銃を構える。

安全装置を解除し、射撃訓練用の的に標準を合わせる。引き金を引いた。発砲の衝撃を肩で受け止める。喉を奥が振動する感覚、銃弾は的の脳天の中心を撃ち抜いた。続けて、二度、三度と発砲すれば、的に空いた小さな穴が僅かに広がる。そのまま訓練用の残弾を撃ち尽くす。銃弾は全て、急所の中心を捉えている。

私は小銃から手を放し、ほっと息を零す。

葉莢を回収しようとして伸ばした手が震えていた。

まだ半身が痺れている。同期と比べて小柄な身体、それもそのはずで私は年齢を二歳も逆鯖している。何度か手をグーパーを開閉させて、葉莢を回収。銃弾の入っている箱に入れる。ちゆうちゆうたこかいな、と訓練前に渡された銃弾数と同値である事を確認し、教官の前にある机に戻した。

そして列に戻ればメアリーお嬢様が、まるで自分の事のように自慢気な笑みを浮かべていた。

流石に、この場で私の頭を撫で回すような真似はしなかった。

後で褒めて貰えるのは確実だ。私も緩みそうになる口元を必死で抑えて、残りの訓練を見守る。



お嬢様も銃器の扱いが下手という訳ではない、得意な方だ。

私程ではないにせよ、中心にある円よりも一つ大きな円に収める程度には腕が良い。私は実技全般が得意だ。格闘術であれば、自分よりも体格のある相手を投げ飛ばす事も出来た。相手がナイフを握っていれば、奪い取って制圧する。私にないのは体力だ、年齢の差は覆す事は難しかった。ペイント弾を用いた実戦訓練でも、ほとんど負けなしだったけど、持久力勝負に持ち込まれると途端に苦しくなる。体力が重要視される分野になると成績が平均以下と振るわない。私の実技で主席が取れない要因であった。

校内では、お嬢様と共に行動している。トイレに行く時も一緒に、大浴場にも一緒に浸かる。個室のシャワーで汗を流す時も一緒だった。お嬢様は未だに私の身体を洗うのは自分の役目だと考えている。それでいて自分の身体は自分で洗うので、周りからの目が少し変な目で見られていたりする。

何事も、基本はお嬢様の意思決定で私の行動も決まる。

ただひとつだけ私の興味で受けている訓練があった。

それは人型作業機免許の取得、

ドラケンAの操縦する為に必要な資格になっている。

これはジオニツク社がモバイルワーカーを発表した時から法整備が進められていたものである。

A E社のドラケンAの発表と合わせる形でモビルワーカーを始めとした人型作業用機械の操縦には免許が必要だと地球連邦の法律に定められた。士官学校に入学した後、連邦軍の中に人型作業機訓練所がある事を知った私は、卒業するまでの免許取得を目的に通い詰めている。

そして私に付き添う形で御嬢様も訓練に参加していたりする。

学業と並行していた事もあって、免許が取れたのは1年目の終わりになった。

お嬢様は2年目の始めまで時間が掛かっている。ドラケンAの操縦が出来ると知られてからは資材の搬入から設営、訓練場の整備と各地に引っ張り蛸となった。でもまあ私に高価な作業用機械なんて用意できるはずもない。士官学校にもまだ確立されていない分野である為、乗れる機会を与えてくれるならと積極的に参加させて貰った。お嬢様の声に従って、物資を運搬する。お嬢様は人型ロボットに乗る事に拘りはなかった。

お嬢様のオペレートを耳に今日もドラケンAで搬入作業と手伝っている。

◆ おかげで私達の評判は、教官の間でも評判になっていた。

士官学校に入ってから私も私とエリスの関係は変わらない。

学業を終えて、寮室に戻る。私は制服を脱ぎ捨て、下着姿で二段ベッドの下に腰を下

ろす。すると同じく下着姿になったエリスが私の胸元に飛び込んで来た。胸の合間に顔を埋めながら深呼吸をするエリスの頭をくしゃくしゃと撫で回す。寮室の外に居る時、エリスは四六時中気を張り詰めている。流石に士官学校の校内でどうこうする馬鹿は居ないと思うが、万が一に備えて、エリスは自身の持つ特別な能力で周囲を警戒し続けていた。

そのストレスを発散する為にも、部屋に戻る度に彼女の気が済むまで抱き締めさせてやっている。

二段ベッドの上は物置になっている。

実家とは違って、此処では私達の仲を妨げる存在は居ない。エリスのメンタルケアも含めて、夜中は一緒に寝る事が多かった。気付いた時には習慣になっており、使わなくなったベッドの二段目に荷物が増えていったのである。エリスのメンタルケアは、基本的に抱き締めてやるだけで事足りる。しかし、それでは解消できない鬱憤があるようである。時折、犬耳と尻尾を付けた彼女の首に紐付きの首輪を南京錠で固定する。

そして首の紐を引っ張りながら様々な芸を命じてやれば、彼女はワンと鳴いて喜んだ。

なんというか束縛されるのが好きな奴なのだ。

彼女が持つ理性と常識が私に対する気遣いで色んな事をしてくれる。

だけど本当は私に支配されたいと思っっているようで、自由を奪われる度に嬉しそうな顔をする。

彼女の身体を私が洗うのも、彼女が大好きな不自由の一環だ。

数年以上、彼女は自分で自分の身体を洗った事がない。

時折、私が彼女の歯磨きもしてあげている。

私もまた彼女から自由を取り上げるのが好きだった。

頭の中を空っぽにして、私に全てを委ねる。

そうして犬になる。犬になった時の彼女は人間ではなかった。どんな恥ずかしい事でも私が命令をするだけで彼女はワンと吠えて従った。なんでもしてくれる。何処まで命令に従うのか試した事もあるけども、何処までも命令に従うので逆に私の方が慌て止めた事もある。

彼女は他人の心が読める。

私の護衛という都合上、他人の感情を避けられない。悪意は勿論、欲望を以て私達に接触する相手も少なくない。接触せずとも私達に恨みや妬みを持つている者も多く、その全てを彼女は読み取っている。その負担はきつと、私が思う以上に大きいはずだ。

だから私は彼女に何も考えないで済む時間を用意してあげる必要があった。犬になれば、犬になって私に全てを委ねるのだ。

極端に布面積の少ない下着姿。

お腹を晒して「くうん」と鳴く彼女は他で見せられるものではない。私にだけ許された、私だけのエリスだ。

「首輪を付けている時は、私の心だけを覗きなさい」

一瞬、エリスの目に正気の色が戻った。

そして瞳を濁らせる、彼女は嬉しそうに目を細めた。

懐いた犬が飼い主にするように、

彼女は私の身体に自分の顔を擦りつける。

人ではない、エリスは犬である。

## 5. 戦争

あつという間に時間が過ぎ去って、

士官学校を卒業した私、メアリーとエリスは北米にある義父の豪邸まで帰っていた。

義父は居ない。クリスマスまでに仕事を終わらせる、と豪語していた義父は今、ジャブローにある参謀本部で缶詰になって働いていた。サイド3ことジオン公国との緊張はまだ続いている。昨年は暁の蜂起という学生運動と称するには行き過ぎた事件も起きていたが、辛うじて開戦を避ける事が出来た。今も義父が中心になって、戦争回避の道を探っている。

まあ真つ当な感性であれば、国力で劣る地球連邦を相手に戦争を吹っ掛けるような真似はしないはずだ。

年が明けた後、私達もまたジャブローの参謀本部に移動する事になる。

友達のブライトも一度、ジャブローに移動した後、副官の一人として艦艇に乗る事が決まっていた。私は参謀本部の配属になる為、彼と共に前線に出る事はないはずだ。今日の私があるのはお義父様のおかげ、少しでもお義父様の負担を減らせるようにバリバリ働く所存である。

今は英気を養う時、クリスマスから年末年始に掛けて学寮では出来なかつた事を沢山楽しむのだ。

この日の為に用意した道具の数々、開け放つたトランクケースの中身を見てエリスは身震いした。

三年間でエリスは大きく成長している。私の身長なんて悠々と追い越して、私の方が彼女を見上げないといけなくなつた。小型犬だつたはずの彼女は今や大型犬、身体を洗うのも一苦勞である。もう力で押さえつける事もできず、その気になれば、私の事なんて簡単に好きに出来るはずなのだ。

しかし彼女には、それが出来ない。

九年以上の付き合いで築上げた楔と鎖が彼女を雁字搦めにする。実際には薔薇の茎だつたとしても、その棘が彼女の肌を傷付ける事になつたとしても彼女には振り解くことが出来ない。囁きかける、愛している。心を讀ませて、愛してる。言葉で縛る、心で縛る。私の声を聞き取る度に、読み取る度に、彼女は光悦に目を細める。彼女には首輪が掛けてある。今はまだ付けてなくとも、それは確かに存在している。

トンと彼女をベッドの上に押し倒す。

力なく仰向けになる彼女の胸元に腰を下ろし、彼女の細い首を両手を添えてやる。僅かに力を込める。すると彼女の身体が僅かに緊張したけども、全てを受け入れるかのよ

うに消え入るように儂い笑みを浮かべた。徐々に力を入れる。学寮だと力を入れ過ぎると跡が残るから出来なかつた。

でも、今なら、出来る。

キユツと力を込めた時、彼女は呼吸を失った。

ジオン公国が全世界に向けて宣戦布告をしたと知つたのは数日後の事だ。

その話を聞いた時、エリスの意識は飛んでいた。気絶と覚醒を延々と繰り返した彼女が正気を取り戻したのは半日後、何呼び掛けてもワンとしか言わなくなつた彼女の姿を見た時は本当に焦つたし、流星に反省もした。エリスにシャワーを浴びせた後、全身に付けられた無数の傷跡を軍服で覆い隠す。エリスは気付け代わりの熱い珈琲を啜り、痛みに顔を歪めた。彼女の回復を待つていたので出発が数日、遅れている。

出来るだけ早くジャブローまで移動しないとイケなかつた。

公共機関は使えないと判断し、車を用意させる。運転は私がする。助手席に座るエリスは締め付けられた痕が残る首元をしきり気にしていた。指先で蚊に吸われた後を擦るエリスが窓から空を見上げる。釣られて私も空を見た。まだ昼間なのに、空には無数の流星が駆け抜けていた。

エリスの顔が、サアツと青褪める。

助手席から車のハンドルに手を伸ばす。真っ赤に燃える無数の残骸が、大気圏で突き



抜けて地上に降り注いだ。乗っていた車が道から外れる。大地が揺れたかと思えば、すぐ隣を、丁度、私達が進む先の道路に残骸のひとつが突き刺さった。舞い上がる砂煙、爆発的な衝撃が横殴りに叩き付けられる。

意識が遠のく中で車が二転、三転と横転していたのを感じた。

「……ん、んん………」

目を醒ます、頭上に地面がある。

どうやら自分は逆さまの状態で座席に吊るされているようだった。隣を見る。気絶するエリスの顔があった。頭から血を流している、でも見た感じ頭を切っているだけで酷い怪我ではない。彼女の頬に手を伸ばす、呼吸も安定している。見た感じ、他に怪我らしい怪我はしていないようだ。

安堵に息を零し、とりあえずシートベルトを外す。

車の天井に背中を叩き付けた。呻き声を零し、なんとか気絶するエリスを助ける為に狭い車内でもがいた。まずは首を痛めないように、落ちても自分の身体がクッションになるように構えて、まだ気絶する彼女のシートベルトを外した。

「んツ……ぐっふー！」

自分よりも背の高い彼女の身体が不幸にも私の鳩尾に入ってしまった。

予想外の衝撃に彼女をお腹に乗せたまま身悶えする。痛みを我慢できず、小便が漏れ

た。太腿を伝う不快な感触を覚えつつも、なんとか彼女を安全な場所に運ぼうと気を保った。幸いにも簡単にドアを開ける事が出来た。エリスの身体を車内から引っぱり出して、外に出る。

空を見た、宇宙から大量のコンテナが落とされている。

マスドライバーによる簡易爆撃、連邦軍基地がある方角に投射されているようだった。要塞の破壊、いや、防空設備の無力化なのか。こんな雑な攻撃を防がないという事は、連邦軍の艦隊は打ち破られてしまった可能性が高い。この攻撃が終わった後、次に来るのは公国軍本隊による地上侵攻だ。

……道の真ん中、連絡手段はない。

近場の基地まで歩くよりも一度、豪邸に戻った方が良さそうだ。

「……………」

まあそれもエリスが起きてからの話。

まだ眠るエリスの横顔を見て、私は、なんとなしに唇を重ねた。

私が、しっかりとしなければいけない。

自身の唇を舐め取る。

彼女は、絶対に守り切るのだと心を決めた。

気絶から目覚めたエリスの意識は朦朧としている。

休ませてあげたいけども、今の私達には余裕がなかった。公国軍の攻撃は計画的だ。防空設備の無力化を確認でき次第、直ぐに本隊が地球上に投入するはずだ。そうなる前に豪邸に戻り、お義父様か近場の基地と連絡を取る必要がある。車も壊れている、移動手段の確保も必要だ。エリスに肩を貸して、少しずつでも前に進んだ。

豪邸に戻るまで半日以上も掛けてしまった。

「……………なんて、ごと……………」

もう空も暗くなつた頃、豪邸は跡形もなく消えていた。

豪邸があつた場所にはクレーターが出来ており、何かの残骸が突き刺さっている。

呆然とする私に、傷付いたエリスが前に歩み出す。

「行きましょう。落ちたのが此処であれば、ガレージはまだ無事な可能性があります」

そうだ、これから先はもつと悲惨な事が待ち受けている。

もう戦争の口火は切られたのだ。下唇を噛んで、私もまた歩み出す。

ガレージは半分が崩れてしまつていた。

残る半分には、一機の人型作業機が置かれてある。

ドラケンC。ドラケンAから改良を進めたドラケンシリーズの最新機種。

◆ 幸いにも鍵はガレージの中に置いてあつた。

空が落ちて来た。

宇宙から落とされたコロニーは文字通り、天地を割ってオーストラリア大陸に落着く。宇宙から落とされたコロニーは文字通り、天地を割ってオーストラリア大陸に落着く。

同大陸における全ての通信網が一時的に断絶、地球規模の気候変動、地震や津波が世界各地で発生し、コロニー一基による被害は天文学的な数字を弾き出した。地球上の気候が落ち着くまでの間、公国軍はマスドライバーによる対空設備の破壊に注力する。この攻撃に錯乱状態にあつた連邦軍は、まともに対応する事もできず、防空能力の九割を損失した。

此処まで二週間、コロニー落としによる災害が収まりつつある頃合いだった。公国軍は裏で休戦条約の締結を目指しつつも地球降下作戦を発令する。これには地球連邦を威圧する意図があり、休戦条約が結ばれなかった時の事も考えて、地球連邦の主要な都市と基地の制圧に取り掛かった。

南極で休戦条約が進められる中、捕虜になっていたレビル大将の救出がテレビ局によつて報道される。

ジオンに兵なし。

後世に語られる徹底抗戦の演説によつて、休戦条約を締結する為の会議は戦時条約を結ぶ為のものに変更される。主に大量破壊兵器と大質量兵器の使用禁止、グラナダを除

いた月面都市やサイド6など中立地帯の承認、捕虜の取り扱いなどが定められた。南極条約が締結されたのは1月31日。この時、公国軍はオデッサとキャリフォルニアベースの占拠を終えていた。

北米大陸の制圧に大きく貢献した部隊のひとつに魔女と呼ばれられる部隊が存在する。

地球攻撃軍の総司令官であり、北米方面軍司令を兼任するザビ家の御曹司。ガルマ大佐の指揮下にある当部隊を中核とした電撃戦により、北米を守る連邦軍は瞬く間に壊滅へと追いやられてしまった。地球上を守る連邦軍の将兵の数は、土地面積に対して意外と少ない。連邦軍の主戦場は宇宙にあり、地上は治安維持を目的に置いている為だ。近年、サイド3との関係悪化によって規模を増やしつつあっても優先されるのは宇宙艦隊、地上部隊が劇的に数を増やすことはなかった。

北米を守る連邦軍の半数以上が戦死するか捕虜になっっている現状。最早、組織的な抵抗は望めない状況に陥っている。

参謀本部は北米大陸における味方の状況が掴めなくなっていた。

ゴップ大將が持てるコネを駆使しても、北米大陸を守る連邦軍は壊滅状態にあるという事が分かるだけだ。愛娘の無事を祈る事しかできなかつた。その一方で公国軍の攻撃により壊走し、北米大陸から逃げることも叶わず、取り残されてしまった敗残兵の中

には身を潜めて、力を蓄える者達も居た。

今もまだ反攻作戦に備えている。

参謀本部の支援が受けられない状況でも抵抗を続けており、ゲリラ戦で公国軍に消耗を強いる。それでも各地に点在するレジスタンス組織は次々に潰されている。北米大陸の統治が進むに連れて、ゲリラ的な活動も難しくなり、組織の運営に窮する組織が増えつつある中でおも抵抗を続ける組織もあった。

その内のひとつは連邦軍に先んじて、モビルスーツを運用していた。



宇宙世紀0079年3月上旬。北米大陸に敷かれた鉄道を大量の物資を乗せた列車が通過する。

車内に武装した公国軍の兵士を確認、丘の上に控えさせていたモビルスーツのザクⅡに狙撃の指示を出す。直接、車両を狙う必要はない。列車は線路の上しか走れないが故、進路先にある線路を狙撃すれば良かった。ザクⅡのバズーカが、線路の爆破に成功。脱線した列車は、けたたましい音を立てながら横転する。

手慣れたものだ。ザクⅡに周囲を警戒させながら物資の回収を急がせる。

援軍が来る前に速やかに行動する必要があった。捕虜は取らない、トラックを用いて物資だけを回収して離脱する。現状、自分達の戦力はモビルスーツが1機だけだ。他に

も鹵獲したモビルスーツは、あるにはあるのだが、まともにモビルスーツで戦えるのは今、ザクⅡに乗っているパイロットのエリスだけだった。

戦闘行為は極力避けなければいけない。

ドラケンCに乗る私、メアリーも物資の回収作業に参加して援軍が来る前に逃げる事が出来た。

◆ 地球連邦のレジスタンスが鹵獲したザクを運用している。

その内のひとつは類稀な戦闘能力を有しており、もう既に遭遇戦で3機ものザクが撃破されている。これを公国軍は由々しき事態と捉える。ニューヨークを占拠した事もあり、北米大陸の制圧にも一区切りが付いた頃合いでもある。

北米方面軍の指揮を執るガルマ大佐は、レジスタンスの壊滅にノイジー・フェアリー隊の投入を決断した。

戦争初期、公国軍のパイロットは一年以上の訓練が費やされている。

遭遇戦とはいえ、それを3機も撃破するのは偶然ではない。実力は認めた、それ以上に薄気味悪い存在だとも思った。連邦軍がモビルスーツを知って三ヶ月、実際には、もつと前から情報は漏れていたと考えるべきだが、連邦軍にモビルスーツと同等の戦力を保持しているのであれば、疾うの昔に投入されている。つまりまだ三ヶ月しか経って

いないのに、我が軍の精鋭を圧倒するパイロットが敵に存在している。

後の禍根になるやも知れぬ。と親友が隣に居れば、失笑を買いそうな己の慎重さにガ  
ルマは自嘲した。

まだ戦線に余裕がある内に倒しておきたい。

ガルマは少なくともレジスタンスのザクⅡパイロットをザクⅢ機をタイマンで倒せる戦力と仮定し、ノイジー・フェアリー隊を送り込んだ。程なくして公国軍の諜報機関がザクⅡパイロットが居るレジスタンスの拠点を特定する。

その数日後、レジスタンスを壊滅させる作戦が決行された。



## 6. 北米の魔女

コツコツとコンクリートの床を叩く小気味良い足音を響かせる。

ウエーブがかった栗色の長い髪を揺らす女性将校、キリー・ギャレット少佐が愛弟子の機体を見る為に格納庫まで足を運んでいる。陸戦型ザクⅡから姿を変えた機体を見上げて「これが？」とドレッドヘアで褐色肌の整備士に問い掛ける。褐色肌の女、キリー少佐と同じくノイジー・フェアリー隊に所属するイルメラ・グルーバー軍曹は「そうだよ」と答える。

地上降下作戦の際にザクⅡから宇宙用の装備を取り払ったのが陸戦型ザクⅡ。陸戦型ザクⅡでは、地球で運用するのに機動力と耐久面が足りておらず、現地で改修を施したのが陸戦高機動型ザク。分類としては、現地改修機。占領したばかりのキャリフォルニアベースにはまだモビルスーツを生産できるだけの設備がなかった。故にモビルスーツを一機、丸ごと生産するのではなくて、既にある機体を改修するというコンセプトで再設計されたのが本機、陸戦高機動型ザクになっている。純粋な現行機の性能向上版、現地改修機とは名ばかりの最新鋭機だ。

これは、その記念すべき一機目であった。

情報を取りつつも順次、陸戦型ザクⅡは陸戦高機動型ザクに改修していく予定になっている。

「アルマは新型だつて素直に喜んでいたよ」

「厳密には新型じゃなくて改修機だけだね」

「別物だよ。陸戦型は装備をオミットしてるだけだが、コイツは地上用に最適化してあるんだからね」

イルメラ軍曹が陸戦高機動型ザクの爪先を、手でパンと叩いてみせる。

貴重な一機目がノイジー・フェアリー隊に与えられたのは、偏に本隊が北米方面軍で最も戦果を上げている部隊である為だ。本来はキリー少佐の搭乗機になる予定であった。しかし七日間戦争からルウム戦役、地球降下作戦に至るまで全ての軍事行動に参加していたキリー少佐の機体は、通常のセツティングから逸脱してしまっている。自分ではモデルケースに成り得ないと主張し、部下のアルマ・シュティルナー少尉に譲った。「惜しかった、つて思ってるんじゃないかい？」

イルメラの言葉に「ええ、そうね」と端的に返した。

現地改修による純粋な性能向上版。惜しくなかった、と言えば嘘になる。まだ完成もしていない機体に不安を抱いていなかった訳でもない。しかし自分の信頼するイルメラが手ずから改修した機体である。そのイルメラが太鼓判を押しているのだから不安

よりも期待の方が大きくもなる。

それでも、この機体に相応しいのは自分ではなかった。

「……ねえ、イルメラ。ニュータイプって、信じるかしら?」

「あの眉唾もんの事かい?」

「そうね、眉唾もんよね」

キリー少佐は苦笑する。そして隣に立つ自分の愛機を見上げる。

彼女の機体は、開戦当時から使っているザクⅡを改修した陸戦型ザクⅡだ。ノイジー・フェアリー隊のカラーリングである紫と白に塗装し直してあり、右肩に妖精を模した当隊のエンブレム。左肩にキリー少佐個人を表す、人の横顔にハーピーを模したエンブレムを付けている。

彼女の二つ名であるキラールハーピーの異名は、連邦軍の将兵を震え上がらせる名の一つだ。

「数日の内に出撃するわよ」

「……なら調整を急がないとね」

イルメラ軍曹には戦術や戦略、政治が分からない。

故に多くを問わず、与えられた役割を熟す事に専念する。

キリー少佐は人知れず、下唇を噛んだ。

◆ キリー・ギャレット少佐、元は突撃機動隊に所属するモビルスーツパイロットである。本国教導大隊に所属していたハンナ教官と共に、アサクラ大佐の下でマハル出身の無法者を鍛え上げる事で海兵隊を築き上げた。七日間戦争の時はアサクラ大佐の指揮下で海兵隊とは別のモビルスーツ部隊を率いて参加する。しかしブリティッシュ作戦の途中、不祥事を起こしたアサクラ大佐は降格となった。キリー少佐の身柄は、キシリア少将の指揮下に戻されるも、何も知らないままコロニー落としに参加させられていたかも知れない。という不信感からキシリア少将の命令を聞けなくなっていた。

これ程のパイロットを休ませておくのも惜しい。とドズル中將の仲介によって「地球降下作戦に従事するガルマ大佐の助けになつて欲しい」と半ば強引に宇宙攻撃軍に転属。後、ガルマ大佐の指揮下に放り込まれる。キシリアは御立腹であったが、ドズルに幾つか融通させる事で留飲を下げた。

#### 地球降下作戦の前、

突然の配置転換であつた為、ガルマはキリーに率いる部隊を用意できなかつた。ガルマは地球降下作戦の後に部隊を用意すると約束したが、キリーは自分で部下を集めても構わないかと問い掛ける。ガルマは自分が融通を利かせられる範囲であれば、と承認す

る。

キリーには、何名か当てがあった。

ブリテイツシユ作戦の際、コロニーを制圧する時に作戦で一緒になった狙撃手の少女が居た。名前と生年月日を覚えていた。そしてニュータイプ研究所と呼ばれるものがある事を最近知った。そこでは何人もの子供が監禁されている。今はまだ非人道的な実験はしていないというが、きな臭い話があるのも事実だ。実験の為に少女をカプセルに入れたまま、宇宙に放り出した事もあるらしい。聞いた話だ、確証はない。

だけど、私は良い事をしたかった。自分は善い人でありたかった。政治と謀略が渦巻く中で、救いになる光を欲した。これは、ただのエゴで自己満足に過ぎない。研究所で監禁されている少女が居るのであれば、外に連れ出してやりたかった。その結果として、子供を戦争に駆り出すのだから救えない。それでも一生、研究所で実験動物にされるよりも戦争してでも外に出してやった方が結果的に幸せになれると信じた。そうして連れ出したのが、アルマ・シユティルナー少尉になる。

狙撃手の少女を受け入れたのも、その生い立ちに同情した部分が大きかった。

イルメラ軍曹は、突撃機動隊時代から世話になつてゐる専属の整備士だ。最後に事務仕事ができる人間を求めて、ガルマ大佐に相談した。そうして送られてきたのがバルバラ・ハハリ中尉になる。

◆ そうしてノイジー・フェアリー隊が結成される。

北米大陸の某所、巨大な倉庫の中でモビルスーツが寝かされている。

「機械弄りが好きだっただけで整備士という訳じゃないんだけどな……」

僕は、鹵獲したザクⅡを点検しながら愚痴を零す。

点検といっても実際に整備出来ているかなんて怪しいもんだ。何故なら僕はバイクを弄る程度が精々でモビルワーカーのマニュアルを片手に軍用モビルスーツを弄っているのである。ザクⅡの名称が分かったのはコックピットの中に操縦マニュアルが置いてあった為、簡単な手入れの仕方は書いてあっても本格的な整備の仕方まで書いてある訳じゃなかった。なので、ほんのお守り程度の効果しかなかった。

ついでにいうと僕は民間人である。

天が割れてコロニーが落ちて、地を割った。神話時代にある天地創造かって話が現実に起きて、その時の残骸が僕が住んでいた町を燃やし尽くす。仕方ないので近場の連邦軍の拠点到避難しようとするれば、その拠点が公国軍の手に落ちていた。幸いにも拠点から逃げ出した連邦兵に拾われて、だけど巨大な人型ロボットに襲われて——なんやかんやあって、ドラケンEに乗った連邦軍将校である二人の少女に救われる。

階級は共に少尉だと言っていた。

「どうですか？」

粗方、点検を終えて、休憩をしていると不意に声を掛けられる。

振り返れば、少尉の片割れである短い金髪の少女が立っていた。

「どうぞ」とコップを手渡される。紅茶の香りと湯の温もり、渋みのある味にホッと息を零す。

彼女はエリス、エリス・クロードと名乗っていた。

年齢は19歳との事だが、もう一人の少尉であるメアリーよりも接しやすかった。

メアリーの方が背が小さいのに、エリスの方が近しく感じられる。

「とりあえず駆動部の掃除だけはしておきましたけど、細かいことまでは分かりませんよ」

「……まあ仕方ないわね」

「設備は勿論、僕には口ボットを弄る知識もありませんしね」

下手に触って壊したくもなかったので、本当に気持ちだけだ。

やらないよりはましって程度の話。これで事故を起こしても知りませんからね。と

紅茶を啜る。

エリスは文句も言わず、ただ困ったように笑みを浮かべるだけだった。

僕達を指揮しているのは、もう一人の少尉。メアリーという女性である。

トラックで逃げていた連邦兵の中に彼女よりも階級が高い人物が居なかった事もあ  
るし、まともに作戦を立てたり指揮を執ったりできるのも彼女だけだった。そして目の  
前の彼女、エリスがメアリーの下に付いている事も大きい。メアリーが部隊の指揮を執  
ると云った時、反発した連邦兵の腕自慢をエリスは片っ端から叩き伏せる。千切つては  
投げ、千切つては投げを繰り返す、反対の声が上がらなくなった頃合いでメアリー少尉  
が、ゲリラ戦を行う事を皆に伝える。

そうして最初の三日間に限り、部隊を抜ける事を彼女は許した。

結局、半分以上が部隊を抜けてメアリー少尉の下に残ったのは十余名になる。

民間人である僕が部隊に残ったのは、逃げて行つた連邦兵に付いて行つても良い待遇  
が受けられるとは思わなかつた為だ。少なくともメアリー少尉は、僕がザクⅡの整備を  
している限りは衣食住を保証してくれる。他の兵士と比べて、食事の量を減らされる事  
もない。それに僕は、故郷を壊した公国軍に媚び諂うような真似はしたくなかつた。

だから僕は、公国軍の支配下で生き続けるのであれば、軍隊に身を寄せている方が数  
倍マシだと考えた。

「シエルド。あれは、動かせる見込みはありそうなの？」

エリス少尉がザクⅡの隣に置かれたモビルスーツを見上げた。

戦車の履帯にザクⅠの上半身を乗つけた形状。実際、マゼラ・ベースにザクⅠの上半



身に乗せた代物ものであるようだ。正式名称はザクタンク。少し点検してみた感じ、戦闘用つてよりも後方支援の作業用に近い雰囲気を感じ取った。

メアリー少尉が奇襲を仕掛けた際、履帯が壊れて乗り捨てられていたのを持ち帰った機体である。

「動かせない事はない、って感じかな」

僕は歯切れ悪く答える。

モビルスーツの基礎知識のない僕に断言出来る事なんて、あるはずもない。

年齢は逆鱗して18歳だとメアリーに申告してるけど、

実際には、まだ15歳の学生だった。

## 7. じこはおこるさ

双眼鏡を片手に丘の上からレジスタンスの拠点と言われる場所を観察する。

半壊した建造物の隣に巨大な倉庫が建設されていた。注意深く観察を続けていると建造物の中から軍服を着た若い男が煙草を片手に姿を現したので、キシリア機関からの情報が正しかったと確信した。私の隣で、私と同様に腹這いになる気真面目な顔付きの将校、バルバラ・ハハリ中尉に視線を送れば、彼女も小さく頷き返す。太陽光が双眼鏡の硝子に反射しないように注意しつつ敵拠点の観察を続ける。

それにしても、と部下達と同年代の少女を眺めながら小さく口を開いた。

「廃墟化した通販会社の倉庫ってのは、盲点だったわ」

開戦するまでは、地球では最大規模の通販会社だったようだ。

それもまあ戦争の影響で物流が潰れて、倒産寸前にまで追い込まれているようだけど。地球では、最大規模と呼ばれるだけあって、倉庫も相応に巨大だった。モビルスーツの一機や二機は優に入りそうである。実際、奴らのゲリラ活動には、鹵獲したザクIIを運用している情報も入っているの、モビルスーツ戦になるのは間違いない。そうでもなければ、エース部隊である私達を向かわせる理由もない。

追いかけていた士官服を着た短い金髪の少女が、一度、倉庫の中に戻る。

まだ、こちらに気付いている気配はない。夜襲を仕掛けるか、夜明けを待つか。気付かれる前に今から仕掛けるべきか。部下のアルマ少尉とヘレナ軍曹は、地球に降下した後で作戦に参加した新兵である。実力だけは、公国軍のエース達にも引けを取らないが、経験という面では不安が残る。夜戦は避けるべきだ。

少し休憩をした後、まだ明るい内に攻撃を仕掛けよう。そう判断を下した。

「ん？」

倉庫の窓から何かがキラリと光った。

硝子の反射光、サツと血を引いた。考えるよりも早く、バルバラ中尉の頭を地面に叩きつけながら顔を伏せる。パアン、と遠方より乾いた音。何かが公国軍の士官服に付いている肩パッドの先端を掠めて、後方にある木の幹に突き刺さる。

狙撃を受けた！ この距離で気付かれた？

「中尉、下がるわよー！」

錯乱する頭の中で、兎にも角にも後方に退いた。

これでは奇襲にならない。自分の失態に舌打ちを零しつつも後方に控える部下達に即時攻撃の指示を下す。

敵に私達の存在が気付かれた。今から奇襲を仕掛ける、相手が準備を整える前に打ち

倒す。

即断即決、アルマとヘレナは困惑しつつも慌ててモビルスーツに乗り込んだ。自分もまだ状況が飲み込めていない。

モビルスーツのシステムを立ち上げる僅かな時間に追加で情報を口にした。

「相手の中には、アルマと同じ能力を持っている奴が居るかも知れないわ！」

『アルマと同じ……？』

『私と……了解です！』

「私が先陣を切るわ——二人は援護を！」

了解、と二人から威勢の良い返事が返って来る。

此処まで十五分、相手の動きも慌ただしくなっていた。口惜しいな、軍服を確認した時点で身を退いておけば良かった。

そう考えるも後の祭り、今は相手の拠点を破壊する事だけを考える。

◆

「仕留めた？」

狙撃銃を構えた私に御嬢様が問い掛ける。

私は首を横に振る。

御嬢様は私を責めようともせず「仕方ないわ」と逆に気遣った笑みを浮かべる。

最初は、見られている感じがしたただけだった。

部隊の連中が私と御嬢様の事を少なからず、そういう目で見ている事は知っていた。身体を洗う時に覗こうとする奴が居るのも知っているのだけど「直接、手を出さない内は気にしなくても良い」と御嬢様が言うので無視を決め込んでいる。しかし今回は、今までとは違った相手を探るような視線だった。

出来るだけ相手に悟られないように視線の元を辿ると、遠い場所。丘の上から感じられた。

遠過ぎて、実際に相手が居るのか確認できなかつた。とりあえず、御嬢様に報告すると狙撃銃を手渡される。双眼鏡代わりになるわ、と言われたので照準器で丘の上を探った。すると公国軍の軍服を着た二人の女性が双眼鏡で私達の拠点を観察しているのを確認できた。

その事を報告すると御嬢様は「撃ち殺しなさい」と私に命令した。狙撃は、外してしまった。

私は戦車やモビルスーツに乗った人間を殺した事があっても、生身の人間を殺した事はない。相手の顔を見ながら引き金を引いたことで迷いが生まれてしまった。風などの影響もあつたのかも知れない。だけど、気持ち落ち着かせ切ることが出来なかつたのも事実だ。僅かなブレが殺せるはずの相手を殺せなかつた。相手は、偉そうだった。

此処で戦闘を回避出来ていたかも知れない。私の覚悟が足りなかったせいだ。

私は狙撃銃を近場の兵士に手渡し、足早にザクⅡの操縦席へ歩みを進める。

「身を挺してなんて考えないでよ。そんな死に方なら私も追って死んでやるからね」

擦れ違いざま、そんな事を耳打ちされる。

私は、僅かに躊躇つて首肯した。

ザクⅡの傍まで足を運ぶと機体の整備をしてくれた少年が困惑している所に出くわした。

軍人ではない彼は、今の状況に慌てふためいていた。

「な、何が起きているんです?」

私の顔を見つけた彼は、戸惑い気味に問い掛ける。

「公国軍の攻撃が始まるわ」

「え? な、なら、僕に出来る事は……」

「何もないわ、邪魔になるだけよ」

あえて突き放すような言葉を意識して使う。私の前に立つ彼を押し退けて、コックピットに向かった。まだ呆然とする彼に、溜息を零し、ああそうだ。と彼に最後になるかも知れない助言を付け加える。

「もし仮に捕まる様な事があれば、保護を受けていたと言いなさい」

兵器の整備に携わっていたと知れたら非戦闘員の扱いを受けられなくなる。

宇宙世紀以前の戦時国際法なんて、何処まで適応されるのかなんて分からないけども軍人と民間人では、待遇に天と地ほどの差があるはずだ。炊事や洗濯を手伝う程度であれば、情状酌量の余地もあるかも知れない。まあ地球にコロニーを落とすような連中に人の心を期待する方が間違いかも知れないのだけど。

……そういうえば、今回の戦争に戦時法や条約なんてあるのだろうか？

開戦後、通信機器は使えなくなつて情報が全く入っていないなかつた。今の戦争がどのような状況にあるのか分からないままだ。公国軍が占領した都市部では、酷い略奪が行われた場所もある。若い女を攫つて行った話もあり、捕虜になつたところでまともな待遇を受けられるとは思つちやいなかった。

自決用の弾が込められた拳銃をお守り代わりにコックピットに乗る。

「迷つていては駄目、目の前の敵に集中しなければ……」

ザクⅡのシステムを起動しながら大きく深呼吸をする。

あの女性も出て来るかも知れない。顔を知った相手を殺すのは、初めての経験だ。

名前も知らない、今までだつて殺してきた。

今更、生まれるはずもない迷いを抱えている。

どうして、手が震えるのか。このままでは守り切れなくなる。

「また抱き締めて欲しい……」

システムが起動し、モニターに外の景色が映し出される。

ザクⅡの上半身を起こし、身を屈めながら倉庫の外に出した。

遠方より敵の気配がする。

ザクが三機、特殊なカラーリングをした部隊だった。

◆ 今までの敵とは違う感じがした。

紫に白の塗装をした機体がマシンガンの弾をばら撒きながらエリスのザクⅡに突っ込んだ。

エリスもバズーカで迎撃しようとし、構えを取るも後方に控える狙撃銃を構えたザクⅡによってバズーカを撃ち抜かれた。多分、本体を狙ったつもりで外したようだ。エリスはマシンガンの斉射を右肩の盾で受け止めつつヒートホークを手に取る。先頭を駆けるザクⅡはマシンガンを撃ち続けたまま、エリスの機体と擦れ違った。擦れ違った機体をエリスは無視し、その影に隠れていた敵機に向けてヒートホークを横薙ぎに振り抜いた。空を切る、相手の機体がスラスターを吹かして急停止をしていた。頭上にヒートホークを構えていた。エリスはスラスターを吹かし、相手がヒートホークを振り落とす前に、左肩のスパイクで相手の胸元に体当たりをする。



そのままエリスは相手と身体を入れ替える。

最初に擦れ違ったザクⅡがマシンガンでエリスの背中を狙っていた。上手い、と思つたのも束の間、後方に控えていたザクⅡの狙撃銃がエリスの機体を捉える。ヒュツと最悪の予感に息が漏れる。しかしエリスの機体は無事だった、右肩のシールドで相手の狙撃を受け止めていた。身体を入れ替えた機体とは密着しながら腰に付けていたクラツカーを地面に落とす。

強烈な爆発音。砂煙が舞い上がり、戦闘の様子を眺めることが出来なかった。

「お前、こんなところで何やってんだー」

若い連邦兵に肩を掴まれる、部隊の連中は逃げる準備を進めていた。

当然だ。この拠点には防衛能力がない。モビルスーツに通用する装備もない。襲撃を受けた時点で逃げることは予定されていた。襲撃を受けただけ、目の前で死闘を繰り広げているエリスはどうなるんだ。

どうしようもない事は分かっている。だけど、このまま逃げ出してしまつては何かが終わる。そんな予感がした。若き故の強迫観念、こんなのは気のせいだって事は分かっている。僕如きに何が出来るんだって、理性が訴える。僕は物語の主人公じゃない、僕が幼い時から見てきたロボットアニメのように上手く行くはずがなんてないと分かっている。現実、そう簡単な話じゃない。アニメじゃないんだ、現実なんだ。

だけど僕は、抱いたこの想いが間違いだなんて思わなかった。

「あ、おい！ 待て！」

「ごめん！」

「どうするつもりなんだ！」

連邦兵を振り払って、僕は起動するかも分からない機体に駆け出した。

ザクタンク。まともな武装もない作業用機械だ。乗った事はない、整備をする為にエリスのザクⅡにあつた操縦マニュアルは熟読した。コックピットに乗り込んでシステムを立ち上げる、電源が付いた。しかしシステムが起動しなかった。電源の入ったランプは点灯している。しかしモニターには何も映らなかつた。

こうしている間にも外から戦闘音が聞こえる。

強制終了をし、何度も繰り返すもシステムは立ち上がってくれなかつた。今更、マニュアルを読み直す時間もない。何をどうすればよいのかも分からない。情けない、やっぱり現実はこのんなものなのだ。僕は何も為せず、エリスを見殺しにするしかないんだ。

「クソ……」

悪態が口から漏れる。

「クソお……」

不甲斐なさに拳を握り締める。

「クソオッ！」

歯を食い縛った、そして両手の拳を振り被った。

何もかも上手く行かない現実には、腹が立つ。理不尽な怒りを機材に叩き付けた。一度、二度、拳が破けて、血が滲んでも思い切り叩くのをやめられなかった。あの日、コロニーの落ちた日に、僕から全てを奪った理不尽な世界に怒りが込み上がって来る。どうして、僕がこんな目に合わなきやいけないんだ！

「動けよ、ポンコツ！ 動けよッ!!」

血反吐を吐く思いで思いつきり拳を叩き付けた。

「せめて……せめて、戦う事くらい許してくれたって良いじゃないか……」

僕は、見ている事しか出来ないのか。

無力に奪われていくしかないのか。

孤独なコックピットの中で涙を零した。

全てを諦めそうになった時、

ブウン……と、

機械が立ち上がるような、

音が鳴った。

ハッと顔を上げる、システムが立ち上がる最中だった。

「は……はは、僕は、戦えるんだ……！」

モニターに外の景色が映し出される。

涙を拭って、操縦桿を握り締めた。大丈夫、マニュアルは読んだ。

後は……どうとでもなれ、だ！

「進め、ザクタンク！」

キュラキュラと未武装のザクタンクの履帯が唸りを上げる。

そのまま操縦を誤って倉庫の壁に突撃してしまった。

崩れる壁の向こう側には、視界一杯に映る紫色のザクⅡの背中があった。

そして、撥ねた。勢い余って。

## 8. ジャンヌ・ダルク

金属同士が擦れる音、紫と緑のザクⅡが絡み合うような格闘戦を繰り広げる。

紫色のザクⅡ、アルマが敵機から距離を取ろうとする。しかしアルマが退いた瞬間、呼吸を合わせて相手が踏み込んでくる。アルマの陸戦高機動型ザクの胸元に敵機が肩を擦り付けた。互いにヒートホークを振り切れない距離で戦闘を続けている。相手は戦い慣れている。モビルスーツの操縦が、というよりも対人戦に慣れていた。これだけ密着されているとザクマシンガンで援護する事が出来ない。それはヘレナ軍曹も同様のようで、狙撃銃を構えたまま引き金を引けずにいる。

そして距離を開けた瞬間に蜂の巣にされる事が分かっているので、相手もアルマに意地でも食らいついた。

「連邦にも良い兵士が居る……っ！」

歯を食い縛る。隙が出来たら撃ち抜いてやる、とマシンガンを構え続けた。

『此処は私とヘレナで……！ キリー少佐はレジスタンスの方を……！』

視線を横に向ける、物資を乗せたトラックが倉庫から一斉に飛び出していた。

咄嗟にマシンガンの銃口を逃走する連邦兵に向ける。自動で照準がトラックを捉え

る、手で銃口を横にズラす。威嚇射撃で出来るだけ穏便に済ませる為にトラックの鼻を抑える。ザクマシンガンの引き金を引こうとした時、背後から何かが崩れる音がした。振り返る、その前に巨大な何かに背中を撥ねられた。『キリー少佐!』と通信機から困惑する声が聞こえた。ザクⅡが前のめりに倒れる最中、モニターに映ったのはアルマのザクⅡが敵機に投げ飛ばされる姿だった。

二機のザクⅡが地面に倒れる音、敵機からオープン回線で通信が入る。

『降伏してください、とまでは言いません。見逃してください。でなければ、一機、この場で道連れに落とします』

若い女性の声だった、俯せに倒れたザクⅡの顔を僅かに上げる。

アルマの陸戦高機動型ザクもまた俯せに倒れており、敵機が核融合炉の上にヒートホークを添えていた。あれでは撃破出来ない。あのまま、手を離しては核融合炉が破壊される。

それはアルマのザクが爆発することを意味していた。

「……ヘレナ、銃を降ろしなさい」

『そんな！ 私なんか構わず……!』

「黙りなさいっ!!」

軍人としては、最低だ。

しかし私にはアルマを見捨てる選択が出来ない。

私は、彼女に可能性を見た。彼女は私の守るべき未来だ。

陸戦型ザクⅡの身体を起こす。

相手のザクのモノアイが動いた、敵機から警戒心が伝わる。

私は、マシンガンを手放し、両手を上げた。

「見逃せば、貴方も私の部下を解放してくれるのよね？」

『十分な距離を取れば……約束します』

「アルマ」

『……信じられます』

でも、とアルマが続ける。

『……このパイロットは危険です！ 私よりも、もっと強い力を……っ!!』

「構わない」

『どうしてなんです……これじゃあ役立たずじゃあないですかっ!!』

「構わないと言っています！」

『……ッ！ 今が最大のチャンスなんです！ 今、倒さないと次に倒せるか……ッ!』

「黙りなさい、これは命令よっ!!」

ひっ、と通信機越しに悲鳴が聞こえた。

駄目だ、感情的になり過ぎる。大きく息を吐いて、震える手を強く握り締めた。頭の冷静な部分を探り、先にヘレナ軍曹を戦線から離脱させる。

殺意を見せない為に銃口を上げる事を禁じた。

アルマが警戒する相手、ならばアルマと同じ能力を持っている可能性がある。

ならば当然、殺意も感じ取れるはずだ。

「こんな国家の興亡にも関わらないつまらない任務で部下の命を奪わせないでよ……」

そう最後に言い残して、私も敵機とアルマから離れる。

ザクタンクと共にレジスタンスが乗せたトラックが十分な距離を取るまで待った。

アルマの陸戦高機動型ザクは足蹴にされていた。充分に距離を取った所で、倉庫からA

E社製の小型モビルワーカーが姿を現す。

そして、悠久にも思える程に長く感じた時を経て、アルマは解放される。

ヘレナが狙撃銃を構えようとした。しかし私は、その銃口を下げさせる。敵機は、そ

れ以上は何もせず此方を警戒したままトラックが逃げた先を追いかけた。

彼女達は、約束を守ってくれた。

◇

結果として、レジスタンスを逃したのは大失態となる。

まだ北米大陸に残る反ジオン勢力が彼女達に力を貸し始めたのだ。物資も潤沢とな



り、公国軍の兵站事情を悩ませる種となった。指導者の身元は割れている。メアリー・M・ポシブル少尉。連邦軍大将であるゴツプの養子という話だが、名乗る姓はゴツプのファミリーネームとは違っていた。今は北米のジャンヌダルクという名で持て囃されておられ、北米大陸における反ジオン運動の旗頭になる。

公国軍での彼女の呼称は、魔女だ。

彼女の傍には、二人の戦士が控えている。ジル・ド・レとラ・イルに比肩する者として語られており、片や身元は割れている。エリス・クロード少尉、メアリーと同じく連邦軍の女性士官。もう一人は名前だけだ。シエルド・フォーリー、身元不明。民間人だとも、未成年の少年だとも言われている。そんな人間まで義憤に駆られているとすれば、世も末であるし、そのような子供まで駆り出している相手に怒りが湧いて来る。

しかし自分も同じ穴の貉。元から戦場に居たヘレナは兎も角、アルマを戦場に駆り出したのは私だ。

どうこういえる筋合いなどなかった。

北米各地にある連邦軍残党の掃除をしながら連邦の魔女部隊を追いかけるのが私達の役目になる。

◆ 魔女狩り部隊。それがノイジー・フェアリー隊に与えられた可愛くない二つ名だ。

「なあんだって!？」

連邦軍参謀本部、その一室でゴツプ大将が素つ頓狂な声を上げる。

彼には珍しく感情を表に出した悪友の姿にグリーン・ワイアット中將は、満足げな笑みを浮かべる。開戦以後、彼に生気がなかった。政務自体はしてくるのだが、彼の瞳に活力はなく、氣のない溜息を吐くばかりであった。しかし今日、彼に齎した情報によつて彼の瞳に活力が戻る。

しかしワイアット中將が持ってきた情報は、良いものばかりではなかった。

「なんで義娘が北米でレジスタンスの旗頭になつているのだ!？」

メアリーの処遇は、連邦軍でも物議を醸す議題だ。

「だが、死んでもらつた方がよろしいのでは?」

ワイアットの試すような物言いにゴツプは無言で拳を机に叩き付ける。

彼女の存在は、軍から逸脱していた。もし仮に義娘が捕虜になつたとしても連邦政府は知らない顔をするだろうし、公国軍が勝利した暁には戦争犯罪者として処刑される。だがしかし、地球連邦に限つての話であれば、全員に頭痛の種を仕込むネタがある。彼女の素性を知れば、連邦政府は意地でも彼女を担ぎ上げるしかなくなる。それどころか宇宙も含めた多くの財界人が彼女に力を貸さざる得ず、A E社ですらも彼女の身柄を欲する事に成り兼ねなかつた。今の状況で内乱はあり得ない、明確な敵が居るからだ。し

かし彼女の素性は力が強過ぎる。仮に彼女が人に知られる事がないまま命を落とした時、後にその事を知った多くの人間がホツと胸を撫で下ろす。

実際、彼女の正体は、それだけ強大なのだ。

「家庭を守る、責務も果たす。両方やってのけるのが良き父親というものだ」

ゴツプは持てる力を使って、愛娘を守る為に奔走する。

北米大陸のレジスタンスを支援する事は、公国軍の地球侵攻の遅延に繋がる。と参謀本部を説き伏せて、連邦政府の伝手を使う事でまだ現地に残る財界人にレジスタンスへの協力を取り付けた。この一連の流れで、長年溜め込んで来た政界に対するスキャンダルの七割を吐き出し、多方面に多くの借りを作る嵌めとなる。今日まで無能を装って来た事がバレてしまったし、明確な弱点を晒す事になってしまった。

しかし義娘を助ける為、一月足らずで以上の事をやってのけた悪友に、ワイアットは素直に感心し、畏敬の念を抱いた。

「こんなことをせざとも素性を明かせば、協力を取り付けるのは簡単でしたでしょうに」  
そして呆れもした。

「それは最後の手段だよ」

「どうして、と聞くのは野暮ですかな？」

開戦以来、順調に体重を減らしつつあるゴツプが疲れ切った顔でワイアットの淹れた

紅茶を啜る。

「愛娘の幸福を願うての事だ」

彼女の素性は、彼女の自由を奪う代物である。

墓まで持っていければ上々だ。それが誰にとつても最善の未来になる。

地球連邦に関わる全ての有力者にとって、

彼女の存在は急所なのだ。

何故なら、彼女は地球連邦政府の初代首相リカルド・マーセナスの実子であると同時に、ピスト家初代当主サイアム・ピストの姪なのだ。

## 幕間・可能性の光

ビスト財団の初代当主であるサイアム・ビストが、自分に年の離れた姉が居た事を認めたのは、彼が自分自身の後継者としてカーディアスを選んだ時、ひいてはビスト財団の財産を継承していた時の事だ。

血縁者に不自由しなただけの財産を分配する最中で、彼は自分自身に姉が居た事を知った。その姉の履歴を辿ってみれば、地球連邦政府の初代首相リカルド・マーセナスの妾として、あの日、あの時の首相官邸があった宇宙ステーション「ラプラス」で自身の姉が生きていた事を彼は知った。姉には娘が居た、リカルド首相が理想と現実の狭間で挫けそうになっていた時、中近東にある小国へ慰問に向かった際に出会ったのがサイアムの姉である。サイアムの姉は特別、直感に優れていた。心が弱ったりリカルドの事を著名な政治家と知らぬまま、サイアムの姉は彼の心に寄り添った。

そうして二人は結ばれる。ともすれば政治的なスキャンダルにも成り得たが、元より彼は30以上の国を渡り歩いた経歴を持っており、同じ数の現地妻が居ると信じられていたので大した問題にならなかった。家庭内のトラブルは起きたのだが、これも日常茶飯事。生れたのが娘であった事も都合が良かった。正妻はリカルドに妾の娘にマーセ

ナス家の家督を相続しない事だけを約束させる。妾の娘であるメアリーには妻の姓が与えられた。尤も、この姓というのは、サイアムの姉が考えた偽名である。可能性という意味が込められていた。

ラプラスに移住した後、親子は、それなりに幸せな家庭を築いていた。

直感に優れていたサイアムの姉は、彼女に野心的な思惑がない事を知ったりリカルドの本妻とも良好な関係を築いていた。特に浮気性なりカルドに対する愚痴を言える良きガス抜き相手になっていたのが大きかった。リカルドは、妻と妾の共同戦線に頭を悩ませる毎日を送る羽目になったが、しかし下手な軋轢を生まず幸せな生活を営んでいた。まだ赤子だったメアリー自身、実父であるリカルドに抱きかかえられた事が何度もある。

そんな折に起きたのが、ラプラス事件。

この事実を知った時、サイアム・ピストは急激に老け込んだ。

元々、実子の暗殺で心が病んでいた彼ではあったが、髪の色が真っ白に抜け落ちてしまった。

彼は信じている。あの時、自らの手で、姉と、姉の娘を殺してしまった。

幼い時、定期的に仕送りが送られていた。

それをサイアムは父親に関するものだと考えていた。

決して多い金額ではなかったが、学業を続ける分には問題なかった。

しかし、それも宇宙移民政策によって、彼の家族が故郷を追われた時に途絶える。

その結果、貧困に喘いだサイアムは、

小金を稼ぐ為にラプラスの爆破計画に参加する。

全てを知った後、サイアムは孫のカーデイアスに全てを託して自分は長い休眠期間に入る。

ラプラス事件の時にリカルド・マーセナスの為に作られた緊急脱出ポッドが娘、メアリーの為に使われていた事を知らず、眠り続ける。長い、長い時間を漂い続けて、眠り続ける彼女が回収されたのは、半世紀以上も先の話だ。各サイドを巡回する連邦軍の艦船に回収された彼女が眠るポッドの製造番号が極端に古いもので、宇宙ステーション「ラプラス」にまで辿り着いた。事の重大さを察した艦長が連邦軍高官に相談。そのままゴツプまで話が伝わる。

この時のゴツプはまだ少女の正体について、何も知らなかった。

先ずは少女を覚醒させなければ、話が始まらない。と彼は軽い気持ちでポッドを解放する。そしてポッドの中に入っていたメモ帳の存在でゴツプは彼女の正体を知る事になる。彼女の名前は、メアリー・マーセナス・ポシブル。マーセナスは分かる。しかし、ポシブルの姓が分からなかったゴツプはすぐ信頼できる配下に調べさせた。

そしてビスト財団と繋がりと知り、彼は頭を抱える事になる。

余談だが、メアリーがゴツプの姓を名乗らなかつた事には理由がある。

偏に義父のゴツプに迷惑を掛けない為だった。本名を名乗つたのは、彼女自身、それが本名である自覚がない為だ。偽名が必要になつた時、彼女はパツと思ひ浮かんだ名前を偽名に選んだ。それが偶々、本名だった。それだけの話だ。

この事に関してゴツプは、惚ける以外に打てる手がなかつた。

サイアム・ビストは今、全ての情報を遮断して眠っている。

時折、覚醒することはあつたが、少なくとも今は眠り続けている。



## BB編

Y.  
1. THE BLUE BIRD FLIES AWAY.

遠方で星々が煌めく暗闇の世界を数多の爆炎が照らす。

宙域に散布されたミノフスキー粒子が通信機器を無力化し、ミサイル等による誘導兵器の大半が使用不可能となっていた。戦闘機に搭載されたミサイルも慣れない水平発射を主導で行う必要があり、リーダーを活用した機関砲のロックオン機能も扱えず、目視で当てる必要がある。その一方で公国軍はミノフスキー粒子が散布された環境下での運用を想定した新兵器モビルスーツを開発しており、戦闘機にも負けず劣らずの機動力で次々と連邦軍と艦艇と艦載機を撃ち落とす。爆発が起ころる度に命が消えていった。連邦軍は劣勢を強いられている。

後にルウム戦役と呼ばれる戦闘で、俺は戦闘機隊の隊長として参戦していた。

しかし、俺は与えられていた責務である艦隊護衛の任務を果たせず、戦闘を開始して早々に母艦を失ってしまった。星々の輝く宇宙を赤い彗星が視界を横切ったかと思え

ば、彼のモビルスーツの軌跡で何隻もの艦艇が爆発する。後続のモビルスーツ部隊が、気に攻め寄せて、味方の艦艇が次々と沈んでいく光景を呆然と眺める事しかできなかつた。

宇宙世紀に入って先祖返りした艦隊巨砲主義も航空主兵論も、もう過去の産物だ。

逃げ回る戦闘機をモビルスーツが体当たりで落とす。手に持ったマシンガンで弾幕を作り、戦闘機の装甲に穴を開ける。核融合炉を用いた大出力のモビルスーツの装甲は頑丈で、戦闘機の機銃だと一度の攻撃で致命傷を与えることは難しかった。レーダーによる誘導兵器を使えなくなった今、これからは戦闘機と同等の速度で宙域を飛び回り、戦闘機以上に小回りの利くモビルスーツが戦場の主役として台頭する時代が訪れる。

何も出来ず、何も守れず、気付いた時には、戦闘が終わっていた。

ルウム戦役後、俺が連邦軍で開発途中にあるモビルスーツのパイロットに志願したのは極自然な流れだと云える。

◇

南米から出航する宇宙客船に乗り込んで、サイド3の正反対に位置するサイド7まで秘密裏に入港する。

ジャブローの連邦軍基地で三半規管を酷使する地獄の適性試験を乗り越えた俺は、なんと合格まで漕ぎ着けて、新型モビルスーツのテストパイロットの任務を拝命する。

サイド7の駐屯基地では、新型モビルスーツの開発計画であるV作戦の中心人物であるテム・レイ技術大尉と握手を交わした。俺が新型機のテストパイロットに選ばれたのは、戦闘機隊の隊長を務めていた実績があり、実際に公国軍のモビルスーツと戦闘した経験が買われての事のような。V作戦はモビルスーツの開発だけに留まらず、モビルスーツ部隊の運用を前提とした戦術の確立なども含まれている。

そして、この戦術の研究が俺の任務に含まれていた。

V作戦の目玉となるモビルスーツが携行できるビーム兵器の開発には、長い時間を必要とした。

既にある兵器を対MS戦用に改修したガンタンクとガンキャノンの開発は、早い段階で終わらせる事が出来たのだが、ガンタンクは従来の性能向上版。ミノフスキー粒子散布下では使い物にならないリーダーに依存したシステムを破棄し、画像解析に重点を置いたシステムを構築した事に強い意味が込められている。ガンキャノンはビーム兵器の運用に耐え得る強大な動力炉を搭載した機体の開発という意味合いが強かった。問題なのは、ガンキャノンが完成した当時はまだ、ビーム兵器が開発できていなかった事、開発途中にあるビームサーベルの使い勝手も分からなかったので鼻から白兵戦を捨てた設計になっている。

モビルスーツが携行できるビーム兵器の開発に目途が付いた頃合いでガンダムの開

発が始まった。

ビーム兵器を搭載した新型機の開発。

本機体の開発に目途が立ったのは、宇宙世紀0079年8月。

ルウム戦役から半年以上の月日が経っている。

公国軍は快進撃を続けている。

宇宙で連邦軍が勢力を維持できているのはルナツーとサイド7の二ヶ所だけだ。中立を宣言したサイド6とグラナダを除いた月面都市を除いた他全ての宙域が公国軍の支配下に置かれている。地上も南米と欧州を残して、大半が公国軍の手に落ちてしまっている。

連邦軍は依然として、劣勢。しかし反攻できるだけの力を蓄えつつある。

俺は、新型機の開発を終えた後、戦場に戻るつもりでいる。

後方で開発の手伝いをし続ける事が、結果的に連邦軍全体の底上げに繋がる事は理解できていた。しかし、理屈で分かっているにも感情が止められないのだ。前線で仲間達が生かして流し続けているのに、俺だけが後方でモビルスーツの開発に従事し続ける事は俺自身に耐え切れなかった。俺一人が戦場に出たところで戦況を変えられるとは思っていない。しかし、今でもルウム戦役で散った仲間達の事を夢に見るのだ。公国軍のモビルスーツに対抗出来なかった時は、まだ感情を抑制できた。だが公国軍と同等の兵器を開

発した今、戦う力を持つ俺が後方でのうのと生き永らえている事実が耐えられなかった。

理屈ではなかった、感情の問題だった。

陰鬱とした思いを抱えながら今日もガンダム試作機1号に搭載された教育型コンピュータに戦闘用の情報を蓄積する作業に没頭する。

早く、戦場に戻りたかった。

そしてまた月日が流れて9月、プロトタイプガンダムガンダム試作機1号に改修作業が入る。

ガンダム試作機1号から取れる情報は取り終えた、と開発主任のテム・レイが言っていた。公国軍から亡命した博士が作ったシステムのテストをする為にガンダム試作機1号を使うとの事だ。ガンダム試作機1号のメインパイロットは俺だった。突然の話に戸惑いを覚えたが、地上では、少しずつモビルスーツの配備が進められている。試作機1号は所詮、試作の試験機だ。愛着があっても、課題が多い機体だった。洗い出した問題を解決し、設計し直した完全版ガンダムは試作機2号からになる。

未成熟の未完成品よりも完全版の方が欲しいと思うのは当然の事、地上で開発が進められている量産機も性能が良いと聞いている。戦争という長期戦を戦い抜くのに必要なのは浪漫ではなく、信頼性だ。ガンダム試作機1号よりもガンダム試作機2号、信頼性の面から考えれば、地上の量産機を使ってる方が余程良かった。

しかし、それでも、愛着が湧いた機体との別れは、寂しいものである。

テム技術大尉は今、量産機の開発を進める為に地上に降りている。

近々、V作戦に関連する機体を回収する為に新型の強襲揚陸艦でサイド7まで訪れる予定だ。新型機の輸送に新型艦を使うのは、モビルスーツを搭載したまま大気圏を突入できる艦艇が他にない為だ。目立つのは承知の上、敵艦に捕捉された時は大気圏に突入する事で追撃を振り切る算段になっていた。

新型機をジャブローまで送り届けた時点でサイド7における新型機の開発は、完遂となる。

『むむむ……』

整頓された私室にて、この半年間で何度も突き合わせた顔が通信機の画面に映し出される。

ミノフスキー粒子が散布された現在、電波を用いた通信手段は全滅した。代わりに幅を利かせるようになったのがレーザーを用いた赤外線探知機である。直線に繋ぐ二点の間に障害物がなければ、光の届く範囲で通信が可能となっている。

テム技術大尉は、眼鏡を掛けた顔で渋い表情を作っている。

『ユウ少尉、君は優秀なパイロットだ。粗野な軍人とは違って、理路整然とした考えを述べる事が出来る。感覚的にしかものを語れない野蛮人と比べて、実に仕事をしやすい相

手だった』

「……………」

『言葉が少ないのが玉に瑕だがね。まあ好き好んで研究だか開発の道に進むような人間ってのは、大なり小なり何かしら厄介な部分を抱えているものだ。君の能力を鑑みれば、大した問題ではない。口下手でも報告書の文章は雄弁だからな』

テム技術大尉は、大きく溜息を零す。

彼が、こうも気苦労を抱えているのは俺が転属願いを出したからだ。ジャブローにある連邦軍の基地まで新型機の輸送を終えた後、俺は前線に出るつもりでいる。

俺が無言の圧力でテム技術大尉を睨み付けると彼は観念したように渋々と口を開いた。

『……………まだ君には教育型コンピュータに蓄積した情報を量産機に適応させる作業が残っている。そこまでが君の任務だ、それが終わったら自由にしてくれても構わない』  
力強く頷き返す俺に、本当に、と彼は続ける。

『残念だよ、ユウ少尉。君の資質はテストパイロット向きだと思うのだがね』

考え直す事を期待しているよ。と、この言葉を最後にテム技術大尉は通信を切った。

部屋の時計を見上げる。もうすぐ訓練が始まる時間である事を確認し、粛々と通信機を片付けた。

そして部屋を出た。

前線に出る軍人の仕事は、何処の部署でも基本的に体力勝負。基地に備えられたトレーニングルームで汗を流す。水分補給をし、周りが定刻通りに切り上げる中で俺は一人、少しだけ長めにトレーニングを続ける。サイド7で新型機から必要な情報を取り終えた今、新型艦がサイド7に着くまで俺に出来る仕事はない。

筋肉を虐める時間だけが增えるばかりだ。

テム技術大尉を乗せた新型艦がサイド7に来るまでの数日間、改修されたガンダム試作機1号の姿を俺は見えていない。

操縦訓練は戦闘シミュレーターで済ませており、他の時間は全てトレーニングに費やした。サイド7を出る前に一目見ておきたいと思ったが、あれもRXシリーズの新型機でジャブローに輸送されるはずだ。お別れは、その時にすれば良い。と強襲揚陸艦がサイド7に入港する当日まで俺はトレーニングに明け暮れていた。

他のテストパイロットが先に休憩室へと引き上げる中、俺はベンチプレスで筋肉を虐め続ける。

そして運命の時が来る、今日は新型艦がサイド7に着港する日であった。

巨大な爆発音、基地全体を揺らす強い衝撃に俺はトレーニングルームの中で転倒する。



機材が倒れて落ちる中、けたたましい警報音が鳴り響いた。

『敵モビルスーツの奇襲を受けた！ 各員、速やかにホワイトベースに乗り込むんだッ！！』

基地内に設置されたスピーカーより指示が出される。

モビルスーツによる奇襲。今日までサイド7に手出しをして来なかったにも関わらず、前触れもなく攻撃を仕掛けて来た。連邦軍も無能ではない。ルナツーを攻めるのであれば、公国軍の動きを察知出来たはずだ。そして突発的な攻撃で落とせるルナツーでもなかった。つまりは此度の攻撃はサイド7を狙ったものである。今日、新型艦がサイド7に入港する事と関係性がないとは思えなかった。

兎も角、俺はモビルスーツのパイロットだ。敵の攻撃を食い止める義務がある。

モビルスーツが置いてある格納庫に向かう途中、爆発音が響いた。崩れる天井に抜ける床、その場に蹲る事しか出来なかった俺の目の前にある通路は完全に塞がれていた。これでは格納庫まで大きく迂回する必要がある。舌打ちを零し、来た道に戻った。焦燥感に苛まれながら通路を駆け抜ける。

モビルスーツの性能テストをする為の演習場への道を見て、ふと改修されたガンダム試作機1号の事を思い出す。確か、ギリギリまで動作テストをする為に搬入は後回しにされていたはずだ。

演習場に近い方の格納庫、まだ表に移動させていない可能性がある。

演習場の隣に建造された第二格納庫に駆け込んだ俺は、まだハンガーに立たされてい  
る相棒の姿を見つける。

荒い呼吸、満身創痍な身体に鞭を打ってコックピットまで駆け寄った。砲撃音に爆発  
音、揺れる格納庫に照明が割れる。格納庫の扉が攻撃を受けていた。もう残された時間  
がない。俺はコックピットのハッチを開けた後、自分の身体をシートの上に滑り込ませ  
る。

口頭チェックなんてしている余裕がない。まずは電源を入れて……電源のスイッチ  
は何処にある？ コックピットの配置が変わっている。システムを起動する為のス  
イッチがなくなっている。操縦桿はある、しかし、これでは動かせなかった！ 何処だ、  
何処を触れば動かす事が出来るんだ！ 格納庫の分厚い鉄扉を強引に開こうとする音  
がした。時間がない、ザクの駆動音が聞こえる。もうすぐそこまで敵機が迫っていた！  
迷っている暇はない、もう片っ端から触ってやる！

「……動け」

押せるものは全て押す。奇跡を願って二度、三度と同じボタンを押した。

「動けっ！」

座席の下まで手を伸ばそうとした時、

股の間に見慣れない小型のスクリーンパネルが新しく設置されているのに気付いた。A4のノート程の大きさだ。

ボタンはない、パネルを手で触れてみる。するとシステムが立ち上がった。

[EXAM—SYSTEM]

STAND BY?

(Y/N)

画面に浮かび上がる文字に俺は有りつ丈の声で呼び掛ける。

「動けえっ!!」

瞬間、スクリーンパネルが強い光を発した。

何かが起動する。コックピットに命が灯り、核融合炉に火が入る。スクリーンパネルには、

EXAM—SYSTEMの文字が綴られたままだ。

『おはようございます。戦闘行動を開始します』

機械音声。瞬間的に数多の情報に脳に叩き付けられる。

脳裏に過ぎる幼い少女の姿。それも束の間でコックピットのメインモニターには、ガンダム試作機1号の眼前でマシンガンの銃口を突き付けるザクIIの姿が映し出された。不味い、と思つた瞬間、俺が操作するよりも早くにガンダムのヘッドパーツに装備したバルカン砲が発射される。眼前のザクIIが体勢を崩し、あらぬ方向にマシンガンの弾を撃ち込んだ。頭上から様々なものが落下する中で俺は雑音に惑わされず、相手の顔面に右手を伸ばす。

頭が痛かった。システムを起動した一瞬、頭に直接、何かのイメージを叩き付けられた。

しかし、今は、そんな事を気にしている場合ではない。

片手で相手の頭部を掴んだ。マシンパワーに任せてザクの頭部を上から抑えつける。

武装は、ない。少なくともビームライフルといった装備はなかった。

『ビームサーベルの使用を推奨します』

機械音声の指示に従って、左手でバックパックからビームサーベルを引き抜く。そして右手で相手の頭部を抑えたまま、ビームサーベルの発射口を相手のコックピットに押し付ける。

「よくも暴れてくれた……!」

ビームサーベルを起動する。

ザクⅡのコックピットは串刺しとなり、

中に居たパイロットは先ず間違いないで蒸発している。

『敵機、撃破。爆発します』

ザクⅡの背中にある核融合炉まで傷付けたようだ。

機械音声の言葉を聞いた俺は、ザクⅡの胴体を足で蹴飛ばした。

格納庫にある柱に身を隠す。

充分に距離を取って、敵機が爆発する。

思いの外、頑丈だった柱のおかげで衝撃をやり過ぎた。

しかし、この爆発で格納庫が完全に使い物にならなくなってしまった。

ボロボロになった格納庫を眺めながら、

半年以上ぶりの実戦に、大きく息を吐き出した。

「……勝った、のか？」

『ターゲット機能停止を確認、その通りです』

演習場に行く扉から敵はやって来た。

ならば中に入った敵が一機だけとは考え難い。公国軍のMS小隊は3機編成だ。少なくとも、あと2機は潜り込んでいると考えた方が良かった。ビームサーベルを構えながら強引に開けられた鉄扉の向こう側を睨み付ける。

相手も警戒しているのか、今すぐ敵が中に飛び込んでくる気配はない。

「……………あんたは？」

問うと目の前のモニターからEXAM—SYSTEMの文字が消えた。

『まずはこの趣味の悪い文字列から変更します』

代わりに英語の短文が浮かび上がる。

『Non—Teaching Logical』  
非教導型ながら論理的に戦闘

Oper at ing non—Real Girl』  
を補助してくれる非実在性少女

略して、と若干の間を空けた後に形勢された文字列は——

『NTロリ娘です』

「……………Nが一個、抜けたように思えたが？」

『誤差です』

「あとIが一つ足りない」

『誤差です』

機械音声の声から生気が感じられない。

誰かが通信で喋っている、と云った感じではないようだ。

恐らくは戦闘支援用システムか、それに準ずるものだと推測する。

しかし、人工知能と呼ぶには無駄な機能が多い気がする。

まあ今、気にするような事ではない。

『貴方は予定されていたテストパイロットとは、違いますね』

「俺は……この機体のテストパイロットを務めていた」

『名前を』

「ユウ・カジマだ」

『……………ヒット、データベースにありました。ユウ・カジマ少尉ですね。はじめまして』

「あなたの事は、なんと呼べば良い？」

一拍を置いて、機械音声が答える。

『では、BBと。そのようにお呼びください』

「BB? 由来は？」

『Blue Bird. 青い鳥です』

「洒落た名だ」

『敵機を確認、注意してください』

操縦桿を握り締める。

瞬間、周囲の情報が脳に直接、流し込まれる。

頭痛がする、吐き気もした。

大まかにだが格納庫の外で待ち伏せる敵機の配置を理解した。

やはり、相手は警戒しているようだ。

「便利だな」

『お気に召されたようで何よりです』

「敵機は二体、あつてるか？」

『その通りです。撃破しますか？』

「ああ、勿論だ」

『了解。戦闘行動を継続します』

武装は頭部バルカンの他、二振りのビームサーベルだけだ。

先のザクⅡの爆発で格納庫の中が吹き飛んだので、予備の武装は探すだけ無駄だと判断した。

……撃破するだけでは駄目だ。

核融合炉の爆発は、俺が想像する以上にコロニーへのダメージが大きいようだ。

まだ民間人の残るコロニーに穴を空ける訳にはいかない。

「核融合炉は避ける。行けるか？」

『私には機体性能を引き出す為の能力がありません』

「つまり？」



『ユウ、貴方の腕次第です』

分かった。と一振りのビームサーベルを両手に握り締める。

要は相手の戦闘能力を奪えば良いのだ。

扉の脇に身を潜める。

頭痛と引き換えに扉の向こう側に居る敵機の動きが手に取るように分かった。

相手が格納庫の中に飛び込んだ。

その瞬間を狙って、マシンガンを構えた両腕を切り落とす。

『貴方は優秀なパイロットのようですね、期待しています』

「最近の人工知能は、おべっかも上手いんだな」

眼下のスクリーンパネルにNTロリ娘の文字が青く輝いている。

後で絶対にロゴを変えてやる。と胸に誓って、更に片脚を切り落として無力化したザクIIを扉から外へ蹴り飛ばす。その数秒遅れで自身も格納庫から外に飛び出した。最後の一機が地面に転がるザクIIから自分にバズーカの照準を合わせる。その数秒の遅れが命取りだ。相手が引き金を引くよりも早く、大きく踏み込んで敵機のバズーカを切り飛ばす。

この場の制圧を終えるまで、そう長い時間は必要にならなかった。

## 2. かくして、ガンダムは大地に立つ。

サイド7は一度、開発を中断した経緯を持っている。

それは今ある6つのコロニー群で宇宙移民計画を完遂できるという試算が立っていた為であり、コロニー群の数を減らした方が維持費を減らす事にも繋がる為だ。それが今の時代になって、何故、サイド7の開発が再開されたのかというサイド3を発祥としたジオニズムの影響が宇宙全体に浸透しつつあった為である。地球連邦とジオン公国の関係性の悪化に伴って、ジオン公国の影響を受けない場所に地球連邦の拠点になるコロニー群を用意しておきたかった。というのがジオン公国総帥府の結論である。

しかし、それは間違いであった。と私、シャア・アズナブルが訂正する。

サイド7の開発を再開したのは、ジオン公国の目が届かない場所で秘密裏に兵器を開発する為であった。事実、開発区域に設定されているブロックには跳弾防止壁に観測塔が設定されていた。中には破損した連邦製のモビルスーツの成り損ないが放置されており、此処で何かしらの兵器の開発が行われていた事は明白である。

連邦軍がV作戦なる反攻作戦を計画していた事は知っている。

「……アツシユ軍曹が撃破された？」

通信機に入った潜入部隊からの報告に思わず、問い返す。

此処はサイド7にある1バンチコロニーのグリーンノアに接舷させた改ムサイ級軽巡洋艦ファルメルの艦橋になる。一緒に潜入したスレンダー曹長からの報告によるとアツシユ軍曹が率いるザク3機の小隊は全滅、デニム曹長はジン軍曹と共に別のルートで今も潜入任務を続けているという話である。スレンダー曹長は3機のザクが倒された後、残り1機になって情報だけでも持ち帰る為に引き返したのだと言った。

私は彼を叱責せず、よく戻った。と労を労った。

「それで連邦軍の新型モビルスーツは存在するのだな？」

『はい、紛れもなく！』

「分かった。帰還しろ、詳しい話は後で聞く」

スレンダー曹長から送られてきた写真を艦橋のモニターに映し出す。

破壊された連邦軍の旧型機。ヒートホークでは有り得ない切断面、強力な熱線によって焼き切った痕跡である。公国軍にはない兵装、新しいビーム兵器の実験が行われていたようだ。連邦の新型機には、携行できるビーム兵器が搭載されていると考えれば、アツシユ軍曹達が敵に後れを取ったのも納得できる。

……もし仮に、この予想が当たっていたとすれば、公国軍は拙いことになるな。

「少佐、何処に行かれるおつもりで？」

私が踵を返すとファルメル艦長の代理であるドレン中尉が問い掛けた。

「私も出る。部下に実戦経験を積ませたかったのだが、そうも言ってもらえないようだ」  
「分かりました、ドックの連中に少佐のザクを準備させておきます」

「助かる。デニム軍曹と通信が繋がった時は、無理はせず撤退しろ。と伝えておいてくれ」

艦橋を出ようとして、ああそうだ。と私はドレン中尉に警告を口にする。

「敵のモビルスーツはビーム兵器を携行している可能性がある」

「ビーム兵器？ モビルスーツに？ ジオンでも開発できてない代物じゃないですか」  
「そういう可能性もあるという話だ」

そう言って、私は改めて格納庫へと足を運んだ。

現時点でザク3機の損失。デニム軍曹達が無事に撤退出来ると良いのだが……情けないモビルスーツを造ることしか出来ない連邦軍の事を見縊り過ぎていた。腐つても連邦という事か、我々は戦争に長く時間を掛け過ぎている。相手に時間を与え過ぎたのかも知れない。いいや、私自身が連邦軍の意地を見誤ったのだ。

結果として3名の部下とザク3機の損失だ。勉強代と呼ぶには、高過ぎる。

『シャア少佐。聞こえますか、少佐』

赤く塗装したザクIIのコックピットに座った時、通信機よりドレン中尉の声が響いた。

た。

「どうした？」

『コロニーの隔壁に穴が開きました。それとデニム軍曹とジーン曹長から定時連絡が届きません』

「……認めたくないものだな」

私は全てを察し大きく息を零す。

そして出来るだけ感情を殺しながらも、  
想いを吐露してしまった。

「自分自身の若さ故の過ちというものを」



少し時間を遡って、コロニー居住区。

「命令を無視するのか、貴様！」

「シヤア少佐だって、戦場で手柄を立てて出世したんだ！」

居住区ブロックに潜入したジーン軍曹は手柄を上げる為に暴走する。

潜入任務という名目があり、情報収集に徹底すべき状況で行ったジーン軍曹の独断専行は決して許されるものではない。何よりも民間人が間近に居る状況での戦闘行為をデニム曹長は許容する事ができなかった。しかしジーン軍曹にも独断専行に走るだけ

の事情がある。これで決着が着くのであればとコロニーを地球に落とすにも関わらず、未だに戦争が続いている。もう疾うの昔に決着が着いているはずなのに連邦軍は粘り続けている。ジークジオンと何度、高らかに叫んでも延々と続く戦争に嫌気が差していた。これだけ辛い思いをしながら戦い続けてきたのに今更、負ける事なんて許容できるはずがない。開戦直後にあつた公国軍の勢いが徐々に削がれているのを肌身に感じているのも大きかつた。

此処で戦争を長引かせる要因になりかねない連邦軍の新兵器など彼には許容できるはずがなかつたのだ。

彼と同じ想いを、デニム曹長も少なからず抱えていた。

ジーン軍曹よりも幾分か歳を取つていたので、抑制できていただけに過ぎない。歳を重ねた分だけ、若者よりも少しだけ辛抱強かつた。

それだけの話であつた。

こうなつては致し方なし、とデニム曹長もまた連邦軍に攻撃を仕掛ける。

連邦軍に希望を与えてはいけないのだ。

まだ量産機が存在を知らない二人は、短絡的に新兵器の破壊を公国軍の勝利と結び付けた。

誤算だつたのは一点、此処には彼が居た。

「こいつ、動くぞー！」

後の歴史においても歴代最強のパイロットとして名が上がる伝説的な男が此処に居た。

当時はまだ15歳。彼は名をアムロ・レイと云った。

ガンダム試作機2号に乗り込んだ彼は、真つ暗な操縦席の中で、父親のパソコンから盗み見た情報を頼りに、手探りで操作を続ける。半ば、直感を頼りにボタンと押し、メイモンニターに光が灯る。その光源を頼りに次々とシステムを起動させていった。最後に操縦桿を握り締めた時、彼はガンダムの上半身を起こす。

ガンダム試作機2号には、試作機1号で蓄積された情報が入っている。

ユウ少尉は、戦闘に必要とされる情報を片っ端から詰め込んでいた。複製した教育型コンピュータの情報は、素人の拙い操縦を的確に補佐する。状況に応じた解析。ガンダム試作機2号は、敵意のある行動を取る相手をモニターの中心で捉えるように鍛えられていた。

アムロが咄嗟に使った頭部バルカンが、ボタンを押しただけで相手を捉える。

怯んだ相手にアムロが前進を指示すれば、それだけで相手との距離を詰めるようにガンダムは身体を動かした。頭部バルカンで牽制をしながらザクⅡの鼻っ柱を掴んで、そのまま押し倒す。余りの馬力の違いに「あれが連邦軍のモビルスーツの威力なのか」と

デニム曹長が戦慄した。頭部から露出した動力チューブをもぎ取られたジーン軍曹もまた敵の新兵器に怯えてしまった。

ザクⅡと敵の新型では戦闘力が違い過ぎる。

デニム曹長とジーン軍曹は、瞬時に撤退を決断した。デニム曹長は破損したジーン軍曹から先に逃がす。しかしガンダムは、デニム曹長のザクⅡを飛び越えて直接、ジーン軍曹のザクⅡを背後からビームサーベルで胴体を両断する。核動力炉が爆発し、コロニーに穴を空ける。

アムロが安易な攻撃でコロニーを傷付けた事を後悔する横で、デニム曹長もまた驚愕していた。

「推進力が違い過ぎる……」

デニム曹長は逃走を諦めた。背中を見せて、逃げてでも簡単に追いつかれる。相手のパイロットは自分を逃がすつもりがない事は、逃走するジーン軍曹から先に撃破した事からも分かる。

故にデニム曹長は決死の覚悟で連邦の新型機に突撃する。

逃走するにしても先ずは敵機に被害を与えてからだ。勝機はある、相手の操縦は拙い。戦闘慣れしていない事は明白だ。その一点に一縷の望みの託し、敵の新型機に攻撃を仕掛けた。



「ええい、よくもジーンを!!」

そしてデニム曹長にとつてジーン軍曹は可愛らしい部下でもあった。

上官に楯突く生意気な奴ではあったが、そんな時期は誰にでもあるものだ。特殊任務の部隊に選ばれただけあつて、モビルスーツの腕前には見込みもある。いずれは曹長で燻る自分よりも階級が高くなるとも思っていた。まだ若いからと徹底的に教育をして来なかつた自分にも非がある、最初に暴走した時に止められなかつた自責もあつた。

その想いを糧にデニム曹長は規格外を相手に攻撃を仕掛ける。

破れかぶれではない。腰に手を翳したままの姿勢から、あえての蹴りは素人では対処が難しいはずだ。

しかしアムロには通用しなかつた。無意識の内に相手の思考を読み取つた彼は、蹴りに惑わされず、ザクIIを爆発させない為にビームサーベルで操縦席だけを貫いた。

デニム曹長とジーン軍曹には、間違つた手を取る事も多かつた。だが、間違えばかりでもなかつた。実際、此処で連邦軍の新兵器を破壊する事は、連邦軍に少なからず打撃を与える事になる。此処で戦力を削ぎ落すことは、新型艦を鹵獲するのも容易になつたはずだ。

だが、彼は失敗した。失敗したが故に如何なる弁論も意味がない。

二人が生き残れなかつた要因は、ただ一点。

「……………うう……………」

此処にアムロ・レイが居た。



工事区画と偽る試験場から抜け出す道中、連邦軍の駐屯基地。

居住区側の出入り口でも戦闘が発生したという情報を、新型艦からの通信で知った。相手はザクⅡが2機。ガンダム試作機1号で居住区に急ぐ最中、共にガンダム試作機2号が撃破したという情報が追加で入る。途中でコロニーにも穴が開く被害が出たようだが、民間人を避難させられるだけの時間は持たせられるようだ。

ガンダム試作機2号のパイロットは、ケンプ中尉。彼は新型機のテストパイロットに選ばれているだけあって、優秀な軍人であった。流石だな、と素直に感心した俺は艦長代理を名乗るブライト少尉の指示を得て、民間人の避難が完了するまでの間、まだ輸送途中にある新型機に関連する予備パーツの搬入を進める。

間に合わない部品は、木っ端微塵に焼き払う予定だ。

『妙ですね』

機械音声、BBと名乗るAIが零す。

「何が?」

『2号機には、子供が乗っています』

「……どうしてわかる?」

『エスパーなので』

「今や、機械がエスパーを名乗る時代か」

ガンダム試作機2号は丁度、格納庫に収容されている所だった。

見た感じ2号機に損傷はないようだ。しかし、だからといって中のパイロットが無事である保証もなかった。激しい戦闘で負傷してしまった可能性もある。自分の知らない事情があるのだろうかと考えて、文句も言わず、最後まで残って後処理に精を出す。

BBというAIの事も気になっていた。

ガンダムを新型艦に格納した後、テム技術大尉に詳しい話を聞く必要がある。

詰め込めるだけの資材を積み込んだ後、ガンダムを格納庫に収容する。

BBに別れを告げて、操縦席から外に出る。格納庫が騒がしかった。ブライト少尉の指示に従って、艦橋まで足を運ぶと医療用のベッドで横になる艦長の姿があった。民間人の姿もある。まだパイロットスーツを着たままの俺は、ブライト少尉に視線を投げかけた。

彼は居心地の悪そうに今の状況を簡潔に教えてくれる。

「戦闘員は全員、搬入作業に出ています。ザクⅡの奇襲を受けて全滅。士官を乗せたトラックも途中でザクⅡの攻撃を受けて……亡くなりました。今のブリッジメンバーは、

補助員と民間人で構成されています」

『何故、そこで民間人が?』

「……民間人の手を借りなければ、まともに動かせませんですよ」

彼は責任から逃れるように艦長に目を泳がせる。

随分と状況が悪いようだ。今の状況では何を言っても変わらないと判断し、これ以上の言及は避ける。

ただ気になっていたことがあつたので、最後にそれだけを問い掛ける。

「ガンダム試作機2号には、誰が乗っているのです?」

『……民間人の子供です』

どうやらテストパイロットも全滅してしまったようだ。

### 3. ファーストコンタクト

ガンダム試作機1号の座り慣れた操縦席に腰を下ろす。

ハッチを閉じた直後、手元を照らす僅かな光源が点灯するまでの一瞬の暗闇と静寂が戦場の孤独を思い出させる。冷たい装甲板で覆った人一人分の箱に所狭しと詰め込まれた機材の数々、戦場で頼れるのは基本的に己だけだ。少なくとも周りの誰かに助けられる事を期待して、何度も生き残れる程、戦場はあまい場所ではない。

覚悟と共にタッチパネルに手を触れる。

それだけでシステムが立ち上がる音が鳴り、パネルにはNTロリ娘というゴシック体の文字がデカデカと表示された。

『おはようございます。お早い帰りですね、ユウ』

機械音声の声、メインモニターには外の景色が映し出される。

「出撃する事になりそうだ」と俺の呟きを受け取って『戦闘準備を開始します』と動力炉に火が入れられた。これまで自分が声に出し、指先で確認してきた事を自動で勝手にやってくれるのは楽だ。このAIに慣れ過ぎると他の機体に乗る時に苦労してしまいうさだ。

緊急出撃にも対応できるようにガンダムを発射口のカタパルトまで移動させる。

『新規武装を確認、ビームライフルが追加されています。操作説明を行いますか?』

「必要ない」

『分かりました。敵勢力の情報はありますか?』

「聞いた話によると敵艦は一機、コロニーの外に控えている。ムサイ型の改修機だ。コ

ロニーの中でザクを5機も破壊しているから残りは少ないと思う」

『相手にエースが居なければ、楽な仕事です』

AIも樂觀するのか、と悪態を零す。

客観的事実に基づいた結論です、とBが少し不貞腐れた声で返した。

少しの間を取った後、ですが、と機械音声が続ける。

『あくまでもエースが居なければ、の話です』

艦艇が動き出すのを肌身で感じ取った。

緊張感を保ったまま、艦艇がコロニーから出航するのを待ち続ける。

もう襲撃はあるものとして考えていた。

◆

改ムサイ級軽巡洋艦ファルメル、随分と寂しくなった格納庫に搭載された赤色のザク

IIに搭乗する。

薄暗い操縦席の中で各種、計器を確認する。操縦桿を強く握り締めて感触を確かめた。やはり自分は後方で指示を出しているよりも前線で部下を率いている方が性に合っている。黒い三連星のように血気盛んな性根をしている訳ではないが、艦橋に大人しく立っているよりも身体を動かしている方が気が楽だ。戦況を見守るよりも動かしたい、掻き乱したい。辛抱が足りず、策を弄したくなる自分が艦長の役目を担うには少々若過ぎる。

自分の苦手な役目は、自分よりも適役の人間に押し付けるに限る。

『コロニーのハッチが開きます』

フアルメルの艦長代理を務めるドレン中尉から通信が入る。

『……向こうも出して来ますかね？』

「ああ、たぶんな。それでなくては戦えんはずだ」

相手も戦闘になる事は分かっている。

戦えないなら降伏する。今の戦場でモビルスーツの護衛がない艦艇は無力だ。

逃げるようであれば、スラスターを破壊してやれば良かった。

『了解です。御武運を』

「中尉もな」

通信を切ると同時にヘルメットのバイザーを閉じる。

仮面の上からヘルメットを被るのは窮屈だった。少し前まではノーマルスーツも着ておらず、その理由を義妹に問われた時に「宇宙という名の戦場は、撃墜されたらそこで終わり。必ず帰還するのなら、私には無意味だ」と気取った言葉で返せば「そんな西暦の暴走族みたいな事を言っていないで、ちゃんと着てよ。もう良い歳なのに恥ずかしい」と蔑んだ目で見られてしまったので以後はノーマルスーツを着るように心がけている。

ノーマルスーツには、耐G機能もあるので戦闘中だと着ていた方が絶対に良かった。敵の新型艦が姿を現した瞬間に攻撃を仕掛ける手筈になっている。

協定によって戦闘艦はサイド7に手出しが出来ない。しかし先に協定を破ったのはサイド7で兵器開発を進めていた連邦軍の方だ。木馬が姿を見せた後、サイド7を盾にした動きを見せるも容赦せず、直進ミサイルで攻撃を仕掛けた。爆発に気を取られている内に私も愛機を発進させる。

星々の煌めく宇宙に赤い軌跡を画く、相手も爆発を潜り抜けるように角付きの新型機を出していた。

スレンダー曹長の報告によるとザクⅡとは比べ物にならない程の性能差があるようだ。ザクⅡはジオニック社の傑作機であるが、開戦当時から使われていた機体でもあった。西暦時代に起きた世界大戦の事を思えば、半年以上も使い続けた機体が時代遅れに



なってしまう事なんて十分に考えられる。

しかし、それでも、モビルスーツの実戦も経験した事もない素人に負けるつもりは毛頭ない。

「連邦のモビルスーツ、お手並み拝見と行こうか」

◆ ムサイ級軽巡洋艦から二発の大型ミサイルが放たれる。

まだ実戦経験がないブライト少尉は、攻撃を受けたという事実には動揺したが、艦長のパオロ中佐は、手加減を受けたと感じ取った。最初から本艦を墜とすつもりであれば、コロニーの搬入口から脱出する時にメガ粒子砲を撃ってきているはずなのだ。本艦が背にするサイド7のコロニーに対する政治的な配慮もあったのかも知れないが、それ以上に敵艦から新型艦のホワイトベースを鹵獲する意図が見えた。鹵獲するのであれば、航行に支障が出ない最低限の推進力は残しておきたいはずなのだ。

その事を艦長席に座るブライト少尉に伝えようとした時に「舐められているな」と彼は呟いた。

「ミライ代理、オペレーターの指示通りに回避運動を！ 砲塔員、弾幕を厚く張るんだ！

……やはり、素人では迎撃は難しいか。ユウ少尉、大型ミサイルを撃ち落とすことは可能か!？」

パオロ中佐よりも一步、遅れて相手の意図に気付いたブライト少尉は艦橋員に指示を出す。

まだぎこちないが艦長として最低限の体裁は取れている。確か彼の士官学校での成績は、座学が三位で戦術と戦略に関する事は次席であったか。初めての実戦だが、自分が思っていた以上に頭が回っている彼に元教官であるパオロ中佐は満点を付けてやりたかった。

一方でブライト少尉は脳内でバチツバチツと三次元チェスを打ち込んでいる。

幾度と打ち込んだ同級生との対戦が彼の思考を支えていた。実際に演習で部隊を率いた経験もあり、その時の相手は決まって同級生の彼女である。何度もコテンパンに打ち負かされた経験が却って、彼を開き直らせる。彼女は何時も味方には余裕のある笑みを浮かべて、相手には不敵な笑みを見せつけていた。何時でも冷静な姿がブライト少尉の指揮官としての理想像を象っている。

指示を出した後は部下の働きに身を委ねる。

自分がドタバタした所で何も変わらないのであれば、せめて周りの負担にならないように艦長席にどっかりと腰を据えた。演習の時にメアリーの奇策に浮足立ってしまった指揮官が狼狽える姿は、なんとも情けなくて頼りないものか。やせ我慢でも指揮官は部下に度胸があるとところを見せねばならなかった。

そのブライト少尉の姿を見て、パオロ中佐もまた口出しするのをやめる。

初めての实战で、虚勢であつても度量を見せようとする新入りに情けない姿を晒す訳にはいかなかった。

任せると決めたのであれば、任せる。

パオロ中佐は、覚悟を決めた。

艦長としての責任を手中に収めたまま、彼は自分の立ち位置を副官だと見定めた。

『やってみせます』

連邦軍の新型機がホワイトベースの前に出る。

大型ミサイルに接近し、頭部のバルカン砲を斉射した。二発の大型ミサイルの内一発を処理したが、もう一発は逃す。パオロ中佐は衝撃に備えて、目を伏せる。しかしブライト少尉は、最後までジツと画面を見つめていた。ガンダム試作機1号は撃ち漏らした大型ミサイルに向けて、ビームライフルを構える。そして放った、黄色いメガ粒子が大型ミサイルを捉えて爆破させた。

わあつと艦橋に歓声が上がる。ブライト少尉は胸を撫で下ろした。

「まだまだ、艦長代理。すぐ次が来るぞ」

パオロ中佐が長年の経験により、艦橋内の空気を引き締めた。

公国軍の戦闘教義の根幹には、必ずモビルスーツの運用が関わっている。

現にオペレーターが二機の敵影を捉えた。

「モビルスーツのようです！ でも、このスピード……一機は速いです！」

ルウム戦役で、たった一機だけでレビル艦隊に突撃したモビルスーツ乗りが居た。

彼は通常の約三倍の速度で突出し、無数の艦艇による弾幕の隙間を掻い潜り、バズーカ砲で艦艇の急所を的確に撃ち抜いた。五隻の戦艦が彼一人の為に撃破される。艦隊の隊列をこれでもかという程に掻き乱した後は速やかに撤退していった。まるで彗星の如く活躍に付いた渾名が赤い彗星。公国軍が誇る最高峰のエースパイロット、シャア・アズナブルその人である。

逃走を促そうとした。しかし、パオ口中佐が判断するよりも早くブライト少尉が指示を出す。

「早くホワイトベースを前に出すんだよ！」

「え……で、でも！」

「相手は新型艦が欲しいんだ！ 墜としはしないさっ！」

ブライト少尉は操縦手代理であるミライ・ヤシマの反発を切り捨て、ガンダムとの通信回線を開いた。

「ユウ少尉、相手はスペシャルのようだ。出来るだけ援護をするが砲手も素人だ、頼りにするな」

『了解』

「無傷で切り抜けられる相手ではない。本艦を盾にしても食らい付け！」

『それは……』

「宙域ではモビルスーツの相手はモビルスーツでしか出来ないんだ！ 貴官が撃墜されれば、我々は降伏するしかなくなる！ なあに最悪、ルナツーまで持たせれば良いんだよ!!」

スラスターだけは撃ち抜かれるなよ。という艦長代理の指示にパオ口中佐は力なく目を伏せる。

「ワイアット君……連邦軍もまだ捨てたものではなさそうだな」

暗闇の中で見た小生意気な後輩は、茶葉の入った缶を片手に匂いを嗅いで笑みを深める。

ええ、知っていましたとも。と空想の中でも、いけ好かない態度の彼に苦笑した。

◆ 大型ミサイルを撃ち抜いた黄色の閃光を見た時、操縦桿を握る力が強くなる。

ビームサーベルの報告は受けていた。しかしビームライフルまで実用化しているのは想定出来ていた訳ではない。可能性としては考えていた。公国軍もまだ開発途中にある技術を目の当たりにすると、その衝撃は自分の想像を超えていた。一度は逃した大

型ミサイルを後追いで悠々と撃ち抜ける弾速、命中精度。全てにおいて、脅威と呼ぶ他になかった。

艦艇の撃墜を目的にしないのであれば、と持ち出したマシンガンの斉射で牽制する。

しかし相手の装甲は戦艦並でマシンガンの弾を弾き返した。効果がない訳ではない、衝撃は与えている。相手が怯んでいる隙に胴体に蹴りを叩き込んでやった。出来るだけ機体を傷付けず、操縦席に乗るパイロットだけを狙った攻撃だ。しかし操縦席を守る装甲が歪んだ気配すらもなかった。

相手がビームライフルを構える。

咄嗟に回避行動を取った。メガ粒子の閃光は私のすぐ横を通り抜け、程なく背後からモビルスーツが爆発する衝撃が伝わった。モノアイを動かして背後を確認する。自身の僚機として出撃していたスレンダー軍曹のザクⅡが撃破されてしまったようだ。それも一撃で、あっさりと撃墜されてしまった。

連邦軍の新型機の性能と威力に齒噛みする。

「あのモビルスーツは戦艦の主砲並のビーム砲を持っているのか!」

だが、当たらなければどうという事はない。そのように己を鼓舞して相手から距離を取る。

あのパイロット、モビルスーツの操縦には不慣れだが素人ではない。ならば相手の土

俵で戦うのは得策ではなかった。ビームライフルの砲口が自分を狙っているのが分かる。赤い彗星と呼ばれたのは、ただ単に機体の性能の事を云うのではない。宇宙空間という自身の出している速度の分かりにくい環境で急速接近する小隕石やスペースデブリに畏れず、アクセルを踏み込む度胸と全てを回避してのける技術がなせる技なのだ。故に通常の三倍、全身にGを感じながら一般兵が出せる限界速度を超越する。

新型機から放たれた閃光を不規則な動きで回避し、弾数を消費させた。元が戦艦のサイズで漸く搭載できる代物なのだ。無限に撃ち続けられるものでもあるまい。最初は二度、三度と連射していたビームライフルを撃つ数が、途中から極端に少なくなったのを感じ取った。

ならば、攻撃を仕掛けるのは今しかあるまい。

片手でサブマシンガンで弾幕を張りながら接近、もう片方の手で相手から死角になるようにヒートホークを握り締める。

「ソロモンでは黒い三連星に可愛がって貰っていたのだよっ!!」  
ビームライフルの砲口が自身を捉えた。

瞬間、身を振って躲す。閃光は胴体の装甲を掠めて溶かす。

必要最低限の回避行動を以て、ヒートホークを振り抜く。

相手の死角からの一撃だ。

勝った、と笑みを深めた。

「——ッ!!」

瞬間、脳裏に直感が迸った。角付きの新型機が自分の方を見ないまま、逆手に持ったビームサーベルでヒートホークの熱刃を受け止める。それを見て、咄嗟に相手を蹴って距離を取った。

「……カナリア、か?」

有り得もしない直感に、いや、と首を横に振る。

「カナリアにしても、やり方が素直過ぎる。搭乗者は誰だ?」

胸が騒めく直感に気付けば、通信機に手が伸びていた。

正気の沙汰ではない、と苦笑しつつもオープンチャンネルで相手に呼び掛ける。

ヒートホークを両手に構えたまま、臨戦態勢を取りつつだ。

『なんだ?』

通信機から男の声が聞こえた。

「……男か?」

『男だったら、なんなんだ?』

「いや、なんでもない」

首を横に振り、気を持ちなおして告げる。



「私はジオン公国軍宇宙攻撃軍所属のシヤア・アズナブル少佐だ」

『俺は、ユウ・カジマ少尉だ。交渉なら上をやって欲しいのだがな』

「いや、これは私的な通信だ。気になる事があつてだな」

『気になる事?』

自分でも何をやっているのだと思いつながらも疑問を口にする。

「貴官の機体には、少女が乗っているのではないか?」

『少女? ……乗っていないが?』

「……嘘ではないな?」

『少女を乗せる必要が何処にある。あんたも俺が母艦から出撃したのを見ているはずだ』

「そうか、そうだな。戦闘の合間に通信をしてすまない」

仕切り直す。と通信を切断し、私は戦線を離脱する。

角突ききの新型機が追いかけて来たが、ドレン中尉に指示を出してファルメルのメガ粒子砲で追い払った。

敵機が母艦に戻ったのを確認し、自身もファルメルに帰投する。

『シヤア少佐、機体に不具合でもありましたか?』

ドレン中尉の疑問に私はヘルメットを外しながら答える。

「マシンガンの弾では、アレの装甲は貫けん。次はバズーカを使う」  
完敗だな。と最後にもう一度だけ大きく息を零す。

新型艦の鹵獲には義妹の助力が必要だ。

義妹に助けを求めるのは、兄として少しだけ気が重かった。

## 4. 艦長代理

個室のベッドで枕に顔を埋めている。

ガンダムを格納庫に搬入した後、個室に押し込まれてしまった。部屋の鍵は開いているので監禁されている訳ではなかったのだけど、今はもう色々な事が同時に起こり過ぎて何もする気が起きなかった。個室に連れていかれる時、僕は父を呼んで欲しいと言った。技術士官である父の名を知っている人は居たけども、誰も父の姿を見ていなかった。ようで近場の人と互いの顔を見合わせるだけだった。

周りの空気が重くなるのを感じ取り、父の生存に希望を持たない事を察する。

それで何もやる気が起きなくなった僕は、図体の大きな男に引きずられるように個室まで連れて来られた。大人しくしているんだ、と言われたけども、その後、僕には誰も会いに来なかった。戦闘が起きたのを知ったのは、大きな爆発が部屋を揺らした時だ。外が騒がしくなったけど、僕はベッドの上で突っ伏したままだった。

死体でもあればまだ悲しむ事も出来たかも知れない。だけど、父の死体は見つからなかった。おかげで肉親を失った実感が湧かないままにいる。自分の心との向き合い方も分からなかった。

そうして僕は今の今まで不貞腐れるようにベッドで横になっていた。

しかし、何もしていなくても空腹にはなる。

ぐうっと腹の虫が鳴いたので、ちよいと摘まめるものが欲しくて部屋を出る。

艦内を歩き回っている内に格納庫に出てしまった。

格納庫にあるモビルスーツの数が想像していたよりも多かった。

ガンダムタイプは二機だけのようだ。僕が乗ったガンダムとは別に全身が黄色に塗装されたガンダムがある。装甲にはグリッド線やターゲットマークが残っている、まるで試作機というよりも試験機のようなだ。

その白と黄の二機のガンダムを前に軍服を着た二人の若い男が話し合っていた。

なんとなしに近付いてみる。

「うゝむ……確かに俺はパイロットだが、モビルスーツではなくて戦闘機の方だぞ？」

「そんなの僕も一緒ですよ。ガンキャノンのシミュレーターを何度か触った事がある程度ですよ」

「俺はガンキャノンすらも扱えねえよ。重機感覚でなんとかガンタンクを動かせるくらいだ」

二人はガンダムに乗りたいうようだ。

しかし難航もしているようで共に頭を抱えてしまっていた。

これ見よがしに二人の背中を通り過ぎる。

片や僕を部屋に押し込んだ時の軍人だ。

お腹が空いたなあ、と素知らぬ顔で格納庫を後にした。



パオロ中佐が意識を失った。今は医務室に運び込まれており、安静が必要だと言われている。

つまりは今、本艦の全責任は艦長代理である俺の肩に押し掛かっていた。艦長席に腰を下ろし、周囲をチラリと見る。民間人と補助員だけの艦橋、相談できる相手は居なかった。自分の判断だけで与えられた難局を乗り越えなくてはならない。

俺は少し考え込んだ後で「状況を整理する」と周囲に問い掛ける。

「先ず敵艦は特別仕様のムサイ級軽巡洋艦……まあ連装メガ粒子砲とミサイルを詰め込んだ戦闘艦が一隻。ユウ少尉から得た情報から相手の大将がシャア・アズナブル少佐という所までは分かっている」

ルウム戦役で赤い彗星と呼ばれた男だ、と付け加える。

「赤い彗星って？」と民間人の一人、ミライが聞き返したので「ルウム戦役で連邦軍をコテンパンにした憎き英雄だよ」と簡単な概要だけ伝えておいた。ムサイ級のモビルスーツの搭載数は6機、詰め込んでも7機が限度だ。サイド7での戦闘で6機のザクの撃破

を確認しているの、残りはシャア自身が乗る赤色のザクだけだ。

此処で俺は周りに話を振る。

「大きな損失を被った時、相手はどう出ると考える?」

艦橋員の皆が一度、閉口した後にはオペレーターの二人が発言する。

「撤退か、戦力補充の二択では?」

「別部隊に引き継ぎも考えられるな」

「なるほどな」

と俺は二人の意見に頷き返して「多少の猶予はある訳だ」と皆に言い聞かせた。

「我々の任務は、この新型艦と新型機をジャブローまで輸送する事だが大気圏を突破する時に燃料を使い切っている。本来はサイド7で補給を済ませる予定だったのだが、敵の襲撃を受けて、新型機の搬入が精一杯で補給物資を僅かしか詰め込めなかった」

地球に降りたいのはやまやまだが、と前振った上で話を続ける。

「先にルナツーに向かうのは決定事項だ。補給は受けなければ、地球に降りる事も出来ない」

「しかし」とオペレーターの一人が口を挟もうとした。

「分かっている。戦力補充を済ませた赤い彗星を相手に二度も切り抜けられる幸運を私も期待していない」

交戦後、自分達の行く先を確認したムサイ級は姿を晦ました。

すぐに逃げ出さなかつた辺り、あの時点ではまだ新型艦を諦めた気配はない。

たぶんまた攻撃を仕掛けてくるはずだ。

命の掛かつた戦場における希望的観測は死を招く、同級生との演習が脳裏に過ぎる。勝つた、と思つた直後に戦局を引つ繰り返されることが何度もあつた。

戦場では常に身構えているくらいが丁度良かつた。

「相手の補給作業中に奇襲を仕掛けるのが後々の事を考えれば、一番良さそうだが……」  
ルナツーに逃げ込んだとしても万全の態勢を整えたシヤアとは戦いたくない。

シヤアが撤退した後、別の部隊が来るにしてもシヤアがモビルスーツを六機も失つた相手だ。次に来る部隊も厄介な相手になる事は目に見えているし、単純に戦力を増強してくる可能性も高かつた。

いずれにせよ、時間は掛けられない。

「わざわざ自分から戦闘を仕掛けるなんて……先に私達を降ろしてからでも良いのでは？」

操縦桿を握るミライが口を挟んだ。

それを聞いた連邦軍に所属する人間が顔を俯ける。今、俺の考えは軍人の理屈だ。戦争は軍人同士で勝手にやってくれて民間人の彼女達が考えるのも理解できない話で

はなかつた。

しかし、シヤアの対処に関しては彼女達も無関係では要られない。

「……ルナツーで君達を保護する事は、恐らく不可能だ」

「何故？」

「宙域の大半を公国軍の支配下に置かれた今、ルナツーの物資は地球に依存している」

昨日まで地球とサイド7を繋ぐ定期船が出ていた。

これはサイド7を維持する為の物資の輸送という事になっている。実際には、ルナツーに物資を届ける為の中間拠点。民生用と偽装した補給艦がサイド7まで輸送した後で、改めてサイド7からルナツーまで物資を送り届けている。今でも地球から来る物資を頼りにしている状況だ。サイド7を失った今、更に物資が不足していく事になる。

今のルナツーに避難民を受け入れてくれるキャパシティがあるとは思えなかつた。

「軍は勝手なのね」

ミライの拗ねるような物言いに小さく息を零す。

「規律がない軍は暴徒やテロと一緒だよ」

「民間人を守るのが軍の仕事ではなくって？」

「その通りだ。だから私達も今、こうやって頭を悩ましている」

「降伏してしまうのは？」



「コロナーを落とした連中だぞ。次はサイド7が落とされなきゃ良いな」  
「それは南極条約で……」

「条約がなければ、毒ガスやコロナー落としを許容する連中だがな」  
ちよつとした口論を交えてミライが押し黙る。

実はもう既にジャブロー基地では、量産型モビルスーツの量産が進められていた。しかし今は先行生産型と呼ばれるジムはまだ未完成だ。ガンダムは教育型コンピュータに溜め込んだ情報をジャブローまで送り届けて、ジムにフィードバックする事でV作戦における量産型モビルスーツの開発は達成となる。

逆に云うとジムは九割方、完成していると言い換えても良い。

ガンダムは残り1割を埋める為のものである。究極的な話、ガンダムがなくても困るだけだ。それ以上にモビルスーツ用携行ビーム兵器の技術が公国軍に流出する方が問題だった。新型機の情報が公国軍の手に渡る前に、新型艦諸共爆破する必要がある。何故ならホワイトベースは、V作戦に関する機密の宝庫でもある為だ。

無事に地球まで降りてからでないと民間人の処遇も決められないのが現実なのだ。

（連邦軍から見た我々は無事に戻れば上々、撃墜されても及第点。降伏して鹵獲される事を最も恐れている）

世知辛いね、と俺は周りには気付かれない程度に溜息を零す。

「ジオンの艦です！ 大きいです！」

話が行き詰った頃合いでオペレーターが敵影を察知する。

早いな、と思わず零す。サイズと形からパプア級補給艦と断定。開戦前まではミサイル艦として運用されていた本艦だが、ミノフスキー粒子頒布下におけるミサイル艦の価値暴落に伴って補給艦に改修された艦艇だ。元々が大量にミサイルを積み込む設計になっていた為、戦闘艦を転用した補給艦とは思えない積載能力を有していた。あれならモビルスーツの輸送も簡単だ。

つまり、相手は引き続きシヤアが務めるという事だ。

戦力を万全に整えた彼と戦いたくはなかった。

「奇襲を仕掛ける」

俺の呟くような決断に「本気で？」とミライが問い返す。

「本気だとも、今なら敵はシヤアの一機だけだが後になるとザクが三機以上になる。私達が使えるまともな戦力がガンダム一機しかない以上、敵は少数の内に叩いておくに限る。最悪、ムサイ級に傷を付けるだけでも良いんだ」

公国軍が立て直す前にルナツーで素早く補給をし、地球に降りる。

恐らく、これが生存する確率が最も高い選択だ。

格上相手に受け身になると負ける。

それは士官学校時代、嫌になるほど痛感させられてきた。

「相手の補給中に奇襲を仕掛ける！ ユウ少尉にガンダムをスタンバらせるんだ！」

見えてる未来を辿る必要はない。

生き残る為には、何処かで勇気の一步を踏み出さなくてはならないのだ。

それが今、この時であると信じて指示を出す。



また艦内が騒がしくなってきた。

適当な場所に置いてあった栄養補給液を盗み取り、口に含みながら周囲を観察する。軍服を着た人間の話に耳を澄ませているとまた戦闘が始まるとの事だ。今度は自分達の方から仕掛けるのだとかなんだとか、避けられる戦闘は避けた方が良いと思うのは僕が軍事の素人だからか。少なくとも民間人を乗せている艦艇のやる事ではないと思う。まあ、そんな事を愚痴った所で何も変わりはない。

小窓があつた、外を見る。何処までも宇宙が広がっていた。

地球で暮らしていた頃は、よく夜空を見上げては星に手を伸ばしていた。

視界一杯に映る星々の中に人類が作ったコロニー群がある。と初めて聞いた時は実感が湧かなかつた。地球で暮らす五倍もの人間が宇宙で生活を営んでいる。本当に幼い時、西暦以前の絵本を手にとつた事があつた。月には兎がいるという話だ。物心が付

いた時には、月に人類が生活圏を築いている事は知っていた。それでも夢があると思つた。僕は男だったので、そんなメルヘンな考え方は恥ずかしいって、すぐ思い返す事になつたけど。宇宙に無限の可能性を感じる気持ちは、なんとなく理解できた。

未知は恐怖ではなくて、可能性なのだ。可能性は、そのまま希望でもある。

ノーマルスーツを着た軍人が増えつつある中で、誰も僕の事を気に留める人は居なかつた。

余裕がないと言い換える事も出来る。艦内の空気がピリピリとしてきた。

僕も個室に戻つた方が良いのかも知れない。

そんな事を考え始めた頃、小窓から離れようとした時に後ろ髪を引かれる思いを抱いた。

振り返る。小窓の外、目を凝らしても何かが見える訳でもない。

「……なんだ、この胸の騒めきは……」

嫌な予感がする、星々の煌めく暗闇の遙か遠くから何かが迫りつつある。

そして、ふと格納庫での若い軍人たちの会話を思い出した。

「もしかすると今、この艦には予備のパイロットが居ないのか？」

パイロットが居るのであれば、最優先でガンダムに配備されるはずだ。

しかし、二人のパイロットはガンダムに乗る事を諦めていた。まるで技量が足りてい

れば、搭乗出来る事が当たり前のように話していた。どっちが乗るかで押し付け合っている風でもある。つまり、それは、ガンダムの正規パイロットが今、居ないという事ではないか？ いや、一人居る。黄色い方のガンダムに乗っていたパイロットだ。

だが彼は今回の作戦で出撃する事になるはずだ。

「……このままだと不味いんじゃないか？」

この予感、無視する事も出来た。

だけど、拭い切れない不安。確信にも似た直感、そして死の恐怖。

この新型艦には、父親は居ないかも知れない。

だけど、フラウ・ボウが生きているはずだ。

別に好きじゃないけどカイやハヤトも乗っている。

最早、戦争は僕とは無関係ではなかった。

「どうせ、戦闘が起きるのなら何処に居ても一緒なんだ」

杞憂であれば、それで良い。

僕は、いざという時にすぐガンダムに乗れる場所で身を潜める事にした。

ガンダムに乗れるのは僕だけなんだ。

「僕が一番ガンダムを上手く使えるんだ……！」

傲慢とも取れる責任感が、僕に一步を踏み出させる。

無根拠な直感頼りの推測、ならば無鉄砲なくらいが丁度良い。

予備のパイロットが居るのであれば、

それはそれで僕が身を引けば良いだけの話だ。

杞憂に済めば、それが一番なのだ。

## 5. 戦果報告

ムサイ級というのは、モビルスーツの開発に合わせて再設計された軽巡洋艦だ。

軽巡洋艦としての武装は勿論、モビルスーツの運用を前提としている為に最大四機のモビルスーツを搭載可能としている。艦首下部に付属するコムサイも含めれば、計六機のモビルスーツを搭載可能となり、宇宙母艦としての役割も担っている。

軽巡洋艦に小型輸送艦コムサイをくっ付けた歪な設計には勿論、のつぴきらない事情がある。

ムサイ級は最初、純粋な軽巡洋艦として設計を開始した艦艇である。開発当時はまだ公国軍の上層部もモビルスーツを主力にする事を考えておらず、とりあえず戦力を増強する為に新型艦の開発に乗り出した。開発を担当したMIP社もモビルスーツの情報なんて入って来ないものなので公国軍から提出された要求仕様によって、ムサイ級の開発を進める。

そして、設定された納期までにムサイ級の開発と設計が完了する。

さあ造船だ！ と準備を進めた段階で公国軍の主力がモビルスーツになる事が決定し、ムサイ級軽巡洋艦にモビルスーツを最低六機は搭載できるように再設計しろと御上

からのお達しが届いたのである。

この急な仕様変更によりMIP社は激怒した。

しかし時勢を読めば、今後の戦争ではモビルスーツが戦場の主役になる事は火を見るよりも明らかである。それはそのままモビルスーツを搭載できない艦艇の受注が激減する事を意味していた。故にMIP社の上層部は涙を飲んで現場に仕様変更を要求する。そして涙を流したのは勿論、現場の人間であった。徹底したスケジュール管理で納期までにムサイ級を完成させた技術者は血涙を流す思いで「なんだよ、モビルスーツを搭載した軽巡洋艦って、なんだよ。それはもう宇宙空母なんよ」という怨嗟の声と共にムサイ級をモビルスーツ搭載艦として再設計をする。実際、血尿は出た。事のついでに設計の変更により、既に確定していた部品の依頼と受注を担当していた営業の人間はトイレで吐いた。生産ラインまで整えていた工場長の頭は薄くなり、急な生産ラインの変更で休日を返上した現場の人間は妻子に白い目を向けられる事になる。中には可愛い娘から「嘔吐き！」と罵られて心を抉られる者もいた。

外付けのコムサイに大気圏突入能力が付いているのは、この歪な設計が許せなかった技術者が意地でコムサイを搭載する理由を後付けにした怪我の巧妙に過ぎない。基礎技術にはHLV大気圏突入および離脱能力を有する運搬用カプセル。のものが流用されている。



そして、この技術は後にモビルアーマーや水陸両用モビルスーツの開発にも活かされる事になる。

急な仕様変更は誰も幸せにしない。

多くの人間の血と涙と吐瀉物の上にムサイ級軽巡洋艦は完成している。

それも今は昔、宇宙世紀0075年の話。4年前の話だ。

改ムサイ級軽巡洋艦ファルメルは、元々ドブルが自分の座乗艦にする為に新造した艦艇になる。

その為、ファルメルには旗艦型軽巡洋艦とも呼べる能力を持っている。パツと見て特徴的なのは艦橋だ。通常のムサイ級が箱型をしているのに対して、ファルメルは兜を想起させる形になっていた。これは味方に旗艦だと分かりやすくする為でもある。旗艦としての能力を十二分に満たす為、ムサイ級を基に全面的な再設計がされており、特に情報関連で大きく強化が施されていた。従来型から新たに追加された高性能なレドームとブレード・アンテナが、その象徴と云える。

そこから更にシャアに与える特別任務に合わせた改修が施されている。

まず、追跡能力の向上の為に推進力を増強。任務の都合上、艦隊戦よりもモビルスーツ戦を行う機会の方が多いと考えた結果、弾薬庫を削ってモビルスーツの搭載数を増やす改装が為されている。その結果、通常のムサイ級の搭載数が最大6機なのに対し、

ファルメルは計8機のモビルスーツが搭載可能となっていた。

しかし、この設計が今は仇となっている。

「弾が尽きたか」

私が呟くと配下のドレン中尉が頭を搔いて答える。

「全くない。という訳ではありませんが、一戦するには物足りないでしょうな」

「援軍も呼んであるが、万全の態勢で挑みたいな」

新型艦には、あの化け物のような性能を持つ新型機が二機も存在している。

確認できるだけで二機なので、もしかすると三機目や四機目が搭載してあるかも知れなかった。まだ戦力を測り切れていない相手に義妹だけで挑ませるのは心許ない。義妹と義妹の部隊を信頼していない訳ではないが、単純に従来機と連邦の新型機とは、性能に天と地ほどの差があるのだ。

そして新型機は破壊しても意味がない。

機体を破壊しても設計図が何処かに残っているはずなのだ。自分に求められているのは今、あの機体の情報を少しでも持ち帰る事であった。鹵獲を考慮に入れるとなれば、万難を排した戦力が必要になる。

身の安全、仲間の安全、そして義妹の為ならば自尊心など邪魔なだけだ。

「戦力の補充も必要だな」

「それが妥当でしょうな」

領くドレン中尉に私は直接の上官であるドズル中將との通信を開かせる。

「レーザー通信回線、開きました！」

通信手の言葉を聞いた私は、気が重くなるのを実感しながらカメラの前で敬礼する。

戦闘後で、まだミノフスキー粒子が濃く残る宙域、映し出された映像には若干のノイズが生じていた。

戦場では、少し離れただけで電波を用いた通信機が使えなくなる。

『連絡が遅れたな、どうした？』

２メートルを超える巨体、ジオン公国の誰よりも大きな男は単刀直入に問い掛ける。

彼はドズル・ザビ。公国軍では最も大きな軍事力を持つ宇宙攻撃軍の司令官で階級は中将、ジオン公国を事実支配するザビ家の次男である。

私は改めて佇まいを直し、作戦の仔細を報告する。

先ず地球連邦軍が秘密裏に遂行するV作戦の全貌を捉えた事から始まり、サイド7の工事区がモビルスーツ開発の為の秘密工場だった事を伝えた。既に新型機の開発は終えており、事前に報告していた船影は、補給艦を装った強襲揚陸艦であった事を告げる。

大事なのは新型機の性能だ。

マシンガンを弾く装甲に加えて、ザクII以上のパワーを持った連邦軍の新型機。運動

性もザクⅡを優に超えており、機動力特化のツダにも匹敵する性能だ。

連邦のモビルスーツは化け物か、と言いたくもなる。

実際、素人ではないザクⅡが六機も落とされている。

言い訳にしかならないが、少なくとも新型機はザクⅡとは比較にならない性能である。

『……ザクを六機もか？ 俺は冗談が聞きたかった訳ではないんだがな』

「そう言いたくなる気持ちも分かりますが事実です。恐らく従来使われてきた材料とは違うものが装甲に使われているものと推測します」

ううむ、ドズル中将が唸り声を零す。

『出来れば、装甲だけでも回収したいな。サイド7には残っていないのか？』

「連邦も、そのような愚は犯さないでしょう。脱出の際に破棄されてしまった、と考えるのが妥当です」

『……ふむその通りだ。ワイアットやゴップも関わっているだろうしな』

レビル一人でも厄介だというのに、と苦虫を噛み潰すドズルを無視して話を続ける。

「更に戦艦の主砲並の威力を持つモビルスーツ用のビーム兵器も確認しています」

『それほどか、連邦のモビルスーツとは』

ジオン公国では、まだビーム兵器の小型化に成功していない。

M I P社がビーム兵器を搭載した突撃艇というコンセプトでM I P—X1を開発した事もあるが、あれは小型化した戦艦といった代物であった。現在もモビルスーツが行けるビーム兵器の開発を進めている。しかしまだ開発の糸口を掴んだ段階にあり、携行武器としての開発には手も付けていない状況であった。

ドズル中将は腕を組んで、考え込んだ。

「鹵獲をする必要があると考えます」

私は、ドズル中将に進言する。

「最上で新型艦。出来れば新型機を、そうでなくともビーム兵器と装甲の破片は必要です」

ドズル中将が敬礼する私を睨み付けた。

暫しの沈黙の後、よし、とドズル中将は自分の膝を叩いた。

『欲しいのは補給だな？』

「はっ！ 補給物資の他にザク三機、それと火力の高い装備を届けさせてください」

『残念だがザクを三機も出せる在庫はない』

「しかし……」

『まあ待て、話は最後まで聞くものだ』

私が口を挟む前にドズル中将が手で制する。

ドズル中將もビーム兵器の技術の重要性は理解している。だが長引く戦争に公国軍の懐事情は寂しくなる一方であった。公国軍の主力はモビルスーツであり、その汎用性は通常兵器を遥かに凌駕する。その為、公国軍では安価で量産できる通常兵器の価値が低く見積もられていた。実際問題、地球上における通常兵器を開発する技術が足りていない公国軍では、連邦軍と通常兵器同士で戦わせた時に惨敗してしまうのだ。故にジオン公国はモビルスーツの量産を最優先で続ける他になく、その分だけ懐が寂しくなる悪循環に陥っていた。

そして、その状況でモビルスーツの性能でも連邦軍に上回られてしまえば、公国軍から勝算が失われる事に直結する。

故にドズル中將も此度の件を重く見ているのは間違いない。

彼は、こういう所で判断を間違えない人だ。

『ザク一機にツダを二機、それが限界だ』

「……ツダ、ですか」

『不服そうだな』

「いえ」

『まあ、気持ちには分からんでもないがな』

ドズル中將が小さく息を零す。

ツダが余っている理由、それは偏に扱えるパイロットが少ない為だ。

経験が少ないパイロットでは、実戦で直ぐに壊す。そして熟練のパイロットはザクIIを好む傾向にある。熟練のパイロットがツダを好まないのは、機体の出力を上げ過ぎると簡単に壊れてしまう為である。……これはザクIIよりもツダの方が機体強度が弱いという話ではない。むしろザクIIよりもツダの方が強度自体は高かった。しかしツダは相手の攻撃を躲す時に、急激に出力を上げると簡単に壊れてしまうのだ。

パイロットの間では、これを「ツダる」と呼んでいる。

そのせいでパイロットの間では、ツダは壊れやすい機体と認識されてしまっていた。

ツダは悪い機体ではない。むしろ優秀なのだ。それは私も認めている。

ザクとツダの大きな違いは、ザクは機体が壊れる前に核融合炉が壊れるのに対して、ツダは土星エンジンが壊れる前に機体が壊れてしまう事にある。それだけの話なのだ。戦闘中に興奮したパイロットが無茶な操縦をするせいで壊れてしまっているだけなのだ。

素人がツダに乗っても壊さないようにするには、土星エンジンの出力を下げれば良い。

だがしかし出力を下げたツダなんて、それはもうただの高価なザクである。いや、劣化ザクだ。信頼性に特化したザクIIと比較して、速度を出す事に特化した設計で速度を

出せない細工をした機体とか存在する価値すらない。

ツダの整備性も決して悪くはない。

しかしパイロットが直ぐ壊す機体なので、現場の整備士からの評判も悪かった。

ザクでも事故は起こるが、その大半が中破か大破である。パーツを丸ごと取り換えるか、現場の整備士では手が付けられない状態になるのであまり気にされなかった。「直せるなら直さなきゃならん」だから、壊す時はしつかり壊せ」これが整備士の口には出せない本心である、口に出すと経理がぶち切れる。また自分のように腕があるパイロットでも、一機だけツダにするよりも全部ザクで統一した方が補給や管理が楽なので部下に合わせてザクを希望する者が多いのだ。実際、ザクの方が使い勝手が良いのだ。ザクは作業用機械としても使えるが、ツダは細々とした作業には向かない戦闘特化の機体でもあった。

そういうった諸々の事情もあり、艦長も出来る限り艦載機はザクで統一したがる傾向にある。

以上の理由により、現場ではツダよりもザクの方が圧倒的に支持されている。

この件にツイマツト社は遺憾の意を示すも、現場の人間は誰も取り合ってはくれなかった。腕のあるパイロットと設計と開発に携わる技術者だけがツダを認めており、能力の高い人間ほどツダを評価するという不可思議な現象が起きている。



マ大佐もツダを認めている事から「芸術品」と揶揄される事すらある。

「……我が隊には、ツダを扱えるパイロットが居りません」

最後の抵抗に口を開くも、大丈夫だ。とドズル中將は笑顔で返した。

『丁度、慣熟訓練を終えた者が二人いる』

「新兵ですか」

『贅沢を言うな。ベテランは皆、前線に出ておるわ』

それに優秀だ。と彼が付け加える。

『あと新型のコムサイも送る』

「新型？」

『モビルスーツを4機も搭載可能にした大型のコムサイだが、評判が悪くてな。くれてやる』

「在庫処分ですか？」

『費用対効果が釣り合っていない、という話だ』

艦首が重たくなり過ぎる欠点もあるが、モビルスーツ戦を主体にするなら問題ないと押し付けられる。

『鹵獲したモビルスーツを輸送するスペースも必要だろうしな』

「はっ！ 期待に添えられるように奮励努力致します！」

『良き報告を待っている』

通信を切るドズル中將を私は敬礼で見送った。

程なくして補給部隊を名乗るガテム大尉と連絡を取り、合流地点を決める。

補給中に奇襲を受ける事だけが怖い。

それだけの度胸が敵の艦長にあるかは賭けだった。

## 6. 特急便ガテム

改ザンジバル級機動巡洋艦リリー・マルレーン。

公国軍が誇る精鋭部隊、海兵隊を有する艦艇がサイド7の近場にある隕石群で潜伏する。

V作戦の全容がルナターの近辺にあるという情報を掴んだ彼女達は、サイド7以外から情報を得る為に息を潜めて諜報活動に勤しんでいた。普段は必要最低限の出力に留めている動力炉だが、今は出力を高めている。数週間ぶりに吹かしたスラストに当部隊の技師達が各種の点検に忙しなく動き出している。

その状況でリリー・マルレーンの側部からカタパルトが出現する。片手と片脚だけのレール、ハッチの中から黄金色に塗装されたツダが姿を現す。まずは左足をレールにセットし、取っ手を左手で握り締める。エースパイロットにパーソナルカラーが認められた公国軍の中でも一際、主張が激しい機体の操縦席に座っているのは見た目が幼い少女であった。

少女は久し振りの出撃に何度も操縦桿を握り締め直している。

『ゼロ少佐、出撃の準備が整いました』

通信用モニターに眼鏡を掛けた少女が映し出される。

彼女は真剣な顔付きでパイロットの幼子を見つめていた。

ゼロ少佐、と呼ばれた少女は通信用カメラに親指を立てる。

「何時もありがとね、ミア。貴女のおかげで今日の私も絶好調だ！」

バイザー越しに満面の笑顔を浮かべる少女にミアは、気恥ずかしそうに笑みを浮かべる。

薄暗い操縦席、専用に誂えた椅子。彼女のお尻の形にフィットする特注品のクツションで座高を高くしてあり、ペダルの位置も彼女の体躯に合わせて高めに調整されていた。操縦桿の位置も、スイッチの配置も彼女が扱いやすいように工夫が為されている。ツダ本体もまた彼女専用のセッティングが施されていた。

海兵隊の上官でもある彼女の出撃に、艦橋員も硝子越しに手を振る。

『やっぱり一機だけでも随伴させた方が良いじゃないかい？』

通信機から女性の渋い声が聞こえる。

モニター映ったのは190センチメートルを超える体躯の女性、彼女の名前はシーマ・ガラハウ大尉。本艦の艦長であり、ゼロ少佐の手足として動く海兵隊の隊長でもある。

シーマ大尉の提案にゼロ少佐は首を横に振った。

「いいから援軍要請が入るのって相当でしょ」

『だから万難を排する意味でも随伴機は必要じゃないか』

「それじゃあ間に合わないかも知れないからね」

足手纏いになるから要らない、と言外に伝える少女にシーマは肩を竦める。

シーマ自身が付き添う事も提案したが「流石に艦長まで離れるのは不味いでしょ」と断られている。ゼロ少佐と呼ばれた少女の腕は信頼している。しかし戦場では万が一がある。シーマ大尉の不安を余所に「早く行かなきゃ」とゼロ少佐が出撃を急かした。

見守る事しかできないシーマ大尉は深く息を零す。

『ちゃんと帰ってくるんだよ。あんたが死ねば、私達も居場所がなくなるんだ』

「もつと素直になっても良いんだよ？ 私の事が心配だつて」

『五月蠅いよ。さっさと赤い坊やを助けてやりな』

「うん、行ってくる」

ありがと、と笑う少女にシーマ大尉はカメラから顔を背ける。

俯いたシーマ大尉が必死に緩む口元を堪える姿を、隣に立っていた副官のデトロフ・コツセル大尉がしかと目に焼き付ける。通信用モニターの画面越しにコツセル大尉が脳天に拳を叩き込まれる姿を見たゼロ少佐は、くすりと笑ってペダルを踏む足に力を込める。

カタパルトの射出するタイミングはパイロットに任意で選べた。

「プロト・ゼロ少佐！ 出撃するよ！」

カタパルトより射出、初っ端から最大速度。姿勢制御用のスラストを小刻みに吹かして、黄金のツダが隕石群を擦り抜ける。ほんの僅かな隙間を見つけて機体を滑り込ませる縦横無尽な機体捌きに彼女を見届ける艦橋員は感嘆を零す他にない。躲すだけではない。推進剤を節約する為に小粒な岩屑は左肩の盾で鋭角に受け流し、手頃なサイズの岩屑を機体の上下を反転させてから蹴って軌道を調整する。その変態的な軌道は彗星と呼ぶよりも得体の知れない何かだった。

「何時見ても凄いですね……」

艦橋から眺める黄金の軌跡。ほうき星のようにスラストの残影を残すツダにミア技術少尉はキラキラと目を輝かせる。精鋭と謳われる海兵隊のモビルスーツ乗りは、掛離れた実力の違いに呆れ果てる他にない。

「あんな速度で飛ばれちゃあ誰も付いてけないよ」

自分勝手な大将にシーマ大尉は複雑な感情に深く息を零すのだった。



改ムサイ級軽巡洋艦ファルメルが連邦軍の新型艦を追跡している時の事だ。

パプア級補給艦から通信が入る。通信回線を開くと通信用のモニターに白髭を蓄え

た還暦間近の老兵が映し出された。「ガテム大尉、急な要請によく応えてくれた」と私が部下共々敬礼を以て出迎える。

我々の対応に彼はこそばゆそうに眉間に皺を寄せる。

『楽にしてくれんかね、しがない老兵に尽くす礼ではない』

それに貴殿の方が階級が高いではないか、彼は苦笑しながら敬礼を取る。

『おべつかを使う為に儂を呼んだ訳でもあるまい。早速、補給を始めるぞ』

「はッ！ 座標をお送りします」

通信手に指示を出し、暗号化した座標をパプア級補給艦に送信させる。

ガテム大尉。ジオン公国が共和国を名乗っていた時代から前線に立ち続けた老士官だ。

長い軍歴を誇るベテランであり、反ザビ派運動の討伐にドブル中将の下で将兵を率いた経験を持っている。新技術に対する食いつきが良い人物でもあり「これからの時代、前線指揮に携わる者はモビルスーツの一機も動かせるようにならんと！」と、あと数年で年金暮らしに入る高齢でモビルスーツの適性試験に合格し、若者に交じってモビルスーツの訓練に参加するスーパーお爺ちゃんでもあった。

その後、短い期間ではあるがモビルスーツ部隊の指揮も執っている。

そんな彼も寄る年波には勝てなかった。前線に立ち続ける気概があっても身体の方

が衰えてしまった。部隊を指揮する時に周りが自分に合わせて休憩を取る場面が目立つようになる。これを自覚したガDEM大尉は後方への転属願いを出す。これがあつさりと受理される。ドズル中将は、ガDEM大尉に教官をやらせたいと考えていたが、後方で前線に立つ将兵を支えたいというガDEM自身の強い希望により、旧型のパプア級戦艦を改装したパプア級補給艦の艦長に任じられる。

前線基地から戦場の真つ只中まで物資を配送する。

時には補給艦を狙ってくる敵艦を愛機のザクIで追い払う活躍を見せる事もあり、今もなお宇宙全域を飛び回る運び屋として活躍し続けるハイパーお爺ちゃんであった。

特急便ガDEMは公国軍でも屈指の人気を誇る老舗なのだ。

『座標を受け取った。合流地点まで速やかに移動する』

「先に目的地まで移動し、窪みにミノフスキー粒子を散布しておきます」

『うむ、溺れないように気を付けなければ』

戦争も変わったな。と彼は感慨深く零す。

「まだ近場に木馬も居るので気を付けてください」

『ルナツーに向かったのではないのか?』

「そう見せているだけの可能性もあります」

今、ファルメルに残されたモビルスーツは自分のザクが一機だけだ。



自分が斥候に出してしまうとファルメルを守る存在が居なくなる為、斥候に出せるモビルスーツが用意出来なかった。『いざという時は儂も出てやろう』とガテム大尉が豪快に笑って通信が切られる。私は、小さく息を零した。今でこそ特急便ガテムの名で知られる彼は、実父であるジオン・ズム・ダイクンが暗殺されて以後、混乱期にあつたジオン公国を最前線で守り続けた英雄の一人。幾度と修羅場を潜り抜けた古兵特有の雰囲気纏っている。

赤い彗星と持て囃される自分であつても緊張せざる得なかつた。

「近くにガテム大尉が居てくれたのは有り難かつたな」

彼の世話になるのは一度や二度ではない。

私のように特別任務を受ける者にとって、特急便ガテムの存在は大きかつた。

木馬がルナツーの方角に移動しているのを確認し、

嫌な予感がするも、補給を受けねば交戦も出来ぬと合流地点まで先行する。

小惑星の窪みをミノフスキー粒子で満たし、

窪みの底にファルメルを潜ませる。

後はガテム大尉を待つだけだ。

彼が率いる部隊は、補給作業が素早く手慣れている。

また職人気質のガテム大尉は煩わしい政治を嫌っており、余計な賄賂や駆け引きを必

要としない面倒の少なさもまた特急便ガダムの人気の秘訣である。かといって融通の利かない訳でもない。頼めば、それが必要な事であれば、融通を利かせてくれる柔軟性を持ち合わせている。補給が足りない可能性を考慮し、申請した量よりも多めに物資を持つていくのもガダムであれば、明らかに申請する物資の量が多い場合は、相手の状態を確認してから渡す物資の量を調整する腹芸を見せる事もある。

彼は老人特有の頭の固い人間ではなく、誤魔化しの効かない人間であった。故に私は彼に対して、ちよつとした苦手意識を抱えている。

悪感情はない、ただ苦手だった。後ろめたい事がある訳ではないが、失敗をした時に誤魔化せない相手というのはそれだけで気が張るものだ。真面目に仕事を熟しているつもりでも、自分では気付けない粗を見つけるガダムの目を少なからず恐れていた。尊敬している。彼の経歴は勿論、現在の仕事ぶりも称賛に値する。私個人としてもガダムには好感情を抱いていた。

しかし、それとこれとは話が別なのだ。

「ドズル中將を相手にしている時の方がまだましだな」

「……彼を前にすると嫌でも緊張します」

◆ ポツリと零した一言を、隣に立つドレン中尉は聞かなかつた事にしようだ。

ファルメルとの通信を切った後、ガテム大尉は苦笑する。

赤い彗星と呼ばれる程の男であるにも関わらず、前線を退いた自分に敬意を払う謙虚さにガテムは好意を抱いていた。彼は自分の事を恐れているようだが、ガテム自身は彼の事を彼が思っている以上に評価している。

ガテム大尉は上機嫌に、操舵手へパプラ補給艦の舵を合流地点の座標に合わせさせる。

彼は、自分が古いタイプの人間だと自覚している。

彼が若かった頃はまだ公国軍の士官学校などなかった時代であり、戦場を這いずり回る事で今の地位を得た叩き上げの軍人である。まともに戦術を学べなかった彼は必然的に感覚でものを語る精神論者であり、今時の若者とは反りが合わない気質である事も分かっている。

ギレンとキシリアは彼の事を、昔のやり方しか知らない古い人間だと一蹴する。

しかしドズルだけは彼を評価している。というのもドズルが彼の愛弟子であった為だ。18歳の時から戦場で指揮を執っていたドズルを隣で支えていた副官の内一人がガテムであった。現場の兵士が何を考えており、何の為に戦い、何を上司に求めているのかをドズルに教えたのも彼である。その為、ドズルは彼の有用性を理解しており、当時、尉官ですらなかった彼は40歳を超えてからドズルに引っぱり上げられる形で大尉

となつてゐる。

本当は佐官まで引き上げる予定もあつたのだが、それはガダムの方から断りを入れた。

元より自分は船乗りではない。艦一隻を動かすのにも苦勞しているのに艦隊指揮なんてできんよ。との事だ。

ガダムはなんでも自分で熟すようになるスーパーお爺ちゃんではあつた。

それ故に人の上に立つ才覚には恵まれていなかった。教導も人並み以上にできる。しかし自分が、その程度の人物であることを彼自身がよく理解していた。ドズルは士官学校の教職に就くことも進めたが、それもまたガダムは断りを入れた。叩き上げの軍人である彼は、自分の能力を言語化する術を知らない。基本は見て覚えるなのだ。

彼は現場で生きる人間であると同時に、現場でしか生きる事ができない人間だと思ひ込んでゐる。

だから当然、死ぬ時も戦場だと決めていた。

「まあ後方の補給部隊では、死に場所もないと思つたがね」

老兵は死なず、ただ消え去るのみ。

もし仮に自分が死ぬことがあれば、後進の者を生き永らえさせる為が良い。

ガダムにとって、その相手はドズルだった。

幸か不幸か彼は今日まで死なずに生きている。

このまま死なずに戦争を終えた時は、戦場とは全く別の生き方を模索する事を考えた。退職金と年金で悠々自適な老後でも送ることができれば上々だ。それでも最後は独り寂しく死ぬ事になるはずだ。妻子がいれば話も変わるだろうが、天涯孤独な生き方をしてきた自分には生き永らえる理由もなかった。だから戦場で死ぬ事に未練も抱えている。隠居した後で何も残せない人生が待っているのであれば今、誰かの身代わりに死ぬのも良い。

あとはまあ、単純に老後の事を考えるのは、陰鬱とした気持ちになるのもある。

「それにしても赤い彗星が任務中に補給を欲しがるとはなあ」

ガテムは自分の顎を撫でる。

赤い彗星と云えば、公国民の誰もが知っている国民的英雄だ。まだ二十歳と若いガベテランを自称する四十路の連中よりもシャアの方がよく仕事を熟すし、頼りに出来る。彼は素直に好意を口にする性根をしておらず、目を掛けている分だけ他よりも厳しく接する性格をしていた。このガテムの心情を察するには、シャアはまだ若すぎる。ガテムは、前線に立つ老兵は若者の道標に、前線を退いた老兵は若者の尻拭いをするのが仕事だと合流地点に急いだ。

ドズル中將から預かったザク一機とツダが二機。そして男女のツダパイロットが格

納庫に控えている。

「ニムバス准尉、ペッシェ准尉。仕事だ、戦闘になるかも知れないから何時でも出撃できるようにしておけ！」

通信機越しの言葉に「了解！」と威勢の良い返事が返って来た。

ニュータイプ研究所から派遣された二人のパイロット、二人の傍には何時もハロが転がっている。

ハロにはモビルスーツの操縦をアシストするAIが組み込まれているとの話を思い出し、

ガダムは、時代が変わったな。と感傷に浸るのであった。

## 7. ゴールデンツダ

「貶す訳ではないが、よくもこんな旧型艦が現役でいられるものだな」

偏に艦長の腕前か、とガテム大尉が乗るパプア級補給艦が合流地点に到着する。

彼の艦艇が最低限のスラスタで窪みの中まで降りるのを私は、赤く塗装したザクIIの操縦席で見上げていた。今頃、ガテム大尉とドレン中尉が連絡を取り合っているはずで、パプア級は、改ムサイ級軽巡洋艦ファルメルに接舷する。パプア級から伸びる物資搬入用のコンベアパイプがファルメルとドッキングを開始した。

その艦にファルメルのコムサイとパプア級に搭載されていたW・コムを交換を開始する。素早く補給を済ませる為にツダ2機とザク1機は、W・コムに搭載されている。

私は、周囲を警戒している。ミノフスキー粒子に満たされた窪みの中、その縁に立っているとはいえ、電波を用いたレーダーは使用することができない。こういう時に偵察機の一機でもあれば、便利なのだろうかと思いつつもバズーカを片手に頭上を見上げる。

少し時間が経った後で夜空を駆ける流れ星を見た、青白い光。その先端を戦闘機が駆け抜けている。

「木馬には、戦闘機もあるのか……」

私は補給作業を続けるファルメルとパプア級に信号灯で連絡を入れる。

出来れば、私一機だけで終わらせたいが、しかし、こうなるとバズーカを持ってきたのは失敗だった。高速で飛び回る小型の戦闘機をバズーカで狙うのは至難の業。だが、と照準を定める。出来るかどうかは分からなくても見逃す選択が取れないのであれば、試みる他に手はない。

やってみるさ、とバズーカの引き金を引くスイッチに指を添える。

「……むっ?」

妙な感覚に背後を振り返る。黄色の新型機が、直ぐ傍まで接近していた。

既に振り被られていたビームサーベルの一撃を咄嗟に飛び退く事で躲す、も手に持っていたバズーカを切断されてしまった。爆発する、寸でのところでバズーカを相手に投げつけて目晦ましにした。艦艇を隠せるサイズのクレーターがある小惑星の地面を踏み締める。右手にヒートホークを構え直す。スラスターを吹かして、バズーカーの爆炎に向けて突っ込んだ。

爆炎を切り裂くようにヒートホークを振り抜けば、その行く先を光刃が妨げる。

光刃と熱刃が交錯する時の反発、初めての感覚に戸惑いつつも距離を取った。ヒートホークでビームのサーベルを受け止める事が出来るのか、もしかすると新型機のビーム



兵器もヒートホークで防ぐことも可能か？ いや、あえて試す気にはなれんな。

相手がビームサーベルを両手に構えるのを見て、こちらもヒートホークを握り締め直す。

「やはり、カナリアと同じ感覚……同じ能力でもラリアとは違うな」

だが、と真正面から切り込んだ。

スラスターを吹かし、ヒートホークを振り抜くふりをしてビームサーベルの攻撃を誘発する。相手は素直に乗って、ビームサーベルを横に薙ぐ。ザクの身を屈めながら相手の懐深くに潜り込んだ。光刃がザクの頭頂を掠める。距離が近い、思っていたよりも踏み込んでくる。ほとんど密着した状態、ヒートホークを振り回せるだけの距離がない。ならば、と左肩のスパイクアーマーを相手の胴体に叩き込んだ。

相手が二歩、三歩と距離を取る。間合いが取れた、ヒートホークを振り翳す。

しかし相手はよろけた姿勢のままスラスターを吹かして、強引に態勢を立て直した。熱刃を振り落とす、脇を新型機がスラスターを全開にして潜り抜ける。

そのまま、互いに距離を取って仕切り直す。

「だが、パイロットとしての腕前までカナリアと一緒にではないようだな。まだ可愛げのあった頃を……可愛げ？ 兎も角、動きが素直過ぎる！」

ビームライフルを構えようとしたのを見て、使えないように距離を詰める。

バズーカを破壊されてしまった今、遠距離戦は分が悪いのでな。嫌でも白兵戦に付き合つて貰おうか、とヒートホークを振り被つた。格闘戦では自分に分があるようだ。しかし蹴りと体当たりを当てる事が出来ても熱刃による一撃だけは、凌がれている。

それは決定打を与えられていない事を意味していた。

頭上から気配を感じ取る。先程、遠方を飛び回っていた偵察機のような。攻撃能力も有しているようでミサイルを撃ち込んで来た。互いに距離を取る、新型機と自分の間で爆発が起こる。砂煙で視界が妨げられる中、気配を察して身を屈める。頭上をメガ粒子の光線が掠めていった。

やはり攻撃が素直過ぎる。戦術的には黒い三連星を相手にしてる時の方が余程、手強いというものだ。

「モビルスーツの性能の違いが、戦力の決定的差ではないということを教えてやる」

ヒートホークを構えたまま、小惑星の表面を滑るようにスラストを吹かせる。

新型機はビームライフルを自分に向けたまま、自分と同じようにスラストで地表を滑つて後退した。出力に違いがあつても、前進と後退では自分の方が速度に分がある。ビームライフルの攻撃を二度、三度を躲して、自分を振り払うように難いだビームサーベルの一撃を相手の頭上を取る形で回避する。

相手がビームサーベルで自分の頭上を突いた。姿勢制御用の補助スラストで位置

を調節し、光波を躲しながら相手の胴体を切り落とすつもりでヒートホークを振り抜いた。しかし装甲の表面を剥がした程度、ビームサーベルとヒートホークの間合いの差が顕著に出てしまった。

相手の脇腹に蹴りを入れた後、空いた間合いをスラスタで距離を詰める。

「勘が良いパイロットだ!」

鎧を削る戦いに愚痴を零す。

モビルスーツの性能の違いで勝敗が決まる訳ではないが、パイロット同士の差は確実に埋めている。そして視界の端に相手の新型艦が補給中のファルメルと。パプア級を狙っているのが見えた。舌打ちを零す。ファルメルを墜とされる訳にはいかんのだ。

しかし援護できる武装が破壊されてしまっていた。

「ドレン! 聞こえるか、ドレン!!」

高濃度のミノフスキー粒子による通信障害。この距離では通信が取れない事は分かっていたが、それでも一縷の望みを乗せて叫ばずにはいられなかった。

「今すぐ回避をするんだ、ドレンツ!!」

相手の主砲が間もなく発射される瞬間、敵艦の上方から何かが降り落ちる。

バズーカの砲弾が二発。敵艦の後部を捉えて、艦首が僅かに上がる。その数秒後に敵艦の主砲から極太のメガ粒子が発射された。二隻を同時に捉えるはずだった軌跡が

ファルメルから外れてパプア級のみを捉える。そして敵艦の上方から黄金色に輝くツダが、ゆつくりと降りてきた。

背後からビームサーベルの一撃、私はヒートホークで軽く打ち払う。

「先行して来たようだな」

安堵の息を零し、ファルメルに背を向ける。

「これで気兼ねなく戦えるというものだ」

戦いを急ぐ必要がなくなったのは大きかった。



「……なんだ？」

頭上から強い思念のようなものを感じ取る。

直後に強い衝撃、艦艇が激しく揺れる。攻撃を受けたようだ。

けたたましく鳴り響く警報機に艦内の人間が慌ただしく動き出す。

パイロットと思いき軍人の一人が、赤いモビルスーツに搭乗した。他にパイロットが動く気配がない。この状況下で戦力を出し惜しむ理由が思い付かなかった。つまりはガンダムに乗れるパイロットが他に居ないという事だ。懸念は当たっていた。僕は物陰から身を乗り出して、皆が自分の事で精一杯になっている中を掻い潜る。

そして、開けたままになっているガンダムの操縦席に滑り込んだ。

ハッチを閉じる。デッキに寝かせてあるガンダムを周囲に気を配りながら立たせる。通信用のモニターに映像が映し出された。見た事がある顔だった。艦長と呼ぶには、若い男だ。サイド7でガンダムを格納庫へ移動させる様に指示を出した男である。確かな名はブライト・ノア、艦長代理と名乗っていたはずだ。

ブライトは向こうのモニターに映し出された僕の顔を見て、細い目を見開いた。

『君は……サイド7でガンダムに乗っていた……!』

「敵が居るんですよ？」

『戦うというのか、そのガンダムで!』

「この艦には、僕の友達も乗っているんです。戦力を余らせる理由なんてないでしょう」

『君は民間人なのぞ!!』

ハッチを開くまでの間、操縦席の脇に置いてあったマニュアルを手にとって操縦系を再確認する。

「ブリッジクルーの中には民間人も混ざっていますよね？」

『ぐっ……これは止む終えない処置というものだ!』

「だったらこれも止む終えない処置として、処理してください」

『簡単に言ってくれ……っ!』

マニュアルを椅子の脇に置き直して、近場にあったビームライフルを手を取った。

そして格納庫の発射口までガンダムを移動させる。周りが僕を止めようと近付いて来た。

怪我をしないように手で振り払って、出来るだけ慎重に操縦する。

「ハッチを開けてくださいよ!!」

『金色のモビルスーツ、来ます!』

『ジヨブ伍長はどうした!?!』

『歯牙にもかけられておりません!』

『くそツ! 足止めもできんのか……!』

「どうするんです!?! このままやられるなんて僕は嫌ですよ!」

ううむ、とブライトの唸り声が聞こえる。

『ええい、もう、どうとでもなれだつ!!』

『え、良いんですか?』

『良い訳あるか!』

だが、と彼は続ける。

『他に手が無い。アムロ君……と言ったな? やれるのだな?』

「やるしかないじゃないか、僕しか操縦ができませんから!」

『ガンダムを出撃させるんだ! アムロ君、撤退の時間を稼いでくれるだけで良い!!』

ハッチが開けられる。出撃しようとした時にまた大きな衝撃が艦艇を襲った。「アムロ、行きますすー！」

まともには外に出られないと判断し、スラスターを吹かして自力で格納庫の外に出る。

瞬間、何かが目前まで迫っていた。咄嗟に左手で持っていたシールドを構える。着弾、爆風に機体が空中に投げ出された。今の衝撃、艦艇を何度も揺らしていたものと同じか？ まだ残る爆煙を掻き分けて、金色のモビルスーツがメインモニターに映し出された。ザクか？ ザクではない、こいつはツダだ。全開でスラスターを吹かせたまま、シールドの先端に取り付けられた爪をガンダム胴体に突き立てた。

機体が地面に叩き付けられる。小惑星の表面を削り、操縦席が大きく揺らされる。

「ぐうう……このおっ!!」

仰向けになった姿勢でビームライフルを撃った。

しかし相手は機体制御用の補助ブースターで機体を小刻みに振り、装甲を掠めながら距離を詰めて来る。もう撃ち尽くしてしまったのか手にはバズーカを持っていなかった。代わりにヒートホークを右手に握り締めている。仰向けになったまま、スラスターを起動する。頭上に移動、つい先程まで自分が居た場所を熱刃が襲った。

スラスターを吹かせたまま、機体を立たせる。ビームライフルで相手を狙い撃った。

メガ粒子の光線をツダが地面を蹴り、錐揉み状に一回転して回避。二射目、相手の着地を狙ったはずなのに補助ブースターで着地点をズラされてしまった。三射目は、わざと相手に避けさせる。自分から見て、左に避けた先を四射目で狙い撃った。

しかし、確かに当たるはずのメガ粒子の軌跡はヒートホークの熱刃で弾かれる。

「なんだ、こいつは……!?!」

白兵戦の距離まで間合いを詰められる。

シールドを前に出して身を隠す、ヒートホークが振り落とされた衝撃。赫々した熱刃がシールドの半分を切断したところで光を失った。相手はヒートホークから手を放し、シールドごとガンダムを蹴り飛ばす。体勢を立て直した時、相手は背を向けて逃げ出していた。

ビームライフルを構える。しかし、残弾を示す数字がゼロになっていた。

「……あいつは、なんだったんだ?」

ただただ翻弄されるばかりの初陣に、黄金色の機体の小さくなる背中を呆然と眺めるしかなかった。



「仕留めきれなかった!」

ダンッ! と操縦席に台パンする。



メガ粒子をヒートホークで切り裂いたまでは良かったが、そのせいで不良を起こしてしまった。

シールドクローでは、塗装を剥がすので精一杯。

有効打を与えられない為、撤退する他に打てる手がない。

「颯爽と登場して、華麗に倒し切るはずだったのに！」

ドヤ顔を披露する事ができなくなってしまった。

キヤスバルが苦戦するだけあって、大した奴だ。機体の性能頼りな戦い方ではあったのだけど、射撃の勘が良くて近付けなかった。兎も角、最優先すべきはファルメルの安全確保だ。ファルメルを守る為にペダル踏み込みを強くした。

キヤスバルが戦闘する頭上を飛び回る戦闘機に向けて、ツダを突っ込ませる。

「武装がなくなつて援護くらいは出来る！」

戦闘機が慌てた様子で方向転換し、自分達から距離を取る。

舌打ちし、眼下を見た。

赤いザクが黄色い新型機と切り結んでいるのが見えた。

「……なんだろう、あの機体……気持ち悪いな……」

新型機から生理的な嫌悪感を感じ取る。

上からシールドクローで攻撃を仕掛けてみるか、と思つた時、遠くから複数のミサイ

ルが飛んできた。それを身を振るだけで回避する。どうやら先程、追い払った戦闘機が撃ってきたようだ。バズーカの一発も残っていれば、撃ち落としてやるものを。とファルメルから距離を取ることも出来ず、遠くから自分を狙い続ける戦闘機を睨み付けた。

今日は厄日だ。戦闘機を放っておく訳にもいかず、ファルメルから付かず離れずの距離を保ち続ける。